

Symantec™ System Recovery 2013 ユーザーズガイド

Windows Edition



Symantec System Recovery 2013 ユーザーズガイド

このマニュアルで説明するソフトウェアは、使用許諾契約に基づいて提供され、その内容に同意する場合にのみ使用することができます。

マニュアルバージョン: 2013年3月

法的通知と登録商標

Copyright © 2013 Symantec Corporation. All rights reserved.

Symantec、Symantec ロゴ、LiveUpdate、pcAnywhere、Symantec AntiVirus、NetBackup、SmartSector、Backup Exec は、Symantec Corporation または同社の米国およびその他の国における関連会社の商標または登録商標です。その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

その他の会社名、製品名は各社の登録商標または商標です。

本書に記載されている製品は、その使用、コピー、頒布、逆コンパイルおよびリバースエンジニアリングを制限するライセンスに基づいて頒布されています。本書のいかなる部分も、Symantec Corporation およびそのライセンサーからの事前の文書による許諾を得ることなく、いかなる方法によっても無断で複写、複製してはならないものとします。

本書は、現状のままで提供されるものであり、その商品性、特定目的への適合性、または不侵害の暗黙的な保証を含む、明示的あるいは暗黙的な条件、表明、および保証はすべて免責されるものとします。ただし、これらの免責が法的に無効であるとされる場合を除きます。SYMANTEC CORPORATION およびその関連会社は、本書の提供、パフォーマンスまたは使用に関連する付随的または間接的損害に対して、一切責任を負わないものとします。本書の内容は、事前の通知なく、変更される可能性があります。

ライセンス対象ソフトウェアおよび資料は、FAR 12.212の規定によって商業用コンピュータソフトウェアと見なされ、FAR 52.227-19「Commercial Computer Software - Restricted Rights」、DFARS 227.7202「Rights in Commercial Computer Software or Commercial Computer Software Documentation」、その他の後継規則の規定により制限権利の対象となります。米国政府によるライセンス対象ソフトウェアおよび資料の使用、修正、複製のリリース、実演、表示、開示は、本使用許諾契約の条項に従ってのみ行われるものとします。

<http://www.symantec.com>

弊社製品に関して、当資料で明示的に禁止、あるいは否定されていない利用形態およびシステム構成などについて、これを包括的かつ暗黙的に保証するものではありません。また、弊社製品が稼動するシステムの整合性や処理性能に関しても、これを暗黙的に保証するものではありません。

これらの保証がない状況で、弊社製品の導入、稼動、展開した結果として直接的、あるいは間接的に発生した損害等についてこれが補償されることはありません。製品の導入、稼動、展開にあたっては、お客様の利用目的に合致することを事前に十分に検証および確認いただく前提で、計画および準備をお願いします。

第 1 章	Symantec™ System Recovery 2013 の概要	15
	Symantec System Recovery について	15
	Symantec System Recovery のコンポーネントについて	16
	Symantec System Recovery 2013 の新機能	17
	Symantec System Recovery の[ヘルプとサポート]にアクセスするに は	19
	Symantec System Recovery 2013 に関するフィードバックの送信	19
第 2 章	Symantec System Recovery のインストール	21
	Symantec System Recovery をインストールする前に	21
	Symantec System Recovery のシステムの必要条件	21
	サポートされるファイルシステム、ディスクタイプ、ディスクパーティショ ン方式、リムーバブルメディアについて	23
	Symantec System Recovery の機能の可用性について	24
	Symantec System Recovery の評価版について	26
	Symantec System Recovery のインストール	27
	カスタムインストールオプション	29
	Symantec System Recovery のインストールの完了	30
	評価期間後の Symantec System Recovery のアクティブ化	31
	LiveUpdate で Symantec System Recovery を更新	32
	Symantec System Recovery のアンインストールについて	32
	Symantec System Recovery Monitor のインストール	33
	Symantec System Recovery Monitor のシステムの必要条件	34
	Symantec System Recovery Monitor を使用するための Windows ファイアウォールの例外の設定	34
第 3 章	コンピュータのリカバリの確保	37
	コンピュータの修復の確認について	37
	Symantec System Recovery Disk のテストについて	38
	Symantec System Recovery Disk のテスト	38
	カスタム Symantec System Recovery Disk の作成	39
	USB 上にある Symantec System Recovery Disk の更新につい て	41
	Symantec System Recovery Disk の作成の設定	42

	Symantec System Recovery Disk のオプションの設定	43
第 4 章	始めましょう	45
	Symantec System Recovery の使用方法	45
	Symantec System Recovery の開始	47
	Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定	47
	バックアップの全般オプションの設定	48
	コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整	50
	ネットワークスロットルの有効化について	50
	デフォルトのトレイアイコン設定の調整	51
	ファイルの種類の管理についてとファイルの拡張子	53
	外部ドライブに一意の名前を使うことについて	56
	オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定	57
	Symantec System Recovery メッセージのログへの記録	58
	製品 (イベント) メッセージの電子メール通知の有効化	60
	簡単セットアップを使って最初のバックアップを設定	62
	[詳細] ページの非表示または表示	62
第 5 章	データのバックアップに関する推奨事項	65
	データのバックアップについて	65
	バックアップの種類を選択について	66
	バックアップの前に実行する内容	67
	バックアップ中に実行する内容	69
	バックアップの終了後すべきこと	69
	定義済みバックアップの実行に関するヒント	70
	バックアップジョブのプロパティの表示	72
	バックアップ先の選択について	72
	デュアルブートのコンピュータのバックアップについて	74
第 6 章	ドライブ全体のバックアップ	77
	ドライブベースのバックアップの定義について	77
	ドライブベースのバックアップの定義	78
	[ドライブ] のオプション	79
	[関連するドライブ] のオプション	80
	リカバリポイントの種類オプション	81
	バックアップ先のオプション	81
	[オフサイトコピーの設定] のオプション	83
	リカバリポイントのオプション	83
	[詳細なスケジュール] のオプション	85
	ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて	86
	ネットワーク資格情報について	86

	バックアップ中のコマンドファイルの実行について	87
	[コマンドファイル]のオプション	88
	ドライブベースバックアップの詳細オプション	90
	[バックアップ時刻]のオプション	94
	リカバリポイントの圧縮レベル	96
	Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行	97
	Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行に ついて	98
	Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実 行	99
	オフサイトコピーについて	103
	オフサイトコピーの仕組み	104
	オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について	105
	オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について	106
	オフサイトコピー先としての FTP サーバーの使用について	107
第 7 章	ファイルとフォルダのバックアップ	109
	ファイルとフォルダのバックアップについて	109
	ファイルとフォルダのバックアップ	110
第 8 章	バックアップジョブの実行と管理	119
	既存のバックアップジョブを今すぐ実行	119
	オプションを指定してバックアップを実行	120
	バックアップ速度の調整	122
	バックアップまたは修復タスクの停止	122
	バックアップの正常終了の検証	123
	バックアップ設定の編集	124
	イベント起動バックアップの有効化	124
	[イベントトリガの全般]のオプション	125
	[トリガとなるアプリケーション]のオプション	125
	ThreatCon レスポンスについて	126
	バックアップジョブに対する ThreatCon レスポンスの設定	127
	ThreatCon レスポンスオプション	127
	バックアップスケジュールの編集	128
	バックアップジョブの無効化	128
	バックアップジョブの削除	128
	コンピュータをバックアップできるユーザーの追加	129
	ユーザーまたはグループのアクセス権の設定	130

第 9 章

ご使用のコンピュータからのリモートコンピュータのバックアップ	131
お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ	131
コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加	132
コンピュータリストへのローカルコンピュータの追加	133
コンピュータリストからのコンピュータの削除	133
Symantec System Recovery Agent の配備について	133
ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備	134
Symantec System Recovery Agent の配備	135
Symantec System Recovery Agent の手動インストール	136
Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する権限の付与	137
Symantec System Recovery Agent について	138
Symantec System Recovery Agent の使用	138
Windows のサービスツールを使った Symantec System Recovery Agent の管理について	139
サービスを使用するためのベストプラクティス	140
Windows のサービスツールを開く	141
Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止について	141
Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止	142
Symantec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作の設定	143
Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示について	144
Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示	145
Symantec System Recovery へのアクセスの制御について	145
ユーザーとグループの追加	146
ユーザーまたはグループの権限を変更する方法	147
ユーザーまたはグループの削除	148
異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行	148

第 10 章

バックアップの状態の監視	151
バックアップの監視について	151
コンピュータのハードディスクの再スキャン	152
[ホーム] ページのアイコンについて	152
[状態] ページのアイコンについて	154
SNMP トラップを送信するための Symantec System Recovery の設定	158
Symantec System Recovery 管理情報ベースについて	158
ドライブ (またはファイルおよびフォルダのバックアップ) の状態レポートのカスタマイズについて	159

	ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズ	159
	ドライブの詳細の表示	161
	ドライブの保護レベルの向上	161
	問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について	164
第 11 章	Symantec System Recovery Monitor を使用したり モートコンピュータのバックアップ状態の監視	165
	Symantec System Recovery 2013 Monitor について	165
	Symantec System Recovery 2013 Monitor の開始	166
	Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて	166
	Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定	169
	コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加	170
	コンピュータリストに複数のリモートコンピュータを追加するためのテキストファイルのインポート	171
	リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正	172
	コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除	172
	リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示	173
	コンピュータの詳細の表示	174
	コンソールの表示について	174
	保護状態レポートについて	175
第 12 章	リカバリポイントの内容の探索	177
	リカバリポイントの検索について	177
	Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索	178
	Windows エクスプローラからのリカバリポイントのマウント	178
	リカバリポイント内のファイルの表示および復元	179
	リカバリポイントドライブのマウント解除	180
	リカバリポイントドライブのプロパティの表示	181
	リカバリポイントドライブのプロパティ	181
第 13 章	バックアップ先の管理	183
	バックアップ先について	184
	バックアップ方式について	184
	ドライブベースのバックアップについて	184
	ファイルおよびフォルダのバックアップについて	185
	古いリカバリポイントのクリーンアップ	186
	リカバリポイントセットの削除	187

セット内のリカバリポイントの削除	187
リカバリポイントのコピー	188
[ソース]のオプション	190
[保存場所]のオプション	192
[リカバリポイントをコピー]のオプション	192
仮想変換ジョブの定義	194
[ソース]のオプション	196
[仮想ディスクの保存先]のオプション	196
[全般オプション]のプロパティ	198
[変換時間]のオプション	200
既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合	201
仮想変換ジョブのプロパティの表示	201
仮想変換ジョブの進行状況の表示	202
仮想変換ジョブの編集	202
仮想変換ジョブの削除	203
仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行	203
[ソース]のオプション	204
[仮想ディスクの保存先]のオプション	207
[全般オプション]のプロパティ	209
ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について	210
保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータの表 示	211
保存するファイルのバージョン数を制限する	211
ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動によるファイルの削 除	211
ファイルまたはフォルダのバージョンの確認	212
バックアップデータの管理の自動化	212
バックアップ先の移動	213
第 14 章	
ファイル、フォルダ、ドライブ全体のリカバリ	215
消失したデータの修復について	215
ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダ の修復	216
リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復	217
[リカバリポイントを選択]のオプション	218
[ファイルを修復]のオプション	220
リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く	221
必要なファイルまたはフォルダの検索について	221
セカンダリドライブの修復	221
[コンピュータを修復]のオプション	222
ドライブの修復のカスタマイズ	225
[復元するリカバリポイント]のオプション	226

修復オプション	227
LightsOut Restore による離れた場所からのコンピュータの復元について	228
LightsOut Restore のセットアップと使用について	229
LightsOut Restore の設定	230
第 15 章 コンピュータのリカバリ	237
コンピュータの修復について	237
Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) ベースのコンピュータのリカバリについて	238
Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート	239
CD/DVD から起動するためのコンピュータの設定 または USB デバイス	241
ハードディスクのエラーを調べることでコンピュータの修復を準備	242
コンピュータのリカバリ	242
[復元するリカバリポイントを選択]のオプション	244
[修復するドライブ]のオプション	246
仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ	250
修復オプション	253
別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて	255
Restore Anyware の使用方法	255
Restore Anyware によるコンピュータのリカバリ	256
Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復	258
[リカバリポイントを選択]のオプション	260
Symantec System Recovery Disk によるコンピュータのファイルとフォルダの検索	261
Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について	261
ネットワークサービスの起動	262
リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用	262
Symantec System Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング	264
ネットワーク接続の設定	265
リカバリポイントのプロパティの表示	267
[リカバリポイントのプロパティ]	267
リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示	268
リカバリポイント内のドライブのプロパティ	269
サポートユーティリティについて	270

第 16 章	ハードディスクドライブのコピー	271
	ハードディスクドライブのコピーについて	271
	ハードディスクドライブのコピーの準備	272
	ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー	272
	[詳細]オプション	274
第 17 章	Symantec System Recovery Granular Restore Option の使用	277
	Symantec System Recovery Granular Restore Option について	277
	Granular Restore Option で使用するリカバリポイントを作成する場合の	
	ベストプラクティス	278
	バックアップするドライブを指定する方法	279
	Granular Restore Option の起動	280
	Granular Restore Option で実行できる処理	280
	特定のリカバリポイントの内容の確認	281
	[リカバリポイントを開く]のオプション	282
	メールボックスのリストア	282
	電子メールフォルダの復元	283
	電子メールメッセージの復元	284
	SharePoint ドキュメントの復元	285
	ファイルとフォルダの復元	286
付録 A	Symantec System Recovery を使用したデータベースのバックアップ	289
	Symantec System Recovery を使用したデータベースのバックアップにつ	
	いて	289
	Symantec System Recovery を使用した VSS 対応データベースのバック	
	アップについて	290
	Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバック	
	アップについて	291
	Symantec System Recovery または Symantec System Recovery	
	Disk を使用したコールドバックアップの手動作成について	291
	Symantec System Recovery を使用したウォームバックアップの自動	
	作成について	292
	Symantec System Recovery を使用したホットバックアップの作	
	成	293
付録 B	Active Directory のバックアップ	295
	Active Directory の役割について	295

付録 C	Microsoft の仮想環境のバックアップ	297
	Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて	297
	Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について	298
付録 D	Symantec System Recovery 2013 と Windows Server 2008 Server Core の使用	301
	Symantec System Recovery 2013 と Windows Server 2008 Core につ いて	301
	コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール	302
	GUI サポート付きのフルインストールの実行	302
	ログを使用した完全なサイレントインストールの実行	303
	ログを使用したエージェントのみのサイレントインストールの実行	303
索引	305

Symantec™ System Recovery 2013 の概要

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery](#) について
- [Symantec System Recovery](#) のコンポーネントについて
- [Symantec System Recovery 2013](#) の新機能
- [Symantec System Recovery](#) の[ヘルプとサポート]にアクセスするには
- [Symantec System Recovery 2013](#) に関するフィードバックの送信

Symantec System Recovery について

Symantec System Recovery は、Windows® システムのリカバリにおけるゴールドスタンダードです。時間単位または日単位ではなく、分単位でのシステム損失や災害からのリカバリを可能にします。Symantec System Recovery は、高速で使いやすいシステム復元を提供し、IT 管理者によるリカバリ時間目標の達成を支援します。サーバー、デスクトップまたはラップトップの異種ハードウェアと仮想環境に、完全なベアメタルリカバリを実行することも可能です。さらに、リモートの無人の場所にあるシステムをリカバリする機能も提供します。

Symantec System Recovery は、動作中の Windows システム全体のリカバリポイントをキャプチャします。バックアップには、オペレーティングシステム、アプリケーション、システム設定、ファイル、その他の項目が含まれます。リカバリポイントは、SAN、NAS、直接接続型ストレージ(DAS)、RAID、Blu-ray/DVD/CD、といった多様なメディアまたはディスクストレージデバイスに保存できます。システムに障害が発生した場合には、時間がかかり、エラーが発生しやすい手動の処理は必要なく、すばやくシステムを復元できます。

Symantec System Recovery は、次のいずれかを使用して、リモート操作で管理できます。

- ライセンス付きのもう 1 つの Symantec System Recovery コピー
- Symantec System Recovery Management Solution (別途配布)
Symantec System Recovery Management Solution のライセンスは Symantec System Recovery で提供されます。Symantec System Recovery Management Solution のライセンスを別途購入する必要はありません。

Symantec System Recovery Management Solution は、中央管理アプリケーションです。このアプリケーションを使用すると、IT 管理者は組織全体のシステムリカバリジョブをひと目で確認できます。ローカルシステムとリモートシステムのリカバリアクティビティ、ジョブ、ポリシーの配備、修正、保守を集中的に実行できます。リアルタイムの状態を監視し、既知の問題をすばやく解決することもできます。

Symantec System Recovery は、Backup Exec Retrieve と統合されているため、IT の介入なしでファイルを修復できます。

統合された Granular Restore Option を使用することにより、個々の Microsoft® Exchange 電子メール、フォルダ、メールボックスをすばやく復元できます。

p.16 の「[Symantec System Recovery のコンポーネントについて](#)」を参照してください。

p.17 の「[Symantec System Recovery 2013 の新機能](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のコンポーネントについて

Symantec System Recovery には、プログラム本体と Symantec System Recovery Disk の 2 つの主要コンポーネントが含まれます。

表 1-1 主な製品コンポーネント

主なコンポーネント	説明
Symantec System Recovery プログラム (ユーザーインターフェース)	<p>Symantec System Recovery プログラムでは、コンピュータのバックアップを定義、スケジュール、実行できます。バックアップを実行するとき、コンピュータのリカバリポイントが作成されます。その後、コンピュータ全体または個々のドライブ、ファイルとフォルダを修復するために、リカバリポイントを使うことができます。</p> <p>また、Symantec System Recovery では次の操作を実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none">■ コンピュータの貴重なディスク容量を他の目的のために使うことができるようにリカバリポイントのストレージ (バックアップ先) のサイズを管理してください。■ 貴重なデータが定期的にバックアップされていることを確認するために、コンピュータのバックアップ状態を監視できます。

主なコンポーネント	説明
Symantec System Recovery Disk	<p>Symantec System Recovery Disk を使用すると、修復環境でコンピュータを起動できます。コンピュータのオペレーティングシステムにエラーが発生した場合、Symantec System Recovery Disk を使用してシステムドライブ(オペレーティングシステムがインストールされているドライブ)を修復します。</p> <p>メモ: Symantec System Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 DVD に含まれるか、または別の DVD として提供されます。Symantec System Recovery Disk が含まれている DVD は安全な場所に保管してください。</p> <p>p.237 の「コンピュータの修復について」を参照してください。</p>

p.15 の「Symantec System Recovery について」を参照してください。

p.17 の「Symantec System Recovery 2013 の新機能」を参照してください。

Symantec System Recovery 2013 の新機能

Symantec System Recovery には、数多くの拡張機能と新機能が含まれています。最新の機能と拡張機能について詳しくは、次の表を参照してください。

メモ: リストのすべての機能が、この製品のすべてのバージョンで使用できるわけではありません。

表 1-2 Symantec System Recovery 2013 の新機能

機能	説明
スマート調整機能	<p>オペレーティングシステムのエラーが発生した場合に、より高速な増分バックアップを提供します。</p> <p>スマート調整を実行するため、Symantec System Recovery では Vtrack という新しい変更追跡ドライブが採用されています。</p>
増分バックアップの強化	<p>トランザクション NTFS (TxF) とその他のファイル操作の増分バックアップを向上するためのいくつかの拡張機能が含まれています。</p>
エラー処理メカニズムの強化	<p>エラーの Unique Message Identifier (UMI) リンクをクリックしたときに、フィルタ処理された、より関連性の高い検索結果を提供します。強化されたエラー処理メカニズムにより、より効率的に短時間でエラーを解決できます。</p>

機能	説明
インストールプログラムの向上	いくつかの利便性と性能が強化され、さらに高速で優れたインストールを体感できます。
ネイティブ 64 ビットのサポート	Symantec System Recovery のネイティブ 64 ビットバージョンが提供されています。
64 ビットバージョンの Symantec System Recovery Disk のサポート	64 ビットバージョンのカスタム Symantec System Recovery Disk を作成可能になりました。対応する 32 ビットのドライバを Symantec System Recovery Disk に追加せずに、64 ビットオペレーティングシステムを実行するコンピュータを起動できるようになりました。
Windows 8 のサポート	<p>Windows 8 オペレーティングシステムを実行するコンピュータのバックアップとリカバリが可能になりました。Windows 8 Server ファミリーで新たに導入された ReFS (Resilient File System) ボリューム、重複排除機能を有効にしたボリューム、ストレージプールボリュームをバックアップできます。</p> <p>メモ: Symantec System Recovery では、ReFS ボリュームの完全バックアップのみがサポートされます。増分バックアップはサポートされません。</p>
UEFI (Unified Extensible Firmware Interface) ベースのコンピュータのバックアップサポート	<p>UEFI ベースのコンピュータのシステムドライブをバックアップし、リカバリできます。たとえば、UEFI 技術をサポートする次のオペレーティングシステムの 64 ビットバージョンを実行するコンピュータをバックアップし、リカバリできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows 7 ■ Windows 8 ■ Windows Vista SP1 以降 ■ Windows Server 2008 ■ Windows Server 2008 R2 ■ Windows Server 2012 <p>UEFI ベースの物理コンピュータのリカバリポイントを VMware 社の仮想ディスクに変換することもできます。</p>
iSCSI ボリュームのバックアップサポート	Symantec System Recovery コンソールまたは Symantec System Recovery Disk を使って iSCSI ボリュームをバックアップおよび復元できます。

機能	説明
Symantec™ System Recovery 2013 Monitor	<p>Symantec System Recovery を使用してバックアップしたりリモートコンピュータのバックアップ保護状態を判別できます。コンピュータのバックアップ保護状態を監視することで、必要時に消失データを確実にリカバリできるようにします。この監視機能は、小規模なビジネスの顧客向けに特別に設計された直感的なアプリケーションです。</p> <p>p.165 の「Symantec System Recovery 2013 Monitor について」を参照してください。</p> <p>p.33 の「Symantec System Recovery Monitor のインストール」を参照してください。</p>

p.15 の「[Symantec System Recovery について](#)」を参照してください。

p.16 の「[Symantec System Recovery のコンポーネントについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery の [ヘルプとサポート] にアクセスするには

Symantec System Recovery の詳しい情報を参照するには、[ヘルプとサポート] ページにアクセスしてください。[ヘルプとサポート] ページから製品のヘルプシステムやユーザーズガイドにアクセスできます。さらに、トラブルシューティング情報を見つけることができるシマンテック社のナレッジベースにアクセスすることもできます。

[ヘルプとサポート] にアクセスするには

- 1 Symantec System Recovery を起動します。
- 2 [ヘルプ] メニューの [ヘルプとサポート] をクリックします。

p.15 の「[Symantec System Recovery について](#)」を参照してください。

p.17 の「[Symantec System Recovery 2013 の新機能](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery 2013 に関するフィードバックの送信

Symantec System Recovery 2013 に関するフィードバックや考えをシマンテック社にお送りください。

フィードバックを送信する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。

- [Symantec System Recovery 2013]ウィンドウの右上の [意見を送信]をクリックします。
- ヘルプメニューの [意見を送信]をクリックします。

p.15 の「[Symantec System Recovery について](#)」を参照してください。

p.17 の「[Symantec System Recovery 2013 の新機能](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のインストール

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery](#) をインストールする前に
- [Symantec System Recovery](#) のインストール
- [LiveUpdate](#) で [Symantec System Recovery](#) を更新
- [Symantec System Recovery](#) のアンインストールについて
- [Symantec System Recovery Monitor](#) のインストール

Symantec System Recovery をインストールする前に

インストール手順は、ご使用の作業環境とインストールオプションの選択内容によって異なります。この章では、インストール DVD からの製品版の [Symantec System Recovery](#) のインストールに重点を置いて説明します。

[Symantec System Recovery](#) をインストールする前に、ご使用のコンピュータがシステム要件を満たしていることを確認してください。既知の問題については、インストール DVD の [Readme](#) ファイルを参照してください。

p.21 の「[Symantec System Recovery のシステムの必要条件](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のシステムの必要条件

[Symantec System Recovery](#) が正常に機能するためのシステムの必要条件を次の表に示します。

表 2-1 システムの最小必要条件

コンポーネント	最小必要条件
オペレーティングシステム	<p>互換性があるオペレーティングシステム、プラットフォーム、アプリケーションのリストは、次の URL で参照できます。</p> <p>http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-17</p>
RAM	<p>次のリストは、Symantec System Recovery の各コンポーネントのメモリ必要条件を示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Symantec System Recovery Agent: 512 MB ■ Symantec System Recovery ユーザーインターフェースと Recovery Point Browser: 512 MB ■ Symantec System Recovery Disk: 1 GB (専用) ■ LightsOut Restore: 1 GB
利用可能なハードディスク容量	<p>次のリストは、Symantec System Recovery とその他の項目のハードディスク容量の必要条件を示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 製品全体をインストールする場合: すべてのインストールには最大 700 MB が必要 (選択した製品の言語によって異なる) ■ リカバリポイント: リカバリポイントを保管するために、ローカルハードディスクまたはネットワークサーバーに十分なハードディスク容量が必要になります。 リカバリポイントのサイズは、バックアップしたデータ量と保管するリカバリポイントのタイプによって異なります。 ■ LightsOut Restore: 2 GB
DVD-ROM ドライブ	<p>ドライブの速度に制限はありませんが、BIOS からスタートアップディスクとして使用できなければなりません。</p> <p>Symantec System Recovery では、Gear Software 社の技術が使用されます。DVDライターに互換性があることを確認するには、Gear Software 社の Web サイトを参照してください。</p> <p>http://www.gearsoftware.com</p> <p>ご使用のライターの製造元とモデル番号がわかる場合は、そのライターについての情報を参照できます。</p>

コンポーネント	最小必要条件
ソフトウェア	<p>Symantec System Recovery をインストールし、使用するには、次の Microsoft .NET Framework バージョンが必要です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Microsoft .NET Framework 2.0 SP2: Symantec System Recovery インストールプログラムを実行するために必要です。 ■ Microsoft .NET Framework 4.0 以降: Symantec System Recovery を実行し、使用するために必要です。 <p>必須の .NET Framework バージョンがまだインストールされていない場合は、Symantec System Recovery インストールプログラムによって自動的にインストールされます。</p> <p>Granular Restore Option を使用して電子メールを復元できるようにするには、Microsoft Outlook 2003、2007 または 2010 がインストールされている必要があります。</p>

p.23 の「サポートされるファイルシステム、ディスクタイプ、ディスクパーティション方式、リムーバブルメディアについて」を参照してください。

サポートされるファイルシステム、ディスクタイプ、ディスクパーティション方式、リムーバブルメディアについて

Symantec System Recovery では、次のファイルシステム、ディスクタイプ、ディスクパーティション方式、リムーバブルメディアがサポートされます。

- サポートされるファイルシステム
- Symantec System Recovery では、次のファイルシステムがサポートされます。
- FAT16、FAT16X
 - FAT32、FAT32X
 - Resilient File System (ReFS)

メモ: Symantec System Recovery では、ReFS ボリュームの完全バックアップのみがサポートされます。増分バックアップはサポートされません。
 - NTFS

メモ: 暗号化された NTFS ドライブは、復元する前に解読される必要があります。暗号化された NTFS ドライブのリカバリポイント内にあるファイルは表示できません。
 - Linux Ext2、Linux Ext3

サポートされる ディスクタイプと
ディスクパー
ティション方式

Symantec System Recovery では、次のディスクタイプとディスクパーティション方式がサポートされます。

- ダイナミックディスク
- GUID パーティションテーブル (GPT)
- マスターブートレコード (MBR)
- Linux スワップパーティション

リムーバブルメディア

リカバリポイントをローカルで保存できます (すなわち、Symantec System Recovery がインストールされているコンピュータに保存できます)。または、ほとんどの Blu-ray、DVD-R(W)、DVD+RW、CD-R、CD-RW レコーダにリカバリポイントを保存できます。Gear Software 社の Web サイトで、サポートされるドライブの更新リストを確認できます。

<http://www.gearsoftware.com>

Symantec System Recovery では、ほとんどの USB デバイス、1394 FireWire デバイス、REV、Jaz、Zip ドライブ、MO デバイスにリカバリポイントを保存できます。

p.21 の「Symantec System Recovery のシステムの必要条件」を参照してください。

Symantec System Recovery の機能の可用性について

Symantec System Recovery は、さまざまな市場でのニーズを満たすようにパッケージされています。購入した製品によっては、一部の機能が利用できない場合があります。ただし、マニュアルにはすべての機能が記載されています。購入した製品のバージョンに含まれている機能を確認してください。製品のユーザーインターフェースからアクセスできない機能は、製品のそのバージョンに含まれていない可能性があります。

お使いのバージョンの Symantec System Recovery に含まれている機能の詳細は、シマンテック社の Web サイトを参照してください。

p.24 の「Symantec System Recovery Basic Edition について」を参照してください。

Symantec System Recovery Basic Edition について

次の機能は Symantec System Recovery の基本のエディションでは利用できません。これらの機能を使いたい場合は、Symantec System Recovery の製品版にアップグレードしてください。

表 2-2 無効な機能

無効な機能	説明
集中管理	Symantec System Recovery Management Solution で、ネットワーク内にインストールされている Symantec System Recovery をリモートで監視および管理できます。リモートでデータのバックアップや修復を行う機能も含まれています。
リカバリポイントセット	ドライブの初回の完全バックアップを取得します。その後のバックアップでは、完全バックアップ実行以降のドライブ上のデータに対する変更のみが取得されます。この機能を使用しない場合は、ドライブの単体リカバリポイント(完全バックアップ)のみを作成できます。
ハードディスクドライブをコピーするウィザード	ハードディスクドライブのすべての内容を 2 台目のハードディスクドライブにコピーします。
Blu-ray/DVD/CD のサポート	コンピュータを Blu-ray、DVD、または CD メディアに直接バックアップします。または、リカバリポイントを Blu-ray、DVD、または CD メディアへコピーします。
LightsOut Restore	ファイルシステムが正常に動作している場合は、コンピュータの現在の状態に関係なく、離れた場所からコンピュータを復元できます。
リカバリポイントのインデックス付け	検索エンジンで、各リカバリポイントに含まれているすべてのファイル名にインデックス付けできます。ファイル名にインデックス付けすると、検索エンジンを使用して復元するファイルを検索できます。
Backup Exec Retrieve のサポート	Backup Exec Retrieve を使用して、リカバリポイントに保存されているファイルを検索し修復します。
ファイルとフォルダのバックアップ	選択したファイルまたはフォルダをバックアップ対象とするように、バックアップを制限できます。
オフサイトコピー	リカバリポイントをコピーし、1 つまたは 2 つの場所に保存します。

これらの機能を有効にするには、Symantec System Recovery の正規版のアップグレードライセンスを購入する必要があります。

Symantec System Recovery Basic Edition は、地域によって利用できない場合があります。詳しい情報が必要な場合、またはアップグレードライセンスを購入する場合は、最寄のリセラーにお問い合わせください。

<http://www.symantec.com/backupexec/>

p.24 の「Symantec System Recovery の機能の可用性について」を参照してください。

p.26 の「Symantec System Recovery の評価版について」を参照してください。

Symantec System Recovery の評価版について

ライセンスキーのインストールを先延ばしする場合でも、60 日間の評価期間中は、Symantec System Recovery のすべての機能を使用できます。

また、評価期間中に Symantec System Recovery Disk、Symantec System Recovery のコンポーネントは使えません。

Symantec System Recovery Disk の次の主な機能を使用するには、有効なライセンスキーが必要です。

- [コンピュータをバックアップ]ウィザード
p.98 の「[Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について](#)」を参照してください。
- Restore Anyware を使用して仮想ディスク(.vmdk または .vhd)を異なるハードウェアを備えた物理コンピュータに復元する[コンピュータを修復]ウィザード。
p.255 の「[別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery の評価期間は、ソフトウェアで次の操作のいずれかを行った時点から開始します。

- ドライブベースまたはファイルとフォルダのバックアップの定義
- コンピュータの修復
- ドライブのコピー
- 増分リカバリポイントの統合
- ドライブベースのバックアップまたはファイルとフォルダのバックアップの実行
- スケジュールされた仮想ディスク変換ジョブの定義
- スケジュールされた仮想ディスク変換ジョブの実行
- 仮想ディスクへのワンタイム変換ジョブの定義
- ドライブベースまたはファイルとフォルダのバックアップの定義
- コンピュータの修復
- 増分リカバリポイントの統合
- ドライブベースまたはファイルとフォルダのバックアップの実行

評価版のモードの製品を使用する場合、60 日後に期限切れになります。ただし、評価期間が終了するまですべての機能を使用できます。評価期間の終了後は、製品を購入するか、または評価版をアンインストールする必要があります。ライセンスは、いつでも(評価版の有効期間の終了後でも)ソフトウェアを再インストールせずに購入できます。

メモ: コンピュータ製造元ですでにインストール済みの製品の場合、評価版の有効期限は 90 日間です。インストールウィザードの製品のライセンスまたはアクティブ化のページに評価版の有効期限が示されます。

p.31 の「[評価期間後の Symantec System Recovery のアクティブ化](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のインストール

インストールを開始する前に、Symantec System Recovery のインストールに関するシステムの必要条件を確認してください。

p.21 の「[Symantec System Recovery のシステムの必要条件](#)」を参照してください。

メモ: インストール処理中に、コンピュータを再起動しなければならない場合があります。再起動後に、コンピュータが正常に動作することを確認してください。その場合、Symantec System Recovery のインストール時のログオンで使用した同一のユーザークレデンシャルを使用して再びログオンします。

警告: Symantec System Recovery Disk には、コンピュータをリカバリするために必要なツールが用意されています。製品のバージョンによって製品の DVD または別の DVD に Symantec System Recovery Disk が含まれていることがあります。DVD は安全な場所に保管してください。

Symantec System Recovery インストールプログラムでは、Symantec System Recovery Monitor をインストールできます。Symantec System Recovery Monitor は、Symantec System Recovery のインストール時にインストールするか、インストールプログラムを再び実行して後でインストールできます。

p.165 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor について](#)」を参照してください。

p.33 の「[Symantec System Recovery Monitor のインストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery をインストールするには

- 1 管理者アカウントまたは管理者権限をもつアカウントのいずれかを使用してコンピュータにログオンします。
- 2 Symantec System Recovery の製品 DVD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。

インストールプログラムが自動的に開始します。

インストールプログラムが実行されない場合は、コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
<drive>:¥browser.exe
```

<drive> をご使用のメディアドライブのドライブ文字に置き換えます。

- 3 次のいずれかを実行します。
 - Symantec System Recovery Monitor をすぐにインストールするには、[DVD ブラウザ]パネルの[役に立つリンク]の下にある[Symantec System Recovery Monitor をインストール]をクリックします。
 - 後で Symantec System Recovery Monitor をインストールするには、Symantec System Recovery インストールプログラムを再び実行します。
p.33 の「[Symantec System Recovery Monitor のインストール](#)」を参照してください。
- 4 [DVD ブラウザ]パネルで、[インストール] > [Symantec System Recovery をインストール]の順にクリックして、インストールを開始します。
- 5 [使用許諾契約]パネルで、使用許諾契約を確認し、[使用許諾契約書に同意します]をクリックします。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [インストールの種類]パネルで、次のいずれかを実行します。

Symantec System Recovery のすべて 次に示す順序で操作を実行します。
の機能をインストールするには

- [標準インストール]をクリックします。
- [次へ]をクリックします。

Symantec System Recovery の選択した機能をインストールするには 次に示す順序で操作を実行します。

- [カスタムインストール]をクリックし、[次へ]をクリックします。
 - [カスタムインストールの機能]パネルで、今回インストールしないすべての機能の選択を解除し、[次へ]をクリックします。
- p.29の「[カスタムインストールオプション](#)」を参照してください。

メモ: Windows の[プログラムの追加と削除]ツールを使用して Symantec System Recovery プログラムを修正することで、これらの機能を後でインストールできます。

- 8 [インストール先フォルダ]パネルで、Symantec System Recovery のインストール先フォルダを選択し、[次へ]をクリックします。
- 9 [インストールの概要]パネルで、Symantec System Recovery インストールの概要を確認し、[インストール]をクリックします。

インストール処理の進行状況が[進行状況]パネルに表示されます。

- 10 インストールが完了したら、メディアドライブから製品 DVD を取り出し、[終了]をクリックして、インストールウィザードを閉じます。

この時点でコンピュータを再起動しないように選択した場合、コンピュータを再起動するまで Symantec System Recovery を実行できません。

p.30の「[Symantec System Recovery のインストールの完了](#)」を参照してください。

カスタムインストールオプション

次の表は、[カスタムインストールの機能]パネルで使用できるオプションについて説明しています。

表 2-3 カスタムインストールオプション

オプション	説明
バックアップおよび修復サービス	コンピュータをバックアップまたはリカバリするために必要なプライマリサービスをインストールします。
Recovery Point Browser	リカバリポイントを使った、ファイルとフォルダの参照、マウント、コピー、検証、復元の実行を可能にします。

オプション	説明
User Interface	Symantec System Recovery サービスと連携するために必要な製品のユーザーインターフェースをインストールします。
エージェントの配備	このオプションは、ユーザーインターフェースオプションを展開すると表示されます。 Symantec System Recovery をインストールしたコンピュータに対して、Symantec System Recovery エージェントを他のコンピュータに配備することを許可します。Symantec System Recovery エージェントはリモートリカバリ管理に必要です。
Granular Restore Option	このオプションは、ユーザーインターフェースオプションを展開すると表示されます。 リカバリポイントを開き、Microsoft Exchange のメールボックス、フォルダ、個々のメッセージを復元できます。また、Microsoft SharePoint ドキュメントや、構造化されていないファイルとフォルダを復元することもできます。
CD/DVD サポート	CD または DVD に直接バックアップし、カスタム Symantec System Recovery Disk を作成できます。この機能を使用するには、CD ライターまたは DVD ライターが必要です。
LiveUpdate	最新の製品アップデートを適用して、シマンテック社のソフトウェアを最新の状態に保ちます。

p.27 の「[Symantec System Recovery のインストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のインストールの完了

Symantec System Recovery のインストールを完了して、コンピュータを再起動した後、Symantec System Recovery のセットアップウィザードは自動的に開始します。セットアップウィザードを使って製品のライセンスを取得するか、またはアクティブ化できます。LiveUpdate を実行して製品の更新をチェックしてから、最初のバックアップを設定できます。

メモ: コンピュータ製造元ですでにインストール済みの製品の場合、評価版の有効期限は 90 日間です。セットアップウィザードの[製品のアクティブ化]パネルの[後でアクティブ化する]ラベルを参照してください。

Symantec System Recovery のインストールを完了する方法

- 1 [ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。

コンピュータ製造元によって製品がインストールされている場合、**Symantec System Recovery** の初回実行時に、「ようこそ」のページが表示される場合があります。

- 2 次のいずれかを実行します。

- [製品をすでに購入済みで、ライセンスキーを持っている]をクリックします。

メモ:ライセンスキーは、製品 DVD ジャケットの裏面に記載されています。ライセンスキーは大切に保管してください。**Symantec System Recovery** をインストールするときに使用する必要があります。

- ライセンスのアクティブ化を延期するには、[後でアクティブ化する]をクリックします。評価版の有効期限が終了すると、製品は動作しなくなります。

p.26 の「[Symantec System Recovery の評価版について](#)」を参照してください。

- **Symantec System Recovery** の評価版からライセンスキーを購入する場合は、[Symantec Global Store]をクリックします。
- **Volume Incentive Program (VIP) Activation** キーを持っている場合は、対応するスペースに、証明書に記載されているキーを入力します。

- 3 [次へ]をクリックします。

- 4 次のいずれかを実行します。

- [LiveUpdate の実行]をクリックして、製品の出荷以降の更新をチェックします。
- インストール処理が完了したら、[簡単セットアップを起動]をクリックして、[簡単セットアップ]ウィンドウを表示します。(このオプションはサーバー版の**Symantec System Recovery** では利用できません。)

- 5 [終了]をクリックします。

p.31 の「[評価期間後の Symantec System Recovery のアクティブ化](#)」を参照してください。

評価期間後の Symantec System Recovery のアクティブ化

評価版の有効期限が終了する前に**Symantec System Recovery** のアクティブ化を行わなかった場合は、ソフトウェアが動作しなくなります。ただし、評価版の有効期限の終了後は、いつでも製品をアクティブ化することができます。

評価期間後に Symantec System Recovery をアクティブ化する方法

- 1 ヘルプメニューの[ライセンスキーの入力]をクリックします。
- 2 [製品をすでに購入済みで、ライセンスキーを持っている]をクリックします。

メモ: ライセンスキーは、製品 DVD ジャケットの裏面に記載されています。

- 3 対応するスペースにライセンスキーを入力してください。
- 4 [次へ]をクリックして、次に[完了]をクリックします。

p.26 の「[Symantec System Recovery の評価版について](#)」を参照してください。

LiveUpdate で Symantec System Recovery を更新

インターネット接続を使用すれば、お使いの製品のバージョンに必要なソフトウェアの更新プログラムを受け取ることができます。LiveUpdate は Symantec LiveUpdate サーバーに接続し、お使いの各シマンテック製品の更新プログラムを自動的にダウンロードしてインストールします。

LiveUpdate は、製品をインストールした直後に実行します。定期的に LiveUpdate を実行して、更新プログラムを入手してください。

LiveUpdate で Symantec System Recovery を更新する方法

- 1 ヘルプメニューの[LiveUpdate の実行]をクリックします。
- 2 [LiveUpdate]ウィンドウで、[開始]をクリックして更新プログラムをインストールします。
- 3 インストールが完了したら、[閉じる]をクリックします。

一部のプログラムの更新では、変更を反映するために、コンピュータの再起動が必要な場合があります。

p.27 の「[Symantec System Recovery のインストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のアンインストールについて

Symantec System Recovery を以前のバージョンの製品からアップグレードする場合は、インストールプログラムによって自動的に以前のバージョンがアンインストールされます。必要に応じて、手動でアンインストールすることもできます。

ソフトウェアのアンインストール方法については各オペレーティングシステムの手順に従ってください。

p.31 の「[評価期間後の Symantec System Recovery のアクティブ化](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Monitor のインストール

インストールを開始する前に、Symantec System Recovery Monitor のインストールに関するシステムの必要条件を確認してください。

p.34 の「[Symantec System Recovery Monitor のシステムの必要条件](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Monitor をインストールするには

- 1 管理者アカウントまたは管理者権限をもつアカウントのいずれかを使用してコンピュータにログオンします。
- 2 Symantec System Recovery 製品 DVD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。

インストールプログラムが自動的に実行されます。

インストールプログラムが実行されない場合は、コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
<drive>:¥browser.exe
```

<drive> をご使用のメディアドライブのドライブ文字に置き換えます。

- 3 [DVD ブラウザ] パネルの [役に立つリンク] の下にある [Symantec System Recovery Monitor をインストール] をクリックします。
- 4 画面に表示される指示に従って、インストールを完了させます。

インストールが完了したら、Symantec System Recovery Monitor を開始する前に Windows ファイアウォールの例外を設定する必要があります。

p.34 の「[Symantec System Recovery Monitor を使用するための Windows ファイアウォールの例外の設定](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Monitor のシステムの必要条件

表 2-4 Symantec System Recovery Monitor のシステムの最小必要条件

コンポーネント	説明
オペレーティングシステム	次の Microsoft Windows 32 ビット版と 64 ビット版のオペレーティングシステムがサポートされています。 <ul style="list-style-type: none">■ Microsoft Windows XP (すべてのエディション)■ Microsoft Windows Server 2003 または R2■ Microsoft Windows Vista (すべてのエディション)■ Microsoft Windows Server 2008 または R2■ Microsoft Windows 7 (すべてのエディション)■ Microsoft Windows 8 (Desktop Edition)■ Microsoft Windows 8 Server
利用可能なハードディスク容量	25 MB
ソフトウェア	Microsoft .NET Framework 4.0
Microsoft Windows の画面解像度	1024 x 768 ピクセル (推奨)

p.33 の「[Symantec System Recovery Monitor のインストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Monitor を使用するための Windows ファイアウォールの例外の設定

Symantec System Recovery Monitor を開始する前に、Windows ファイアウォールのプログラムとポートの例外を、ホストコンピュータとクライアントコンピュータの両方で設定します。

Windows ファイアウォールのポート例外を設定するには

- 1 [スタート] > [ファイル名を指定して実行] の順にクリックし、`firewall.cpl` と入力します。
- 2 左ペインで、[詳細設定] をクリックします。
- 3 [受信の規則] オプションを選択します。
- 4 右ペインで、[新しい規則] をクリックします。
- 5 Windows ファイアウォールのポート例外を設定するには、次のステップを実行します。
 - [規則の種類] で、[ポート] オプションを選択します。

- [次へ]をクリックします。
 - [TCP]オプションを選択します。
 - [特定のローカルポート]オプションを選択します。
 - [特定のローカルポート]フィールドに、デフォルトのポート番号として135を入力します。
 - [次へ]をクリックします。
 - [接続を許可する]オプションを選択します。
 - [次へ]をクリックします。
デフォルトの設定は変更しません。
 - [次へ]をクリックします。
 - 名前フィールドに規則の名前を指定します。
 - [完了]をクリックします。
- 6 Windows ファイアウォールのプログラム例外を設定するには、次のステップを実行します。
- [規則の種類]で、[プログラム]オプションを選択します。
 - [次へ]をクリックします。
 - [このプログラムのパス]オプションを選択します。
 - **Symantec System Recovery** については、Vprosvc.exe のデフォルトのインストール先である次の場所を参照します。
C:\Program Files (x86)\Symantec\System Recovery\Agent\Vprosvc.exe
 - **Backup Exec System Recovery** については、Vprosvc.exe のデフォルトのインストール先である次の場所を参照します。
C:\Program Files (x86)\Symantec\Backup Exec System Recovery\Agent\Vprosvc.exe
 - [接続を許可する]オプションを選択します。
 - [次へ]をクリックします。
デフォルトの設定は変更しません。
 - [次へ]をクリックします。
 - [名前]フィールドに規則の名前を指定します。
 - [完了]をクリックします。

p.165 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor について](#)」を参照してください。

コンピュータのリカバリの確保

この章では以下の項目について説明しています。

- [コンピュータの修復の確認について](#)
- [Symantec System Recovery Disk のテストについて](#)
- [カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)

コンピュータの修復の確認について

Windows が正常に起動または実行しない場合、Symantec System Recovery Disk を使用して、コンピュータを修復できます。コンピュータのネットワークカードとハードディスクの実行に必要なドライバが、リカバリディスクに含まれている必要があります。

コンピュータの修復に必要なドライバがあることを確認するために、[ドライバの検証の実行]のツールを使うことができます。ドライバ検証のツールは Symantec System Recovery Disk で利用可能です。ドライバ検証ツールでは、Symantec System Recovery Disk 上のハードウェアドライバと、コンピュータのネットワークカードとハードディスクの実行に必要なドライバが比較されます。

コンピュータのネットワークインターフェースカードまたはストレージコントローラに対して変更を加えた場合は、必ずドライバ検証テストを実行してください。

メモ: Symantec System Recovery Disk のドライバ検証ツールは無線ネットワークアダプタ用のドライバをサポートしていません。

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテストについて](#)」を参照してください。

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテスト](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk のテストについて

Symantec System Recovery Disk をテストして、修復環境がコンピュータ上で正常に実行されることを確認しておく必要があります。

メモ: Symantec System Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 DVD に含まれるか、または別の DVD として提供されます。Symantec System Recovery Disk が含まれている DVD は安全な場所に保管してください。

Symantec System Recovery Disk をテストすると、次のような問題を識別して解決できます。

- Symantec System Recovery Disk を起動できない
 - p.241 の「[CD/DVD から起動するためのコンピュータの設定または USB デバイス](#)」を参照してください。
- コンピュータ上のリカバリポイントにアクセスするのに必要なストレージドライブがない
- Symantec System Recovery Disk を実行するためにシステムに関する情報が必要である

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテスト](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk のテスト

次の表は Symantec System Recovery Disk のテストの手順の概略を示したものです。

表 3-1 Symantec System Recovery Disk のテスト

手順	処理	説明
手順 1	ドライバ検証ツールの実行	<p>ドライバ検証ツールを実行して、コンピュータのネットワークカードとストレージデバイスに対して Symantec System Recovery Disk が実行可能かどうかをテストします。ドライバがリカバリディスクに含まれていない場合、[ドライバの検証結果]ダイアログボックスが表示されます。</p> <p>適切なドライバにアクセスできないと、Symantec System Recovery Disk の実行中にデバイスを使用できません。そのため、リカバリポイントがネットワークまたはローカルハードディスクドライブに保存されている場合は、リカバリポイントにアクセスできない場合があります。</p> <p>その場合、ドライバを検索して CD またはフロッピーディスクにコピーできます。また、カスタム Symantec System Recovery Disk を作成することもできます。</p> <p>p.39 の「カスタム Symantec System Recovery Disk の作成」を参照してください。</p>
手順 2	Symantec System Recovery Disk を使用したコンピュータのブート	<p>Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータをブートします。</p> <p>p.239 の「Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート」を参照してください。</p>
手順 3	接続のテスト	<p>ネットワークまたはローカルコンピュータに保存されているリカバリポイントの模擬復元を実行します。模擬復元の実行はネットワークまたはローカルハードディスクドライブに接続できるかどうかをテストするのに役立ちます。</p>

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテストについて](#)」を参照してください。

カスタム Symantec System Recovery Disk の作成

ドライバ検証に成功し、ご使用の **Symantec System Recovery Disk** が正常に機能しているように見える場合でも、シマンテック社はカスタム **Symantec System Recovery Disk** を作成することをお勧めします。カスタム **Symantec System Recovery Disk** は、CD/DVD または USB デバイス上に作成できます。カスタム **Symantec System Recovery Disk** には、コンピュータの現在のネットワークドライブとストレージデバイスドライブが含まれます。このため、緊急事態が発生した場合に、コンピュータの復元に必要なリカバリポイントを実際に取得できるようになります。

作成したカスタム **Symantec System Recovery Disk** は、別のカスタム **Symantec System Recovery Disk** を作成するためのソースとして使用できます。

メモ: カスタム Symantec System Recovery Disk CD/DVD を作成するには、書き込み可能な Blu-ray/DVD/CD-RW ドライブが必要です。

カスタム Symantec System Recovery Disk を作成するには

- 1 利用可能にするすべてのストレージデバイスとネットワークデバイスを取り付け、電源をオンにします。
- 2 Symantec System Recovery を開始します。
- 3 Symantec System Recovery Disk DVD をメディアドライブに挿入します。
- 4 [タスク]メニューで、[カスタムリカバリディスクを作成]をクリックします。
- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 次のいずれかを実行します。

ソース Symantec System Recovery Disk へのパスがわかっている場合 そのパスを[Symantec System Recovery Disk メディアの場所]フィールドに入力します。

ソース Symantec System Recovery Disk へのパスが不明の場合 次に示す順序で操作を実行します。

- [参照]をクリックします。
- [Symantec System Recovery Disk ISO ファイル]をクリックして ISO イメージファイルのパスを特定するか、[Symantec System Recovery Disk フォルダ]をクリックして別のメディア上のディスクのパスを特定します。
- [開く]ダイアログボックスで、適切な ISO イメージファイル、メディアドライブまたはフォルダの場所に移動します。
- [開く]をクリックします。

- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [Symantec System Recovery Disk の作成]パネルで、Symantec System Recovery Disk を作成するための設定を選択します。
p.42 の「[Symantec System Recovery Disk の作成の設定](#)」を参照してください。
- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 含まれるストレージドライブとネットワークドライブのリストを確認し、ドライブを追加するか、不要なドライブを削除します。
- 11 [次へ]をクリックします。

- 12 [起動オプション]パネルで、対応するリストからデフォルトのキーボード配列、表示言語、タイムゾーンを選択します。
- 13 [次へ]をクリックします。
- 14 [オプション]パネルで、カスタム Symantec System Recovery Disk のオプション設定を選択します。
 p.43 の「[Symantec System Recovery Disk のオプションの設定](#)」を参照してください。
- 15 [次へ]をクリックします。
- 16 [ライセンスの設定]パネルで、カスタマイズした Symantec System Recovery Disk でライセンス付き機能を有効にする方法を指定します。たとえば、コンピュータをバックアップというコールドイメージ機能があります。
- 17 [次へ]をクリックします。
- 18 カスタム Symantec System Recovery Disk の作成用に選択したオプションの概略を確認します。
- 19 [完了]をクリックします。

警告: 新しく作成したカスタム Symantec System Recovery Disk は必ずテストしてください。Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータを起動し、リカバリポイントを含んでいるドライブにアクセスできるように確保します。

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテスト](#)」を参照してください。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

p.38 の「[Symantec System Recovery Disk のテストについて](#)」を参照してください。

p.41 の「[USB 上にある Symantec System Recovery Disk の更新について](#)」を参照してください。

USB 上にある Symantec System Recovery Disk の更新について

新しいドライブや新しいバージョンのドライブをコンピュータに追加する場合は常に、それらを Symantec System Recovery Disk に追加する必要があります。Symantec System Recovery Disk が CD 上または DVD 上にある場合、新しいカスタムリカバリディスクを作成して、新しいドライブを含める必要があります。ただし、Symantec System Recovery Disk が USB デバイス上にある場合は、新しいカスタムリカバリディスクを作成せずに、既存のディスクを更新することができます。

USB デバイス上にある既存の Symantec System Recovery Disk を更新するには、[カスタム Symantec Recovery Disk の作成]ウィザードを実行します。USB デバイス上にある既存の Symantec System Recovery Disk をコピー元とコピー先の両方に使用してい

ることを確認します。Symantec System Recovery Disk の作成時には、既存のドライブは保持され、新しいドライブのみがリカバリディスクに追加されます。

メモ: 複数のコンピュータからのドライブを USB デバイス上にある 1 つの Symantec System Recovery Disk に追加できます。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk の作成の設定

次の表は[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成]ウィザードの[Symantec System Recovery Disk の作成]パネルのオプションを記述したものです。

表 3-2 Symantec System Recovery Disk の作成の設定

オプション	説明
ディスクラベル	Symantec System Recovery Disk のラベルに使う名前を指定できます。
Symantec System Recovery Disk を CD/DVD または USB デバイスに作成	カスタマイズした Symantec System Recovery Disk を CD、DVD、USB デバイスに保存できます。このオプションを選択してから、CD または DVD を配置したメディアドライブか USB デバイスをプラグインしたメディアドライブを選択します。 メモ: USB デバイス上の既存のデータは、Symantec System Recovery Disk の作成中はフォーマットされません。
カスタム Symantec System Recovery Disk (ISO ファイル) のコピーを保存	カスタマイズした Symantec System Recovery Disk を CD/DVD イメージ(.iso)ファイルとして保存できます。Symantec System Recovery Disk を .iso ファイルとして保存する場合は、このオプションを選択します。その後、結果ファイルを保存するパスを指定します。
Symantec System Recovery Disk のカスタマイズを省略	[カスタム Symantec System Recovery Disk を作成]ウィザードの残りのパネルを省略できます。デフォルトの Symantec System Recovery Disk オプションのいずれも変更しない場合は、このオプションを選択します。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk のオプションの設定

次の表は[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成]ウィザードの[オプション]パネルのオプションを記述したものです。

表 3-3 Symantec System Recovery Disk のオプションの設定

オプション	説明
ネットワークサービスを自動的に開始	LightsOut Restore によってコンピュータを修復するときにネットワーク接続を自動的に開始します。
動的 IP	追加のネットワーク設定の必要なしでネットワークに接続します。復元するときにネットワーク上で DHCP サーバーが利用可能であることがわかっている場合、このオプションをクリックできます。
静的 IP	特定のネットワークアダプタと固有のアドレスが設定されているネットワークに接続します。修復するときに DHCP サーバーがない(または DHCP サーバーが利用不能である)ことがわかっている場合は、このオプションをクリックします。
Symantec pcAnywhere を自動的に開始	Symantec System Recovery Disk を起動すると、Symantec pcAnywhere Thin Host を自動的に開始します。
設定	pcAnywhere のログオン資格情報と他の省略可能なパラメータを設定できます。 p.43 の「 pcAnywhere を設定するためのオプション 」を参照してください。
Windows ファイアウォールの設定の使用	Symantec System Recovery Disk に現在の Windows ファイアウォールの設定を保存します。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

pcAnywhere を設定するためのオプション

次の表は[Symantec pcAnywhere の設定]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[カスタム Symantec System Recovery Disk を作成]ウィザードの[オプション]パネルから利用可能です。

表 3-4 pcAnywhere を設定するためのオプション

オプション	説明
ユーザー名	pcAnywhere への認証を行うためのユーザー名を入力できます。

オプション	説明
パスワード	pcAnywhere への認証を行うためのパスワードを入力できます。
パスワードの確認	pcAnywhere への認証を行うためのパスワードを再入力できます。
ホスト名	ホストに使う名前を入力できます。 ホスト名をコンピュータと同じ名前に設定する場合は、このボックスを空白にしておくことができます。
暗号化レベル	ホストとリモートコンピュータ間のデータストリームを暗号化できます。
暗号化レベル - なし	ホストとリモートコンピュータ間で、データストリームの暗号化が行われないよう指定できます。
暗号化レベル - pcAnywhere	第三者が容易に解読できないように、数学アルゴリズムを使用してデータをスクランブル処理できます。 このオプションは、pcAnywhere がサポートしているあらゆるオペレーティングシステムで利用可能です。
暗号化レベル - 共通	暗号キーを使ってデータのエンコードとデコードを行うことができます。 このオプションは、Microsoft CryptoAPI をサポートしているあらゆる Windows オペレーティングシステムで利用可能です。

p.43 の「[Symantec System Recovery Disk のオプションの設定](#)」を参照してください。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

始めましょう

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery の使用方法](#)
- [Symantec System Recovery の開始](#)
- [Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)
- [簡単セットアップを使って最初のバックアップを設定](#)
- [\[詳細\]ページの非表示または表示](#)

Symantec System Recovery の使用方法

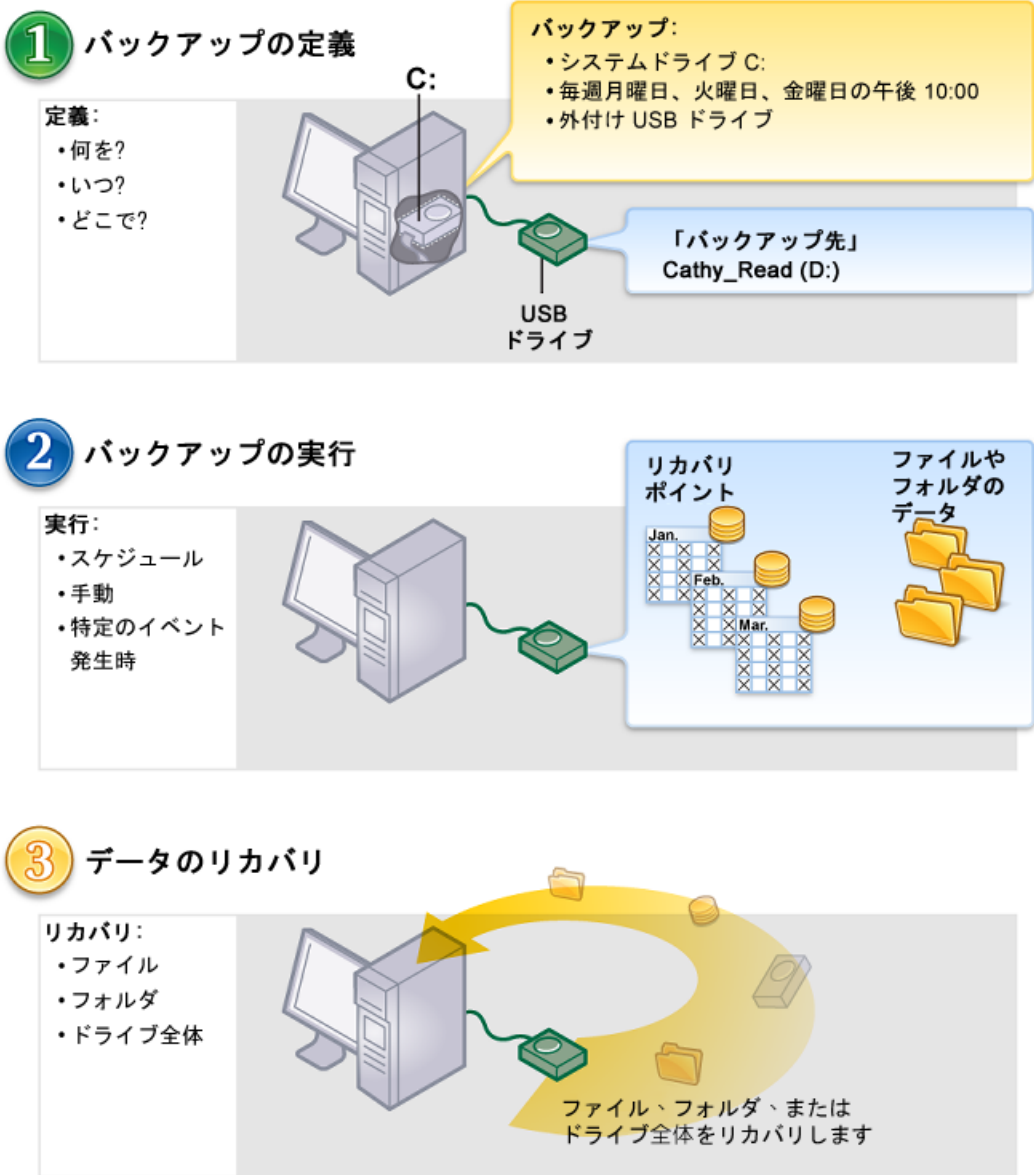
Symantec System Recovery はファイル、フォルダ、または全体のドライブをバックアップするときに便利です。データをバックアップするためには、バックアップを定義する必要があります。バックアップはどんなデータをいつバックアップし、どこに置くかを指定します。

Symantec System Recovery を使用する場合、次の主なタスクを実行します。

- バックアップの定義
- バックアップの実行
- ファイル、フォルダ、ドライブ全体のリカバリ

次の図を参照して、タスクの関連性を確認してください。

図 4-1 Symantec System Recovery の使用



p.47 の「Symantec System Recovery の開始」を参照してください。

p.47 の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

Symantec System Recovery の開始

Symantec System Recovery は、デフォルトでは Windows の Program Files フォルダにインストールされます。インストール時に、プログラムアイコンが Windows のシステムトレイにインストールされます。このアイコンから Symantec System Recovery を開くことができます。Windows のスタートメニューで Symantec System Recovery を開くこともできます。

Symantec System Recovery を開始するには

◆ 実行している Windows のバージョンによって、次のいずれかの方法を使用します:

- Windows のクラシックタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec System Recovery]の順にクリックします。
- Windows のタスクバーで、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec System Recovery]の順にクリックします。
- Windows のシステムトレイで、[Symantec System Recovery] のトレイアイコンをダブルクリックします。
- Windows のシステムトレイで [Symantec System Recovery] のトレイアイコンを右クリックして、[Symantec System Recovery を開く]をクリックします。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定

[オプション]ダイアログボックスでは、Symantec System Recovery のデフォルトオプションを設定できるいくつかのビューがあります。

Symantec System Recovery のデフォルトオプションを設定する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 編集するオプションを選択し、必要な変更を行って[OK]をクリックします。

p.48 の「[バックアップの全般オプションの設定](#)」を参照してください。

p.50 の「[コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整](#)」を参照してください。

p.51 の「[ネットワークスロットルの有効化](#)」を参照してください。

p.51 の「[デフォルトのトレイアイコン設定の調整](#)」を参照してください。

p.53 の「[新しいファイルの種類と拡張子の追加](#)」を参照してください。

p.54 の「[ファイルの種類と拡張子の名前の変更](#)」を参照してください。

- p.54 の「[デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元](#)」を参照してください。
- p.55 の「[ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除](#)」を参照してください。
- p.56 の「[外部ドライブの一意の名前の削除または変更](#)」を参照してください。
- p.57 の「[オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定](#)」を参照してください。
- p.58 の「[Symantec System Recovery メッセージのログへの記録](#)」を参照してください。
- p.60 の「[製品 \(イベント\) メッセージの電子メール通知の有効化](#)」を参照してください。
- p.158 の「[SNMPトラップを送信するための Symantec System Recovery の設定](#)」を参照してください。

バックアップの全般オプションの設定

バックアップを実行したときに作成されるリカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータのデフォルトの保存先を指定できます。新しいバックアップを定義したときに保存場所の指定を省略した場合、ここで設定した保存場所が使用されます。

またコンピュータ名をバックアップデータファイル名の先頭に追加し、新しいサブフォルダに各々のバックアップファイルを保存することを選択できます。

バックアップの全般オプションを設定する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [全般]をクリックします。
- 3 バックアップの適切なオプションを設定してください。
p.48 の「[全般オプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

全般オプション

次の表は[全般]ページのオプションを記述したものです。ここで設定するオプションはデフォルトのバックアップオプションとして使われます。

表 4-1 全般オプション

オプション	説明
バックアップデータのファイル名の先頭にコンピュータ名を追記する	<p>各バックアップデータファイル名の先頭にコンピュータ名を追加します。</p> <p>このオプションは、複数のコンピュータを同じドライブにバックアップする場合に役立ちます。たとえば、ラップトップコンピュータとデスクトップコンピュータを同じ USB ドライブまたはネットワークドライブにバックアップする場合です。各バックアップデータファイル名の先頭にコンピュータ名が追加されていると、より簡単に、どのバックアップデータファイルがどのコンピュータのものであるかを特定できます。</p>
バックアップファイルを一意なサブフォルダに保存する	<p>バックアップ先として使用する新しいサブフォルダを作成します。</p> <p>メモ: 新しいサブフォルダにはコンピュータと同じ名前が付けられます。たとえば、コンピュータ名が「My_Laptop」である場合、新しいサブフォルダは「¥My_Laptop」という名前になります。</p>
デフォルトのバックアップ先	<p>リカバリポイントとファイルやフォルダのバックアップデータを保存するフォルダへのパスを指定できます。パスが不明の場合は、場所を参照できます。</p> <p>ネットワーク上の保存場所のパスを入力した場合は、認証に必要なユーザー名とパスワードを入力します。</p> <p>メモ: バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。ただし、他のユーザーのアクセスを防止するために、バックアップデータを暗号化することができます。バックアップデータを暗号化する場合は、バックアップを定義または編集するときに[詳細]オプションを参照してください。</p> <p>p.78 の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。</p> <p>p.92 の「高度なバックアップオプションの編集」を参照してください。</p>

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響の調整

コンピュータでバックアップが実行されている場合、コンピュータパフォーマンスが減速することがあります。コンピュータパフォーマンスの減速は、単体リカバリポイントを作成する場合により顕著であることがあります。パフォーマンスが減速するのは、バックアップを実行するために Symantec System Recovery によってコンピュータのハードディスクとメモリーリソースが使用されているためです。

作業中、コンピュータに対する Symantec System Recovery の影響を最小化するためにバックアップの速度を変更できます。

メモ: バックアップまたは修復中に、そのときのニーズに合わせてデフォルト設定を変更することもできます。

コンピュータパフォーマンスに対するバックアップの影響を調整する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [パフォーマンス]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - バックアップジョブ中にコンピュータパフォーマンスを向上させるには、スライダーバーを[低]の方に移動します。
 - バックアップジョブがもっとすばやく動作できるようにするには、スライダーバーを[高速]の方に移動します。
- 4 [OK]をクリックします。

p.122 の「[バックアップ速度の調整](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

ネットワークスロットルの有効化について

ネットワークスロットルを有効にすることによって、バックアップによるネットワークパフォーマンスへの影響を制限できます。

多くの要因がネットワークパフォーマンスに影響します。この機能を使う前に、次の点について考慮してください。

ネットワークカード ネットワークが有線か無線か。ネットワークカードの速度。

ネットワークバックボーン ネットワークパイプラインのサイズ。転送速度は 10 MB をサポートしているか、1 GB をサポートしているか。

ネットワーク サーバー	サーバーハードウェアの堅ろう性。サーバーハードウェアのプロセッサ速度。搭載されている RAM 容量。RAM の速度。
バックアップ	同時にバックアップするようにスケジューリングしているコンピュータの数。
ネットワークトラフィック	バックアップの実行をスケジューリングしている時間帯は、ネットワークトラフィックが重いときか、軽いときか。

p.51 の「[ネットワークスロットルの有効化](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

ネットワークスロットルの有効化

ネットワークの処理能力がわかっている場合のみ、この機能の使用を検討してください。ネットワークトラフィックが軽いときにバックアップを時間差でスケジューリングしている場合は、この機能を使用する必要がないこともあります。複数のコンピュータを同時に、同じネットワークの保存先にバックアップするのは避けてください。

ネットワークのパフォーマンスに関する必要な情報を収集してから、その情報に応じてバックアップをスケジューリングします。この機能を有効にし、環境に合わせて[最大ネットワークスロットル]を設定します。

ネットワークスロットルを有効にする方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [パフォーマンス]をクリックします。
- 3 [ネットワークスロットルを有効化]を選択します。
- 4 [最大ネットワークスロットル]フィールドでは、ネットワークスループットの最大量(KB)を入力してください。
- 5 [OK]をクリックします。

p.50 の「[ネットワークスロットルの有効化について](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

デフォルトのトレイアイコン設定の調整

システムトレイアイコンをオンにするか、または必要に応じてオフにできます。発生したエラーメッセージのみを表示するか、またはエラーメッセージとその他の情報(バックアップの完了など)の両方を表示するかを選択できます。

デフォルトのトレイアイコン設定を調整する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [トレイアイコン]をクリックし、次にトレイアイコンで使うオプションを選択してください。
p.52 の「[トレイアイコン]のオプション」を参照してください。
- 3 [OK]をクリックします。

p.47 の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

[トレイアイコン]のオプション

次の表はデフォルトのトレイアイコンの設定を調整するために選択できるオプションを記述したものです。

表 4-2 [トレイアイコン]のオプション

オプション	説明
システムトレイアイコンを表示	システムトレイに Symantec System Recovery のアイコンを表示します。 その他のオプションを有効または無効にするには、このオプションを選択する必要があります。
未処理のバックアップを表示	スケジュールしていたバックアップが実行されなかった場合に通知します。 たとえば、バックアップの実行をスケジュールしていた時間にコンピュータの電源が入っていなかった場合などに通知されます。
システムトレイに関する質問を表示	データの継続的なバックアップに役立つメッセージを、質問形式で表示します。
状態メッセージを表示	バックアップ操作の状態についてのメッセージを表示します。たとえば、バックアップの開始の通知や、バックアップ先の空き容量がわずかに変わったことの通知などです。
エラーメッセージを表示	エラーが発生した場合にエラーメッセージを表示して、データ保護を妨げる可能性がある問題の解決を促します。

p.51 の「デフォルトのトレイアイコン設定の調整」を参照してください。

p.47 の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

ファイルの種類管理についてとファイルの拡張子

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義する場合、ファイルの種類を指定すると、頻繁に使用するファイルを簡単に処理対象に含めることができます。たとえば、コンピュータに音楽ファイルを保存している場合、すべての音楽ファイルを含むバックアップを設定できます。たとえば、**.mp3**、**.wav** です。

最も一般的なファイルの種類と拡張子は、デフォルトで定義されています。必要に応じて、ファイルの種類のカテゴリをさらに定義して、いつでもそのカテゴリを編集できます。たとえば、2 つの新しいファイルの拡張子を使う必要がある新しいプログラムをインストールする場合 (たとえば **.pft** と **.ptp**)。新しいファイルの種類を定義し、そのカテゴリの 2 つのファイルの拡張子を定義できます。その後、バックアップを定義するときに、この新しいカテゴリを選択できます。バックアップを実行すると、拡張子が **.pft** と **.ptp** のすべてのファイルがバックアップされます。

p.53 の「[新しいファイルの種類と拡張子の追加](#)」を参照してください。

p.54 の「[ファイルの種類と拡張子の名前の変更](#)」を参照してください。

p.54 の「[デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元](#)」を参照してください。

p.55 の「[ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除](#)」を参照してください。

新しいファイルの種類と拡張子の追加

最も一般的なファイルの種類と拡張子は、デフォルトで定義されています。ただし、必要に応じてファイルの種類のカテゴリを追加できます。

新しいファイルの種類と拡張子を追加する方法

- 1 [タスク]メニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストの下部で、[ファイルの種類を追加](+)をクリックします。
- 4 新しいファイルの種類のカテゴリを説明する名前を入力して、**Enter**キーを押します。
- 5 [拡張子]リストの下部で、[拡張子の追加](+)をクリックします。
- 6 アスタリスク(*)とピリオドを入力してから、定義するファイルの種類と拡張子を入力し、**Enter**キーを押します。
- 7 [OK]をクリックします。

p.54 の「[ファイルの種類と拡張子の名前の変更](#)」を参照してください。

p.54 の「[デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元](#)」を参照してください。

p.55 の「[ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除](#)」を参照してください。

p.53 の「[ファイルの種類管理についてとファイルの拡張子](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

ファイルの種類と拡張子の名前の変更

必要に応じて、既存のファイルの種類と拡張子の名前を変更できます。

ファイルの種類と拡張子の名前を変更する方法

- 1 [タスク]メニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストからファイルの種類を選択し、次のいずれかを実行します。
 - [ファイルの種類名を変更]をクリックして、選択したファイルの種類の名前を編集します。
 - [拡張子]リストから拡張子を選択し、[拡張子名を変更]をクリックして拡張子の名前を編集します。
- 4 [OK]をクリックします。

p.53 の「[新しいファイルの種類と拡張子の追加](#)」を参照してください。

p.54 の「[デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元](#)」を参照してください。

p.55 の「[ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除](#)」を参照してください。

p.53 の「[ファイルの種類の管理についてとファイルの拡張子](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元

必要に応じて、デフォルトのファイルの種類と拡張子を復元できます。

デフォルトのファイルの種類と拡張子を復元する方法

- 1 [タスク]メニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストからファイルの種類を選択します。

- 4 [デフォルトのファイルの種類のリストを復元]または[デフォルトの拡張子のリストを復元]のいずれかをクリックして、デフォルトのファイルの種類または拡張子をすべて復元します。

注意: 設定したファイルの種類と拡張子がすべて削除されます。これらは、再度手動で追加する必要があります。

- 5 [OK]をクリックします。
- p.53 の「[新しいファイルの種類と拡張子の追加](#)」を参照してください。
- p.54 の「[ファイルの種類と拡張子の名前の変更](#)」を参照してください。
- p.55 の「[ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除](#)」を参照してください。
- p.53 の「[ファイルの種類と管理についてとファイルの拡張子](#)」を参照してください。
- p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

ファイルの種類とそのすべての拡張子の削除

必要に応じて、ファイルの種類とそのすべての拡張子を削除できます。

ファイルの種類とそのすべての拡張子を削除する方法

- 1 [タスク]メニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ファイルの種類]をクリックします。
- 3 [ファイルの種類]リストからファイルの種類を選択し、次のいずれかを実行します。
 - [ファイルの種類を削除]をクリックして、ファイルの種類とそのすべての拡張子を削除します。
 - [拡張子]リストから拡張子を選択し、[拡張子を削除]をクリックして拡張子を削除します。

メモ: デフォルトのファイルの種類は削除できません。拡張子は、デフォルトのファイルの種類と拡張子以外、すべて削除できます。デフォルトのファイルの種類に拡張子を追加することもできます。

- 4 [OK]をクリックします。
- p.53 の「[新しいファイルの種類と拡張子の追加](#)」を参照してください。
- p.54 の「[ファイルの種類と拡張子の名前の変更](#)」を参照してください。
- p.54 の「[デフォルトのファイルの種類と拡張子の復元](#)」を参照してください。

p.53 の「[ファイルの種類管理についてとファイルの拡張子](#)」を参照してください。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

外部ドライブに一意の名前を使うことについて

Symantec System Recovery はバックアップ先かオフサイトコピー先として外部ドライブを使うとき、外部ドライブに一意の名前を割り当てることを可能にします。一意の名前を割り当てることは、複数のドライブを使う場合、これらの保存先を管理し、混乱を避けるのに役立ちます。ドライブを接続するたびに割り当てられるドライブ文字が変更される場合に特に役立ちます。

メモ: 一意の名前を使用しても、ドライブラベルが変更されることはありません。一意の名前は Symantec System Recovery がドライブにアクセスする場合にのみ使用されます。

たとえば、ある週の間だけ、オフサイトコピー先として使用している 2 つの異なる外部ドライブをスワップアウトするとします。ドライブラベルに基づいてその時点でどのドライブを使用しているかを識別することは困難です。以前に割り当てられたドライブ文字が変更されたら、より混乱します。

ただし Symantec System Recovery と各ドライブを使うとき、各ドライブと一意の名前を関連付けることができます。ドライブと関連付けられる一意の名前は Symantec System Recovery のさまざまな場所に表示されます。

メモ: 各外部ドライブに物理的なラベルを貼り付けて、ドライブ交換のタスクを管理しやすくすることも有効な方法です。

たとえば、あるドライブに「Cathy Read」、2 つ目のドライブに「Thomas Read」という一意の名前を割り当てた場合。ドライブがコンピュータに接続されるたびに Symantec System Recovery に割り当てた一意の名前が表示されます。

p.103 の「[オフサイトコピーについて](#)」を参照してください。

これらの設定は、[オプション]ダイアログボックスで 1 つのビューにすべてのドライブの一意の名前を表示させることで、簡単に行えます。このビューから、既存の名前を削除または編集できます。

p.56 の「[外部ドライブの一意の名前の削除または変更](#)」を参照してください。

外部ドライブの一意の名前の削除または変更

必要に応じて、ドライブの一意の名前を削除または変更できます。

メモ: Symantec System Recovery によって、初めて外部ドライブをコンピュータに接続したときに一意の名前を割り当てることができます。

外部ドライブの一意の名前を削除または変更する方法

- 1 [タスク]メニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ターゲット]の下の[外部ドライブ]をクリックします。
- 3 リストから外部ドライブを選択し、次のいずれかを実行します。
 - 外部ドライブに関連付けられた一意の名前を削除する場合は、[削除]をクリックします。
 - 一意の名前を編集する場合は、[名前の変更]をクリックします。
- 4 [OK]をクリックします。

p.56 の「[外部ドライブに一意の名前を使うことについて](#)」を参照してください。

オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定

File Transfer Protocol (FTP) は、インターネットを介してファイルをコピーする最も簡単で安全な方法です。Symantec System Recovery は FTP クライアントとして機能し、リカバリポイントをリモート FTP サーバーにコピーします。重要なデータのセカンダリバックアップとして FTP サーバーにリカバリポイントをコピーできます。

[オプション]ダイアログボックスでは、FTP の設定を行い、リカバリポイントが確実に FTP サーバーにコピーされるようにすることができます。

オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定を行う方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [ターゲット]の下の[FTP の設定]をクリックします。
- 3 適切なオプションを選択してください。

p.57 の「[FTP 設定のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

FTP 設定のオプション

次の表はオフサイトコピーで使用するデフォルトの FTP の設定のために選択できるオプションを記述したものです。

表 4-3 FTP 設定のオプション

オプション	説明
接続モード: パッシブ (推奨)	セキュリティシステムとの競合を回避できます。このモードは、一部のファイアウォールおよびルータが必要です。パッシブモードを使用すると、FTP クライアントは FTP サーバーによって提供される IP アドレスとポートへの接続を開きます。
接続モード: アクティブ	サーバーは FTP クライアントによって提供される IP アドレスとポートへの接続を開くことができます。パッシブモードで接続または転送の試行に失敗した場合、またはデータソケットエラーが発生した場合は、アクティブモードを使用します。
接続試行の制限	Symantec System Recovery による FTP サーバーへの接続試行の最大回数を示します。最大 100 回まで試行できます。
接続試行の上限	Symantec System Recovery による FTP サーバーへの接続試行が停止されるまでの秒数を示します。最大 600 秒 (10 分) まで指定できます。
デフォルトポート	接続のリスニングを行う FTP サーバー上のポートを示します。 FTP サーバーの管理者に相談して、入ってくるデータが指定するポートで確実に受信されるように設定してください。

p.57 の「[オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery メッセージのログへの記録

発生時にログに記録する製品メッセージ(エラー、警告、情報)とログファイルの保存場所を指定できます。製品メッセージには、バックアップまたは関連するイベントの状態について役立つ情報が含まれます。また、トラブルシューティングが必要なときに便利な情報も含まれます。

2 つのログ記録方法を利用できます。Symantec System Recovery のログと Windows アプリケーションログです。

Symantec System Recovery メッセージをログに記録する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [通知]で[ログファイル]をクリックします。
- 3 適切なログファイルオプションを選択します。

p.59 の「[\[ログファイル\]のオプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

Windows のイベントログに記録する製品イベントを設定する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [通知]で[イベントログ]をクリックします。
- 3 適切なイベントログオプションを選択します。
p.60 の「[イベントログ]のオプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

p.47 の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

[ログファイル]のオプション

次の表は Symantec System Recovery メッセージをログに記録するためのオプションを記述したものです。

表 4-4 [ログファイル]のオプション

オプション	説明
優先度およびメッセージの種類の選択	<p>メッセージをログに記録する優先レベルを選択できます。優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージをログに記録するか、どのメッセージも記録しないかを選択できます。</p> <p>次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのメッセージ ■ 優先度が中および高のメッセージ ■ [優先度の高いメッセージ] ■ メッセージなし
エラー	発生時にエラーメッセージをログに記録します。
警告	発生時に警告メッセージをログに記録します。
情報	発生時に情報メッセージをログに記録します。
ログファイルの場所	<p>ログファイルを作成し保存するパスを指定できます。</p> <p>パスが不明の場合は、場所を参照できます。</p>
最大ファイルサイズ	<p>ログファイルの最大可能サイズ(KB)を指定できます。</p> <p>新しく発生したログ項目は、ログファイル内の最も古いログ項目と置き換えられるため、ログファイルのサイズは設定した制限内に維持されます。</p>

p.58 の「Symantec System Recovery メッセージのログへの記録」を参照してください。

[イベントログ]のオプション

次の表は Windows のイベントログに記録する製品イベントを設定するためのオプションを記述したものです。

表 4-5 [イベントログ]のオプション

オプション	説明
優先度およびメッセージの種類の選択	メッセージをログに記録する優先レベルを選択できます。優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージをログに記録するか、どのメッセージも記録しないかを選択できます。 次のいずれかのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none">■ すべてのメッセージ■ 優先度が中および高のメッセージ■ [優先度の高いメッセージ]■ メッセージなし
エラー	発生時にエラーメッセージをログに記録します。
警告	発生時に警告メッセージをログに記録します。
情報	発生時に情報メッセージをログに記録します。

p.58 の「[Symantec System Recovery メッセージのログへの記録](#)」を参照してください。

製品(イベント)メッセージの電子メール通知の有効化

バックアップの実行中にエラーまたは警告が発生した場合に、電子メール通知を指定したメールアドレスに送信できます。

メモ: SMTP サーバーがない場合は、この機能は利用できません。

通知は、システムイベントログとカスタムログファイルにも送られます。カスタムログファイルは、製品のインストールフォルダの **Agent** フォルダ内にあります。

通知が配信されない場合は、SMTP サーバーが正しく動作しているか、設定を確認してください。

製品(イベント)メッセージの電子メール通知を有効にする方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [通知]の下、[SMTP 電子メール]をクリックします。

3 適切なオプションを選択してください。

p.61 の「[SMTP 電子メール]のオプション」を参照してください。

4 [OK]をクリックします。

p.47 の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

[SMTP 電子メール]のオプション

次の表は製品 (イベント) メッセージの電子メール通知を有効にするためのオプションを記述したものです。

表 4-6 [SMTP 電子メール]のオプション

オプション	説明
優先度およびメッセージの種類 の選択	<p>メッセージをログに記録する優先レベルを選択できます。優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージをログに記録するか、どのメッセージも記録しないかを選択できます。</p> <p>次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのメッセージ ■ 優先度が中および高のメッセージ ■ [優先度の高いメッセージ] ■ メッセージなし
エラー	発生時にエラーメッセージをログに記録します。
警告	発生時に警告メッセージをログに記録します。
情報	発生時に情報メッセージをログに記録します。
送信先アドレス (admin@domain.com)	通知の送信先電子メールアドレス(例: admin@domain.com)を指定できます。
[発信元アドレス]	<p>送信者の電子メールアドレスを指定できます。</p> <p>[発信元アドレス]は必須ではありません。送信者の電子メールアドレスを指定しなかった場合は、製品名が使用されます。</p>
SMTP サーバー (smtp.domain.com)	電子メール通知を送る SMTP サーバーへのパス(例: smtpserver.domain.com)を指定できます。
SMTP 認証	指定した SMTP サーバーを認証する方法を指定できます。
ユーザー名	SMTP のユーザー名を指定できます。
パスワード	SMTP のパスワードを指定できます。

メモ: SMTPのユーザー名とパスワードがわからない場合は、システム管理者にお問い合わせください。

p.60の「製品(イベント)メッセージの電子メール通知の有効化」を参照してください。

簡単セットアップを使って最初のバックアップを設定

セットアップウィザードで[簡単セットアップを起動]チェックボックスを選択した場合、[簡単セットアップ]ウィンドウは[バックアップの実行または管理]ウィンドウを最初に開くときに表示されます。

メモ: サーバー版の Symantec System Recovery では[簡単セットアップ]ウィンドウは利用できません。

簡単セットアップを使って最初のバックアップを設定する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [簡単セットアップ]ウィンドウでは、デフォルトのドライブとファイルとフォルダのバックアップ設定を受け入れるか、またはそれらを編集するための設定をクリックしてください。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [最初のバックアップ]ウィンドウでは、次のいずれかを実行します。
 - 指定したスケジュールによってバックアップを実行するために[スケジュールに従って最初のバックアップを実行]を選択します。
 - バックアップをすぐに実行するために[今すぐバックアップを実行]を選択します。
- 5 [OK]をクリックします。

p.47の「Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定」を参照してください。

[詳細] ページの非表示または表示

専門知識がある Symantec System Recovery ユーザーは、[詳細]ページを使用して、最も一般的な製品の機能を 1 カ所で確認できます。Symantec System Recovery の専門知識があれば、[詳細]ビューからはほとんどのタスクを実行できます。

メモ: [詳細]ページの使用中にマニュアルを参照する場合、最初のいくつかの手順は必要ありません。最初のいくつかの手順は、ユーザーインターフェースの他のページから各機能にアクセスする方法を示しているにすぎないからです。それ以降の手順に従ってください。

[詳細]ページを使用しない場合は、非表示にできます。

[詳細]ページを非表示にするまたは表示する方法

- 1 Symantec System Recovery を起動します。
- 2 [詳細]ページを非表示にするまたは表示するには、表示メニューで[詳細]をクリックします。

p.47 の「[Symantec System Recovery のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

データのバックアップに関する推奨事項

この章では以下の項目について説明しています。

- データのバックアップについて
- バックアップの種類を選択について
- バックアップの前に実行する内容
- バックアップ中に実行する内容
- バックアップの終了後すべきこと
- 定義済みバックアップの実行に関するヒント
- バックアップジョブのプロパティの表示
- バックアップ先の選択について
- デュアルブートのコンピュータのバックアップについて

データのバックアップについて

コンピュータまたは個別のファイルとフォルダをバックアップするには、次の操作を実行します。

- バックアップを定義します。
- バックアップを実行します。
p.45 の「[Symantec System Recovery の使用方法](#)」を参照してください。
バックアップを定義するときに次の項目を決定します。
- バックアップする内容 (ファイル、フォルダ、またはドライブ全体)。

- バックアップデータの格納先(バックアップ先)。
- バックアップデータをリモートの場所にコピーするためのオフサイトコピーを使用するかどうか。
- バックアップの実行時間(自動または手動)。
- リカバリポイントに対して指定する圧縮レベル、セキュリティ設定を有効にするかどうか(暗号化とパスワード保護)。
- 使用するその他のオプション。各バックアップを必要に応じてカスタマイズできます。

p.66の「バックアップの種類を選択について」を参照してください。

p.72の「バックアップ先の選択について」を参照してください。

p.74の「デュアルブートのコンピュータのバックアップについて」を参照してください。

バックアップの種類を選択について

次のガイドラインを使用して、どのバックアップの種類を選択するかを決定できます。

ドライブベースのバックアップ 次の場合に、このバックアップの種類を使用します。

- コンピュータのシステムドライブをバックアップし、リカバリする場合。通常、システムドライブはCドライブで、オペレーティングシステムが含まれています。
- 特定のハードドライブをバックアップし、リカバリする場合。たとえば、オペレーティングシステムを含んでいるシステムドライブ以外のセカンダリドライブです。
- 消失または破損したファイルやフォルダを特定の時刻からリカバリする場合。

ファイルとフォルダのバックアップ 次の場合に、このバックアップの種類を使用します。

- 特定のファイルやフォルダをバックアップし、リカバリする場合。たとえば、マイドキュメントフォルダに格納されている個人のファイル。
- 特定の種類のファイルをバックアップし、リカバリする場合。たとえば、音源(.mp3または.wav)や写真(.jpgまたは.bmp)。
- ファイルの特定バージョンを特定の時刻からリカバリする場合。

p.72の「バックアップ先の選択について」を参照してください。

p.65の「データのバックアップについて」を参照してください。

バックアップの前に実行する内容

初回バックアップを定義して実行する前に、次の推奨事項を考慮します。

コンピュータの電源がオンであることがわかっている時間にバックアップのスケジュールを設定する。

バックアップの実行時には、コンピュータの電源がオンで、Windows が動作している必要があります。そうでない場合、スケジュール設定されたバックアップはコンピュータの電源が再びオンになるまでスキップされます。実行されなかったバックアップを実行するように要求されます。

メモ: シマンテック社は、ボリュームに対して重複排除が実行されているときにそのボリュームをバックアップしないことをお勧めします。重複排除とバックアップが同時に実行されないようにバックアップのスケジュールを設定します。

p.66の「[バックアップの種類を選択について](#)」を参照してください。

バックアップ先としてセカンダリハードディスクを使用する。

プライマリハードディスク(C)以外のハードディスクにリカバリポイントを格納してください。そうすることにより、プライマリハードディスクに障害が発生した場合でも確実にシステムをリカバリできます。

p.48の「[バックアップの全般オプションの設定](#)」を参照してください。

外部ドライブをバックアップ先として使用することを考慮する。

外部ドライブを使用することにより、バックアップデータの携帯性が向上します。特定の場所から重要なデータを取り除く必要がある場合、外部ドライブであれば簡単に持ち出すことができます。

p.103の「[オフサイトコピーについて](#)」を参照してください。

外部ドライブに一意の名前を付けて、識別しやすくする。

各外部ドライブに一意の名前を割り当てることができます。一意の名前を付けることにより、バックアップした各コンピュータのバックアップデータがどこにあるのかを把握できます。外部ドライブのコンピュータへの取り外しと接続を行うごとにドライブ文字が変わる場合に、特に役に立ちます。一意の名前を参照すると、Symantec System Recovery を実行しているときに使用されるドライブを常に認識できます。

一意の名前を使用しても、ドライブのボリュームラベルは変わりません。Symantec System Recovery を使用するとき、一意の名前によりドライブを識別できます。

指定した一意の名前はドライブに割り当てられたままになります。Symantec System Recovery の別のコピーを動作している2番目のコンピュータにドライブを接続すると、指定した一意の名前が表示されます。

メモ: 指定した一意の名前に一致するラベルを各ドライブに付けることも考慮してください。

p.56の「外部ドライブに一意の名前を使うことについて」を参照してください。

オフサイトコピーを使用する。

最新のリカバリポイントをポータブルストレージデバイスまたはリモートサーバーのいずれかにコピーするには、オフサイトコピーを使用します。リカバリポイントをポータブルハードディスクにコピーすると、オフィスから外出するときにデータのコピーを持ち出すことができます。

p.103の「オフサイトコピーについて」を参照してください。

定期的なバックアップを頻繁に実行する。

バックアップを定義する場合は、頻繁にバックアップを実行するようにスケジュールを設定し、少なくとも最近2カ月のリカバリポイントを用意します。

p.128の「バックアップスケジュールの編集」を参照してください。

p.78の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

個人的なデータは、Windows やソフトウェアプログラムがインストールされているドライブとは別のドライブに保存する。

個人のデータは、オペレーティングシステムやソフトウェアプログラムとは切り離して保存してください。そうすることにより、リカバリポイントの作成を迅速化し、復元しなければならない情報の量を減らすことができます。たとえば、Windows の動作、ソフトウェアプログラムのインストールと実行に、Cドライブを使用します。個人的なファイルやフォルダの作成、編集、格納には Dドライブを使用します。

その他のドライブ管理ソリューションについては、次の URL のシマンテック社の Web サイトにアクセスしてください。

www.symantec.com/

リカバリポイントを作成した後に、安定性を確実にするためにそのリカバリポイントを検証する。

バックアップを定義するときに、リカバリポイントが安定していること、消失データをリカバリするために使用できることを検証するオプションを選択します。

p.66 の「バックアップの種類を選択について」を参照してください。

p.69 の「バックアップ中に実行する内容」を参照してください。

p.69 の「バックアップの終了後するべきこと」を参照してください。

バックアップ中に実行する内容

コンピュータでバックアップを開始すると、コンピュータの処理速度が低下していることに気づく場合があります。Symantec System Recovery では、バックアップの実行に相当のシステムリソースが必要になります。速度の低下が発生した場合は、他の作業が完了するまでバックアップの速度を落とすことでコンピュータの処理速度を向上させることができます。

p.122 の「バックアップ速度の調整」を参照してください。

p.67 の「バックアップの前に実行する内容」を参照してください。

p.69 の「バックアップの終了後するべきこと」を参照してください。

バックアップの終了後するべきこと

バックアップが終了した後で、次のようなベストプラクティスを考慮してください。

リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータの内容を確認する。

リカバリポイントの内容を定期的にチェックして、重要なデータのみがバックアップされていることを確認します。

p.221の「[リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く](#)」を参照してください。

p.179の「[リカバリポイント内のファイルを開く方法](#)」を参照してください。

[状態]ページを確認して、バックアップが実行され、問題がないことを確認する。

[状態]ページを定期的に確認してください。[詳細]ページでイベントログを確認することもできます。

イベントログには、イベントが発生したときにログが記録され、さらにバックアップ中またはバックアップ後に発生したバックアップおよびエラーが記録されます。

メモ: バックアップの状態および他のメッセージもシステムトレイに表示されます。そのため、バックアップの状態を確認するために製品を起動する必要はありません。

p.123の「[バックアップの正常終了の検証](#)」を参照してください。

p.63の「[\[詳細\]ページを非表示にするまたは表示する方法](#)」を参照してください。

古いバックアップデータを削除して、保存領域を管理する。

古いリカバリポイントを削除して、ハードディスクの空き領域を増やします。

また、ファイルとフォルダをバックアップするとき作成されるファイルのバージョン数を減らします。

p.210の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

コンピュータの各ドライブに適用されている保護レベルを確認する。

[状態]ページを定期的にチェックして、定義したバックアップが各ドライブに適用されていることを確認します。

リカバリポイントのバックアップコピーを保管する。

リカバリポイントのバックアップコピーを安全な場所に保存してください。たとえば、ネットワーク上の任意の場所に保存したり、別の場所で長期的に保管するためにCD、DVD、テープを使用することもできます。

p.188の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

p.67の「[バックアップの前に実行する内容](#)」を参照してください。

p.69の「[バックアップ中に実行する内容](#)」を参照してください。

定義済みバックアップの実行に関するヒント

定義済みバックアップを実行する場合は、次のヒントを考慮します。

- スケジュール設定されたバックアップを開始するときに、Symantec System Recovery が動作している必要はありません。バックアップを定義し終えたら、Symantec System Recovery を閉じることができます。
 - バックアップ対象のコンピュータは、電源がオンの状態で、Windows が開始されている必要があります。
 - すべての定義済みバックアップは自動的に保存されるため、後で編集または実行できます。
 - p.119 の「[既存のバックアップジョブを今すぐ実行](#)」を参照してください。
 - p.120 の「[オプションを指定してバックアップを実行](#)」を参照してください。
 - p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。
 - バックアップ中にディスクのデフラグメンテーションプログラムを実行しないでください。実行すると、リカバリポイントの作成にかかる時間が大幅に増え、予期しないシステムリソースの問題の原因になる場合があります。
 - 互いに依存する2つ以上のドライブを使用している場合は、同一のバックアップにそれら両方を含めてください。同一のバックアップに両方のドライブを含めることで、最も安全な保護を確保できます。
 - 同一の定義済みバックアップに複数のドライブを含めることで、実行しなければならないバックアップの合計数を減らすことができます。さらに、作業の中断を最低限に抑えることができます。
 - 進行状況とパフォーマンス機能を使用すると、バックアップによるコンピュータの処理速度に対する影響を低減できます。たとえば、プレゼンテーションの最中に、スケジュール設定されたバックアップが開始すると想定します。プレゼンテーションプログラムに処理リソースを割り当てるために、バックアップの速度を下げることができます。
 - p.122 の「[バックアップ速度の調整](#)」を参照してください。
 - バックアップ中、コンピュータの電源管理機能と Symantec System Recovery の競合が発生する場合があります。
 - たとえば、アクティビティが一定期間発生しないとコンピュータが休眠モードに入る場合などです。スケジュール設定されたバックアップの実行中に電源管理機能をオフにしておくことを考慮してください。
 - バックアップが中断された場合は、再実行します。
 - バックアップの作成で問題が発生した場合、コンピュータを再起動しなければならない場合があります。
- p.67 の「[バックアップの前に実行する内容](#)」を参照してください。
- p.69 の「[バックアップ中に実行する内容](#)」を参照してください。
- p.69 の「[バックアップの終了後するべきこと](#)」を参照してください。

バックアップジョブのプロパティの表示

バックアップジョブを開かずに、定義済みのバックアップの設定および構成を確認することができます。

バックアップジョブのプロパティの表示方法

- 1 [ホーム]ページで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウでバックアップジョブを選択し、[タスク]>[プロパティ]の順にクリックします。

p.119の「[既存のバックアップジョブを今すぐ実行](#)」を参照してください。

p.120の「[オプションを指定してバックアップを実行](#)」を参照してください。

p.124の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

バックアップ先の選択について

リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータの保存先は、以下の情報を考慮して決めてください。

メモ: バックアップ先として CD または DVD を使用する場合 (非推奨) は、ディスク上のサブフォルダにバックアップすることはできません。CD や DVD のルートにバックアップデータを作成する必要があります。

次の表に、バックアップ先を選択するときに考慮する必要がある情報を示します。

表 5-1 バックアップ先の選択

バックアップ先	考慮する項目
ローカルハードディスクドライブ、USBドライブ、FireWireドライブ (推奨)	この方法のメリットは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 高速なバックアップと復元を提供する。 ■ 無人バックアップをスケジュールできる。 ■ ディスク領域に繰り返し上書きが可能で低コストである。 ■ 別の場所での保管できる。 ■ ハードディスクドライブ領域を他の用途のために確保できる。 リカバリポイントをバックアップ対象と同じドライブに保存することは可能ですが、次の理由からお勧めできません。 <ul style="list-style-type: none"> ■ リカバリポイントの数またはサイズが増加すると、より多くのディスク容量を消費する。その結果、通常の用途に使用できるディスク容量が少なくなる。 ■ リカバリポイントはそれ以降のそのドライブのリカバリポイントに含まれることになるため、リカバリポイントのサイズが増大する。 ■ 致命的なエラーがそのコンピュータに発生した場合は、リカバリポイントを修復できない可能性がある。同じハードディスク上の別のドライブにリカバリポイントを保存してある場合でも、リカバリポイントを修復できない可能性がある。
ネットワークフォルダ	コンピュータがネットワークに接続されている場合は、リカバリポイントとファイルおよびフォルダのバックアップデータをネットワークフォルダに保存できます。 <p>ネットワークフォルダにバックアップするには、通常そのフォルダをホストしているコンピュータへの認証を行う必要があります。コンピュータがネットワークドメインの一部となっている場合、ドメイン名、ユーザー名、パスワードを入力する必要があります。たとえば、<code>domain¥username</code> のように入力します。</p> <p>ワークグループ内のコンピュータに接続する場合、リモートコンピュータ名とユーザー名を入力する必要があります。</p> <p>例:<code>remote_computer_name¥username</code></p>

バックアップ先	考慮する項目
CD-RW/DVD-RW	<p>バックアップデータをリムーバブルメディアに保存する際、バックアップするのに複数のメディアが必要な場合は、データが自動的に正しいサイズに分割されます。</p> <p>複数のドライブのバックアップでは、各ドライブのリカバリポイントはメディア上に単体で保存されます。同じメディア上にリカバリポイントを保存する領域を確保できる場合でも、リカバリポイントはメディア上に単体で保存されます。</p> <p>この方法を使用する場合は、バックアップをスケジュールできません。</p> <p>メモ: CD-RW または DVD-RW をリカバリポイントの保存場所として使用するの、最適な方法とはいえません。処理中にディスクを交換する必要がある場合があります。</p>

p.66 の「バックアップの種類を選択について」を参照してください。

p.119 の「既存のバックアップジョブを今すぐ実行」を参照してください。

p.120 の「オプションを指定してバックアップを実行」を参照してください。

デュアルブートのコンピュータのバックアップについて

Symantec System Recovery の実行元オペレーティングシステムで非表示に設定されているドライブ (パーティション) がある場合でも、デュアルブートのコンピュータをバックアップできます。

ドライブバックアップを実行する場合、各ドライブのコンテンツ全体がリカバリポイントにキャプチャされます。ドライブを復元する場合、コンピュータを開始するために、リカバリされたドライブを使用できます。

デュアルブートのコンピュータをバックアップするときは、次の点を考慮します。

- 復元されたシステムからコンピュータをブートするには、オペレーティングシステムのブート情報を含む各ドライブをバックアップしてから、復元する必要があります。
- 次の条件の両方に当てはまる場合、共有データドライブの増分バックアップは作成しないでください。
 - Symantec System Recovery が両方のオペレーティングシステムにインストールされている。
 - 両方のオペレーティングシステムが共有ドライブを管理するように設定されている。

デュアルブートシステムに Symantec System Recovery LightsOut Restore 機能を使用しようとする、問題が発生する場合があります。それはサポート対象外です。

Symantec System Recovery Restore Anyware 機能の使用にも同じ条件が適用されます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.65 の「[データのバックアップについて](#)」を参照してください。

ドライブ全体のバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [ドライブベースのバックアップの定義について](#)
- [ドライブベースのバックアップの定義](#)
- [リカバリポイントの圧縮レベル](#)
- [Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)
- [Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について](#)
- [オフサイトコピーについて](#)
- [オフサイトコピーの仕組み](#)

ドライブベースのバックアップの定義について

ドライブベースのバックアップは、ハードディスクドライブ全体のスナップショットを取得し、保存されているすべての情報を後で取得できるように取り込みます。ファイル、フォルダ、デスクトップ設定、プログラム、およびオペレーティングシステムのすべてがリカバリポイントに取り込まれます。これによって、リカバリポイントを使用して個々のファイルやフォルダ、またはコンピュータ全体を復元できます。

データを確実に保護するには、ドライブベースのバックアップを定義し、定期的にバックアップを実行してください。

デフォルトでは、スケジュールされた単体リカバリポイントのファイル名とリカバリポイントセットのファイル名には、001.v2i、002.v2iのように連番が付加されます。セット内の増分リカバリポイントのファイル名には、_i001.iv2i、_i002.iv2iのように連番が付加されます。たとえば、ベースリカバリポイントの名前がCathyReadF001.v2iの場合、最初の増分リカバリポイントの名前はCathyReadF001_i001.iv2iになります。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.109 の「[ファイルとフォルダのバックアップについて](#)」を参照してください。

ドライブベースのバックアップの定義

ハードディスクドライブ全体のスナップショットを作成するようにドライブベースのバックアップを定義してください。

p.77 の「[ドライブベースのバックアップの定義について](#)」を参照してください。

p.109 の「[ファイルとフォルダのバックアップについて](#)」を参照してください。

ドライブベースのバックアップを定義する方法

- 1 [タスク]メニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウで、[新しく定義]をクリックします。
バックアップをまだ定義していない場合は、[簡単セットアップ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [コンピュータのバックアップ]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 4 [ドライブ]パネルでは、バックアップをするために 1 つ以上のドライブを選択し、次に[次へ]をクリックしてください。
p.79 の「[\[ドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。
- 5 [関連するドライブ]パネルが表示されたら、適切なオプションを設定し、次に[次へ]をクリックします。それ以外の場合は次の手順にスキップします。

メモ: UEFI ベースのコンピュータのシステムドライブをバックアップする場合は、関連するドライブをすべてバックアップする必要があります。[関連するドライブ]パネルには、UEFI ベースのコンピュータを正しく復元するために重要な EFI システムパーティションと Windows Recovery Environment パーティション (Windows 8 および 2012) がリストされます。

p.80 の「[\[関連するドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。

- 6 [リカバリポイントの種類]パネルで、バックアップで作成するリカバリポイントの種類を選択し、次に[次へ]をクリックしてください。

p.81 の「[リカバリポイントの種類のオプション](#)」を参照してください。

- 7 [バックアップ先]パネルで、適切なオプションを選択してください。

p.81 の「[バックアップ先のオプション](#)」を参照してください。

バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。他のユーザーのアクセスを防止するために、バックアップデータを暗号化することができます。

- 8 (省略可能) バックアップ保護を強化するために、離れた場所に保存するリカバリポイントのコピーを作成する場合は、[追加]をクリックし、適切なオプションを選択し、次に[OK]をクリックしてください。

p.83の「[\[オフサイトコピーの設定\]のオプション](#)」を参照してください。

- 9 [次へ]をクリックします。

- 10 [詳細オプション]パネルで、必要なリカバリポイントオプションを設定し、[次へ]をクリックします。

p.83の「[リカバリポイントのオプション](#)」を参照してください。

p.90の「[ドライブベースバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。

p.88の「[\[コマンドファイル\]のオプション](#)」を参照してください。

- 11 [バックアップ時刻]パネルで、バックアップの時刻と頻度を指定するために適切なオプションを選択し、[次へ]をクリックしてください。

メモ: ベースバックアップを実行する時刻と増分バックアップを実行する時刻が同じでないことを確認します。

p.94の「[\[バックアップ時刻\]のオプション](#)」を参照してください。

- 12 (省略可能) 新しいバックアップをすぐに実行する場合は、[今すぐバックアップを実行]をクリックします。

一度だけ実行するオプションを選択して単体リカバリポイントを設定した場合、このオプションは利用できません。

- 13 選択したオプションを確認し、[終了]をクリックします。

p.109の「[ファイルとフォルダのバックアップについて](#)」を参照してください。

[ドライブ]のオプション

次の表は[ドライブ]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[バックアップ定義]ウィザードで利用可能です。

表 6-1 [ドライブ]のオプション

オプション	説明
隠しドライブを表示	ハードディスクの隠しドライブを表示できます。ドライブはDrive selection tableに表示されます。
Drive selection table	バックアップに含める1つ以上のドライブを選択できます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

[関連するドライブ]のオプション

次の表に、[関連するドライブ]パネルのオプションを示します。

表 6-2 [関連するドライブ]のオプション

オプション	説明
関連するすべてのドライブを追加 (推奨)	バックアップ定義にすべての関連ドライブを選択し、含めることができます。
選択したドライブのリストを編集	バックアップ定義に含める、または含めない関連ドライブを選択、または選択解除できます。
関連するドライブを追加しない	バックアップ定義ですべての関連ドライブを選択解除(含めない)できます。

[関連するドライブ]ウィザードパネルは、このパネルにリストされているドライブの 1 つ以上を使うように構成されたアプリケーションが含まれているドライブを最初に選択したときにのみ表示されます。

そのようなアプリケーションには次のものがあります：

- Windows Server 2008 R2 with Hyper-V
- ドメインコントローラ
- オペレーティングシステムがインストールされているドライブとは別のドライブにあるブート構成データベース (Windows Vista と Windows 7)

接続された Microsoft 仮想ハードディスク (VHD) をバックアップしたい場合にはホストドライブ用と接続された VHD 用に別のバックアップジョブを作成する必要があります。たとえば、VHD のホストがドライブ C にあり、接続された VHD がドライブ D である場合、ドライブ C のバックアップジョブとドライブ D のバックアップジョブを作成する必要があります。また、別の接続された VHD 内で入れ子になっている接続された VHD はバックアップできません。

p.297 の「[Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて](#)」を参照してください。

データドライブ (オペレーティングシステムがインストールされていない任意のドライブ) のデータを暗号化するために Microsoft BitLocker ドライブ暗号化を使用すると、ロックされたデータドライブは Symantec System Recovery で処理されないことに注意してください。代わりに、BitLocker で暗号化されたドライブをバックアップするには、そのドライブをロック解除する必要があります。

通常、事前選択されているオプション [関連するすべてのドライブを追加] を受け入れてください。特定の関連ドライブを選択解除すると、修復が不完全に実行されるか、正常に完了しない場合があります。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

リカバリポイントの種類オプション

次の表に[リカバリポイントの種類]パネルのオプションを示します。

表 6-3 リカバリポイントの種類オプション

オプション	説明
リカバリポイントセット(推奨)	<p>追加のリカバリポイントがあるベースリカバリポイントを実行スケジュールします。追加のリカバリポイントには、前回のリカバリポイント以降にコンピュータに加えられた増分変更のみが含まれます。</p> <p>増分リカバリポイントは、ベースリカバリポイントより高速に作成できます。また、単体リカバリポイントより使用する保存領域が小さくなります。</p> <p>メモ: 各ドライブに定義できるリカバリポイントセットは 1 つのみです。選択したドライブを既存のバックアップに割り当て、リカバリポイントの種類として[リカバリポイントセット]を指定している場合、[リカバリポイントセット]オプションは利用できません。また、リカバリポイントセットに含めることができないマウントされていないドライブを選択した場合も、このオプションは利用できません。</p>
単体リカバリポイント	<p>選択したドライブの完全な単体のコピーを作成します。通常、特にバックアップを複数回実行する場合、このバックアップの種類はより多くの保存領域を必要とします。</p>

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

バックアップ先のオプション

次の表に、[バックアップ先]パネルのオプションを示します。

表 6-4 バックアップ先のオプション

オプション	説明
フォルダ	<p>リカバリポイントを保存する場所を示します。</p> <p>Symantec System Recovery でこの場所に十分な空き領域がないことが検出された場合、警告が表示されます。十分な領域がある別の場所を選択してください。</p>
参照	<p>使用するバックアップ先を参照して検索できます。</p>
保存先の詳細	<p>保存先のパスの種類を表示します。ネットワークパスを追加すると、ユーザー名も表示されます。</p>
編集	<p>[フォルダ]フィールドで指定したネットワークにアクセスするためのユーザー名とパスワードを入力できます。このオプションはネットワークにあるバックアップ先を選択したときのみ利用可能です。これはネットワーク共有にリカバリポイントを保存する場合にも適用されます。</p> <p>p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。</p>
リカバリポイントファイル名のカスタマイズ	<p>リカバリポイントの名前を変更できます。</p> <p>デフォルトのファイル名は、コンピュータ名の後にドライブ文字が付加されたものです。</p> <p>また、一意のサブフォルダにリカバリポイントを保存できます。</p>
追加	<p>最大2つのオフサイトコピー先を追加できます。</p> <p>オフサイトコピーを使用すると、バックアップが完了するたびに、最新のリカバリポイントが、外部ドライブなどの可搬ストレージデバイス、ローカルエリアネットワーク接続を介したリモートサーバー、リモートFTPサーバーのいずれかに自動的にコピーされます。</p> <p>p.103 の「オフサイトコピーについて」を参照してください。</p>

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

[オフサイトコピーの設定]のオプション

次の表は[オフサイトコピーの設定]パネルのオプションを記述したものです。

表 6-5 [オフサイトコピーの設定]のオプション

オプション	説明
オフサイトコピーの有効化	オフサイトコピー機能を有効にします。
外部オフサイトコピーのコピー先ドライブに接続するときにコピーの開始を確認するメッセージを表示する	外部オフサイトコピー先のドライブをコンピュータに接続するたびに、リカバリポイントがそのドライブに自動的にコピーされることを示します。
フォルダ、ネットワークパス、FTP アドレス	オフサイトコピー先のパスを指定できます。
参照	使用するオフサイトコピー先を参照して検索できます。
保存先の詳細	保存先のパスの種類を表示します。ネットワークパスまたは FTP パスを追加すると、ユーザー名も表示されます。
編集	指定したネットワークパスまたは FTP パスのユーザー名やパスワードを編集できます。
オフサイトコピーのコピー先を追加	2つ目のコピー先を追加して、コピー先のパスを指定できます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

リカバリポイントのオプション

次の表に、[オプション]パネルのリカバリポイントのオプションを示します。

表 6-6 リカバリポイントのオプション

オプション	説明
名前	バックアップの名前を示します。 メモ: このオプションは Symantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。

オプション	説明
圧縮	<p>リカバリポイントの圧縮レベルとして、次のいずれかを設定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし ■ 標準 ■ 通常 ■ 通常以上 <p>p.96の「リカバリポイントの圧縮レベル」を参照してください。</p> <p>圧縮率は、ドライブに保存されているファイルの種類によって異なります。</p>
[作成後のリカバリポイントを検証]	<p>リカバリポイントまたはファイルセットが有効か破損しているかをテストします。</p>
[このバックアップに保存するリカバリポイントセット数を制限]	<p>このバックアップに保存できるリカバリポイントセット数を制限します。リカバリポイントセット数を制限すると、リカバリポイントが保存されているハードディスクドライブに空き領域がなくなるリスクを軽減できます。新しいリカバリポイントセットは、バックアップ先ドライブ上の最も古いセットと置き換えられます。</p> <p>このオプションはリカバリポイントセットを作成する場合にのみ表示されます。</p> <p>メモ: このオプションは Symantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
[システムファイルと一時ファイルを含める]	<p>クライアントコンピュータでのリカバリポイントの作成時に、オペレーティングシステムファイルおよび一時ファイルのインデックス付けをサポートします。</p> <p>メモ: このオプションは Symantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用してリカバリポイントを作成すれば表示されません。</p>
高度な設定	<p>特に、リカバリポイントに対するセキュリティオプションを追加できます。</p> <p>p.90の「ドライブベースバックアップの詳細オプション」を参照してください。</p>

オプション	説明
コマンドファイル	バックアップ中にコマンドファイル (.exe、.cmd、.bat)を使用できます。 p.87の「バックアップ中のコマンドファイルの実行について」を参照してください。
説明	リカバリポイントの説明を示します。説明を任意に記述して、リカバリポイントの内容の識別に利用できます。

p.78の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

[詳細なスケジュール]のオプション

次の表に、[詳細なスケジュール]パネルのプロパティを示します。

表 6-7 [詳細なスケジュール]のオプション

オプション	説明
スケジュール	バックアップを実行する日付と開始時刻を選択できます。
1日に複数回実行	頻繁に編集または変更するデータを保護するために、バックアップを1日に複数回実行できることを示します。
バックアップの間隔	バックアップの最大間隔を指定します。
回数	1日にバックアップを実行する回数を指定します。
自動的に最適化	バックアップ先で使用するディスク領域の管理に役立つ最適化の頻度を選択できます。
新しいリカバリポイントセットを開始	新しいリカバリポイントセットが開始される頻度を示します。
カスタム	バックアップを実行する開始時刻と曜日または日付をカスタマイズできます。
イベントトリガ - 全般	自動的にバックアップを開始するイベントの種類を選択できます。 p.124の「イベント起動バックアップの有効化」を参照してください。

オプション	説明
イベントトリガ - ThreatCon レスポンス	自動的にバックアップを開始する ThreatCon レスポンスのレベルを設定できます。 p.127 の「 ThreatCon レスポンスオプション 」を参照してください。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて

次のファイルは、ドライブベースのバックアップから意図的に除外されています。

- hiberfil.sys
- pagefile.sys

これらのファイルには、大量のディスク領域を占有する一時データが含まれています。これらのファイルは不要であり、システムが完全に修復された後にコンピュータシステムに悪影響を与えることはありません。

これらのファイルの名前がリカバリポイントに表示される場合でも、それは単なる存在情報です。データは保存されていません。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

ネットワーク資格情報について

ネットワーク上のコンピュータに接続する際は、そのネットワークへの認証をすでに行っている場合でも、ネットワークにアクセスするためのユーザー名とパスワードを入力する必要があります。Symantec System Recovery サービスは、ローカルシステムアカウントで実行されます。

ネットワーク資格情報を入力する場合、次のルールが適用されます。

- 接続するコンピュータがドメイン上にある場合、ドメイン名、ユーザー名、パスワードを入力します。次に例を示します。
domain¥username
- ワークグループ内のコンピュータに接続する場合、リモートコンピュータ名とユーザー名を入力します。次に例を示します。
remote_computer_name¥username
- ドライブをマッピングした場合、サービスが異なるコンテキストで実行され、マッピングしたドライブを認識できないため、ユーザー名とパスワードの再入力が必要になる場合があります。

[タスク]メニューへ移動して[オプション]を選択することによって、デフォルトの場所を設定できます。デフォルトの場所がネットワーク上のコンピュータなら、[編集]オプションをク

リックし、必要なネットワーク資格情報を指定することもできます。これによって、バックアップジョブの作成時、指定した場所がデフォルトでダイアログボックスに表示されるようになります。別のオプションを使用すると、特定のバックアップユーザーアカウントを作成できます。その後、このアカウントを使用するように Symantec System Recovery サービスを設定します。

p.78 の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

p.86 の「ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて」を参照してください。

バックアップ中のコマンドファイルの実行について

バックアップ中にコマンドファイル (.exe、.cmd、.bat) を使用できます。コマンドファイルを使用すると、Symantec System Recovery をコンピュータで実行中の他のバックアップルーチンと統合できます。またコマンドファイルを使用して、コンピュータのドライブを使う他のアプリケーションと統合することができます。

メモ: notepad.exe などのグラフィカルユーザーインターフェースが含まれるコマンドファイルを実行することはできません。そのようなコマンドファイルを実行すると、バックアップジョブが失敗します。

リカバリポイントの作成中、次の任意の段階でコマンドファイルを実行できます。

- スナップショットの作成前に実行
- スナップショット作成後に実行
- リカバリポイント作成後に実行

p.88 の「[コマンドファイル]のオプション」を参照してください。

コマンドファイルの実行は、バックアップを実行する VSS 非対応データベースを停止および再起動するときに最もよく使用されます。

バックアップ中に Visual Basic スクリプトファイル (.vbs) を使用する場合は、スクリプトを実行するバッチファイル (.bat) を作成します。たとえば、次の構文を含む Stop.bat というバッチファイルを作成します。

```
Cscript script_filename.vbs
```

Cscript は Visual Basic スクリプトファイル名に先行します。

警告: コマンドファイルはユーザーによる操作なしで実行されるため、実行中にユーザーインターフェースは表示されません。すべてのコマンドファイルを、バックアップ中に使用する前に、Symantec System Recovery とは別にテストすることをお勧めします。

バックアップが開始されると、指定した段階でコマンドファイルが実行されます。コマンドファイルの実行中にエラーが発生するとバックアップが停止されます。または、(段階に関係なく)コマンドファイルが指定した時間内に終了しない場合もバックアップは停止されます。いずれにしても、コマンドファイルは必要に応じて終了し、エラー情報がログに記録され、表示されます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.97 の「[Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

[コマンドファイル]のオプション

次の表は[コマンドファイル]パネルで利用可能なオプションを記述したものです。

表 6-8 [コマンドファイル]のオプション

オプション	説明
[コマンドファイルのフォルダ]	コマンドファイルをデフォルトの保存場所以外の場所に保存する場合は、保存場所を指定します。また、ジョブごとに保存場所を指定することも、複数のコンピュータで共有できる保存場所を指定することもできます。ネットワーク上の場所を指定すると、ネットワーク資格情報の入力を求められます。
[参照]	使用するコマンドファイルのフォルダを参照して検索できます。
[ユーザー名]	ネットワークパスに存在するコマンドファイルフォルダにユーザー名を指定します。
[パスワード]	ネットワークパスに存在するコマンドファイルフォルダにパスワードを指定します。

オプション	説明
[スナップショットの作成前に実行]	<p>バックアップが開始した後とリカバリポイントが作成される前に、コマンドファイルを実行できることを示します。この段階では、リカバリポイントの作成プロセスを準備するためのコマンドを実行できます。たとえば、ドライブを使用している実行中のアプリケーションを終了できます。</p> <p>メモ: このオプションを使用する場合は、コマンドファイルにエラー修復機能が組み込まれていることを確認してください。この段階で停止する必要があるサービス (VSS 非対応データベース、リソース集約型アプリケーションなど) がコンピュータにあり、コマンドファイルにエラー修復機能がなければ、この段階で停止されたサービスは再起動されない可能性があります。コマンドファイルでエラーが発生すると、リカバリポイント作成プロセスがすぐに停止する場合があります。他のコマンドファイルは実行されません。</p> <p>p.45 の「Symantec System Recovery の使用方法」を参照してください。</p>
[スナップショット作成後に実行]	<p>スナップショットが作成された後コマンドファイルを実行できることを示します。この段階では、リカバリポイントの作成中にサービスがドライブに対して通常の処理を再開することを許可するコマンドを実行できます。</p> <p>データベースは一時的にバックアップ状態になりますが、スナップショットの作成は数秒で済みます。最小数のログファイルが作成されます。</p>
[リカバリポイント作成後に実行]	<p>リカバリポイントファイルが作成された後コマンドファイルを実行できることを示します。この段階では、リカバリポイント自体を処理するコマンドを実行できます。たとえば、リカバリポイントをオフラインの場所にコピーできます。</p>
[タイムアウト] (各段階に適用されます)	<p>コマンドファイルを実行できる時間 (秒) を指定できます。</p>

p.87 の「[バックアップ中のコマンドファイルの実行について](#)」を参照してください。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.97 の「[Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

ドライブベースバックアップの詳細オプション

次の表に、ドライブベースバックアップを作成するときに使用できる詳細オプションを示します。

表 6-9 ドライブベースバックアップの詳細オプション

オプション	説明
リカバリポイントを複数ファイルに分割して圧縮保存	リカバリポイントを小さなファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ(MB)を指定します。
SmartSector™ コピーの無効化	<p>使用済みのハードドライブセクタと未使用のハードドライブセクタをコピーします。このオプションを選択すると、処理に要する時間が増加し、より大きなリカバリポイントが結果として生じることがあります。</p> <p>SmartSector 技術は、データを含んでいるハードディスクのセクタのみをコピーすることによってコピー処理を高速化します。ただし、データを含んでいるかいないかに関わらず、元のレイアウトですべてのセクタをコピーする必要がある場合があります。</p>
コピー時に不良セクタを無視	ハードディスクに不良セクタが存在する場合でもバックアップを実行します。ほとんどのドライブでは不良セクタは発生しませんが、ハードディスクの継続的な使用では問題が発生する可能性が増します。

オプション	説明
VSS の完全バックアップを実行	<p>VSS ストレージで完全バックアップを実行し、VSS 固有のトランザクションログを確認することを VSS に対して要求できます。このオプションは、Microsoft Exchange Server でのみ使用できません。</p> <p>Exchange VSS では、すでにデータベースにコミットされているトランザクションが判別され、切り捨てられます。さらに、トランザクションログの切り捨てにより、ファイルサイズを扱い可能なサイズに維持し、ファイルによって使用されるハードディスクの容量を制限できます。</p> <p>このオプションを選択しない場合、バックアップは依然として VSS ストレージ上で実行されます。ただし、VSS では、バックアップの後にトランザクションログが自動的に切り捨てられません。</p> <p>メモ: Symantec System Recovery Disk で [コンピュータのバックアップウィザード] 機能を使用してリカバリポイントを作成した場合、このオプションは表示されません。</p>
パスワードを使用する	<p>リカバリポイントの作成時に、リカバリポイントに対してパスワードを設定します。パスワードには標準文字を含むことができます。パスワードには、拡張文字または記号を含むことはできません。(128 以下の ASCII 値の文字を使用してください。)</p> <p>ユーザーは、バックアップを復元したり、リカバリポイントの内容を表示する前にこのパスワードを入力する必要があります。</p>
AES 暗号化を使用する	<p>リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに高い保護レベルに強化します。</p> <p>次の暗号化レベルから選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ [標準 128 ビット (8 文字以上のパスワード)]■ [中 192 ビット (16 文字以上のパスワード)]■ [高 256 ビット (32 文字以上のパスワード)]

p.78 の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

p.86 の「ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて」を参照してください。

高度なバックアップオプションの編集

最初にバックアップを定義したときに選択した詳細オプションは、バックアップを定義した後でも編集できます。

バックアップの詳細オプションを編集する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択し、[設定を編集]をクリックします。
- 3 [次へ]を2回クリックします。
- 4 [詳細]をクリックします。
- 5 [詳細オプション]ダイアログボックスで変更を行い、[OK]をクリックします。
p.90の「[ドライブベースバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。
- 6 [次へ]を3回クリックし、[終了]をクリックします。

p.78の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.86の「[ドライブベースのバックアップから除外されるファイルについて](#)」を参照してください。

リカバリポイントの暗号化について

Advanced Encryption Standard (AES) により、作成またはアーカイブするリカバリポイントを暗号化して、データのセキュリティを強化することができます。ネットワーク上に保存しているリカバリポイントを、権限のないユーザーのアクセスや使用から保護する場合、暗号化を使用する必要があります。

以前のバージョンの Symantec LiveState Recovery または Symantec System Recovery で作成されたリカバリポイントを暗号化することもできます。ただし、暗号化されたリカバリポイントファイルは、現在のバージョンでしか読み出せなくなります。

Recovery Point Browser からのファイルのプロパティの表示によってリカバリポイントの暗号化レベルをいつでも確認できます。

暗号化レベルには、128 ビット、192 ビット、256 ビットの3つがあります。ビット数が高いほど長いパスワードが使用され、データのセキュリティが高くなります。

次の表に、ビット数に対応するパスワードの文字数を示します。

表 6-10 パスワードの文字数

ビット数(暗号化レベル)	パスワードの文字数
128(標準)	8文字以上
192(中レベル)	16文字以上

ビット数(暗号化レベル)	パスワードの文字数
256(高レベル)	32 文字以上

正しいパスワードを入力しなければ、暗号化されたリカバリポイントに対してアクセスまたは復元を行うことはできません。

警告: パスワードは安全な場所に保管してください。パスワードは、大文字と小文字を区別します。パスワードで暗号化されたリカバリポイントに対してアクセスまたは復元を行う場合、**Symantec System Recovery** によってパスワードの入力を求められるため、大文字と小文字を区別して入力します。正しいパスワードを入力しなかった場合、またはパスワードを忘れた場合は、リカバリポイントを開くことができません。

シマンテック社のテクニカルサポートでは暗号化されたリカバリポイントを開くことができません。

暗号化レベルを高く設定するだけでなく、パスワードの形式を複雑にすることで、データのセキュリティを高めることができます。

適切なセキュリティを確保するには、以下のルールに従ってパスワードを作成してください。

- 同じ文字を続けない(例: BBB、88)
- 一般的な単語を使用しない
- 少なくとも 1 つの数字を含める
- 大文字と小文字を混合する
- 少なくとも 1 つの特殊記号 ({}[],.<>:;'"?/¥`~!@#\$\$%^&*()_+)=)を含める
- 定期的にパスワードを変更する

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.110 の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

p.93 の「[リカバリポイントの整合性の検証](#)」を参照してください。

リカバリポイントの整合性の検証

[バックアップ定義]ウィザードの[オプション]ページで[作成後のリカバリポイントを検証]オプションを選択した場合、次のことが行われます。

- **Symantec System Recovery** によって、リカバリポイントを構成するすべてのファイルを開くことができるかどうかを検証されます。
- また、リカバリポイントの内部データ構造が、利用できるデータに適合しているかどうかもチェックされます。

作成時に圧縮レベルを選択した場合は、リカバリポイントを元のファイルと同じデータ量に正しく圧縮解除できるかどうかにもチェックされます。

メモ: [作成後のリカバリポイントを検証]オプションを使用すると、リカバリポイントの作成に2倍の時間がかかります。

必要に応じて、バックアップの作成時にリカバリポイントの整合性を自動的に検証することもできます。

p.90の「[ドライブベースバックアップの詳細オプション](#)」を参照してください。

リカバリポイントの整合性を検証する方法

- 1 [ツール]ページで、[Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
- 2 リカバリポイントを選択し、[OK]をクリックします。
- 3 Recovery Point Browser のツリーパネルで、リカバリポイントを選択します。

例:C_Drive001.v2i.

- 4 ファイルメニューで、[リカバリポイントの検証]をクリックします。

[リカバリポイントの検証]オプションを利用できない場合は、リカバリポイントのマウントを解除する必要があります。リカバリポイントを右クリックして、[リカバリポイントのマウント解除]をクリックします。

- 5 検証が完了したら、[OK]をクリックします。

p.92の「[リカバリポイントの暗号化について](#)」を参照してください。

バックアップの進行状況の表示

実行中のバックアップの進行状況を表示して、バックアップが終了するまでの残り時間を確認できます。

バックアップの進行状況を表示する方法

- ◆ バックアップの実行中に、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックします。

p.78の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

[バックアップ時刻]のオプション

次の表は[バックアップ時刻]パネルのオプションを記述します。オプションは作成するバックアップの種類によって変わります。

表 6-11 リカバリポイントセットの[バックアップ時刻]のオプション

オプション	説明
スケジュール	指定した開始時刻と選択した曜日に従ってバックアップを自動的に実行します。
デフォルト	デフォルトのバックアップ時刻スケジュールを使用できます。
詳細	特定のイベントに応じてバックアップを開始するイベントトリガの設定など、スケジュールの詳細オプションを設定します。 p.85 の「 [詳細なスケジュール]のオプション 」を参照してください。
1日に複数回実行	バックアップの間隔とバックアップの回数を設定します。
新しいリカバリポイントセット(ベース)の作成を開始するタイミング	週単位、月単位、四半期単位、年単位のいずれかで新しいリカバリポイントセット(ベース)を開始します。
カスタム	(省略可能)新しいリカバリポイントセットが開始される頻度を指定します。 たとえば[毎月]を選択した場合、新しいベースリカバリポイントは、新しい各月で実行される最初のバックアップ時に作成されます。
イベントトリガの選択	自動的にリカバリポイントを作成するイベントを選択できます。
詳細	選択または指定した[バックアップ時刻]のオプションについての情報が表示されます。

表 6-12 単体リカバリポイントの[バックアップ時刻]のオプション

オプション	説明
スケジュールなし	手動で実行した場合にのみ、バックアップが実行されます。
毎週	指定した曜日の開始時刻にバックアップが実行されます。 このオプションを選択すると、[保護する曜日を選択]ダイアログボックスが表示されます。
毎月	指定した日付の開始時刻にバックアップが実行されます。 このオプションを選択すると、[保護する毎月の日にちを選択]ダイアログボックスが表示されます。
一度だけ実行	指定した日付と時刻に一度だけバックアップが実行されます。 このオプションを選択すると、[単一のリカバリポイントを作成]ダイアログボックスが表示されます。

オプション	説明
詳細	選択または指定した[バックアップ時刻]のオプションについての情報が表示されます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.128 の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

リカバリポイントの圧縮レベル

リカバリポイントの作成またはコピー中、バックアップしているドライブに保存されているファイルの種類によって、圧縮結果が異なる場合があります。

次の表に、利用可能な圧縮レベルを示します。

表 6-13 圧縮レベルのオプション

オプション	説明
なし	圧縮が修復ポイントに適用されないことを示します。空き容量が十分にある場合に使用します。ただし、バックアップの保存先がアクセスの多いネットワークドライブである場合には、高い圧縮レベルを使用した方が圧縮しない場合よりもネットワークを介して書き込むデータの量が少なくなるため、短時間で処理できます。
標準(推奨)	低い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 40% 圧縮します。これがデフォルトの設定です。
中	中程度の圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 45% 圧縮します。
高	高い圧縮率を使用し、リカバリポイントを平均 50% 圧縮します。リカバリポイントの作成に最も時間がかかります。 高い圧縮率でのリカバリポイントの作成には、通常よりも CPU に高い負荷がかかる場合があります。コンピュータ上でのその他の処理も遅くなる場合があります。その場合は、Symantec System Recovery の動作速度を調整することによって、同時に実行する他のリソース集約型アプリケーションのパフォーマンスを向上させることができます。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.188 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行

[ワンタイムバックアップ]を使用すると、単体リカバリポイントを作成するバックアップをすばやく定義して実行できます。[ワンタイムバックアップ]ウィザードを使用して、バックアップを定義します。ウィザードが完了するとバックアップが実行されます。バックアップの定義は保存されず、後で使用することはできません。単体リカバリポイントは、後で使用できます。

この機能は、重要なイベントの前にすばやくコンピュータまたは特定のドライブをバックアップする必要がある場合に役立ちます。たとえば、新しいソフトウェアをインストールする前に、ワンタイムバックアップを実行できます。また、新しいコンピュータセキュリティの脅威について学習する際にも実行できます。

Symantec System Recovery Disk を使用して、ワンタイムのコールドバックアップを作成することもできます。

p.98 の「[Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery からワンタイムバックアップを実行する方法

- 1 [タスク]ページで、[ワンタイムバックアップ]をクリックします。
- 2 [次へ]をクリックします。
- 3 バックアップするドライブを1つ以上選択し、[次へ]をクリックします。
- 4 [関連するドライブ]ダイアログボックスが表示されたら、適切なオプションを設定し、次に[次へ]をクリックします。それ以外の場合は次の手順にスキップします。
p.80 の「[\[関連するドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。
- 5 [バックアップ先]パネルで、適切なオプションを選択してください。
p.81 の「[バックアップ先のオプション](#)」を参照してください。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [オプション]パネルで適切なオプションを選択します。
p.83 の「[リカバリポイントのオプション](#)」を参照してください。
- 8 [次へ]をクリックします。

- 9 必要に応じて、リカバリポイントの作成中に段階的に実行するコマンドファイルをリストから選択します。次に、停止する前に実行するコマンドの実行時間(秒)を指定します。

コマンドファイルを[コマンドファイル]のフォルダに追加した場合は、[戻る]をクリックしてから[次へ]をクリックして、各段階のリストのファイルを確認する必要があります。

p.88の「[コマンドファイル]のオプション」を参照してください。

- 10 [次へ]をクリックします。
- 11 [終了]をクリックして、バックアップを実行します。

Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行について

有効なライセンスキーがあれば、Symantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用して、単体リカバリポイントを作成できます。Symantec System Recovery やそのエージェントをインストールしなくてもパーティションのリカバリポイントを作成できます。この機能はコールドバックアップまたはオフラインバックアップとも呼ばれます。

コールドバックアップでは、バックアップが行われるときにすべてのファイルが閉じられます。デスクトップまたはサーバーで更新中またはアクセス中である可能性があるデータは、コピーしません。コールドバックアップは、特にデータベースで役立ちます。バックアップ中は、ファイルの書き込みやアクセスが全く行われないので、完全なリカバリポイントが取得されます。

また、次のいずれかに該当する場合、Symantec System Recovery Disk を使用してリカバリポイントを作成することもできます。

- 一定レベルの破損により、コンピュータ上で Windows を起動できない。
- Symantec System Recovery が、Windows オペレーティングシステムで実行中に正常に機能しない。
- 修復する前に、損傷したシステム状態のバックアップをとっておきたい。たとえば、コンピュータの損傷が重大な場合、Symantec System Recovery Disk を使うことができます。システムに残っているものをバックアップできます。そして単体リカバリポイントを復元した後で、修復できるものを修復します。

メモ: Symantec System Recovery Disk を使用して作成したリカバリポイントは、Restore Anywhere を使用して異なるハードウェアに復元されます。

Symantec System Recovery Disk からバックアップを作成する場合、次のシナリオに限り、有効なライセンスキーを要求されます。

- コンピュータのバックアップを作成するために Symantec System Recovery Disk DVD のオリジナルの出荷版を使用する場合。インストール先のコンピュータに Symantec System Recovery がありません。
 - Symantec System Recovery Disk DVD のオリジナルの出荷版を使用してバックアップしようとしているコンピュータには、ソフトウェアがインストールされているがライセンスは付与されていない場合。
 - ライセンスのない Symantec System Recovery (60 日間評価版) をインストールしたコンピュータで、カスタム Symantec System Recovery Disk を作成する場合。それからコンピュータのバックアップを作成するためにカスタム Symantec System Recovery Disk を使います。コンピュータには Symantec System Recovery がインストールされていません。
p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。
 - カスタマイズした Symantec System Recovery Disk を作成した時点で、ライセンスキーの追加を選択しなかった場合。
- p.99 の「[Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行

有効なライセンスキーがあれば、Symantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]機能を使用して、単体リカバリポイントを作成できます。Symantec System Recovery やそのエージェントをインストールしなくてもパーティションのリカバリポイントを作成できます。この機能はコールドバックアップまたはオフラインバックアップとも呼ばれます。

Symantec System Recovery Disk からワンタイムバックアップを実行する方法

- 1 USB デバイス(外付けハードディスクドライブなど)にリカバリポイントを保存する場合、まずデバイスを接続します。
- 2 バックアップするコンピュータで Symantec System Recovery Disk を起動します。
p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 3 [ホーム]パネルで、[コンピュータをバックアップ]をクリックし、[次へ]をクリックします。
- 4 [ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 5 メッセージが表示されたら、[ライセンスキーを指定]パネルで有効なライセンスキーを入力し、[次へ]をクリックします。

- 6 [ドライブ]パネルでは、バックアップする1つ以上のドライブを選択し、[次へ]をクリックします。
- 7 [バックアップ先]パネルで、必要なオプションを設定し、[次へ]をクリックします。
p.100の「[\[バックアップ先\]オプション](#)」を参照してください。
- 8 [オプション]パネルで、リカバリポイントの必要なバックアップオプションと高度なオプションを設定してください。
p.101の「[\[コンピュータをバックアップ\]のオプション](#)」を参照してください。
- 9 [オプション]パネルで、[詳細]をクリックしてください。
- 10 [詳細オプション]パネルで、リカバリポイントの必要なバックアップの詳細オプションを設定し、[OK]をクリックします。
p.102の「[\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。
- 11 [オプション]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 12 [コンピュータのバックアップウィザードの完了]パネルで、バックアップを実行するために[終了]をクリックしてください。
- 13 バックアップが終了したら、[閉じる]をクリックしてSymantec System Recovery Diskのメインウィンドウに戻ります。
p.98の「[Symantec System Recovery Diskからのワンタイムバックアップの実行について](#)」を参照してください。

[バックアップ先]オプション

次の表は[バックアップ先]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはSymantec System Recovery Diskの[コンピュータのバックアップ]ウィザードから利用可能です。

表 6-14 [バックアップ先]オプション

オプション	説明
フォルダ	単体リカバリポイントを保存する場所を参照して、指定できます。
ネットワークドライブの割り当て	リカバリポイントを保存するコンピュータのUNCパスを使用して、ネットワークドライブをマッピングします。 たとえば、 <code>¥¥computer_name¥share_name</code> や <code>¥¥IP_address¥share_name</code> のように入力します。

オプション	説明
参照	使用するバックアップ先を参照して検索できます。
保存先の詳細	保存先のパスの種類を表示します。ネットワークパスを追加すると、ユーザー名も表示されます。
リカバリポイントファイル名	リカバリポイントのファイル名を編集できます。
名前の変更	リカバリポイントのファイル名を変更できます。 デフォルトのファイル名は、コンピュータ名の後にドライブ文字が付加されたものです。

p.99 の「[Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

[コンピュータをバックアップ]のオプション

次の表は[オプション]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはSymantec System Recovery Disk の[コンピュータをバックアップ]ウィザードから利用可能です。

表 6-15 [コンピュータをバックアップ]のオプション

オプション	説明
圧縮	リカバリポイントの圧縮レベルとして、次のいずれかを設定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ なし ■ 標準 ■ 中 ■ 高 <p>p.96 の「リカバリポイントの圧縮レベル」を参照してください。</p> <p>圧縮率は、ドライブに保存されているファイルの種類によって異なります。</p>
作成後のリカバリポイントを検証	リカバリポイントまたはファイルセットが有効か破損しているかをテストします。
説明	リカバリポイントの説明を示します。説明はリカバリポイントの内容の識別に利用できます。

オプション	説明
詳細	リカバリポイントに対するセキュリティオプションを追加できます。 p.102の「 [詳細]オプション 」を参照してください。

p.99の「[Symantec System Recovery Disk からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

[詳細]オプション

次の表は[詳細オプション]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはSymantec System Recovery Diskの[マイコンピュータのバックアップ]ウィザードから利用可能です。

表 6-16 ドライブベースのバックアップの高度なオプション

オプション	説明
リカバリポイントを複数ファイルに分割して圧縮保存	リカバリポイントを複数の小さいファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ(MB)を指定できます。
SmartSectorコピーの無効化	使用セクタだけでなく未使用セクタもコピーできます。そのため、コピー処理に要する時間が長くなり、リカバリポイントのサイズが大きくなります。 SmartSector 技術を使用すると、データを含むハードディスクセクタのみがコピーされるため、コピー処理を高速化することができます。ただし、データの有無に関係なく、すべてのセクタを元のレイアウトのままコピーすることが望ましい場合もあります。
コピー中は不良セクタを無視	ハードディスクに不良セクタがある場合でも、バックアップを実行できます。ほとんどの場合、ドライブに不良セクタはありませんが、ハードディスクの老朽化とともに問題が発生する可能性は高まります。

オプション	説明
パスワードを使用する	<p>リカバリポイントの作成時に、リカバリポイントにパスワードを設定します。パスワードには標準文字列を含めることができます。パスワードには、拡張文字列や記号を含めるできません。ASCIIで文字コードの値が128以下になる文字を使用してください。</p> <p>バックアップを復元するとき、またはリカバリポイントの内容を表示するときに、このパスワードの入力を求められます。</p>
暗号化を使用	<p>リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに強力的に保護します。</p> <p>次の暗号化レベルから選んでください:</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準の128ビット(8文字以上のパスワード) ■ 中程度の192ビット(16文字以上のパスワード) ■ 高度な256ビット(32文字以上のパスワード)

p.101の「[\[コンピュータをバックアップ\]のオプション](#)」を参照してください。

p.99の「[Symantec System Recovery Diskからのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。

オフサイトコピーについて

セカンダリハードディスクへのデータのバックアップは、情報資産の保護への重要な第1歩です。ただし、データの安全性を確保するには、[オフサイトコピー]を使用します。

この機能は最新の完全なリカバリポイントを次へコピーできます。

- ポータブルのストレージデバイス
- ネットワークのリモートサーバー
- リモートFTPサーバー

採用する方法にかかわらず、リカバリポイントのコピーを離れた場所に保存することは、万が一オフィスにアクセスできなくなった場合に備え不可欠な冗長性を保持することになります。オフサイトコピーによって、リモートコピーが確保され、データ保護が倍に強化されます。

p.104の「[オフサイトコピーの仕組み](#)」を参照してください。

p.105の「[オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について](#)」を参照してください。

p.106の「オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について」を参照してください。

p.107の「オフサイトコピー先としてのFTPサーバーの使用について」を参照してください。

オフサイトコピーの仕組み

新しいドライブベースのバックアップジョブを定義する場合は、[オフサイトコピー]を有効にして、設定します。または、既存のバックアップジョブを編集することにより、[オフサイトコピー]を有効にすることができます。

[オフサイトコピー]を有効にする場合は、オフサイトコピー先を2つまで指定します。バックアップジョブによるリカバリポイントの作成が終了すると、[オフサイトコピー]によって少なくとも1つのオフサイトコピー先が利用可能であるかどうか検証が行われます。その後、オフサイトコピー先に対して新しいリカバリポイントのコピーが開始されます。

最新のリカバリポイントが最初にコピーされ、続いて次に新しいリカバリポイントがコピーされます。2つのオフサイトコピー先を設定した場合、[オフサイトコピー]では、最初に追加されたコピー先にリカバリポイントがコピーされます。1つのオフサイトコピー先が利用できない場合は、2番目のコピー先が設定されていればそこにリカバリポイントがコピーされます。どちらのコピー先も利用できない場合、[オフサイトコピー]は次にオフサイトコピー先が利用可能になった時点でリカバリポイントをコピーします。

たとえば、バックアップジョブが午後6時に実行されるように設定し、オフサイトコピー先として外部ドライブを設定したとします。ただし、午後5時30分に退社するときには、安全のためにドライブを持ち出しています。バックアップジョブが午後6時20分に完了すると、オフサイトコピー先ドライブが利用できずコピー処理が中止されたことが **Symantec System Recovery** によって検出されます。翌朝、ドライブをコンピュータに接続し直します。**Symantec System Recovery** によってオフサイトコピー先ドライブの存在が検出され、自動的にリカバリポイントのコピーが開始されます。

[オフサイトコピー]はシステムリソースをわずかに使用しないように設計されているため、コピー処理はバックグラウンドで実行されます。この機能を使用すると、システムリソースにほとんどまたはまったく影響を与えずに、コンピュータで作業を続けることができます。

オフサイトコピー先のディスク領域が不足すると、[オフサイトコピー]によって最も古いリカバリポイントが識別されて削除され、最新のリカバリポイント用の領域が確保されます。その後、オフサイトコピー先に現在のリカバリポイントがコピーされます。

p.105の「オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について」を参照してください。

p.106の「オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について」を参照してください。

p.107の「オフサイトコピー先としてのFTPサーバーの使用について」を参照してください。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

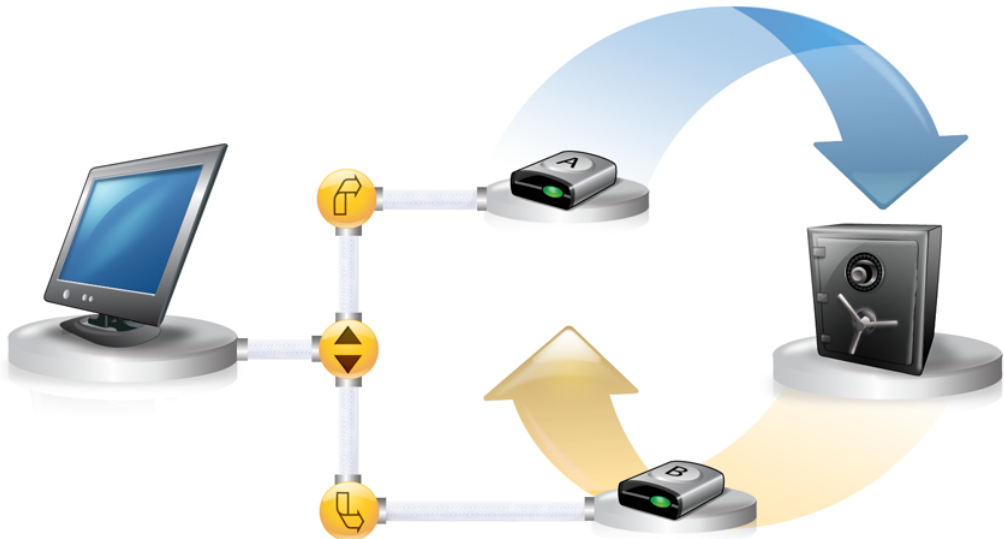
オフサイトコピー先としての外部ドライブの使用について

外部ドライブをオフサイトコピー先として使用できます。この方法を使用すると、オフィスを離れる際にデータのコピーを持ち出すことができます。2つの外付けハードディスクドライブを使用することで、オンサイトとオフサイトの両方で最新のデータのコピーを確実に保存しておくことができます。

たとえば、月曜日の朝に、システムドライブの新しいバックアップジョブを定義するとします。バックアップジョブの種類としてリカバリポイントセットを選択します。外部ドライブ (A) を 1 番目のオフサイトコピー先として設定し、別の外部ドライブ (B) を 2 番目のオフサイトコピー先として設定します。週末を除く毎晩午前 0 時にバックアップジョブが実行されるようにスケジュールします。また、データを権限のないアクセスから保護するために、リカバリポイントの暗号化を有効にします。

p.92 の「[リカバリポイントの暗号化について](#)」を参照してください。

月曜日の夜にオフィスを離れる前に、ドライブ A を接続し、ドライブ B を持ち帰ります。



火曜日の朝には、月曜日のベースリカバリポイントがドライブ A に正常にコピーされています。その日の終わりに、ドライブ A を取り外して安全のために持ち帰ります。

水曜日の朝には、ドライブ B をオフィスを持って来ます。ドライブ B を接続すると、Symantec System Recovery ではドライブ B がオフサイトコピー先であることが検出され

ます。その後、Symantec System Recovery によって自動的に月曜日の夜のベースリカバリポイントと火曜日の夜の増分リカバリポイントのコピーが開始されます。水曜日の終わりには、ドライブ B を持ち帰り、ドライブ A と一緒に安全な場所に保管します。

これで、物理的に異なる2つの場所に、リカバリポイントの複数のコピーが保存されます。すなわち、オフィスのバックアップ先に保存された元のリカバリポイントと、オフサイトコピー先ドライブに保存された同じリカバリポイントのコピーです。オフサイトコピー先ドライブは、自宅の安全な場所に保管されます。

次の木曜日の朝、ドライブ A をオフィスを持って行き接続します。火曜日と水曜日の夜のリカバリポイントが自動的にドライブ A にコピーされます。

メモ: 一意の名前を各ドライブに付けることができる、外部ドライブの名付け機能の使用を検討してください。その後、一致する物理的なラベルを各外部ドライブに付けて、ドライブ交換のタスクを管理しやすくします。

p.56 の「外部ドライブに一意の名前を使うことについて」を参照してください。

ドライブ A または B のいずれかを接続するたびに、最新のリカバリポイントがドライブに追加されます。この方法により、元のバックアップ先ドライブに障害が発生したり修復不可能になった場合に、複数のリカバリポイントを使ってコンピュータを修復することができます。

オフサイトコピー先として外部ドライブを使用すると、バックアップデータのコピーが物理的に異なる2つの場所に確実に保存されることになります。

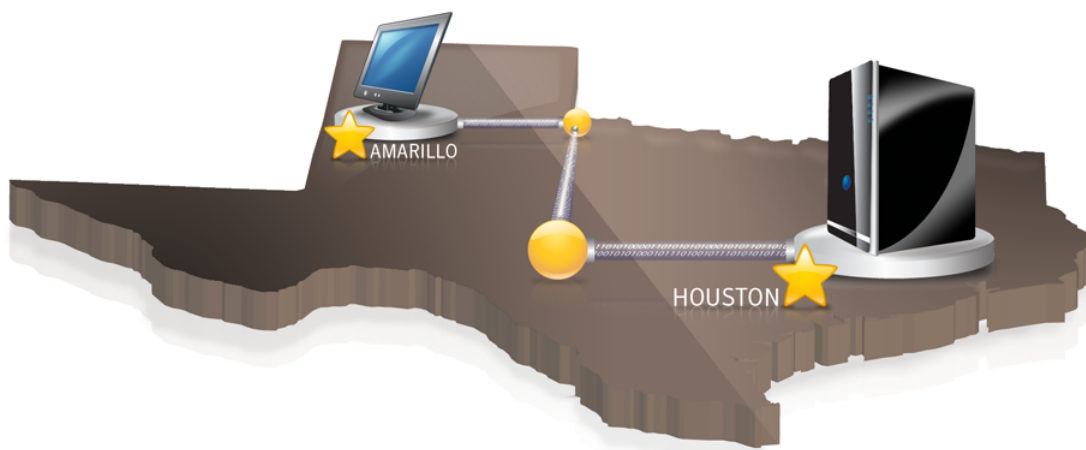
p.104 の「オフサイトコピーの仕組み」を参照してください。

オフサイトコピー先としてのネットワークサーバーの使用について

オフサイトコピー先として、ローカルエリアネットワークサーバーを指定することができます。使用するサーバーにアクセスできる必要があります。ローカルドライブをサーバーにマッピングするか、または有効な UNC パスを指定する必要があります。

たとえば、1 番目のオフサイトコピー先として、ローカルの外部ドライブを設定するとします。次に、そのオフィスとは別の物理的な場所にあるサーバーを特定します。2 番目のオフサイトコピー先としてそのリモートサーバーを追加します。バックアップが発生すると、リカバリポイントは最初に外付けハードディスクドライブにコピーされ、次にリモートサーバーにコピーされます。

リモートサーバーが一定期間利用不能になると、最後の接続以降に作成されたすべてのリカバリポイントが [オフサイトコピー] によってコピーされます。利用可能なすべてのリカバリポイントを保存する領域がない場合は、[オフサイトコピー] によって最も古いリカバリポイントがネットワークサーバーから削除されます。これにより、最新のリカバリポイントのための領域が確保されます。



p.104 の「オフサイトコピーの仕組み」を参照してください。

オフサイトコピー先としての FTP サーバーの使用について

オフサイトコピー先としてのネットワークバスの使用は、サーバーの使用に似ています。FTP サーバーへの有効な FTP バスを指定する必要があります。

また、この方法が正しく動作するためには、**Symantec System Recovery** に正確な FTP 接続情報を入力する必要があります。[オフサイトコピー]が正しく設定されている場合、オフサイトコピーによって FTP サーバー上の指定したディレクトリにリカバリポイントがコピーされます。サーバーが一定期間利用不能になると、最後の接続以降に作成されたすべてのリカバリポイントが[オフサイトコピー]によってコピーされます。利用可能なすべてのリカバリポイントを保存する領域がない場合は、[オフサイトコピー]によって最も古いリカバリポイントまたはリカバリポイントセットが FTP サーバーから削除されます。これにより、最新のリカバリポイントのための領域が確保されます。

p.57 の「オフサイトコピーで使用する FTP のデフォルト設定」を参照してください。



p.104 の「[オフサイトコピーの仕組み](#)」を参照してください。

ファイルとフォルダのバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [ファイルとフォルダのバックアップについて](#)

ファイルとフォルダのバックアップについて

保護する特定のファイルとフォルダをバックアップできます。この種類のバックアップを実行すると、バックアップするよう選択したファイルとフォルダのコピーが作成されます。ファイルは圧縮形式に変換されます。圧縮されたファイルは指定した場所のサブフォルダに保存されます。デフォルトでは、この場所はリカバリポイントを保存するために使われるのと同じバックアップ先です。

次のフォルダとその内容は、ファイルとフォルダのバックアップからデフォルトで除外されます。

- Windows フォルダ
- プログラムファイルフォルダ
- 一時ファイルのフォルダ
- インターネット一時ファイルのフォルダ

通常、これらのフォルダは、個人のファイルまたはフォルダを保存するためには使用されません。ただし、システムドライブ (通常は C ドライブ) のドライブベースのバックアップを定義して実行すると、これらのフォルダがバックアップされます。

必要に応じて、バックアップを定義するときにこれらのフォルダを含めるよう選択できます。

p.110 の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

ファイルとフォルダのバックアップ

特定のファイルとフォルダを選択してバックアップできます。

ファイルとフォルダをバックアップする方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]]ウィンドウで、[新しく定義]をクリックします。
バックアップをまだ定義していない場合は、[簡単セットアップ]ダイアログボックスが表示されます。
- 3 [選択したファイルとフォルダをバックアップ]を選択し、[次へ]をクリックします。
- 4 [バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルで、バックアップに含めるフォルダとファイルを選択してください。

p.111の「[バックアップするファイルとフォルダを選択]のオプション」を参照してください。

メモ: Windows Vista を除くすべてのバージョンの Windows のマイドキュメントフォルダには、デフォルトで2つのサブフォルダがあります。マイピクチャとマイミュージックです。これらのフォルダには、別の場所にあるフォルダへのショートカットだけが含まれ、実際のファイルは含まれません。

画像ファイルおよび音楽ファイルをバックアップするには、ファイルが実際に保存されているフォルダをバックアップ対象にしてください。Windows Vista の場合、これらのフォルダは、ドキュメント(以前のマイドキュメント)と同じレベルにあります。

- 5 [次へ]をクリックします。
- 6 [名前とバックアップ先]パネルでは、バックアップ名と保存先を入力してください。
p.113の「[名前とバックアップ先]のオプション」を参照してください。
- 7 [次へ]をクリックします。
- 8 [バックアップ時刻]パネルで、必要なスケジュールオプションを選択します。

メモ: ベースバックアップを実行する時刻と増分バックアップを実行する時刻が同じでないことを確認します。

p.115の「ファイルとフォルダのバックアップのための[バックアップ時刻]のオプション」を参照してください。

- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 [バックアップ定義ウィザードの完了]パネルで、選択したバックアップオプションを確認します。

- 11 バックアップに含めるファイルの総数とサイズを確認するには、[プレビュー]をクリックします。

メモ: ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれるデータ量によっては、プレビュー処理に数分かかる場合があります。

- 12 バックアップをすぐに実行する場合は、[今すぐバックアップを実行]をクリックし、[終了]をクリックします。

p.109の「[ファイルとフォルダのバックアップについて](#)」を参照してください。

[バックアップするファイルとフォルダを選択]のオプション

次の表は[バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルのオプションを記述したものです。

表 7-1 [バックアップするファイルとフォルダを選択]のオプション

オプション	説明
すべてを選択	[種類とフォルダ]列のすべてのチェックボックスを選択します。選択したデータの種類とフォルダはバックアップされます。
Select None	[種類とフォルダ]列のすべてのチェックボックスを選択解除します。選択解除したデータの種類とフォルダはバックアップされません。
フォルダの追加	バックアップする追加のフォルダを指定できます。 p.112の「 [フォルダの追加]のオプション 」を参照してください。
ファイルの追加	バックアップする追加のファイルを指定できます。
ファイルの種類を追加	バックアップする追加のデータファイルの種類を指定できます。 p.112の「 [ファイルの種類を追加]のオプション 」を参照してください。
編集	テーブルのリストで選択したデータの種類名またはフォルダ名のオプション、設定、プロパティを編集できます。

オプション	説明
削除	追加済みの選択したデータの種類名またはフォルダ名をテーブルのリストから削除できます。 デフォルトのデータの種類とフォルダはテーブルのリストから削除することはできません。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

[フォルダの追加]のオプション

次の表は[フォルダの追加]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードの[バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルから利用可能です。

表 7-2 [フォルダの追加]のオプション

オプション	説明
バックアップするフォルダ	バックアップするフォルダへのパスを指定できます。
参照	バックアップするフォルダを含んでいるパスを参照できます。
サブフォルダ	親フォルダの下のすべてのサブフォルダをバックアップすることを示します。
すべてのファイル	すべてのサブフォルダのすべてのファイルをバックアップすることを示します。
次のファイルの種類のみ	バックアップするデータファイルの種類を指定できます。

p.111の「[\[バックアップするファイルとフォルダを選択\]のオプション](#)」を参照してください。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

[ファイルの種類を追加]のオプション

次の表は[ファイルの種類を追加]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードの[バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルから利用可能です。

表 7-3 [ファイルの種類を追加]のオプション

オプション	説明
名前	データファイルの種類とフォルダの名前を指定します。名前は[バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルのテーブルのリストに追加されます。
拡張子の追加	バックアップする特定のデータの種類のファイル拡張子を追加します。
拡張子を削除	特定のデータの種類のファイル拡張子をリストから削除します。
拡張子名を変更	リストに追加した特定のデータの種類のファイル拡張子名を変更します。
デフォルトの拡張子のリストを復元	[バックアップするファイルとフォルダを選択]パネルで、種類とフォルダの事前定義済みのリストに追加されたデフォルトのファイル拡張子を復元します。

p.111の「[\[バックアップするファイルとフォルダを選択\]のオプション](#)」を参照してください。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

[名前とバックアップ先]のオプション

次の表は[名前とバックアップ先]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードで利用可能です。

表 7-4 [名前とバックアップ先]のオプション

オプション	説明
名前	新しいバックアップの名前を示します。
説明(省略可能)	新しいバックアップの説明を入力できます。
詳細	リカバリポイントにセキュリティオプションを追加します。 p.114の「ファイルとフォルダのバックアップのための[詳細オプション]」 を参照してください。
バックアップ先	デフォルトのバックアップ保存場所を示します。または、リカバリポイントファイルへのローカルパスまたはネットワークパスを指定できます。

オプション	説明
参照	バックアップデータを保存するためのフォルダを参照して検索できます。 バックアップ先として、暗号化されたフォルダは使用できません。他のユーザーのアクセスを防止するためにバックアップデータを暗号化する場合、[詳細オプション]を使用できます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するフォルダにバックアップする場合のユーザー名を指定します。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

ファイルとフォルダのバックアップのための[詳細オプション]

次の表は[詳細オプション]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードの[名前とバックアップ先]パネルから利用可能です。

表 7-5 ファイルとフォルダのバックアップのための[詳細オプション]

オプション	説明
パスワードを使用する	バックアップに対してパスワード保護を有効にするかどうかを示します。
パスワード	バックアップのためのパスワードを指定できます。 パスワードには標準文字列を使用します。拡張文字列や記号を使用することはできません。バックアップの復元または内容の表示を行う前に、このパスワードを入力する必要があります。
パスワードの確認	確認のためにパスワードを再入力できます。

オプション	説明
暗号化を使用	<p>セキュリティ強化のためにバックアップに対してAES暗号化を有効にするかどうかを示します。次の暗号化レベルを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準の128ビット(8文字以上のパスワード) ■ 中程度の192ビット(16文字以上のパスワード) ■ 高度な256ビット(32文字以上のパスワード) <p>p.92の「リカバリポイントの暗号化について」を参照してください。</p>
除外	<p>次に示す任意のフォルダをバックアップに含めないよう選択解除できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Windows フォルダ ■ Program Files フォルダ ■ 一時ファイルのフォルダ ■ インターネット一時ファイルのフォルダ ■ [バックアップファイルを一意的なサブフォルダに保存する] <p>通常、一覧表示されているフォルダは、個人のファイルまたはフォルダを保存するためには使用されません。したがって、これらのフォルダはすべてバックアップ対象外としてデフォルトで選択されています。システムドライブ(通常はCドライブ)のドライブベースのバックアップを定義して実行すると、これらのフォルダがバックアップされます。</p> <p>p.78の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。</p>

p.113の「[名前とバックアップ先]のオプション」を参照してください。

p.110の「ファイルとフォルダのバックアップ」を参照してください。

ファイルとフォルダのバックアップのための[バックアップ時刻]のオプション

次の表は[バックアップ時刻]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードで利用可能です。

表 7-6 [バックアップ時刻]のオプション

オプション	説明
スケジュール	バックアップに対してスケジュールを有効にするかどうかを示します。
デフォルト	デフォルトのバックアップスケジュールを使用できます。
開始時刻	バックアップの開始時刻を指定します。
Sun Mon Tue Wed Thu Fri Sat	バックアップを実行する曜日を選択できます。
詳細	設定した回数だけ 1 日に複数回バックアップを実行します。また、バックアップに必要な間隔も指定できます。 p.116の「[スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]のオプション」を参照してください。
イベントトリガの選択	自動的にバックアップを開始するイベントの種類を選択できます。 p.116の「[スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]のオプション」を参照してください。

p.110の「ファイルとフォルダのバックアップ」を参照してください。

[スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]のオプション

次の表は[スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]パネルのオプションを記述したものです。このパネルはファイルとフォルダのための[バックアップ定義]ウィザードの[バックアップ時刻]パネルから利用可能です。

表 7-7 [スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]のスケジュールオプション

スケジュールオプション	説明
スケジュール	ファイルとフォルダをバックアップする日付と開始時刻を選択できます。
1日に複数回実行	頻繁に編集または変更するデータを保護するために、1日に複数回バックアップを実行します。
バックアップの間隔	ファイルとフォルダのバックアップの最大間隔を指定します。

スケジュールオプション	説明
回数	1日にファイルとフォルダのバックアップを実行する回数を指定します。

表 7-8 [スケジュールを変更 - ファイルバックアップ]のトリガオプション

イベントトリガのオプション	説明
全般	コンピュータからログオフするときなど自動的にバックアップを開始するイベントの種類を選択できます。 p.124の「 イベント起動バックアップの有効化 」を参照してください。
ThreatCon レスpons	自動的にバックアップを開始する ThreatCon レスponsレベルを設定します。 p.127の「 ThreatCon レスponsオプション 」を参照してください。

p.110の「[ファイルとフォルダのバックアップ](#)」を参照してください。

p.115の「[ファイルとフォルダのバックアップのための\[バックアップ時刻\]のオプション](#)」を参照してください。

バックアップジョブの実行と管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [既存のバックアップジョブを今すぐ実行](#)
- [バックアップ速度の調整](#)
- [バックアップまたは修復タスクの停止](#)
- [バックアップの正常終了の検証](#)
- [バックアップ設定の編集](#)
- [イベント起動バックアップの有効化](#)
- [バックアップスケジュールの編集](#)
- [バックアップジョブの無効化](#)
- [バックアップジョブの削除](#)
- [コンピュータをバックアップできるユーザーの追加](#)
- [ユーザーまたはグループのアクセス権の設定](#)

既存のバックアップジョブを今すぐ実行

定義済みのバックアップジョブがすでにある場合は、リカバリポイントをすぐに作成するために [今すぐバックアップを実行] を使うことができます。この機能はソフトウェアプログラムをインストールしようとするときに役立つことがあります。また、多数のファイルを変更した場合に、スケジュールされた通常のバックアップを待ちたくないこともあります。

既存のバックアップジョブはいつでも実行できます。

システムトレイから既存のバックアップを今すぐ実行する方法

- 1 Windows デスクトップで、Symantec System Recovery のシステムトレイアイコンを右クリックします。
- 2 [今すぐバックアップを実行]をクリックします。
- 3 バックアップジョブをクリックして、バックアップを開始します。
メニューに[ジョブはありません]と表示された場合は、Symantec System Recovery を起動してバックアップを定義します。

Symantec System Recovery 内から既存のバックアップを今すぐ実行する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
 - 2 リストからバックアップを選択し、[今すぐ実行]をクリックします。
- p.97 の「[Symantec System Recovery からのワンタイムバックアップの実行](#)」を参照してください。
- p.124 の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。
- p.128 の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

オプションを指定してバックアップを実行

既存のドライブベースのバックアップを実行し、そのバックアップで通常とは別の種類のリカバリポイントを作成する場合は、[オプションを指定してバックアップを実行]を使用します。

メモ: このオプションを使用しても、定義済みのバックアップの元の設定は変更されません。この処理を行うには、バックアップを開いてその設定を手動で編集する必要があります。

オプションを指定してバックアップを実行する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 [バックアップの実行または管理]ウィンドウで、実行するドライブベースのバックアップジョブを選択します。
- 3 タスクメニューで、[オプションを指定してバックアップを実行]をクリックします。

- 4 [オプションを指定してバックアップを実行]パネルで適切なオプションを選択します。

メモ: バックアップの現在の状態によって、1 つまたは複数のオプションが無効になっている場合があります。たとえば、まだバックアップを実行していない場合は、[最新変更分の増分リカバリポイント]を選択できません。これは、ベースリカバリポイントがまだ作成されていないためです。

p.121 の「[オプションを指定してバックアップを実行](#)」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックして、バックアップジョブを実行し、選択した種類のリカバリポイントを作成します。

p.128 の「[バックアップスケジュールの編集](#)」を参照してください。

p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

オプションを指定してバックアップを実行

次の表に、[オプションを指定してバックアップを実行]ダイアログボックスで利用可能なオプションを示します。

表 8-1 オプションを指定してバックアップを実行

オプション	説明
最新変更分の増分リカバリポイント	最後のバックアップ以降にドライブに対して行われた変更を含むバックアップを作成します。このオプションはベースリカバリポイントが存在するときのみ利用可能です。
新しいリカバリポイントセット	全く新しいリカバリポイントセットを開始し、ベースリカバリポイントを作成します。
単体リカバリポイント	ドライブ全体の完全なスナップショットである単体リカバリポイントを作成します。このオプションを選択した後、バックアップ保存場所を入力してください。
フォルダ	リカバリポイントを保存する場所を示します。
参照	使用するバックアップ先を参照して検索できます。
説明の詳細	保存先のパスの種類を表示します。ネットワークパスを追加すればユーザー名も表示します。

オプション	説明
編集	[フォルダ]フィールドで指定したネットワークにアクセスするためのユーザー名とパスワードを入力できます。このオプションはネットワークにあるバックアップ先を選択したときのみ利用可能です。また、ネットワーク共有にリカバリポイントを保存する場合にも利用可能です。 p.86の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。

p.120の「オプションを指定してバックアップを実行」を参照してください。

バックアップ速度の調整

コンピュータの速度、搭載されているメモリ容量、バックアップ中に実行しているプログラムの数によっては、コンピュータの速度が低下する場合があります。

バックアップ実行によるコンピュータのパフォーマンスへの影響を手動で調整して、現在のニーズに合わせることができます。この機能は、コンピュータで作業しているときに、バックアッププロセスによって作業速度が低下するのを回避するために役立ちます。

バックアップの速度を調整する方法

- 1 バックアップの実行中に、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - バックアップの速度を下げ、コンピュータの速度を上げる場合は、スライダを[低]の方へドラッグします。
 - バックアップをできるだけ早く終了する場合や、コンピュータでわずかな作業しかしていない場合は、スライダを[高速]の方へドラッグします。
- 3 完了したら、[非表示]をクリックして[進行状況とパフォーマンス]ダイアログボックスを閉じます。

p.78の「ドライブベースのバックアップの定義」を参照してください。

p.124の「バックアップ設定の編集」を参照してください。

バックアップまたは修復タスクの停止

すでに開始してしまったバックアップまたは修復タスクを停止できます。

バックアップまたは修復タスクを停止する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
 - [進行状況とパフォーマンス]ダイアログボックスが表示されたら、[キャンセル操作]をクリックしてください。
 - [進行状況とパフォーマンス]ダイアログボックスが非表示の場合は、表示メニューで、クリック[進行状況とパフォーマンス]をクリックし、[キャンセル操作]をクリックしてください。
 - [進行状況とパフォーマンス]ダイアログボックスが非表示の場合、Windows のシステムトレイで、Symantec System Recovery のトレイアイコンを右クリックしてください。[現在の操作をキャンセル]をクリックしてください。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

バックアップの正常終了の検証

バックアップが完了してから、バックアップの正常終了を検証し、消失または破損したデータを修復できます。

[状態]ページには、コンピュータの各ドライブの状態に対応したスクロール可能なカレンダーが表示されます。このカレンダーを使用すると、バックアップを実行した日時やバックアップの種類をすばやく確認できます。また、今後のバックアップのスケジュールも確認できます。

p.154 の「[\[状態\]ページのアイコンについて](#)」を参照してください。

メモ: ドライブベースのバックアップを定義する際に、作成したリカバリポイントを検証するオプションを選択してください。

バックアップするデータ量によっては、この検証によってバックアップが完了するまでの所要時間が大幅に伸びます。バックアップが完了すると、リカバリポイントが有効であることが確認できます。

p.93 の「[リカバリポイントの整合性の検証](#)」を参照してください。

バックアップの正常終了を検証する方法

- 1 [状態]ページの[バックアップ]カレンダーで、バックアップを実行した日付にアイコンが表示されていることを確認します。
- 2 バックアップアイコンをマウスで指して、バックアップの状態を確認します。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

バックアップ設定の編集

既存のバックアップの設定を編集できます。[設定を編集]機能を使用すると、[バックアップ定義ウィザード]の主なページにアクセスできます。リカバリポイントの種類を変更するオプションを除く、すべての設定を編集できます。

バックアップ設定を編集する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択します。
- 3 [バックアップの実行または管理]のツールバーで、[設定を編集]をクリックします。
- 4 バックアップの設定を変更します。

p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。

p.124 の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。

イベント起動バックアップの有効化

Symantec System Recovery では、特定のイベントを検出して、そのイベントの発生時にバックアップを実行できます。

たとえば、新しいソフトウェアをインストールする際に、新しいソフトウェアのインストールを検出したときにバックアップを実行できます。コンピュータに悪影響を与える問題が発生した場合、このリカバリポイントを使用して、コンピュータをインストール前の状態に復元できます。

Symantec System Recovery を設定して、次のイベントが発生したときにバックアップを自動的に実行できます。

- アプリケーションのインストールまたはアンインストール時。
- 特定のアプリケーションの起動
- ユーザーのログオンまたはログオフ時。
- ドライブに追加されたデータ量が指定した値 (MB) を超過した場合
このオプションはファイルとフォルダのバックアップでは利用できません。

イベント起動バックアップを有効にする方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択し、[スケジュールを変更]をクリックします。
- 3 [イベントトリガ]の下で、[全般]をクリックします。

- 4 検出するイベントを選択してください。
p.125 の「[\[イベントトリガの全般\]のオプション](#)」を参照してください。
p.127 の「[ThreatCon レスポンスオプション](#)」を参照してください。
- 5 [OK]をクリックします。
p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。
p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

[イベントトリガの全般]のオプション

次の表は[イベントトリガ]パネルのオプションを記述したものです。

表 8-2 [イベントトリガ] - [全般]のオプション

オプション	説明
アプリケーションのインストールまたはアンインストール	ソフトウェアアプリケーションのインストールまたはアンインストールの開始時にバックアップを作成します。
指定されたアプリケーションの起動時	ソフトウェアアプリケーションの起動時にバックアップを作成します。
アプリケーション	ソフトウェアアプリケーションの起動時にバックアップをトリガできるソフトウェアアプリケーションを指定できます。 p.125 の「 [トリガとなるアプリケーション]のオプション 」を参照してください。
ユーザーのログオン時	ユーザーのコンピュータへのログオン時にバックアップを作成します。
ユーザーのログオフ時	ユーザーのコンピュータからのログオフ時にバックアップを作成します。
ドライブへのデータの追加が以下の容量を超える時	ハードディスクに追加されたデータ量が指定した値 (MB) を超えた場合にバックアップを作成します。

- p.124 の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。
p.126 の「[ThreatCon レスポンスについて](#)」を参照してください。

[トリガとなるアプリケーション]のオプション

次の表は[トリガとなるアプリケーション]パネルのオプションを記述したものです。

表 8-3 [トリガとなるアプリケーション]のオプション

オプション	説明
アプリケーション	ソフトウェアアプリケーションの実行ファイル名 (.exe、.com)を識別します。
参照	ソフトウェアアプリケーションを参照できます。
バックアップをトリガするアプリケーション	ソフトウェアアプリケーションの起動時にバックアップをトリガできるソフトウェアアプリケーションを表示します。
追加	リストボックスにソフトウェアアプリケーションを追加します。
削除	リストボックスからソフトウェアアプリケーションを削除します。

p.125 の「[イベントトリガの全般]のオプション」を参照してください。

p.124 の「イベント起動バックアップの有効化」を参照してください。

ThreatCon レスポンスについて

ThreatCon はシマンテック社のセキュリティの脅威早期警告システムです。シマンテック社が各種の脅威を確認すると、ThreatCon チームは脅威レベルを調整します。この調整によって、ユーザーおよびシステムに適切な警告が送信され、データおよびシステムが攻撃から保護されます。

選択したバックアップジョブに対して ThreatCon レスポンストリガを有効にすると、Symantec System Recovery によって脅威レベルの変更が検出されます。このとき、コンピュータはインターネットに接続されていなければなりません。脅威レベルが ThreatCon レベルに達するか超過すると、ThreatCon レスポンスを有効にしたバックアップジョブが自動的に開始されます。これにより、コンピュータが最新の脅威によって影響を受けた場合にデータの修復に使用するリカバリポイントが作成されます。

メモ: コンピュータがオンラインでない場合、オンラインの脅威には影響されません。ただし、コンピュータをインターネットに接続している間中、コンピュータは脅威にさらされることになります。オンラインになったりオフラインになったりする際に、ThreatCon レスポンスを有効または無効にする必要はありません。ThreatCon レスポンスは、オンラインの場合に機能し、オフラインの場合に機能しないだけです。

Symantec ThreatCon について詳しくは <http://www.symantec.com/ja/jp/index.jsp> を参照してください。

バックアップジョブに対する ThreatCon レスポンスの設定

バックアップに対して ThreatCon レスポンスのレベルを設定できます。

バックアップジョブに対する ThreatCon レスポンスの設定方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択し、[スケジュールを変更]をクリックします。
- 3 達するか超過した場合に選択したバックアップジョブを実行する必要な脅威オプションを選択します。

p.127 の「[ThreatCon レスポンスオプション](#)」を参照してください。

- 4 [OK]をクリックします。

[ホーム]ページの[現在の ThreatCon レベル]フィールドで、[ThreatCon レスポンスを変更]をクリックし、選択したバックアップジョブに対する ThreatCon レスポンスを変更することもできます。

p.126 の「[ThreatCon レスポンスについて](#)」を参照してください。

ThreatCon レスポンスオプション

次の表に、4 つの ThreatCon レスポンスオプションを示します。

表 8-4 ThreatCon レスポンスオプション

オプション	説明
監視しない - 無効	選択したバックアップジョブに対する ThreatCon レベルの監視をオフにします。 メモ: Symantec ThreatCon のレベル 1 は、認識されるセキュリティの脅威がないことを示します。レベル 1 は脅威がないことを示すため、オプションではありません。
レベル 2	セキュリティの脅威が発生する可能性がありますが、特定の脅威の発生は検出されていません。
レベル 3	独立した脅威が現在進行中です。
レベル 4	最高レベルのグローバルセキュリティの脅威が進行中です。

p.127 の「[バックアップジョブに対する ThreatCon レスポンスの設定](#)」を参照してください。

p.124 の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。

バックアップスケジュールの編集

定義したバックアップのスケジュールプロパティを編集して、日時を調整できます。

バックアップスケジュールを編集する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 編集するバックアップを選択します。
- 3 ツールバーで、[スケジュールを変更]をクリックします。
- 4 スケジュールの設定を変更します。

p.94の「[\[バックアップ時刻\]のオプション](#)」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。

p.124の「[イベント起動バックアップの有効化](#)」を参照してください。

バックアップジョブの無効化

バックアップを無効にして、後で有効にすることができます。バックアップを無効にした場合、スケジュールを定義していてもバックアップは実行されません。また、イベント起動のバックアップも実行されず、手動でバックアップを実行することもできません。

定義したバックアップは削除できます(リカバリポイントは削除できません)。

バックアップジョブを無効にする方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 無効にするバックアップを選択します。
- 3 [バックアップの実行または管理]ダイアログボックス、タスクメニューで、[バックアップを無効にする]をクリックします。

バックアップを有効にするには、この手順を繰り返します。ただし、この場合は、[バックアップを無効にする]メニュー項目の代わりに[バックアップを有効にする]をクリックします。

p.128の「[バックアップジョブの削除](#)」を参照してください。

バックアップジョブの削除

不要になったバックアップジョブを削除できます。

バックアップジョブを削除しても、リカバリポイントまたはバックアップされたファイルおよびフォルダのデータは保存場所から削除されません。バックアップジョブのみが削除されます。

バックアップジョブを削除する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップの実行または管理]をクリックします。
- 2 1つ以上のバックアップ名を選択してください。
- 3 ツールバーで、[削除]をクリックします。
- 4 [はい]をクリックします。

p.184の「[バックアップ先について](#)」を参照してください。

コンピュータをバックアップできるユーザーの追加

[セキュリティ設定ツール]を使用して、コンピュータ上のどのユーザーが Symantec System Recovery の主な機能にアクセスし、設定できるかを制御することができます。

たとえば、Windows の制限付きアカウントのすべてのユーザーは、既存のバックアップジョブは実行できますが、新しいジョブを作成したり既存のジョブを編集したりすることはできません。[セキュリティ設定ツール]を使用すれば、制限付きユーザーアカウントに管理者権限を付与することができます。管理者権限を付与されたユーザーは、Symantec System Recovery への完全なアクセス権を持ち、バックアップジョブを作成、編集、削除、実行できるようになります。

メモ: デフォルトでは、すべてのユーザーが既存のバックアップジョブを実行できます。ただし、管理者アカウントのユーザーのみがバックアップジョブの作成、編集、削除を行うことができます。

コンピュータをバックアップできるユーザーを追加する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
Windows Vista の場合は、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 [選択するオブジェクト名を入力してください]フィールドで、追加するユーザーまたはグループの名前を入力します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [OK]をクリックして変更を反映し、[セキュリティ設定ツールを閉じます]。

p.130の「[ユーザーまたはグループのアクセス権の設定](#)」を参照してください。

ユーザーまたはグループのアクセス権の設定

ユーザーまたはグループに Symantec System Recovery の機能への特定のアクセス権を付与する場合に、[セキュリティ設定ツール]を使用できます。

ユーザーまたはグループのアクセス権を設定する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。

Windows Vista と Windows 7 の場合は、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。

- 2 [グループ名またはユーザー名]で、ユーザーまたはグループを選択します。
- 3 次のオプションを選択します。

権限	許可	拒否
フルコントロール	ユーザーまたはグループに Symantec System Recovery のすべての機能へのアクセス権を付与します。ユーザーとグループは既存のジョブを含むバックアップジョブを作成、編集、削除できます。	選択したユーザーまたはグループは既存のバックアップジョブを実行できません。選択したユーザーまたはグループがバックアップジョブを作成、編集、削除できないようにします。
状態のみ	選択したユーザーまたはグループは既存のバックアップジョブを実行できます。選択したユーザーまたはグループがバックアップジョブを作成、編集、削除できないようにします。	選択したユーザーまたはグループが Symantec System Recovery のどの機能にもアクセスできないようにします。

- 4 [OK]をクリックして変更を反映し、[セキュリティ設定ツール]を閉じます。

p.129 の「[コンピュータをバックアップできるユーザーの追加](#)」を参照してください。

ご使用のコンピュータからの リモートコンピュータのバックアップ

この章では以下の項目について説明しています。

- [お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)
- [Symantec System Recovery Agent の配備について](#)
- [Symantec System Recovery Agent について](#)
- [サービスを使用するためのベストプラクティス](#)
- [Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示について](#)
- [Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)

お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ

Symantec System Recovery を使用すると、別のコンピュータに接続して、自宅や会社のネットワーク上にバックアップできます。必要な数だけコンピュータを管理できますが、同時に管理できるのは 1 台のみです。

メモ: ライセンスは、管理するコンピュータごとに購入する必要があります。評価期間の60日間だけ、エージェントをライセンスなしで配備できます。その後リモートコンピュータの管理を続行するには、ライセンスを購入してインストールする必要があります。**Symantec Global Store** で追加のライセンスを購入できます。次の **Web** サイトを参照してください:

<http://www.symantecstore.jp/index.asp>

まず、コンピュータの名前または IP アドレスをコンピュータリストに追加します。次に、**Symantec System Recovery Agent** をリモートコンピュータに配備します。エージェントがインストールされると、リモートコンピュータは自動的に再起動します。コンピュータが再起動したら、コンピュータに接続できます。**Symantec System Recovery** 製品のインターフェイスが、リモートコンピュータの状態に応じて変化します。いつでも管理対象を切り替えて、ローカルコンピュータを管理することができます。

p.132 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133 の「[コンピュータリストへのローカルコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133 の「[コンピュータリストからのコンピュータの削除](#)」を参照してください。

コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加

リモートコンピュータのドライブをバックアップするには、対象となるコンピュータを[コンピュータリスト]に追加しておく必要があります。これによって、お使いのコンピュータとリストにあるその他のコンピュータをすばやく切り替えることができます。

コンピュータリストにリモートコンピュータを追加する方法

- 1 コンピュータメニューで、[追加]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - コンピュータの名前を入力する
 - コンピュータの IP アドレスを入力する
ドメインではなくワークグループ環境で操作している場合は、管理するコンピュータの名前を手動で指定する必要があります。[参照]オプションを使って参照することで指定できます。
 - [参照]をクリックしてコンピュータの名前か IP アドレスを検索してください。
- 3 [OK]をクリックし、[コンピュータリスト]にコンピュータを追加します。

p.131 の「[お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)」を参照してください。

p.133 の「[コンピュータリストへのローカルコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133 の「[コンピュータリストからのコンピュータの削除](#)」を参照してください。

コンピューターリストへのローカルコンピュータの追加

ローカルコンピュータのドライブをバックアップするには、対象となるコンピュータを[コンピューターリスト]に追加しておく必要があります。これによって、お使いのコンピュータとリストにあるその他のコンピュータをすばやく切り替えることができます。

コンピューターリストにローカルコンピュータを追加する方法

- 1 [コンピュータ]メニューで、[ローカルコンピュータの追加]をクリックします。
- 2 [OK]をクリックします。

p.131の「[お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)」を参照してください。

p.132の「[コンピューターリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133の「[コンピューターリストからのコンピュータの削除](#)」を参照してください。

コンピューターリストからのコンピュータの削除

[コンピューターリスト]からローカルコンピュータまたはリモートコンピュータを削除できます。

[コンピューターリスト]からコンピュータを削除しても、エージェントはコンピュータからアンインストールされません。代わりに、オペレーティングシステムのアンインストールプログラムを実行する必要があります。

コンピューターリストからコンピュータを削除する方法

- 1 [コンピュータ]メニューで、[リストの編集]をクリックします。
- 2 削除するリモートコンピュータまたはローカルコンピュータを選択して、マイナス記号(-)をクリックします。
- 3 [OK]をクリックします。

p.131の「[お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)」を参照してください。

p.132の「[コンピューターリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133の「[コンピューターリストへのローカルコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.133の「[コンピューターリストからのコンピュータの削除](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の配備について

エージェント配備機能を使用して、[コンピューターリスト]上のコンピュータに Symantec System Recovery Agent を配備できます。エージェントのインストール後は、Symantec System Recovery から直接バックアップジョブを作成できるようになります。

p.131の「[お使いのコンピュータから他のコンピュータをバックアップ](#)」を参照してください。

メモ: Windows Vista ではセキュリティが強化されているため、Windows Vista に Symantec System Recovery Agent を配備するには、セキュリティ設定を変更する必要があります。エージェントを Windows Vista から別のコンピュータに配備しようとすると、同じ問題が発生します。製品 DVD を使用して、対象のコンピュータにエージェントを手動でインストールできます。

インストール中にエージェント配備オプションの選択を解除した場合、この機能は利用できません。インストールを再び実行して[変更]オプションを選択することで、機能を有効にできます。

Symantec System Recovery Diskで[コンピュータを修復]ウィザードまたは[Recovery Point Browser]を実行するには、コンピュータがメモリの最小要件を満たしている必要があります。

製品の多言語バージョンをインストールする場合、Symantec System Recovery Disk を実行するには 1 GB 以上のメインメモリが必要です。

コンピュータがワークグループ環境で設定されている場合、エージェントを配備する前にローカルコンピュータを準備します。

p.134の「[ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備](#)」を参照してください。

p.135の「[Symantec System Recovery Agent の配備](#)」を参照してください。

p.136の「[Symantec System Recovery Agent の手動インストール](#)」を参照してください。

p.137の「[Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する権限の付与](#)」を参照してください。

ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備

ワークグループ環境のコンピュータに Symantec System Recovery エージェントを配備するためには、Windows で特定の手順を完了する必要があります。

ワークグループ環境のコンピュータにエージェントを配備する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]を右クリックして、[エクスプローラ]を選択します。
- 2 ツールメニューで、[フォルダ オプション]、[表示]の順にクリックします。
- 3 [表示]タブで、リストの最後までスクロールして、[簡易ファイルの共有を使用する]チェックボックスが選択されていないことを確認し、[OK]をクリックします。

- 4 Windows の[コントロール パネル]で、[Windows ファイアウォール]をクリックします。
Windows Server 2008 を実行している場合は、[設定の変更]をクリックする必要がある場合もあります。
- 5 [例外]タブをクリックし、[ファイルとプリンタの共有]を選択して[OK]をクリックします。

メモ: エージェントのインストールを続行する前に、実行中のアプリケーションがあれば終了します。[再起動]チェックボックスにチェックマークを付けている場合、インストールウィザードの完了時に、コンピュータが自動的に再起動します。

p.133 の「[Symantec System Recovery Agent の配備について](#)」を参照してください。

p.135 の「[Symantec System Recovery Agent の配備](#)」を参照してください。

p.136 の「[Symantec System Recovery Agent の手動インストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の配備

ローカルコンピュータまたはリモートコンピュータに Symantec System Recovery Agent を配備できます。

Symantec System Recovery Agent を配備する方法

- 1 Symantec System Recovery メニューバーで[コンピュータ]をクリックし、メニューからコンピュータを選択します。

エージェントをインストールするコンピュータでの管理者権限が必要です。

- 2 [エージェントの配備]をクリックします。
- 3 [Symantec System Recovery Agent の配備]ダイアログボックスで、管理者ユーザー名 (または管理者権限を持つユーザーの名前) とパスワードを指定します。
ワークグループ環境では、リモートコンピュータ名を指定する必要があります。IP アドレスを使用してコンピュータに正常に接続できている場合でも、IP アドレスでは指定できません。

たとえば、「*RemoteComputerName¥UserName*」のように入力します。

- 4 エージェントのインストールが完了したときにコンピュータを再起動する場合は、[終了後に再起動]をクリックします。

メモ:コンピュータが再起動するまで、バックアップは実行できません。再起動が実行される前に作業中のデータを保存するように、ユーザーに警告してください。

- 5 [OK]をクリックします。

p.133の「[Symantec System Recovery Agent の配備について](#)」を参照してください。

p.134の「[ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備](#)」を参照してください。

p.136の「[Symantec System Recovery Agent の手動インストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の手動インストール

ローカルコンピュータまたはリモートコンピュータに Symantec System Recovery Agent を手動でインストールできます。

Symantec System Recovery Agent を手動でインストールする方法

- 1 Symantec System Recovery 製品 DVD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。

インストールプログラムが自動的に開始します。

インストールプログラムが起動しない場合は、Windows のタスクバーで[スタート]>[ファイル名を指定して実行]の順に選択し、次のコマンドを入力して[OK]をクリックします。

```
<drive>:¥browser.exe
```

ここで、<drive> はメディアドライブのドライブ文字です。

- 2 [DVD ブラウザ]で、[Symantec System Recovery をインストール]をクリックします。
- 3 [よろこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 4 ライセンス契約に目を通し、同意する場合は[同意する]をクリックします。[次へ]をクリックします。
- 5 プログラムファイルのデフォルトの場所を変更する場合、[変更]をクリックします。次に、エージェントをインストールするフォルダを探して、[OK]をクリックします。
- 6 [次へ]をクリックします。
- 7 [カスタム]をクリックし、[次へ]をクリックします。

- 8 [Symantec System Recovery Service]をクリックし、[この機能をローカルハードディスクドライブにインストールします]をクリックします。

この機能はエージェントです。

- 9 他のすべての機能を[この機能を使用できないようにします。]に設定します。
- 10 [次へ]をクリックし、[インストール]をクリックします。

p.133 の「[Symantec System Recovery Agent の配備について](#)」を参照してください。

p.135 の「[Symantec System Recovery Agent の配備](#)」を参照してください。

p.134 の「[ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備](#)」を参照してください。

p.136 の「[Symantec System Recovery Agent の手動インストール](#)」を参照してください。

Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する権限の付与

ドメイン内のユーザーとドメイン内の Windows Server 2003 SP1 をリモートで管理できません。Symantec System Recovery を使ってサーバーをリモートで管理するすべてのドメインユーザーに対して、サーバー管理者が権限を付与する必要があります。

Windows Server 2003 SP1 でドメインユーザーに権限を付与する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [ファイル名を指定して実行]ダイアログボックスの[開く]フィールドで、dcomcnfgと入力し、[OK]をクリックします。
- 3 [コンポーネントサービス]、[コンピュータ]、[マイコンピュータ]の順に移動します。
- 4 [マイコンピュータ]を右クリックして、[プロパティ]を選択します。
- 5 [COM セキュリティ]タブで、[起動とアクティブ化のアクセス許可]の[制限の編集]をクリックします。
- 6 [グループ名またはユーザー名]リストにドメインユーザーを追加し、適切な権限を付与します。
- 7 [OK]をクリックします。
- 8 [コンポーネントサービス]を閉じ、Symantec System Recovery サービスを再起動します。

p.133 の「[Symantec System Recovery Agent の配備について](#)」を参照してください。

p.135 の「[Symantec System Recovery Agent の配備](#)」を参照してください。

p.134 の「[ワークグループ環境のコンピュータに対するエージェントの配備](#)」を参照してください。

p.136 の「[Symantec System Recovery Agent の手動インストール](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent について

Symantec System Recovery Agent は、リモートコンピュータ上でデータのバックアップと復元を実際に実行する隠れた「エンジン」です。Symantec System Recovery Agent はサービスとして機能するため、グラフィカルユーザーインターフェースはありません。

p.138 の「[Symantec System Recovery Agent の使用](#)」を参照してください。

しかし Symantec System Recovery Agent には Windows のシステムトレイから利用可能なトレイアイコンがあります。このアイコンを使用すると、現在の状態を確認したり、共通タスクを実行したりできます。たとえば、バックアップジョブの表示、Symantec System Recovery Agent への再接続、現在実行中のタスクのキャンセルなどを行うことができます。

保護する各コンピュータで製品 DVD からエージェントをインストールすることによって、エージェントを手動でインストールできます。ただし、より効率的な方法は Symantec System Recovery [エージェントの配備] 機能を使うことです。保護するデータが含まれるドメイン内のコンピュータにエージェントをリモートでインストールできます。

p.139 の「[Windows のサービスツールを使った Symantec System Recovery Agent の管理について](#)」を参照してください。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の使用

Windows システムトレイで Symantec System Recovery のトレイアイコンを使うと、さまざまな有益なタスクに迅速にアクセスできます。

Symantec System Recovery Agent を使用する方法

- ◆ Windows システムトレイで、次のいずれかを実行します。
 - Symantec System Recovery のトレイアイコンを右クリックし、[再接続]を選択してサービスを自動的に再起動します。
バックアップは、サービスが起動するまで実行できません。
 - Symantec System Recovery がコンピュータにインストールされている場合、Symantec System Recovery のトレイアイコンをダブルクリックし、プログラムを起動します。
エージェントのみがインストールされている場合は、トレイアイコンをダブルクリックしても[バージョン情報]ダイアログボックスが表示されるだけです。
 - コンピュータにソフトウェアがインストールされている場合は、Symantec System Recovery のトレイアイコンを右クリックして、エージェントの一般タスクのメニューを表示します。

p.138 の「[Symantec System Recovery Agent について](#)」を参照してください。

p.139 の「[Windows のサービスツールを使った Symantec System Recovery Agent の管理について](#)」を参照してください。

Windows のサービスツールを使った Symantec System Recovery Agent の管理について

Symantec System Recovery Agent は、Windows のサービスの 1 つで、バックグラウンドで実行されます。

このエージェントは、次の機能を提供します。

- コンピュータにログオンしているユーザーがいない(または権限のないユーザーしかログオンしていない)場合でも、スケジュールされたバックアップジョブをローカルで実行する機能。
- 管理者が、他のコンピュータで実行している Symantec System Recovery から、企業全体のコンピュータをリモートでバックアップできる機能。

p.138 の「[Symantec System Recovery Agent の使用](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery の機能を使うには、Symantec System Recovery Agent を起動し、正しく設定する必要があります。Windows のサービスツールを使用して、エージェントの管理およびトラブルシューティングを実行できます。

メモ: Symantec System Recovery Agent を管理するには、ローカル管理者としてログオンする必要があります。

次の方法で Symantec System Recovery Agent を管理できます。

- ローカルおよびリモートコンピュータで Symantec System Recovery Agent を開始、停止、または無効にする。

p.142 の「[Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止](#)」を参照してください。

- Symantec System Recovery Agent が使用するユーザー名とパスワードを設定する。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

- Symantec System Recovery Agent を起動できない場合に実行する修復操作を設定する。

たとえば、Symantec System Recovery Agent を自動的に再起動したり、コンピュータを再起動したりすることができます。

p.143の「[Symantec System Recovery Agent](#)が開始しないときの修復操作の設定」を参照してください。

サービスを使用するためのベストプラクティス

次の表に、サービスを使うためのベストプラクティスを示します。

表 9-1 サービスを使用するためのベストプラクティス

ベストプラクティス	説明
サービスの使用前に[イベント]タブを確認する	[詳細]ビューの[イベント]タブは問題の原因を追跡するのに有効です。特に Symantec System Recovery Agent に関連する問題が発生している場合、問題の原因として考えられる内容について詳しくは[イベント]タブの最新のログエントリを確認してください。
ユーザーによる操作なしに Symantec System Recovery Agent が起動していることを確認する	Symantec System Recovery Agent は Symantec System Recovery の起動時に自動的に起動するように設定されています。状態情報を参照すると、 Symantec System Recovery Agent が起動したことを確認できます。エージェントが起動すると、[タスク]パネルの[状態]領域に、[準備完了]状態を示すメッセージが表示されます。 また、 Symantec System Recovery Agent が自動的に起動するかどうかは、[サービス]を確認することでテストできます。必要に応じて、状態を確認してサービスを再起動できます。[スタートアップの種類]が自動に設定されている場合は、エージェントを再起動してください。 p.142の「 Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止」を参照してください。

ベストプラクティス	説明
Symantec System Recovery Agent のデフォルト設定を変更する場合は注意する	デフォルトの Symantec System Recovery Agent のプロパティを変更すると、Symantec System Recovery を正しく実行できない場合があります。Symantec System Recovery Agent の [スタートアップの種類] および [ログオン] のデフォルト設定を変更する際は、注意してください。エージェントは、Symantec System Recovery の起動時に自動的に起動し、自動的にログオンするように設定されています。

p.141 の「[Windows のサービスツールを開く](#)」を参照してください。

Windows のサービスツールを開く

Symantec System Recovery Agent を管理するための Windows のサービスツールを開くには、いくつかの方法があります。

Windows のサービスツールを開く方法

- 次のいずれかを実行します。
 - Windows の [コントロール パネル] で、[管理ツール]、[サービス] の順にクリックします。
 - Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行] の順にクリックします。
[名前] テキストボックスに、「services.msc」と入力して、[OK] をクリックします。
- [名前] 列で、サービスのリストをスクロールし、Symantec System Recovery (エージェントの名前) を表示します。
状態は [開始] になっているはずですが。

p.141 の「[Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止について](#)」を参照してください。

p.142 の「[Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止について

Symantec System Recovery Agent サービスを開始、停止、または再起動するには、管理者または Administrators グループのメンバーとしてログオンする必要があります。コン

コンピュータがネットワークに接続されている場合は、ネットワークポリシー設定によりこれらのタスクを完了できないことがあります。

次の理由で、**Symantec System Recovery Agent** サービスの開始、停止、または再起動が必要になることがあります。

開始または再起動	Symantec System Recovery がコンピュータ上のエージェントに接続できない場合、エージェントを開始または再起動してください。そうしなければ、 Symantec System Recovery から再接続できません。
再起動	エージェントを再起動してください。この再起動は、エージェントサービスへのログオンに使うユーザー名やパスワードを変更した場合に必要です。また、セキュリティ設定ツールを使って別のユーザーにコンピュータのバックアップ権限を付与した場合にもエージェントを再起動してください。 p.145 の「Symantec System Recovery へのアクセスの制御について」 を参照してください。
停止	エージェントが原因でコンピュータに問題が生じていると考えられる場合、または一時的にメモリリソースを解放したい場合、そのエージェントを停止できます。 エージェントを停止すると、ドライブベースのバックアップとファイルおよびフォルダのバックアップもすべて実行されなくなります。

Symantec System Recovery Agent サービスを停止して **Symantec System Recovery** を起動すると、エージェントは自動的に再起動されます。[状態]は[準備完了]に変わります。

ソフトウェアの実行中に **Symantec System Recovery Agent** サービスを停止すると、エラーメッセージが表示され、**Symantec System Recovery** がエージェントから切断されます。ほとんどの場合には、[タスク]ペインまたはトレイアイコンで[再接続]をクリックして、**Symantec System Recovery Agent** を再起動できます。

[p.142 の「Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止」](#)を参照してください。

[p.143 の「Symantec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作の設定」](#)を参照してください。

Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止

Symantec System Recovery Agent サービスを開始または停止できます。

Symantec System Recovery Agent サービスを開始または停止する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [実行]ウィンドウに、「services.msc」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [サービス]ウィンドウの[名前]列で、[Symantec System Recovery]をクリックします。
- 5 [操作]メニューで、次のいずれかを選択します。
 - 開始
 - 停止
 - 再起動

p.141の「[Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作の設定

Symantec System Recovery Agent が開始しない場合のコンピュータの応答を指定できます。

Symantec System Recovery Agent が開始しないときの修復操作を設定する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [実行]ウィンドウに、「services.msc」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [サービス]ウィンドウの[操作]メニューで、[プロパティ]をクリックします。

- 5 [修復]タブの[最初のエラー]、[次のエラー]、および[その後のエラー]リストから、操作を選択します。

サービスを再起動する	サービスの再起動が試行されるまでの時間(分数)を指定します。
プログラムを実行する	実行するプログラムを指定します。ユーザー入力が必要なプログラムまたはスクリプトは指定しないでください。
コンピュータを再起動する	[コンピュータの再起動のオプション]をクリックして、コンピュータを再起動するまでの待機時間を指定します。コンピュータを再起動する前に、リモートユーザーに表示するメッセージを作成することもできます。

- 6 [エラー カウントのリセット]テキストボックスに、エージェントが何日間正常に実行されたらエラーカウントをリセットするかを指定します。

エラーカウントがゼロにリセットされた場合、次にエラーが発生すると、最初のエラーに設定されている修復操作が実行されます。

- 7 [OK]をクリックします。

p.141の「[Symantec System Recovery Agent サービスの開始または停止について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示について

Symantec System Recovery Agent を正常に実行できるかは、他の必要なサービスに依存します。システムコンポーネントが停止しているか、正常に実行されていない場合、依存関係にあるサービスが影響を受ける可能性があります。

Symantec System Recovery Agent を開始できない場合は、依存関係を確認します。エージェントが依存しているサービスがインストールされていること、それらのサービスの[起動]の種類が[無効]に設定されていないことを確認します。

メモ: 相互に依存している各サービスの[起動]の種類の設定を確認するには、一度に1つのサービスのみを選択する必要があります。その後、[操作]、[プロパティ]、[全般]の順にクリックします。

[依存関係]タブの上のリストボックスには、Symantec System Recovery Agent を正常に実行するために必要なサービスが表示されます。下のリストボックスには、Symantec

System Recovery Agent を正常に実行するために必要なサービスは含まれていません。

次の表に、Symantec System Recovery Agent を正常に実行するために必要なサービスと、起動のデフォルト設定を示します。

表 9-2 必要なサービス

サービス	スタートアップの種類
イベントログ	自動
プラグアンドプレイ	自動
リモートプロシージャコール (RPC)	自動

p.145 の「[Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示

Symantec System Recovery Agent を開始できない場合は、Symantec System Recovery Agent の依存関係を確認できます。依存関係を確認するときに、エージェントが依存しているサービスがインストールされていること、それらのサービスの [Startup] の種類が [無効] に設定されていないことを確認します。

Symantec System Recovery Agent の依存関係を表示する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[ファイル名を指定して実行]の順にクリックします。
- 2 [実行]ウィンドウに、「services.msc」と入力します。
- 3 [OK]をクリックします。
- 4 [サービス]ウィンドウの[名前]で、[Symantec System Recovery]をクリックします。
- 5 [操作]メニューで、[プロパティ]を選択します。
- 6 [依存関係]タブをクリックします。

p.144 の「[Symantec System Recovery Agent の依存関係の表示について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery へのアクセスの制御について

[セキュリティ設定ツール]を使用して、エージェントまたはすべての Symantec System Recovery ユーザーインターフェースにアクセスするのに必要な権限を付与できます。

[セキュリティ設定ツール]を使うときには、Users グループに対して付与されている権限があれば、グループ内のメンバにその権限が適用されます。

メモ: エージェントサービスは、LocalSystem として、または管理者のグループに属するユーザーによってのみ実行できます。

次の表に、Symantec System Recovery Agent を使用するユーザーまたはグループに対して許可または禁止できる権限を示します。

表 9-3 権限オプション

オプション	説明
フルコントロール	ユーザーまたはグループに、すべての Symantec System Recovery 機能に対して、管理者と同等の完全なアクセスを許可します。ユーザーに対して、バックアップの定義、変更、削除、またはリカバリポイントの保存場所の管理を許可しない場合には、フルコントロールを許可しないでください。
状態のみ	ユーザーまたはグループは、状態情報を取得し、バックアップジョブを実行できます。ただし、バックアップジョブを定義、変更、削除したり、製品の他の機能は使用できません。
拒否	ユーザーは、いずれの機能も実行できず、情報も参照できません。Symantec System Recovery へのアクセスが拒否されます。

禁止設定は、継承された許可設定より優先されます。たとえば、2つのグループのメンバであるユーザーが、そのうち1つのグループに対する設定によって権限が禁止されている場合、権限が禁止されます。ユーザー禁止権限は、グループ許可権限に優先されます。

p.146 の「ユーザーとグループの追加」を参照してください。

p.147 の「ユーザーまたはグループの権限を変更する方法」を参照してください。

p.148 の「ユーザーまたはグループの削除」を参照してください。

p.148 の「異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行」を参照してください。

ユーザーとグループの追加

[セキュリティ設定ツール]を使用して、ユーザーまたはグループを追加し Symantec System Recovery にアクセスできるようにすることが可能です。

ユーザーおよびグループを追加する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [追加]をクリックします。
- 3 [ユーザーまたはグループの選択]ダイアログボックスで、[詳細]をクリックします。
- 4 必要に応じて、[オブジェクトの種類]をクリックして、オブジェクトの種類を選択します。
- 5 必要に応じて、[場所]をクリックして、検索する場所を選択します。
- 6 [今すぐ検索]をクリックし、表示されたリストの中からユーザーおよびグループを選択して、[OK]をクリックします。
- 7 終了したら、[OK]をクリックします。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

p.147 の「[ユーザーまたはグループの権限を変更する方法](#)」を参照してください。

p.148 の「[ユーザーまたはグループの削除](#)」を参照してください。

p.148 の「[異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行](#)」を参照してください。

ユーザーまたはグループの権限を変更する方法

[セキュリティ設定ツール]を使用して、ユーザーまたはグループの Symantec System Recovery へのアクセス権を変更できます。

ユーザーまたはグループの権限を変更する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 [Symantec System Recoveryのアクセス許可]ダイアログボックスで、権限を変更するユーザーまたはグループを選択します。その後、次のいずれかを実行します。
 - 「フルコントロール」の権限を設定するには、選択したユーザーまたはグループに対して[許可]または[拒否]をクリックします。
 - 「状態のみ」の権限を設定するには、選択したユーザーまたはグループに対して[許可]または[拒否]をクリックします。
- 3 終了したら、[OK]をクリックします。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

p.146 の「[ユーザーとグループの追加](#)」を参照してください。

p.148 の「[ユーザーまたはグループの削除](#)」を参照してください。

p.148 の「[異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行](#)」を参照してください。

ユーザーまたはグループの削除

[セキュリティ設定ツール]を使用して、ユーザーまたはグループを削除し Symantec System Recovery にアクセスできないようにすることが可能です。

ユーザーまたはグループを削除する方法

- 1 Windows のスタートメニューで、[プログラム]>[Symantec System Recovery]>[セキュリティ設定ツール]の順にクリックします。
- 2 削除するユーザーまたはグループを選択し、[削除]をクリックします。
- 3 終了したら、[OK]をクリックします。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

p.146 の「[ユーザーとグループの追加](#)」を参照してください。

p.147 の「[ユーザーまたはグループの権限を変更する方法](#)」を参照してください。

p.148 の「[異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行](#)」を参照してください。

異なるユーザー権限での Symantec System Recovery の実行

ユーザーの権限が Symantec System Recovery の実行に不十分な場合は、Windows の[別のユーザーとして実行]機能を使うことができます。[別のユーザーとして実行]機能を使用すると、適切な権限を持つアカウントを使ってソフトウェアを実行できます。このことは、適切な権限を持つアカウントで現在ログオンしていなくても当てはまります。

Windows で[別のユーザーとして実行]を使用する方法

- 1 Windows のタスクバーで、[スタート]、[すべてのプログラム]、[Symantec System Recovery]の順にクリックします。
- 2 [Symantec System Recovery]を右クリックし、[別のユーザーとして実行]をクリックします。
- 3 [別のユーザーとして実行]ダイアログボックスで、別のアカウントでログオンするために[次のユーザー]をクリックします。
- 4 [ユーザー名]と[パスワード]フィールドで、使用するアカウント名とパスワードを入力し、[OK]をクリックします。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。

p.146 の「ユーザーとグループの追加」を参照してください。

p.147 の「ユーザーまたはグループの権限を変更する方法」を参照してください。

p.148 の「ユーザーまたはグループの削除」を参照してください。

バックアップの状態の監視

この章では以下の項目について説明しています。

- [バックアップの監視について](#)
- [\[ホーム\]ページのアイコンについて](#)
- [\[状態\]ページのアイコンについて](#)
- [SNMPトラップを送信するための Symantec System Recovery の設定](#)
- [ドライブ\(またはファイルおよびフォルダのバックアップ\)の状態レポートのカスタマイズについて](#)
- [ドライブの詳細の表示](#)
- [ドライブの保護レベルの向上](#)
- [問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について](#)

バックアップの監視について

バックアップを監視して、必要に応じて、消失したデータを効果的に修復できることを確認してください。

[ホーム]ページに、バックアップ保護の全般的な状態が表示されます。[状態]ページでは、保護されているドライブの詳細と、過去および今後のバックアップのカレンダー表示が提供されます。

メモ: 各ドライブがバックアップされていることを確認するだけでなく、コンピュータをバックアップするためのベストプラクティスを十分に検討して実行する必要があります。

p.152 の「[\[ホーム\]ページのアイコンについて](#)」を参照してください。

p.154 の「[\[状態\]ページのアイコンについて](#)」を参照してください。

コンピュータのハードディスクの再スキャン

[更新]を使用すると、製品のさまざまなビューに表示されるドライブ情報を更新できます。この機能は、ハードディスクの設定の変更が **Symantec System Recovery** にすぐに反映されない場合に役立ちます。たとえば、ハードディスク領域の追加やパーティションの作成を行った場合などです。

[更新]を使用すると、接続されているすべてのハードディスクがスキャンされ、設定が変更されているかどうかを確認されます。また、リムーバブルメディア、メディアドライブ、ハードディスクドライブ、ファイルシステム、ハードディスクドライブ文字に関する情報も更新されます。

コンピュータのハードディスクを再スキャンする方法

- ◆ コンピュータメニューで、[更新]をクリックします。

スキャンの実行中は、製品のウィンドウ下部にステータスバーが表示されます。


p.151の「[バックアップの監視について](#)」を参照してください。

[ホーム]ページのアイコンについて

[ホーム]ページの[バックアップの状態]ペインには、コンピュータのバックアップ保護状態の概略が表示されます。たとえば、定義したバックアップに1つ以上のドライブが含まれていないとします。このような場合、バックアップ保護レベルを反映して背景色および状態アイコンが変化します。[状態の詳細]ペインには、推奨される操作が表示されます。

次の表に、[ホーム]ページに表示される各バックアップ保護レベルを示します。

表 10-1 バックアップ保護レベル

アイコン	名称	説明
	バックアップ済み	少なくとも1つのドライブベースのバックアップが定義されており、定期的に実行されます。 必要に応じて、すべてのドライブ、ファイル、およびフォルダを修復できる状態です。

アイコン	名称	説明
	<p>要注意</p>	<p>バックアップが定義されていますが、スケジュールされていないか、長い間実行されていない可能性があります。既存のリカバリポイントが古い可能性があります。または、定義したバックアップに 1 つ以上のドライブが割り当てられていない可能性があります。</p> <p>部分的に保護されたドライブは修復できますが、リカバリポイントが古い場合、最新のデータは修復されません。</p>
	<p>危険性あり</p>	<p>バックアップが定義されておらず、ドライブを修復するために利用できるリカバリポイントもありません。</p> <p>保護されていないドライブは修復できないため、危険な状態です。</p>
	<p>不明な状態</p>	<p>状態を識別中か、製品のライセンスがないことを示します。</p> <p>しばらく待っても状態が表示されない場合は、製品のライセンスがあることを確認してください。</p>
	<p>レポートなし</p>	<p>このアイコンが表示されているドライブでは、バックアップの状態が監視されていません。または、エラーのみが監視されています。ただし、通知するエラーはありません。</p> <p>状態レポートの設定を変更するために[状態]ページの[状態レポートのカスタマイズ]機能を使ってください。</p>

p.151 の「バックアップの監視について」を参照してください。

p.154 の「[状態] ページのアイコンについて」を参照してください。

[状態]ページのアイコンについて






[状態]ページを使用して、バックアップの状態を監視できます。[状態]ページには、コンピュータの各ドライブのリストと、バックアップ履歴を含むカレンダーが表示されます。このカレンダーを使用すると、バックアップを実行した日時やバックアップの種類をすばやく確認できます。また、今後のバックアップのスケジュールも確認できます。ファイルおよびフォルダのバックアップを 1 つ以上定義している場合は、そのバックアップ履歴も表示されます。

メモ: 任意のカレンダーアイコンを右クリックして、状況感知型メニューにアクセスできます。これらのメニューから、関連するタスクにすばやくアクセスできます。

次の表に、[バックアップ]カレンダーに表示される各アイコンの意味を示します。

表 10-2 [バックアップ]カレンダーアイコン

アイコン	説明	状態
	1 つの単体リカバリポイントの作成を設定したドライブベースのバックアップを表します。このアイコンがバックアップタイムラインに表示されている場合は、ドライブベースのバックアップが実行されるようにスケジュールされていることを意味します。	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> バックアップが実行され、単体リカバリポイントが作成された場合。</p> <p> バックアップを利用できない場合。</p> <p> バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。</p> <p> ドライブベースのバックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

アイコン	説明	状態
	<p>増分リカバリポイントの作成を設定したドライブベースのバックアップを表します。これは、ドライブベースのバックアップがバックアップタイムラインに表示されている日付に実行されるようにスケジュールされていることを意味します。</p>	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> バックアップが実行され、増分リカバリポイントが作成された場合。</p> <p> バックアップを利用できない場合。</p> <p> バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。</p> <p> バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

アイコン	説明	状態
	<p>ファイルとフォルダのバックアップを表します。これは、ファイルおよびフォルダのバックアップがバックアップタイムラインに表示されている日付に行われることを意味します。</p>	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> バックアップが実行され、ファイルおよびフォルダのバックアップデータが正常に作成された場合。</p> <p> バックアップを利用できない場合。</p> <p> バックアップがスケジュールどおりに実行されなかった場合。この問題は、エラーが発生してバックアップが実行されなかった場合、またはバックアップが完了前に手動でキャンセルされた場合に発生する可能性があります。</p> <p> バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

アイコン	説明	状態
	<p>このアイコンが表示されている日付に複数のバックアップが実行されるようにスケジュールされていることを表します。</p>	<p>このアイコンは次の状態で表示されます。</p> <p> 複数のバックアップが実行され、最後のバックアップが正常に実行された場合。</p> <p> 複数のバックアップがスケジュールされていて、少なくとも 1 つのバックアップを利用できない場合。</p> <p> 複数のバックアップが実行され、最後のバックアップが正常に完了しなかった場合。この問題は、エラーのためにバックアップが実行されなかった場合に発生する可能性があります。</p> <p> バックアップが今後実行されるようにスケジュールされている場合。</p>

[状態] ページからバックアップ保護を監視するには、次の操作を実行します。

- [状態] ページの [バックアップ] カレンダーで、バックアップを実行した日付にアイコンが表示されていることを確認します。
- [ドライブ] 列で、表示するドライブを選択します。
[状態] ページの下半分に、状態情報が表示されます。
- バックアップアイコンをマウスで指して、バックアップの状態を確認します。
- カレンダーの表示範囲を、次のいずれかの方法により移動することができます。
 - タイトルバーの任意の場所をクリックすると、月単位のカレンダーが表示され、目的の日付へすばやく移動できます。
 - カレンダー下部のスクロールバーを使用すると、日付を前後にスクロールできます。

p.151 の「[バックアップの監視について](#)」を参照してください。

p.152 の「[\[ホーム\] ページのアイコンについて](#)」を参照してください。

SNMP トラップを送信するための Symantec System Recovery の設定

Network Management System (NMS) アプリケーションを使用している場合は、SNMP トラップをさまざまな優先順位や通知の種類で送信するように、Symantec System Recovery を設定できます。

デフォルトでは、Symantec System Recovery は NMS マネージャに SNMP トラップを送信することはできません。SNMP トラップをさまざまな優先順位や通知の種類で送信するように Symantec System Recovery を設定できます。

SNMP トラップを送信するように Symantec System Recovery を設定する方法

- 1 タスクメニューで、[オプション]をクリックします。
- 2 [通知]で[SNMP トラップ]をクリックします。
- 3 [優先度およびメッセージの種類を選択]リストをクリックし、トラップを生成する優先レベルを選択します。

すべてのメッセージ	優先レベルにかかわらず、すべてのメッセージが送信されます。
優先度が中および高のメッセージ	優先順位が中程度のメッセージと高いメッセージのみが送信されます。
優先度の高いメッセージのみ	優先順位が高いメッセージのみが送信されます。
メッセージなし	優先レベルにかかわらず、どのメッセージも送信されません。

- 4 次のオプションを 1 つ以上選択します。
 - エラー
 - 警告
 - 情報
- 5 送信する SNMP トラップのバージョン ([バージョン 1] または [バージョン 2]) を選択し、[OK] をクリックします。

p.158 の「[Symantec System Recovery 管理情報ベースについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery 管理情報ベースについて

Symantec System Recovery 管理情報ベース (MIB) は、エンタープライズ MIB です。これは、Symantec System Recovery SNMP トラップ定義を含んでいます。すべての Network Management System (NMS) アプリケーションには、MIB をロードするための

オプションが用意されています。これらのどのオプションを使用しても、Symantec System Recovery MIB をロードできます。MIB をロードしなくても、NMS アプリケーションはトラップを受信して表示できます。ただし、トラップは情報テキストでは表示されません。この MIB ファイルの名前は `ssr_mib.mib` で、Symantec System Recovery 製品 DVD の [サポート] フォルダにあります。

p.158 の「SNMP トラップを送信するための Symantec System Recovery の設定」を参照してください。

ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズについて

Symantec System Recovery が特定のドライブ(またはすべてのファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態を通知する方法を設定できます。

たとえば、重要でないデータが含まれるドライブ D をバックアップジョブから除外したとします。[ホーム] ページの状態では、コンピュータが危険な状態にあるとレポートされ続けます。Symantec System Recovery をドライブ D を無視するように設定できます。無視することにより、[ホーム] ページの [バックアップの状態] パネルのドライブ D の状態が識別されなくなります。

または、実行されなかったバックアップや失敗したバックアップなどのエラーのみを状態レポートに含めるように指定できます。

メモ: 各ドライブのバックアップの状態は、ドライブが一覧表示された製品全体で通知されます。ドライブの状態レポートをカスタマイズすると、状態は、ドライブが Symantec System Recovery で一覧表示されているすべての場所に反映されます。

最初に特定のドライブにあるデータの重要性を判断する必要があります。または、ファイルとフォルダのバックアップに含めたデータの重要性を判断する必要があります。その後、そのドライブに割り当てる状態レポートのレベルを決定できます。

p.159 の「ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズ」を参照してください。

ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズ

選択したドライブまたはファイルやフォルダの状態レポートをカスタマイズできます。

ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートをカスタマイズする方法

- 1 [状態]ページで、ドライブ(または[ファイルやフォルダ])をクリックして選択します。
[ホーム]ページから[状態レポートのカスタマイズ]をクリックすることもできます。
- 2 [状態レポートのカスタマイズ]をクリックします。
- 3 状態レポートのオプションを選択します。
p.160の「[状態レポートのカスタマイズ]のオプション」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

p.159の「ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズについて」を参照してください。

[状態レポートのカスタマイズ]のオプション

次の表は[状態レポートのカスタマイズ]ダイアログボックスで利用可能なオプションを記述したものです。

表 10-3 [状態レポートのカスタマイズ]のオプション

オプション	説明
完全な状態レポート	[ホーム]および[状態]ページに、選択したドライブまたはファイルやフォルダのバックアップの現在の状態を表示します。 データが重要な場合にこのオプションを選択します。
エラーのみの状態レポート	エラーが発生した場合にのみ、選択したドライブ、またはファイルおよびフォルダのバックアップの現在の状態を表示します。 データが重要な場合にこのオプションを選択します。ただし、このオプションでは、エラーが発生したときに、状態でエラーを通知するだけです。
状態レポートの必要なし	選択したドライブ、またはファイルおよびフォルダのバックアップの状態を表示しません。 データが重要でなく、未処理のバックアップまたは失敗したバックアップを通知する必要がない場合に、このオプションを選択します。

p.159の「ドライブ(またはファイルおよびフォルダのバックアップ)の状態レポートのカスタマイズ」を参照してください。

p.159の「[ドライブ\(またはファイルおよびフォルダのバックアップ\)の状態レポートのカスタマイズについて](#)」を参照してください。

ドライブの詳細の表示

[詳細]ページでは、ハードドライブの詳細を表示できます。

ドライブの次の詳細を表示できます。

名前	バックアップを定義したときに割り当てた名前が表示されます。
種類	バックアップの実行時に、バックアップによって作成されるリカバリポイントの種類が表示されます。
宛先	リカバリポイントのストレージ場所またはバックアップ対象のドライブが存在する場所を識別します。
前回の実行	前回のバックアップの実行日時が表示されます。
次の実行	スケジュール設定された次のバックアップの日時が表示されます。

ドライブの詳細を表示するには

- 1 [表示]メニューで、[詳細]をクリックします。
- 2 [ドライブ]タブにある表の[ドライブ]列で、ドライブを選択します。
- 3 [詳細]セクションを確認します。

p.161の「[ドライブの保護レベルの向上](#)」を参照してください。

ドライブの保護レベルの向上

ドライブベースのバックアップの状態表示がユーザーに注意を促している場合は、保護レベルを向上するための手順を実行します。

既存のバックアップへのドライブの追加、バックアップのスケジュールの編集、バックアップの設定の編集が必要な場合があります。または、新しいバックアップの定義が必要な場合があります。

p.65の「[データのバックアップについて](#)」を参照してください。

ドライブの保護レベルを向上する方法

- 1 表示メニューで、[状態]をクリックします。
- 2 [ドライブ]列で、注意が必要なドライブを選択します。

3 [状態]パネルでは、編集するバックアップ名を右クリックし、次のいずれかのメニュー項目を選択します。

今すぐバックアップを実行	選択したバックアップジョブがすぐに実行されます。
オプションを指定してバックアップを実行	必要なリカバリポイントの種類を選択できる[オプションを指定してバックアップを実行]ダイアログボックスを開きます。リカバリポイントのオプションの種類は増分リカバリポイント、リカバリポイントセットと単体リカバリポイントを含んでいます。
スケジュールを変更	[実行するタイミング]ダイアログボックスが表示されます。バックアップスケジュールを編集できます。
設定を編集	[バックアップ定義ウィザード]が表示されます。バックアップの定義を編集できます。 このオプションでは、ウィザードの 2 番目のページが表示されます。
オフサイトの編集	[オフサイトコピー]機能の設定を編集または変更できる[オフサイトコピーの設定]ダイアログボックスを開きます。
バックアップジョブを削除	選択したバックアップが削除されます。 削除されるのはバックアップの定義のみです。バックアップデータ(リカバリポイントや、ファイルおよびフォルダのバックアップデータなど)は削除されません。
バックアップを無効(有効)にする	選択したバックアップを無効(または有効)にします。
新しいバックアップを定義	コンピュータをバックアップするか、または選択したファイルとフォルダをバックアップするかを選択できる[バックアップ定義ウィザード]を開きます。 このオプションは、[ドライブ]列のドライブがバックアップに割り当てられていない場合に有効です。バックアップジョブに割り当てられるドライブを選択できます。それから[状態]ページから[バックアップ定義ウィザード]を開始するためのショートカット方法へのアクセスがあります。
バックアップ先を管理	バックアップ先ドライブを指定することも、バックアップ先ドライブの既存のリカバリポイントを削除、コピー、または検索することもできる[バックアップ先を管理]ダイアログボックスを開きます。
状態レポートのカスタマイズ	状態レポートが必要かどうかや、状態レポートの種類を指定できる[状態レポートのカスタマイズ]ダイアログボックスを開きます。

p.124 の「[バックアップ設定の編集](#)」を参照してください。

問題のトラブルシューティングでのイベントログ情報の使用について

Symantec System Recovery で操作 (バックアップジョブの実行時など) を実行すると、イベントが記録されます。プログラムのエラーメッセージも記録されます。

イベントログを使用して、問題の原因を追跡したり、バックアップジョブが正常に完了したことを検証できます。

ログエントリには、Symantec System Recovery またはユーザーによる多数の操作の成功または失敗についての情報が含まれます。すべての情報およびプログラムのエラーメッセージを 1 カ所で確認できます。

次の情報がイベントログに含まれます。

表 10-4 イベントログ情報

オプション	説明
種類	イベントがエラーメッセージか、またはその他の情報 (バックアップジョブの正常完了など) かを示します。
ソース	Symantec System Recovery がメッセージを生成するか、別のプログラムが生成するかを特定します。
日付	選択したイベントが発生した正確な日時を表示します。
説明	エラーをトラブルシューティングするうえで役立つイベントについての情報を確認できます。

p.58 の「[Symantec System Recovery メッセージのログへの記録](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Monitor を使用したリモートコンピュータのバックアップ状態の監視

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery 2013 Monitor](#) について
- [Symantec System Recovery 2013 Monitor](#) の開始
- [Symantec System Recovery 2013 Monitor](#) コンソールのアイコンについて
- [Symantec System Recovery 2013 Monitor](#) のデフォルトオプションの設定
- コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加
- リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正
- コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除
- リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示
- コンソールの表示について
- 保護状態レポートについて

Symantec System Recovery 2013 Monitor について

Symantec System Recovery 2013 Monitor は極めて単純な軽量スタンドアロンの使いやすい監視アプリケーションです。Symantec System Recovery 2013 Monitor では、

SSR (Symantec System Recovery) を使ってバックアップしたリモートコンピュータのバックアップ保護状態を判別できます。Symantec System Recovery アプリケーションは、以前は BESR (Backup Exec System Recovery) という名前でした。リモートコンピュータを監視することで、消失したデータを確実にリカバリできます。

Symantec System Recovery 2013 Monitor アプリケーションでは、次の操作を実行できます。

- 同時に最大 100 台のリモートコンピュータのバックアップ保護状態を監視できます。
- 監視するリモートコンピュータの表示を選択できます。
- コンピュータリストに表示されるコンピュータのいずれかを更新して、最新の保護状態を表示できます。リモートコンピュータについて、時間単位の更新間隔を設定することもできます。

p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor の開始](#)」を参照してください。

p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて](#)」を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery 2013 Monitor の開始

Symantec System Recovery 2013 Monitor は、Windows の [すべてのプログラム] メニューにインストールされます。インストール中にプログラムアイコンがシステムトレイにインストールされ、そこから Symantec System Recovery 2013 Monitor を開くことができます。Windows のタスクバーから Symantec System Recovery 2013 Monitor を開くこともできます。

Symantec System Recovery 2013 Monitor を開始するには

- ◆ Windows のタスクバーで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [Symantec System Recovery Monitor] > [Symantec System Recovery 2013 Monitor] の順にクリックします。

Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールが表示されます。









p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて](#)」を参照してください。



Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて

次の表では、Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて説明します。

表 11-1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて

アイコン	タイトル	説明
	表示オプション	コンピュータの追加、表示の切り替え、コンピュータの削除などの SSR 監視アプリケーションの常用機能のほとんどにアクセスするショートカットを表示します。
	新しいコンピュータを追加 (Ctrl + N)	[バックアップの状態] ペインに表示されるコンピュータリストにリモートコンピュータを追加します。 p.170 の「 コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加 」を参照してください。
	コンピュータをインポート (Ctrl+I)	複数のリモートコンピュータを追加するために、テキストファイルをインポートします。このテキストファイルには、リモートコンピュータの IP アドレスが含まれています。 p.171 の「 コンピュータリストに複数のリモートコンピュータを追加するためのテキストファイルのインポート 」を参照してください。
	エクスポート (Ctrl+X)	&SSRMTtitle コンソールの選択したコンピュータの保護状態レポートを HTML または CSV の形式でエクスポートします。 p.175 の「 保護状態レポートについて 」を参照してください。
	アプリケーション設定 (Ctrl + S)	[設定] ペインを開き、Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションを設定できます。 p.169 の「 Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定 」を参照してください。
	表示の切り替え (Ctrl+T)	カテゴリ表示とすべてのコンピュータ表示を切り替えます。
	ヘルプ (F1)	Symantec System Recovery 2013 Monitor のヘルプシステムにアクセスします。
	終了 (Alt + F4)	Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールを閉じます。
		コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除。

アイコン	タイトル	説明
	危険性あり	コンピュータリストに表示されたコンピュータに対して、ドライブベースのバックアップポリシーが作成されていないことを示します。 このようなコンピュータのドライブ、ファイル、フォルダは保護されていないため、リカバリ不可能で危険な状態です。
	要注意	次の注意を示します。 ■ このコンピュータリストに表示されるコンピュータに対してドライブベースのバックアップポリシーが定義済みです。ただし、そのポリシーは最近実行されていないか、コンピュータが定義済みのバックアップポリシーに割り当てられていません。 ■ コンピュータによってはリカバリが可能ですが、リカバリポイントの有効期限が切れている場合、最新版のデータが含まれないことがあります。
	不明	コンピュータリストのコンピュータのバックアップ保護状態が不明であることを示します。この状態は、Symantec System Recovery 2013 Monitor が次の問題でリモートコンピュータに接続できないときに表示される場合があります。 ■ ネットワーク接続の問題 ■ ファイアウォールの問題 ■ 不正なユーザー名またはパスワード
	バックアップ成功	ドライブベースのバックアップポリシーが作成され、定期的に行われていることを示します。リモートコンピュータのドライブ、ファイル、フォルダはすべて保護されており、必要に応じてリカバリを行うことができます。
	コンピュータの詳細	[コンピュータの詳細]ペインを開きます。[コンピュータの詳細]ペインには、選択したリモートコンピュータのバックアップ保護状態の概略が表示されます。 p.173の「リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示」 を参照してください。
 	展開/省略	コンピュータリストでリモートコンピュータのカテゴリ表示を表示する[状態]ペインを展開または折りたたみます。
	コンピュータを削除 (Delete)	コンピュータリストからリモートコンピュータを削除します。 p.172の「コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除」 を参照してください。

アイコン	タイトル	説明
	保護状態を更新 (Ctrl + R)	手動で[バックアップの状態]ペインを更新し、コンピュータリストの最新のバックアップ保護状態を表示します。 コンピュータリストから個々のコンピュータを選択し、更新を選択して、最新のバックアップ保護状態を表示することもできます。
	コンピュータの編集 (Ctrl + E)	リモートコンピュータのログオンクレデンシャルを変更します。 p.172 の「リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正」 を参照してください。
Next sync : 60 min	次の同期時間	次の自動更新までの残り時間を分単位で表示します。

p.169 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定

[設定]ペインでは、Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションを設定できます。次の表では、[設定]ペインのオプションを説明します。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

表 11-2 Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定

設定	実行する手順
[常に上位]	Symantec System Recovery 2013 Monitor アプリケーションを他の Microsoft Windows アプリケーションの上に表示する場合は、このチェックボックスを選択します。
[終了時にウィンドウの場所を保存]	アプリケーションを閉じたときのコンソールの場所を保存する場合は、このチェックボックスを選択します。アプリケーションを再び起動したときに、保存した場所にコンソールが表示されます。

設定	実行する手順
[Windows OS で開始]	Microsoft Windows オペレーティングシステムが起動すると、Symantec System Recovery 2013 Monitor アプリケーションが自動的に開始するようにする場合は、このチェックボックスを選択します。Microsoft Windows にログオンしたときに、Symantec System Recovery 2013 Monitor が自動的に開始され、リモートコンピュータが監視されます。
[自動更新] [更新間隔] <時間を入力> 分	Symantec System Recovery 2013 Monitor の自動更新を有効にする場合に、このチェックボックスを選択します。 更新間隔を修正できます。間隔の値は、60 分から 720 分の間でなければなりません。
[ロード時にすべてのタブを展開]	ロード時に Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのカテゴリ表示ですべての状態タブを展開する場合は、このチェックボックスを選択します。 すべての状態タブは、次のように手動で展開したり折りたたむことができます。 <ul style="list-style-type: none"> ■ [バックアップの状態]ペインを展開するには、展開アイコンをクリックします。 ■ [バックアップの状態]ペインを折りたたむには、省略アイコンをクリックします。
[ドメインアカウントとパスワード]	ドメインアカウントまたは Active Directory で利用可能なリモートコンピュータのグループにアクセスまたはそのグループを監視する場合は、このチェックボックスを選択します。 p.145 の「 Symantec System Recovery へのアクセスの制御について 」を参照してください。
[ユーザー名]: (ドメイン¥ユーザー名)	<ドメイン名¥ユーザー名>の形式でグローバルアカウント名を入力します。たとえば、Symc¥IMG と入力します。
[パスワード]	パスワードを入力します。
[パスワードの確認入力]	パスワードを再び入力します。
[保存]	Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションを保存するには、[保存]をクリックします。

コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加

リモートコンピュータのバックアップ保護状態を監視するには、リモートコンピュータをコンピュータリストに追加する必要があります。

コンピュータリストにリモートコンピュータを追加するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールの左下隅で[マシンを追加]をクリックします。

p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて](#)」を参照してください。

- 2 [ホスト名]または[IP アドレス]フィールドに、追加するコンピュータの名前または IP アドレスを入力します。

Symantec System Recovery へのアクセスの制御について詳しくは、『Symantec™ System Recovery ユーザーズガイド』を参照してください。

- 3 [ユーザー名]フィールドに、コンピュータのバックアップ保護状態にアクセスするための適切な権限を持つアカウントのユーザー名を入力します。
- 4 [パスワード]フィールドに、そのユーザーアカウントのパスワードを入力します。
- 5 [パスワードの確認入力]フィールドに、パスワードを再び入力して確認します。
- 6 [追加]をクリックします。

p.171 の「[コンピュータリストに複数のリモートコンピュータを追加するためのテキストファイルのインポート](#)」を参照してください。

p.172 の「[リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正](#)」を参照してください。

コンピュータリストに複数のリモートコンピュータを追加するためのテキストファイルのインポート

コンピュータリストに複数のリモートコンピュータを追加する場合、すべてのリモートコンピュータの IP アドレスを含むテキストファイルをインポートできます。

p.174 の「[コンソールの表示について](#)」を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.172 の「[リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正](#)」を参照してください。

p.173 の「[リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示](#)」を参照してください。

テキストファイルをインポートする前に、次の操作を実行してください。

- [設定]ペインでドメインアカウントとパスワードを選択して設定します。p.169 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor のデフォルトオプションの設定](#)」を参照してください。
- 監視するリモートコンピュータの IP アドレスを含むテキストファイルを作成します。

テキストファイルをインポートするには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、[複数のコンピュータを追加するためにテキストファイルをインポート]をクリックします。
- 2 リモートコンピュータの IP アドレスを含むテキストファイルを参照し、選択します。
- 3 [OK]をクリックします。

リモートコンピュータのログオンクレデンシャルの修正

コンピュータリストから選択したリモートコンピュータのログオンクレデンシャルを修正できます。

リモートコンピュータのログオンクレデンシャルを修正するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、コンピュータリストからリモートコンピュータを選択します。
- 2 [コンピュータの編集]をクリックします。
- 3 [ホスト名または IP アドレス]フィールドで、ホストコンピュータのホストコンピュータ名または IP アドレスを修正します。

p.145 の「[Symantec System Recovery へのアクセスの制御について](#)」を参照してください。
- 4 [ユーザー名]フィールドで、コンピュータのバックアップ保護状態にアクセスするために必要な権限を持つアカウントのユーザー名を修正します。
- 5 [パスワード]フィールドで、ユーザーアカウントのパスワードを修正します。
- 6 [パスワードの確認入力]フィールドで、ユーザーアカウントの修正済みパスワードを再入力します。

p.174 の「[コンソールの表示について](#)」を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.173 の「[リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示](#)」を参照してください。

コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除

コンピュータリストからリモートコンピュータを削除できます。

コンピュータリストからリモートコンピュータを削除するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、削除するリモートコンピュータを選択します。

メモ: 複数のコンピュータを削除する場合は、コンピュータリストで **Ctrl** キーを押しながらリモートコンピュータをクリックし、**Delete** キーを押します。

- 2 [コンピュータを削除]をクリックします。削除したコンピュータがコンピュータリストで表示されなくなります。

p.170 の「コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加」を参照してください。

リモートコンピュータのバックアップ保護状態の表示

コンピュータリストにリモートコンピュータを追加すると、Symantec System Recovery 2013 Monitor によって次の処理が実行されます。

- 自動的にリモートコンピュータが監視されます。
- 次の保護状態のカテゴリに区分されたすべてのリモートコンピュータを表示できるコンピュータリストが表示されます。
 - 危険性あり
 - 要注意
 - 不明
 - バックアップ成功
- 個々のリモートコンピュータのバックアップ保護状態を表示できます。
- 監視対象のリモートコンピュータが次の保護状態カテゴリに表示される場合、その理由と詳しい情報を表示できます。
 - 危険性あり
 - 要注意
 - 不明

[コンピュータの詳細] ペインでは、リモートコンピュータの監視バックアップ保護状態について詳しい情報を表示できます。

リモートコンピュータの保護状態を表示するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、コンピュータリストからリモートコンピュータを選択します。
- 2 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。
- 3 [コンピュータの詳細]をクリックします。

p.174 の「[コンソールの表示について](#)」を参照してください。

p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて](#)」を参照してください。

コンピュータの詳細の表示

[コンピュータの詳細]ペインでは、監視するリモートコンピュータに関する詳しい情報を表示できます。

表 11-3 [コンピュータの詳細]ペイン

項目	説明
最終更新時	保護状態を確認するために Symantec System Recovery 2013 Monitor がコンピュータに前回アクセスした時間を表示します。
SSR バージョン	Backup Exec System Recovery アプリケーションまたは Symantec System Recovery アプリケーションのバージョンを表示します。
OS バージョン	バックアップ保護状態の監視対象であるリモートコンピュータのオペレーティングシステムのバージョンを表示します。
状態	コンピュータのバックアップ保護状態を表示します。
原因	保護状態の原因を指定します。

p.174 の「[コンソールの表示について](#)」を参照してください。

コンソールの表示について

コンソールの表示の機能を使用すると、Symantec System Recovery アプリケーションでリモートコンピュータを監視し、バックアップ保護状態を表示できます。リモートコンピュータに接続するために、コマンドラインパラメータやユーザークレデンシャルを入力する必要はありません。

メモ: ホストコンピュータで Backup Exec System Recovery 2010 (Service Pack 5) または Symantec System Recovery 2011 (Service Pack 2) 以降を使用している場合、[コンソールの表示]リンクがアクティブな状態で表示されます。以前のバージョンの Symantec System Recovery を使用するホストコンピュータのリンクは非アクティブな状態で表示されます。

Symantec System Recovery について詳しくは、『Symantec™ System Recovery ユーザーズガイド』を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.175 の「[保護状態レポートについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery でリモートコンピュータのバックアップ保護状態を表示するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、コンピュータリストからリモートコンピュータを選択します。
- 2 [コンソールの表示]をクリックします。

保護状態レポートについて

保護状態レポートでは、Symantec System Recovery を使用してバックアップしたリモートコンピュータすべてのバックアップ保護状態に関する詳しい情報を提供します。保護状態レポートは次の形式のいずれかでエクスポートできます。

- ハイパーテキストマークアップ言語 (HTML)
- カンマ区切りファイル (CSV)

p.166 の「[Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールのアイコンについて](#)」を参照してください。

p.170 の「[コンピュータリストへのリモートコンピュータの追加](#)」を参照してください。

p.172 の「[コンピュータリストからのリモートコンピュータの削除](#)」を参照してください。

保護状態レポートをエクスポートして表示するには

- 1 Symantec System Recovery 2013 Monitor コンソールで、[エクスポート可能なデータ形式のリスト]をクリックします。
- 2 エクスポート可能なデータ形式のリストから、[HTML]または[CSV]を選択します。
- 3 [コンピュータに関する情報をファイルにエクスポート]をクリックします。
- 4 [名前を付けて保存]ウィンドウで、レポートのエクスポート先のファイル名と場所を入力します。
- 5 [保存]をクリックします。

リカバリポイントの内容の探索

この章では以下の項目について説明しています。

- [リカバリポイントの検索について](#)
- [Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索](#)
- [リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)
- [リカバリポイントドライブのマウント解除](#)
- [リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)

リカバリポイントの検索について

リカバリポイントのファイルを検索するために **Symantec System Recovery** を使うことができます。リカバリポイントのマウントして、ドライブ文字をリカバリポイントに割り当てることにより、**Windows** エクスプローラで表示できます。

割り当てられたドライブ上で、次のタスクを実行できます。

- **ScanDisk** (または **CHKDSK**) の実行。
- ウイルスチェックの実行。
- 他のドライブへのフォルダやファイルのコピー。
- 使用領域や空き領域などのドライブ情報の表示。
- マウントされたリカバリポイント内に存在するプログラムの実行。
マウントされたリカバリポイント内では、実行するプログラムはいかなるレジストリの値にも依存することができません。プログラムはまた **COM** インターフェース、**Dynamic Link Library (DLL)**、または他の同様な依存関係に依存することができません。

マウントしたドライブは、共有ドライブとして設定できます。ネットワークから共有ドライブに接続し、マウントされたリカバリポイント内のファイルやフォルダを復元することができます。

同時に1つ以上のリカバリポイントをマウントすることができます。マウントを解除するか、またはコンピュータを再起動するまで、マウントしたドライブはそのまま使用できます。ドライブをマウントしても、ハードディスクの空き領域を新たに消費することはありません。

マウント後もNTFSボリュームのセキュリティはすべて維持されます。

リカバリポイント内のファイルやフォルダを復元するためにドライブをマウントする必要はありません。

メモ: リカバリポイントのマウントを解除すると、そのリカバリポイントに書き込まれたデータはすべて失われます。このようなデータには、マウント解除の時点で作成、編集、または削除されていたデータが含まれます。

p.178の「[Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索](#)」を参照してください。

p.180の「[リカバリポイントドライブのマウント解除](#)」を参照してください。

p.181の「[リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

Windows エクスプローラからのリカバリポイントの検索

リカバリポイントの検索を実行する場合、Symantec System Recovery はリカバリポイントをドライブ文字としてマウントしてWindows エクスプローラで開きます。

リカバリポイントに含まれる各ドライブについて、マウントされた新しいドライブ文字が作成されます。たとえば、リカバリポイントにドライブ C および D のバックアップが含まれる場合は、新たにマウントされた2つのドライブが表示されます (E および F など)。マウントされたドライブには、バックアップされたドライブの元のドライブラベルが含まれます。

Windows エクスプローラからリカバリポイントを検索する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 検索するリカバリポイントまたはリカバリポイントセットを選択し、[検索]をクリックします。
- 3 複数のリカバリポイントを含むリカバリポイントセットを選択した場合は、[範囲]列で1つのリカバリポイントを選択し、[OK]をクリックします。

p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

Windows エクスプローラからのリカバリポイントのマウント

Windows エクスプローラでバックアップ先フォルダを開くことで、リカバリポイントをドライブとして手動でマウントすることもできます。

Windows エクスプローラを使用してリカバリポイントの内容を検索できます。たとえば、特定のファイルが最初に保存されていた場所を覚えていない場合は、Windows エクスプローラの検索機能を使用できます。ハードディスクドライブでファイルを通常検索する場合と同様にファイルを検索できます。

Windows エクスプローラからリカバリポイントをマウントする方法

- 1 Windows エクスプローラで、リカバリポイントを選択します。
リカバリポイントは、バックアップを定義したときに選択した保存場所に保存されています。
- 2 リカバリポイントを右クリックして、[マウント]を選択します。
- 3 [リカバリポイントのマウント]ウィンドウで、[ドライブラベル]列からマウントするドライブを選択します。
- 4 [ドライブ文字]リストで、ドライブに関連付ける文字を選択します。
- 5 [OK]をクリックします。
- 6 さらに別のドライブをマウントする場合は、手順 1 から 5 を繰り返します。

p.177 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

リカバリポイント内のファイルの表示および復元

[Recovery Point Browser]を使用し、リカバリポイント内のファイルを開くことができます。ファイルは、そのファイルの種類に関連付けられているプログラムを使用して開かれます。そのファイルに関連付けられているアプリケーションでファイルを保存することでファイルを復元することもできます。また、[Recovery Point Browser]で[ファイルを修復]オプションを使用して、ファイルを復元できます。

ファイルがプログラムに関連付けされていない場合は、Windows の[ファイルを開くアプリケーションの選択]ダイアログボックスが表示されます。ここで、ファイルを開く適切なプログラムを選択できます。

メモ: EFS (暗号化ファイルシステム) を使用している NTFS ボリュームは表示できません。

リカバリポイント内のファイルを開く方法

- 1 [ツール]ページで、[Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
- 2 バックアップ先フォルダに移動し、参照するリカバリポイントファイルを選択して[開く]をクリックします。
- 3 [Recovery Point Browser]の左側のツリーパネルでドライブを選択します。

- 4 右側の内容パネルで、表示するファイルが含まれるフォルダをダブルクリックします。
- 5 表示するファイルを右クリックし、[ファイルを表示]を選択します。

次のいずれかの拡張子を持つプログラムファイルを選択した場合は、[ファイルを表示]オプションは利用できません(淡色表示)。

.exe

.dll

.com

リカバリポイント内のファイルを復元する方法

- 1 [ツール]ページで、[Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
- 2 バックアップ先フォルダに移動し、参照するリカバリポイントファイルを選択して[開く]をクリックします。
- 3 [Recovery Point Browser]の左側のツリーパネルでドライブを選択します。
- 4 右側の内容パネルで、表示するファイルが含まれるフォルダをダブルクリックします。
- 5 表示するファイルを右クリックし、[ファイルを表示]を選択します。

次のいずれかの拡張子を持つプログラムファイルを選択した場合は、[ファイルを表示]オプションは利用できません(淡色表示)。

.exe

.dll

.com

- 6 [Recovery Point Browser]の右側のリストパネルで1つ以上のファイルを選択します。
- 7 [ファイルを修復]をクリックし、次に[修復]をクリックして元の場所にファイルを復元します。

既存の(元の)ファイルを上書きするかどうかを尋ねるメッセージが表示されたら、[はい]または[すべてはい]をクリックし、上書きを実行します。

p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

リカバリポイントドライブのマウント解除

コンピュータを再起動すると、マウントしたリカバリポイントドライブはすべてマウント解除されます。コンピュータを再起動しなくても、ドライブをマウント解除できます。

リカバリポイントドライブをマウント解除する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

- リカバリポイントドライブをマウント解除するには、[Windows エクスプローラ]でマウントされたリカバリポイントに移動します。
 - [Recovery Point Browser]でリカバリポイントドライブをマウント解除するには、ツリー表示で、マウントされたリカバリポイントを選択します。
- 2 マウントされたリカバリポイントを右クリックして、[リカバリポイントのマウントを解除]をクリックします。

p.177 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

p.181 の「[リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

リカバリポイントドライブのプロパティの表示

リカバリポイントの各種のドライブのプロパティを表示するために[プロパティ]を使うことができます。

リカバリポイントドライブのプロパティを表示する方法

- 1 [Recovery Point Browser]の左側のツリーパネルで、表示するドライブが含まれているリカバリポイントをクリックします。
- 2 ドライブを選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
 - リカバリポイントを右クリックして、[プロパティ]を選択します。

p.177 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

p.181 の「[リカバリポイントドライブのプロパティ](#)」を参照してください。

リカバリポイントドライブのプロパティ

次の表は[リカバリポイントのプロパティ]ダイアログボックスのドライブのプロパティを記述したものです。

表 12-1 リカバリポイントドライブのプロパティ

プロパティ	説明
説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明。
元のドライブ文字	ドライブに割り当てられていた元のドライブ文字。
クラスタサイズ	FAT、FAT32、または NTFS ドライブのクラスタサイズ(バイト)。

プロパティ	説明
ファイルシステム	ドライブで使用しているファイルシステムの種類。たとえば、FAT、FAT32、または NTFS。
基本/論理	選択したドライブのパーティションの種類。基本パーティションまたは論理パーティションのいずれか。
サイズ	ドライブの総サイズ(MB)。使用領域と空き領域の両方が含まれます。
使用領域	ドライブ内の使用領域の容量(MB)。
未使用領域	ドライブ内の未使用領域の容量(MB)。
不良セクタが含まれています	ドライブ上に不良セクタがあるかどうかを示します。
正常に静止しました	リカバリポイントが作成された時、データベースアプリケーションが正しく静止したかどうかを示します。

p.181 の「[リカバリポイントドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.177 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

バックアップ先の管理

この章では以下の項目について説明しています。

- [バックアップ先について](#)
- [バックアップ方式について](#)
- [古いリカバリポイントのクリーンアップ](#)
- [リカバリポイントセットの削除](#)
- [セット内のリカバリポイントの削除](#)
- [リカバリポイントのコピー](#)
- [仮想変換ジョブの定義](#)
- [既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)
- [仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)
- [仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)
- [仮想変換ジョブの編集](#)
- [仮想変換ジョブの削除](#)
- [仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行](#)
- [ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)
- [バックアップデータの管理の自動化](#)
- [バックアップ先の移動](#)

バックアップ先について

バックアップ先とは、バックアップデータを保存する場所です。

Symantec System Recovery には、コンピュータの貴重なディスク領域を他の目的に使用できるように、バックアップ先のサイズを管理する機能が含まれています。

p.186 の「古いリカバリポイントのクリーンアップ」を参照してください。

p.187 の「リカバリポイントセットの削除」を参照してください。

p.187 の「セット内のリカバリポイントの削除」を参照してください。

p.188 の「リカバリポイントのコピー」を参照してください。

バックアップ方式について

Symantec System Recovery には、2 つのバックアップ方式が提供されています。

ドライブベースのバックアップ このオプションは、ドライブ全体(たとえば、通常、C であるシステムドライブ)をバックアップする場合に使用します。任意のファイル、フォルダ、またはドライブ全体を復元できます。

p.184 の「ドライブベースのバックアップについて」を参照してください。

ファイルとフォルダのバックアップ このオプションは、選択したファイルやフォルダのみをバックアップする場合に使用します。任意のファイルまたはすべてのファイルをいつでも復元できます。

通常、このオプションではドライブベースのバックアップに比べて、必要なディスク容量は小さくなります。

p.185 の「ファイルおよびフォルダのバックアップについて」を参照してください。

p.77 の「ドライブベースのバックアップの定義について」を参照してください。

p.109 の「ファイルとフォルダのバックアップについて」を参照してください。

ドライブベースのバックアップについて

ドライブベースのバックアップを実行すると、すべての内容のスナップショットが作成され、コンピュータのハードディスクに保存されます。各スナップショットはリカバリポイントとしてコンピュータに格納されます。リカバリポイントは時点です。リカバリポイントを使用して、スナップショットが作成された時点の状態にコンピュータを復元できます。

リカバリポイントの種類は次のとおりです。

独立リカバリポイント(.v2i)	選択したドライブの完全な非依存型のコピーを作成します。通常、このバックアップの種類は、リカバリポイントセットに比べより多くのストレージ容量を必要とします。
リカバリポイントセット(.iv2i)	ベースリカバリポイントが含まれます。ベースリカバリポイントは、ドライブ全体の完全なコピーで、独立リカバリポイントに似ています。リカバリポイントセットには、リカバリポイントも含まれます。これらのリカバリポイントでは、ベースリカバリポイントの作成後に加えた変更のみがキャプチャされます。

ドライブベースのバックアップからファイルやフォルダをリカバリできますが、特定のファイルまたはフォルダのセットを指定してバックアップを行うことはできません。ハードドライブ全体がバックアップされます。

p.184 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

p.109 の「[ファイルとフォルダのバックアップについて](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップについて

選択した個人用ドキュメントおよびフォルダのセットを編集または作成し、それらのファイルおよびフォルダのバックアップを定義できます。たとえば、1つ以上のフォルダを取得するためにバックアップを定義したいことがあります。それらのフォルダの中に定期的に変更するファイルを含めます。追加のハードディスクリソースを使用してコンピュータ全体をバックアップする必要はないので、この種類のバックアップは便利です。

ファイルおよびフォルダのバックアップで、選択した個々のファイルまたはフォルダをバックアップできます。また、バックアップするファイルの種類を指定できます。それから **Symantec System Recovery** では指定した種類のすべてのファイルを検索し、バックアップできます。たとえば、コンピュータ上の複数の場所に保存されている **Microsoft Word** ドキュメントが存在するとします。**Symantec System Recovery** は、すべての **Word** ドキュメント(拡張子が **.doc** のファイル)を検索し、バックアップ対象にします。ファイルの種類のリストを編集して、使用しているソフトウェアに固有の種類をバックアップ対象にすることもできます。

また、**Symantec System Recovery** は同じファイルの複数のバージョンを保存します。つまりこの冗長性によって、復元したい変更内容を含むバージョンのファイルを復元できます。ディスク領域の使用を制御するため、保存するバージョンの数を制限することもできます。

p.184 の「[バックアップ方式について](#)」を参照してください。

p.77 の「[ドライブベースのバックアップの定義について](#)」を参照してください。

古いリカバリポイントのクリーンアップ

時間が経つと、不要なリカバリポイントが発生することがあります。たとえば、数か月前に作成されたリカバリポイントがあるが、最新の作業を含む新しいリカバリポイントがあるため、古いものが不要になる場合などです。

p.212の「[バックアップデータの管理の自動化](#)」を参照してください。

[クリーンアップ]機能を使用すると、最新のリカバリポイントセットを除くすべてのリカバリポイントを削除して、ハードディスクの空き領域を確保できます。

メモ: リカバリポイントを削除した後では、その時点のポイントからファイルまたはシステム修復にアクセスできなくなります。リカバリポイントを削除する前に、その内容を検索してください。

古いリカバリポイントをクリーンアップする方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [バックアップ先を管理]をクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - [リカバリポイントのクリーンアップ]ダイアログボックスで、削除するリカバリポイントを選択します。
 - [バックアップ先を管理]ウィンドウのツールバーで、[クリーンアップ]をクリックします。削除するリカバリポイントを選択します。

最新のリカバリポイントを削除することなく、安全に削除できるリカバリポイントセットが、自動的に選択されます。また、リカバリポイントセットを選択または選択解除して、削除するものを指定することもできます。

- 4 [削除]をクリックします。
- 5 [はい]をクリックして削除を確定します。
- 6 [OK]をクリックします。

p.179の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

p.187の「[リカバリポイントセットの削除](#)」を参照してください。

p.187の「[セット内のリカバリポイントの削除](#)」を参照してください。

p.188の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

リカバリポイントセットの削除

特定のリカバリポイントセットが不要になった場合は、いつでも削除できます。

メモ: リカバリポイントを削除した後では、その時点のポイントからファイルまたはシステム復元にアクセスできなくなります。

リカバリポイントセットを削除する方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
 - 2 [バックアップ先を管理]をクリックします。
 - 3 [リカバリポイントセット]表で、削除するリカバリポイントセットを選択します。
リカバリポイントセットには1つのリカバリポイントのみ関連付けられているものを選択してください。表には「1つのリカバリポイント」のように表示されます。
 - 4 [バックアップ先を管理]ウィンドウの[タスク]メニューで、[削除]をクリックします。
 - 5 [リカバリポイントセットの削除]ダイアログボックスで、[はい]をクリックして削除を確定します。
 - 6 [OK]をクリックします。
- p.186の「[古いリカバリポイントのクリーンアップ](#)」を参照してください。
- p.187の「[セット内のリカバリポイントの削除](#)」を参照してください。
- p.188の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。
- p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

セット内のリカバリポイントの削除

時間の経過とともに、リカバリポイントセットに複数のリカバリポイントが作成された場合があります。この場合は、それらのリカバリポイントを削除して保存領域を確保できます。

[リカバリポイントを削除]オプションを使用すると、セットの最初と最後のリカバリポイントの間に作成されたすべてのリカバリポイントを削除できます。

警告: 削除するリカバリポイントは注意して選択してください。誤ってデータを消失してしまう可能性があります。たとえば、新しいドキュメントを作成し、そのドキュメントがリカバリポイントセットの3番目のリカバリポイントで取得されたとします。その後、4番目のリカバリポイントで取得されたファイルを誤って削除したとします。この場合、3番目のリカバリポイントを削除すると、バックアップされたバージョンのファイルは永久に失われます。確認したい場合は、リカバリポイントを削除する前にその内容を検索してください。

p.179の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

セット内に残すリカバリポイントがわかっている場合は、削除するリカバリポイントを手動で選択できます。

p.186の「[古いリカバリポイントのクリーンアップ](#)」を参照してください。

セット内のリカバリポイントを削除する方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [バックアップ先を管理]をクリックします。
- 3 [リカバリポイントセット]表で、削除するリカバリポイントを含んでいるリカバリポイントセットを選択します。

リカバリポイントセットには複数のリカバリポイントが関連付けられているものを選択してください。たとえば、複数のリカバリポイントを含むリカバリポイントセットを選択した場合は、表に「4つのリカバリポイント」のように表示されます。

- 4 [バックアップ先を管理]ウィンドウの[タスク]メニューで、[削除]をクリックします。
- 5 次のいずれかを実行します。
 - セット内の最初と最後のリカバリポイントを除くすべてを自動的に削除するには、[自動]をクリックします。
 - セット内の削除するリカバリポイントを手動で選択するには、[手動]をクリックします。次に、削除するリカバリポイントを選択します。
 - 選択したセット内のすべてのリカバリポイントを削除するには、[セット内のすべてのリカバリポイントを削除]をクリックします。
- 6 [OK]をクリックします。

p.187の「[リカバリポイントセットの削除](#)」を参照してください。

p.188の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

リカバリポイントのコピー

セキュリティを強化するために、リカバリポイントを他の場所にコピーできます。たとえば、リカバリポイントを、別のハードディスク、ネットワーク上の別のコンピュータ、またはDVDやCDなどのリムーバブルメディアにコピーできます。その後、作成したコピーを安全な場所に保存できます。

リカバリポイントのアーカイブコピーを作成し、ディスク領域を解放することもできます。たとえば、リカバリポイントをCDやDVDにコピーしてから、元のリカバリポイントを手動で削除できます。リカバリポイントのコピーを検証して、そのコピーがディスク上に存在し、有効であることを確認してください。

リカバリポイントをコピーする方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
 - 2 [バックアップ先を管理]をクリックします。
 - 3 [リカバリポイントセット]表で、リカバリポイントセットを選択します。
 - 4 [バックアップ先を管理]ウィンドウの[タスク]メニューで、[コピー]をクリックします。
 - 5 [リカバリポイントのコピー]ダイアログボックスが表示されたら、コピーするセット内のリカバリポイントを選択します。それ以外の場合は次の手順にスキップします。
 - 6 [リカバリポイントのコピーウィザード]の[ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
 - 7 次のいずれかを実行します。
 - 手順5でリカバリポイントを選択すると、[ソース]パネルの[日付]テーブルに、コピーするリカバリポイントがすでにハイライト(選択)されています。[次へ]をクリックします。
 - [ソース]パネルで、コピーするリカバリポイントを選択します。
p.190の「[\[ソース\]のオプション](#)」を参照してください。
リカバリポイントセットが1つのリカバリポイントとして表示されます。リカバリポイントセットに含まれるすべての増分リカバリポイントを表示するには、[すべてのリカバリポイントを表示]を選択します。
 - 8 [次へ]をクリックします。
 - 9 [保存場所]パネルで、リカバリポイントをコピーするフォルダパスを指定して[次へ]をクリックします。
p.192の「[\[保存場所\]のオプション](#)」を参照してください。
 - 10 [オプション]パネルで、コピーしたリカバリポイントのオプションを設定し、[次へ]をクリックします。
p.192の「[\[リカバリポイントをコピー\]のオプション](#)」を参照してください。
 - 11 選択したオプションを確認し、[終了]をクリックします。
- リカバリポイントのコピーに成功した後は、コンピュータからリカバリポイントを削除できません。
- p.187の「[リカバリポイントセットの削除](#)」を参照してください。
- p.186の「[古いリカバリポイントのクリーンアップ](#)」を参照してください。
- p.187の「[セット内のリカバリポイントの削除](#)」を参照してください。
- p.177の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

[ソース]のオプション

次の表は[ソース]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[バックアップ先を管理]ウィンドウの[リカバリポイントのコピーウィザード]で利用可能です。

表 13-1 日付ごとにリカバリポイントをコピーする場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - 日付	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。
日付	ドロップダウンカレンダーを使用して代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。
すべてのリカバリポイントを表示	利用可能なすべてのリカバリポイントを表示できます。

表 13-2 ファイル名ごとにリカバリポイントをコピーする場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名	ファイル名ごとにリカバリポイントを表示できます。
ファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外部(USB)ドライブ上のリカバリポイント(.v2i)または増分リカバリポイント(.iv2i)ファイルを参照できます。または、ネットワーク上の場所やリムーバブルメディアを参照することもできます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するリカバリポイントのファイル名を指定する場合のユーザー名を指定します。 p.86の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

表 13-3 システムごとにリカバリポイントをコピーする場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - システム別	<p>リカバリポイントの保存場所にある現在のシステムインデックスファイルを使用できます。システムインデックスファイルには、コンピュータのすべてのドライブのリストと、関連付けられた選択可能なリカバリポイントが表示されます。</p> <p>システムインデックスファイルを使用することで、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。</p>
日付	<p>ドロップダウンカレンダーを使用して、システムインデックスファイルの代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。</p>
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する	<p>コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のリカバリポイントを復元します。</p> <p>ドライブ、ソースファイル(.v2iと.iv2iファイル)、日付のリストは最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。</p>
代替システムインデックス(.sv2i)ファイルを使用する	<p>別のコンピュータに存在するリカバリポイントを復元します。</p>
目的のシステムの.sv2iファイルを参照して選択	<p>ネットワーク上など、別の場所に存在するシステムインデックスファイル(.sv2i)へのパスを指定します。</p> <p>ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報の入力を求められます。</p> <p>p.86の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。</p>

オプション	説明
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
ドライブ	選択したシステムインデックスファイルに基づいて、復元するリカバリポイントを含んだドライブを選択できます。

p.188 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

[保存場所]のオプション

次の表は[保存場所]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[バックアップ先を管理]ウィンドウの[リカバリポイントのコピーウィザード]で利用可能です。

表 13-4 [保存場所]のオプション

オプション	説明
フォルダ	リカバリポイントのコピー先のパスを入力できます。
参照	リカバリポイントのコピー先のフォルダパスを参照できます。
編集	コピー先情報を編集できます。
ファイル名	名前を変更するファイル名を選択できます。
名前の変更	[ファイル名]テーブルで選択したファイルの名前を変更できます。

p.188 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

[リカバリポイントをコピー]のオプション

次の表は[オプション]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[バックアップ先を管理]ウィンドウの[リカバリポイントのコピーウィザード]で利用可能です。

表 13-5 [リカバリポイントをコピー]のオプション

オプション	説明
圧縮	<p>リカバリポイントの圧縮レベルとして、次のいずれかを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ なし ■ 標準 ■ 通常 ■ 通常以上 <p>p.96 の「リカバリポイントの圧縮レベル」を参照してください。</p> <p>圧縮率は、ドライブに保存されているファイルの種類によって異なります。</p>
作成後のリカバリポイントを検証	<p>リカバリポイント作成後に有効であるかどうかを検証します。</p>
システムファイルと一時ファイルを含める	<p>クライアントコンピュータでのリカバリポイントの作成またはコピー時に、オペレーティングシステムファイルと一時ファイルのインデックス付けをサポートします。</p>
高度な設定	<p>特に、リカバリポイントに対するセキュリティオプションを追加できます。</p> <p>p.193 の「[詳細オプション]」を参照してください。</p>
説明	<p>リカバリポイントの説明を示します。説明を任意に記述して、リカバリポイントの内容の識別に利用できます。</p>

p.188 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

[詳細オプション]

次の表は[詳細オプション]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[バックアップ先を管理]ウィンドウの[リカバリポイントのコピーウィザード]で利用可能です。

p.192 の「[\[リカバリポイントをコピー\]のオプション](#)」を参照してください。

表 13-6 ドライブベースのバックアップの高度なオプション

オプション	説明
リカバリポイントを複数ファイルに分割して圧縮保存	リカバリポイントを複数の小さいファイルに分割し、各ファイルの最大サイズ (MB) を指定できます。 たとえば、リカバリポイントをバックアップ先から ZIP ディスクにコピーする場合は、ZIP ディスクのサイズに従って最大ファイルサイズ 100 MB を指定します。
パスワードを使用する	リカバリポイントの作成時に、リカバリポイントにパスワードを設定します。パスワードには標準文字列を含めることができます。パスワードには、拡張文字列や記号を含めることができません。ASCII で文字コードの値が 128 以下になる文字を使用してください。 バックアップを復元するとき、またはリカバリポイントの内容を表示するときに、このパスワードの入力を求められます。
暗号化を使用	リカバリポイントデータを暗号化して、リカバリポイントをさらに強力に保護します。 次の暗号化レベルから選んでください： <ul style="list-style-type: none"> ■ 標準の 128 ビット (8 文字以上のパスワード) ■ 中程度の 192 ビット (16 文字以上のパスワード) ■ 高度な 256 ビット (32 文字以上のパスワード)

p.188 の「[リカバリポイントのコピー](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブの定義

リカバリポイントと増分リカバリポイントを VMware 仮想ディスクまたは Microsoft 仮想ディスクに変換するスケジュールを作成できます。リカバリポイントを直接 VMware ESX Server に変換することもできます。仮想ディスクは、テストや評価の目的において優れています。

ソフトウェア互換性リストでは、リカバリポイントから作成された仮想ディスクをサポートするプラットフォームのリストを確認できます。ソフトウェア互換性リストは次の URL で入手できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-17>

スケジュール設定された変換では、システムインデックスファイル (.sv2i) を使用してリカバリポイントが仮想ディスクに変換されます。.sv2i ファイルの使用により、複数のリカバリポイントを変換するために必要な時間が短縮されます。リカバリポイントが作成されると、.sv2i ファイルがそれと保存されます。.sv2i ファイルには、各リカバリポイントの元のドライブ場所を含む最新のリカバリポイントのリストが含まれます。

一度だけの仮想変換を作成することもできます。

p.203 の「[仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブを定義するには

- 1 [タスク]メニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 ツールバーで、[新しく定義]をクリックします。
- 3 作成する仮想ディスクの種類(適用可能な場合はバージョン)を選択し、[次へ]をクリックします。
- 4 [ソース]パネルで、変換するリカバリポイントを選択し、[次へ]をクリックします。

p.204 の「[\[ソース\]のオプション](#)」を参照してください。

- 5 [仮想ディスクの保存先]パネルで、すでに選択した仮想ディスク形式とバージョン(適用可能な場合)に基づきオプションを設定します。[次へ]をクリックします。

p.207 の「[\[仮想ディスクの保存先\]のオプション](#)」を参照してください。

- 6 [全般オプション]パネルで、変換オプションを設定し、[次へ]をクリックします。

p.209 の「[\[全般オプション\]のプロパティ](#)」を参照してください。

- 7 [変換時間]パネルで、変換ジョブのスケジュールを設定し、[次へ]をクリックします。

p.200 の「[\[変換時間\]のオプション](#)」を参照してください。

- 8 新しい変換ジョブをすぐに実行する場合は、[今すぐ変換を実行]をクリックします。
このオプションは、[変換時間]パネルで[一度だけ実行]オプションを選択した場合は使用できません。

- 9 [完了]をクリックします。

p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

[ソース]のオプション

次の表は[ソース]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[仮想変換定義ウィザード]から利用可能です。

表 13-7 システムごとにリカバリポイントを表示する場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用して変換を実行	コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のリカバリポイントを変換します。 ドライブ、ソースファイル(.v2iと.iv2iファイル)、日付のリストは最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。
別のコンピュータのリカバリポイントを使用して変換を実行	別のコンピュータに存在するリカバリポイントを変換します。
目的のシステムの.sv2iファイルを参照して選択	ネットワーク上など、別の場所に存在するシステムインデックスファイル(.sv2i)へのパスを指定します。 ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報の入力を求められます。 p.86の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
ドライブ	選択したシステムインデックスファイルに基づいて、変換するリカバリポイントを含んだドライブを選択できます。

p.194の「仮想変換ジョブの定義」を参照してください。

[仮想ディスクの保存先]のオプション

次の表は[仮想ディスクの保存先]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[仮想変換定義ウィザード]から利用可能です。

表 13-8 VMware 仮想ディスクまたは Microsoft 仮想ディスクに変換するための [仮想ディスクの保存先] のオプション

オプション	説明
仮想ディスクのフォルダ	仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力できます。
参照	仮想ディスクファイルを保存するフォルダを参照して検索できます。
ユーザー名	ネットワーク上の仮想ディスクのフォルダの場所を指定したら、ユーザー名を入力できます。 p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。
各ボリュームに 1 つの仮想ディスクを作成	ボリュームごとに 1 つの仮想ディスクファイルを作成します。 このオプションを選択しない場合、各ドライブは変換中にそれぞれのハードディスクドライブ文字の割り当てに対応付けされます。したがって、結果として 1 つの仮想ディスクファイル内に複数のドライブが存在することになります。 メモ: ボリュームが別のディスクに存在する場合、このオプションは利用できません。
名前の変更	表示された仮想ディスクファイルの名前を編集できます。

表 13-9 VMware ESX Server に変換するための [仮想ディスクの保存先] のオプション

オプション	説明
ESX Server 名または IP アドレス	サーバーの名前または IP アドレスを入力できません。
ユーザー名	ESX サーバーへの十分な権限を持つ有効な管理者のユーザー名を入力できます。
パスワード	ESX サーバーへの有効なパスワードを入力できます。
仮想ディスクの保存先	仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力できます。

オプション	説明
参照	仮想ディスクの保存場所を参照できます。
名前の変更	表示された仮想ディスクファイルの名前を編集できます。
次へ	VMware ESX Server の仮想ディスクの追加オプションを指定します。
変換用の一時的な場所	ファイルの一時的な場所として使用できる、サーバーの名前または IP アドレスを入力できます。
一時的な場所の資格情報	十分な権限を持つ有効な管理者のユーザー名とパスワードを入力できます。

p.194 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

[全般オプション]のプロパティ

次の表は[全般オプション]パネルのプロパティを記述したものです。このパネルは[仮想変換定義ウィザード]から利用可能です。

表 13-10 [全般オプション]のプロパティ

オプション	説明
変換ジョブ名	仮想変換ジョブの名前を入力するか、デフォルトの名前を使用することもできます。

オプション	説明
Windows Mini-Setup の実行	<p>修復後コンピュータを再起動するときに Windows Mini-Setup を実行します。</p> <p>一連のダイアログボックスへの応答のスクリプトを書くテキストベースの応答ファイルが修復中に作成されます。Mini-Setup ウィザードが起動すると、この応答が検索され、ウィザードが自動化されます。たとえば、応答ファイルでは、コンピュータのネットワークカードの設定と他のハードウェアやソフトウェアの設定を自動的に適用できます。</p> <p>Windows をセットアップする場合、60 分以上かかることがある Windows のインストールとは違って Mini-Setup は約 6 分かかりません。エンドユーザー使用許諾契約への同意、プロダクトキーの入力などの特定の情報は、応答ファイルを使う Mini-Setup によって自動的に適用されます。</p> <p>代わりに修復の時に次のいずれかの操作をする場合はこのオプションを選択解除します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ Mini-Setup ではなく Windows のインストールを実行する場合■ 修復時に Mini-Setup ウィザードによって変更される設定可能なオプションを変更しない場合。この場合、コンピュータが修復前の元の状態に確実に修復されます。 <p>Mini-Setup について詳しくは Microsoft 社のヘルプとサポート Web サイトで「Mini-Setup」の検索を実行してください。</p>
仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割	<p>仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割できます。</p> <p>たとえば、このオプションは、仮想ディスクが FAT32 ドライブに保存されている場合に使用します。または、2 GB を超えるファイルをサポートしていないその他のファイルシステムに保存されている場合にも使用します。または、仮想ディスクファイルを DVD にコピーしたいが、そのファイルサイズが DVD の容量よりも大きい場合に使用します。</p> <p>メモ: このオプションは VMware 専用です。[Microsoft 仮想ディスク] を変換形式として選択した場合は利用できません。</p>

p.194 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

[変換時間]のオプション

次の表は[変換時間]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[仮想変換定義ウィザード]から利用可能です。

表 13-11 週単位のスケジュールの[変換時間]のオプション

オプション	説明
自動的に最後のリカバリポイントを変換 - 毎週	週単位のスケジュールを使って仮想ディスクへ最新のリカバリポイントを変換します。
デフォルト	デフォルトの変換スケジュールを使います。
開始時刻	変換の開始時刻を選択できます。
日	変換を実行する曜日を選択できます。
1日に複数回実行	一日の間に複数回リカバリポイントを変換します。
変換の間隔	次の変換までの経過時間を選択できます。
回数	選択した開始時刻からの変換の実行回数を指定します。
詳細	選択した変換時間の情報を表示します。

表 13-12 月単位のスケジュールの[変換時間]のオプション

オプション	説明
自動的に最後のリカバリポイントを変換 - 毎月	月単位のスケジュールを使って仮想ディスクへ最新のリカバリポイントを変換します。
デフォルト	デフォルトの変換スケジュールを使用できます。
開始時刻	変換の開始時刻を選択できます。
日にち	変換を実行する毎月の日を選びます。
詳細	選択した変換時間の情報を表示します。

表 13-13 一度だけ実行のスケジュールの[変換時間]のオプション

オプション	説明
自動的に最後のリカバリポイントを変換-一度だけ実行	指定した日付と時刻に一度だけ変換が実行されます。

オプション	説明
日付	変換を実行する年月日を選択できます。
時刻	変換の開始時刻を選択できます。
詳細	選択した変換時間の情報を表示します。

p.194 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合

変換ジョブを作成した後、[今すぐ実行]を使って、仮想ディスク形式にオンデマンドのリカバリポイント変換を作成することができます。手動変換がただちに開始されます。

既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する方法

- 1 タスクメニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 すぐに実行する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 ツールバーで、[今すぐ実行]をクリックします。

p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブのプロパティの表示

選択した仮想変換のジョブの[プロパティ]を使って、設定、オプション、および割り当て済みのスケジュールの概略を確認することができます。

仮想変換ジョブのプロパティを表示する方法

- 1 タスクメニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 プロパティを表示する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 タスクメニューで、[プロパティ]を選択します。
- 4 [OK]をクリックします。

p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブの進行状況の表示

実行中の仮想変換の進行状況を表示して、変換ジョブが終了するまでの残り時間を確認できます。

仮想変換ジョブの進行状況を表示する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
 - 表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックします。
 - タスクメニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックし、表示メニューで[進行状況とパフォーマンス]をクリックしてください。

p.201の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.201の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.203の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブの編集

既存の変換ジョブのスケジュール部分を編集できます。またはジョブのすべての部分を編集できます。

仮想変換ジョブを編集する方法

- 1 タスクメニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 編集する変換ジョブの名前を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。

スケジュールを変更する方法

ツールバーで、[スケジュールを変更]をクリックします。

変換スケジュールを変更して、[OK]をクリックします。

ジョブの設定を変更する方法

ツールバーで、[設定を編集]をクリックします。

ウィザードの各ペインで必要な変更を行い、次に[終了]をクリックしてください。

p.201の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.201の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

仮想変換ジョブの削除

不要になり、使わなくなった仮想変換ジョブは削除できます。

仮想変換ジョブを削除しても、リカバリポイントや仮想ディスクは保存場所から削除されません。変換ジョブのみが削除されます。

仮想変換ジョブを削除する方法

- 1 タスクメニューで、[仮想変換の実行または管理]をクリックします。
- 2 削除する 1 つ以上の変換ジョブの名前を選択します。
- 3 ツールバーで、[削除]をクリックします。
- 4 [はい]をクリックして削除を確定します。

p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行

Symantec System Recovery を使用して、物理コンピュータのリカバリポイントを VMware 仮想ディスクに変換できます。リカバリポイントは、Microsoft 仮想ディスクまたは VMware ESX Server に変換することもできます。仮想ディスクは、テストや評価の目的において優れています。

ソフトウェア互換性リストでは、リカバリポイントから作成された仮想ディスクをサポートするプラットフォームのリストを確認できます。ソフトウェア互換性リストは次の URL で入手できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-17>

スケジュール設定された、仮想ディスクへのリカバリポイントの変換も作成できます。

p.194 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

仮想ディスクへのリカバリポイントのワンタイム変換を実行するには

- 1 [タスク]メニューで、[ワンタイム仮想変換]をクリックします。
- 2 作成する仮想ディスクの種類(適用可能な場合はバージョン)をクリックし、[次へ]をクリックします。

- 3 次のいずれかを実行します。
 - ペインの下部にある[すべてのリカバリポイントを表示]をクリックし、作成日に基づきリカバリポイントをリストから選択します。
 - [表示方法]リストで、リカバリポイントソースを選択します。
p.204 の「[ソース]のオプション」を参照してください。
- 4 [次へ]をクリックします。
- 5 選択した仮想ディスクの形式とバージョン(適用可能な場合)に基づき仮想ディスクの変換先オプションを設定し、[次へ]をクリックします。
p.207 の「[仮想ディスクの保存先]のオプション」を参照してください。
- 6 一般的な変換オプションを設定し、[次へ]をクリックします。
p.209 の「[全般オプション]のプロパティ」を参照してください。
- 7 選択内容の概略を確認します。
変更する必要がある場合は、[戻る]をクリックします。
- 8 [完了]をクリックします。
p.201 の「仮想変換ジョブのプロパティの表示」を参照してください。
p.202 の「仮想変換ジョブの進行状況の表示」を参照してください。
p.202 の「仮想変換ジョブの編集」を参照してください。
p.201 の「既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合」を参照してください。
p.203 の「仮想変換ジョブの削除」を参照してください。

[ソース]のオプション

次の表は[ソース]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[ワンタイム仮想変換ウィザード]から利用可能です。

p.203 の「仮想ディスクへの物理的なりかバリポイントのワンタイム変換の実行」を参照してください。

表 13-14 日付ごとにリカバリポイントを表示する場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - 日付別	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。
日付	ドロップダウンカレンダーを使用して代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。

オプション	説明
すべてのリカバリポイントを表示	利用可能なすべてのリカバリポイントを表示できます。

表 13-15 ファイル名ごとにリカバリポイントを表示する場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名別	ファイル名ごとにリカバリポイントを表示できます。
ファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外部 (USB) ドライブ 上のリカバリポイント (.v2i) または増分リカバリポイント (.iv2i) ファイルを参照できます。または、ネットワーク上の場所やリムーバブルメディアを参照することもできます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するリカバリポイントのファイル名を指定する場合のユーザー名を指定します。 p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

表 13-16 システムごとにリカバリポイントを表示する場合の[ソース]のオプション

オプション	説明
表示 - システム別	<p>リカバリポイントの保存場所にある現在のシステムインデックスファイルを使用できます。システムインデックスファイルには、コンピュータのすべてのドライブのリストと、関連付けられた選択可能なリカバリポイントが表示されます。</p> <p>システムインデックスファイルを使用することで、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。</p>
日付	<p>ドロップダウンカレンダーを使用して、システムインデックスファイルの代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。</p>
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用して変換を実行	<p>コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最近のリカバリポイントを変換します。</p> <p>ドライブ、ソースファイル(.v2i と .iv2i ファイル)、日付のリストは最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。</p>
別のコンピュータのリカバリポイントを使用して変換を実行	<p>別のコンピュータに存在するリカバリポイントを変換します。</p>
目的のシステムの .sv2i ファイルを参照して選択	<p>ネットワーク上など、別の場所に存在するシステムインデックスファイル(.sv2i)へのパスを指定します。</p> <p>ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報の入力を求められます。</p> <p>p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。</p>

オプション	説明
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
ドライブ	選択したシステムインデックスファイルに基づいて、変換するリカバリポイントを含んだドライブを選択できます。

- p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。
- p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。
- p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。
- p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。
- p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

[仮想ディスクの保存先]のオプション

次の表は[仮想ディスクの保存先]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[ワンタイム仮想変換ウィザード]から利用可能です。

p.203 の「[仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行](#)」を参照してください。

表 13-17 VMware 仮想ディスクまたは Microsoft 仮想ディスクに変換するための [仮想ディスクの保存先] のオプション

オプション	説明
仮想ディスクのフォルダ	仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを入力できます。
参照	仮想ディスクファイルを保存するフォルダを参照して検索できます。
ユーザー名	ネットワーク上の仮想ディスクのフォルダの場所を指定したら、ユーザー名を入力できます。 p.86 の「 ネットワーク資格情報について 」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

オプション	説明
各ボリュームに 1 つの仮想ディスクを作成	<p>ボリュームごとに 1 つの仮想ディスクファイルを作成できます。</p> <p>このオプションを選択しない場合、各ドライブは変換中にそれぞれのハードディスクドライブ文字の割り当てに対応付けされます。したがって、結果として 1 つの仮想ディスクファイル内に複数のドライブが存在することになります。</p> <p>メモ: ボリュームが別のディスクに存在する場合、このオプションは利用できません。</p>
名前の変更	表示された仮想ディスクファイルの名前を編集できます。

表 13-18 VMware ESX Server に変換するための[仮想ディスクの保存先]のオプション

オプション	説明
ESX Server 名または IP アドレス	サーバー名またはサーバーの IP アドレスを示します。
ユーザー名	ESX サーバーへの十分な権限を持つ有効な管理者のユーザー名を示します。
パスワード	ESX サーバーへの有効なパスワードを示します。
仮想ディスクの保存先	仮想ディスクファイルの保存先フォルダへのパスを示します。
参照	仮想ディスクの保存場所を参照できます。
名前の変更	表示された仮想ディスクファイルの名前を編集できます。
[次へ]	VMware ESX Server の仮想ディスクの一時的な場所のオプションを指定します。
変換用の一時的な場所	ファイルの一時的な場所として使用できる、サーバーの名前または IP アドレスを入力できます。
一時的な場所の資格情報	十分な権限を持つ有効な管理者のユーザー名とパスワードを入力できます。

p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。

p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。

p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

[全般オプション]のプロパティ

次の表は[全般オプション]パネルのプロパティを記述したものです。このパネルは[ワンタイム仮想変換ウィザード]から利用可能です。

p.203 の「[仮想ディスクへの物理的なりかバリポイントのワンタイム変換の実行](#)」を参照してください。

表 13-19 [全般オプション]のプロパティ

オプション	説明
Windows Mini-Setup の実行	<p>修復後コンピュータを再起動するときに Windows Mini-Setup を実行します。</p> <p>一連のダイアログボックスへの応答のスクリプトを書くテキストベースの応答ファイルが修復中に作成されます。Mini-Setup ウィザードが起動すると、この応答が検索され、ウィザードが自動化されます。たとえば、応答ファイルでは、コンピュータのネットワークカードの設定と他のハードウェアやソフトウェアの設定を自動的に適用できます。</p> <p>Windows をセットアップする場合、60分以上かかることがある Windows のインストールとは違って Mini-Setup は約 6 分かかりません。エンドユーザー使用許諾契約への同意、プロダクトキーの入力などの特定の情報は、応答ファイルを使う Mini-Setup によって自動的に適用されます。</p> <p>代わりに修復の時に次のいずれかの操作をする場合はこのオプションを選択解除します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Mini-Setup ではなく Windows のインストールを実行する場合 ■ 修復の時に Mini-Setup ウィザードによって変更される設定可能なオプションを変更しない場合。この場合、コンピュータが修復前の元の状態に確実に修復されます。 <p>Mini-Setup について詳しくは Microsoft 社のヘルプとサポート Web サイトで「Mini-Setup」の検索を実行してください。</p>

オプション	説明
仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割	仮想ディスクを 2 GB の複数の .vmdk ファイルに分割します。 たとえば、このオプションは、仮想ディスクが FAT32 ドライブに保存されている場合に使用します。または、2 GB を超えるファイルをサポートしていないその他のファイルシステムに保存されている場合にも使用します。または、仮想ディスクファイルを DVD にコピーしたいが、そのファイルサイズが DVD の容量よりも大きい場合に使用しません。 メモ: このオプションは VMware 専用です。 [Microsoft 仮想ディスク] を変換形式として選択した場合は利用できません。

- p.201 の「[仮想変換ジョブのプロパティの表示](#)」を参照してください。
- p.202 の「[仮想変換ジョブの進行状況の表示](#)」を参照してください。
- p.202 の「[仮想変換ジョブの編集](#)」を参照してください。
- p.201 の「[既存の仮想変換ジョブをすぐに実行する場合](#)」を参照してください。
- p.203 の「[仮想変換ジョブの削除](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について

ドライブベースのバックアップではハードディスクドライブ全体が取得されます。したがってリカバリポイントのサイズは、ファイルおよびフォルダのバックアップ中に取得されるデータよりも通常かなり大きくなります。ただし、ファイルおよびフォルダのバックアップの場合も、データを管理しないと多くのディスク領域が占有される可能性があります。たとえば、音声ファイル、ビデオファイル、写真は、通常、大きいファイルです。

保存するバックアップファイルのバージョンの数を決定する必要があります。ファイルの内容を変更する頻度とバックアップを実行する頻度によって、バージョンの数を決定できません。

- p.211 の「[保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータの表示](#)」を参照してください。
- p.211 の「[保存するファイルのバージョン数を制限する](#)」を参照してください。
- p.211 の「[ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動によるファイルの削除](#)」を参照してください。

p.212 の「[ファイルまたはフォルダのバージョンの確認](#)」を参照してください。

保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータの表示

まず、現在保存しているファイルおよびフォルダのバックアップデータの総量を表示します。

保存されているファイルおよびフォルダのバックアップデータを表示する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 他のバックアップ先を選択するには、[ドライブ]リストから、バックアップ先として使用するドライブを選択します。
- 3 [バックアップ先を管理]ウィンドウの下部で、[ファイルとフォルダの保存に使用される領域]フィールドを参照し、現在使用されている保存領域を確認します。

p.210 の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

保存するファイルのバージョン数を制限する

保存するバックアップファイルのバージョン数を制限して、ファイルおよびフォルダのバックアップデータを管理できます。このような保守を行うことで、特にファイルサイズが大きい場合に、必要なディスク領域を大幅に減らすことができます。

保存するファイルのバージョン数を制限する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [設定]をクリックします。
- 3 [ファイルとフォルダのバックアップのファイルバージョンを制限]を選択し、1 から 99 までの数値を入力します。
- 4 また[バックアップ保存領域のディスク使用率を監視]を選択できます。使用されるディスク領域の総量を指定できます。

p.212 の「[バックアップデータの管理の自動化](#)」を参照してください。

- 5 [OK]をクリックします。

p.210 の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップからの手動によるファイルの削除

バックアップ先に保存されているファイルを手動で削除できます。

ファイルおよびフォルダのバックアップから手動でファイルを削除する方法

- 1 タスクメニューで、[ファイルを修復]をクリックします。
- 2 次のいずれかを実行します。
 - [修復するファイルを検索]フィールドに、削除するファイルの名前を入力し、[検索]をクリックします。
 - ファイルの名前がわからない場合は、[検索]をクリックし、次にファイルを参照してください。
- 3 [すべてのバージョンを表示]をクリックし、ファイルおよびフォルダのバックアップデータに存在するファイルのすべてのバージョンを表示します。
- 4 削除するファイルを1つ以上選択します。
- 5 右クリックして、[削除]を選択します。

p.210の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

ファイルまたはフォルダのバージョンの確認

[Windows エクスプローラ]を使用して、ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれる利用可能なバージョンの情報を表示できます。

保存する各ファイルとフォルダのバージョン数を制限できます。

p.211の「[保存するファイルのバージョン数を制限する](#)」を参照してください。

ファイルまたはフォルダのバージョンを確認する方法

- 1 [Windows エクスプローラ]を開きます。
- 2 ファイルおよびフォルダのバックアップに含まれるファイルを選択します。
- 3 ファイルを右クリックして、[バージョンを表示]を選択します。

p.210の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

バックアップデータの管理の自動化

Symantec System Recovery は、バックアップの保存領域を監視し、保存領域の空き容量がなくなると通知を行います。また、しきい値を超えた場合、古いリカバリポイントおよび古いバージョンのファイルを、ファイルおよびフォルダのバックアップから自動的に削除できます。しきい値を指定しない場合は、ディスクの全容量の 90% に達すると Symantec System Recovery から通知されます。

バックアップデータの管理を自動化する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [ファイルとフォルダのバックアップのファイルバージョンを制限]を選択し、1から99までの数値を入力します。
- 3 [バックアップ保存領域のディスク使用率を監視]を選択します。スライダをドラッグし、バックアップデータに使用されるディスク領域の総量を制限します。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - 容量を超過したときに通知するだけで、その他の操作は不要な場合、[バックアップの保存領域がしきい値を超過したら警告する]を選択します。
 - 通知せずに、Symantec System Recovery でバックアップデータを自動的に管理する場合、[保存場所を自動的に最適化]を選択します。
Symantec System Recovery は、古いリカバリポイントを自動的に削除し、設定したしきい値にファイルのバージョン数を制限します。
- 5 次にバックアップを実行するまで変更を反映しない場合、[次のバックアップまで変更を遅延]を選択します。
- 6 [OK]をクリックします。

p.210の「ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について」を参照してください。

バックアップ先の移動

リカバリポイントのバックアップ先を変更し、既存のリカバリポイントを新しい場所に移動できます。たとえば、バックアップデータの保存用に外付けハードディスクドライブを取り付けるとします。この場合、1つ以上のバックアップのバックアップ先を、新しいドライブに変更できます。

新しい場所を選択するとき、既存のリカバリポイントを新しいバックアップ先に移動することもできます。これ以降、選択したバックアップの保存に使用されるリカバリポイントは、新しい場所に作成されます。

メモ: バックアップ先を新しい内蔵または外付けハードディスクドライブに移動できます。作業を進める前に、ドライブが正しく取り付けられていることまたは接続されていることを確認してください。

バックアップ先を移動する方法

- 1 タスクメニューで、[バックアップ先を管理]をクリックします。
- 2 [バックアップ先を管理]ウィンドウの[ドライブ]リストから、移動するバックアップ先を含むドライブを選択します。

- 3 [移動]をクリックします。
 - 4 [バックアップ先の移動]ダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
 - [新しいバックアップ先]フィールドに、新しいバックアップ先へのパスを入力します。
 - [参照]をクリックして、新しいバックアップ先を選択し、[OK]をクリックします。
 - 5 定義されているバックアップのうち、新しいバックアップ先を使用するものを選択します。

定義されているバックアップのうち、移動しないバックアップの選択を解除します。
 - 6 このバックアップ先を、今後新しく定義するバックアップのデフォルトのバックアップ先として使用する場合、[デフォルトのバックアップ先として保存]を選択します。
 - 7 [OK]をクリックします。
 - 8 既存のリカバリポイントを新しいバックアップ先に移動するには、[リカバリポイントを移動]を選択します。
 - [各バックアップの最後のリカバリポイントを移動し、それ以外を削除]を選択します。
 - [すべてのリカバリポイントを新しい保存先に移動]を選択します。
 - 9 ファイルおよびフォルダのバックアップデータを新しいバックアップ先に移動する場合、[ファイルのバックアップデータを移動]をクリックします。

元のバックアップ先にファイルおよびフォルダのバックアップデータがない場合、[ファイルのバックアップデータを移動]オプションは選択できません。
 - 10 [OK]をクリックします。
- p.210の「[ファイルおよびフォルダのバックアップデータの管理について](#)」を参照してください。

ファイル、フォルダ、ドライブ 全体のリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

- 消失したデータの修復について
- ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダの修復
- リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復
- リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く
- 必要なファイルまたはフォルダの検索について
- セカンダリドライブの修復
- ドライブの修復のカスタマイズ
- LightsOut Restore による離れた場所からのコンピュータの復元について

消失したデータの修復について

Symantec System Recovery は、リカバリポイントまたはファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用して、消失したファイル、フォルダ、ドライブ全体を復元できます。

消失したファイルおよびフォルダを修復するには、リカバリポイントまたはファイルおよびフォルダのバックアップデータが必要です。ドライブ全体を修復するには、リカバリポイントが必要です。消失したファイルまたはフォルダに最近行われた変更を修復できます。ただし、消失したファイルまたはフォルダに変更が行われた時期のバックアップデータが必要になります。

p.216の「ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダの修復」を参照してください。

p.217 の「[リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用した ファイルとフォルダの修復

ファイルおよびフォルダのバックアップを定義してあれば、ファイルを修復する必要がある場合に、最近のファイルおよびフォルダのバックアップを使用してファイルを修復できます。

Symantec System Recovery には、修復するファイルを検索できる検索ツールがあります。

p.215 の「[消失したデータの修復について](#)」を参照してください。

ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用してファイルとフォルダを修復する方法

- 1 タスクメニューで、[ファイルを修復]をクリックします。
- 2 [ファイルを修復]ダイアログボックスの左ペインで、検索方法として[ファイルやフォルダ]を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - [修復するファイルを検索]検索ボックスに、復元するファイルまたはフォルダの名前のすべてまたは一部を入力します。[検索]をクリックします。
たとえば、**recipe**と入力します。名前に **recipe** という語を含むファイルまたはフォルダ (**Chocolate Cheesecake Recipes.doc**、**Cathy Read Recipes.xls**、**Recipes for Success.mp3** など) が見つかります。
 - [高度な検索]をクリックし、検索条件を入力します。次に、[検索]をクリックします。
標準の検索テキストボックスに戻るには、[基本検索]をクリックします。
- 4 検索結果のリストボックスで、復元するファイルを選択します。
- 5 [ファイルを修復]をクリックします。
- 6 [ファイルを修復]ダイアログボックスで、次のいずれかを実行します。
 - バックアップ時にファイルが保存されていた元のフォルダにファイルを復元する場合は、[元のフォルダ]をクリックします。
フォルダ内のファイルを上書きする場合は、[既存ファイルの上書き]を選択します。このオプションを選択しない場合は、ファイル名に番号が追加されます。既存のファイルは変更されません。

注意: [既存ファイルの上書き] オプションを指定すると、現在のファイルは復元したファイルに置き換えられます。または、指定した場所に保存されている同じ名前のファイルが、復元したファイルに置き換えられます。

- **Windows** デスクトップに作成される[修復されたファイル]フォルダにファイルを復元する場合は、[デスクトップの[修復されたファイル]フォルダ]をクリックします。
このフォルダは、復元中に **Symantec System Recovery** によって作成されます。
 - [代替フォルダ]をクリックし、ファイルを復元する場所へのパスを入力します。
- 7 [修復]をクリックします。
 - 8 既存のファイルを置き換えることを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。修復するファイルが修復したいファイルであることを確認してください。
 - 9 [OK]をクリックします。
- p.217 の「[リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復](#)」を参照してください。

リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復

ドライブベースのバックアップを定義して実行している場合、リカバリポイントを使用してファイルやフォルダを復元できます。

p.215 の「[消失したデータの修復について](#)」を参照してください。

リカバリポイントを使用してファイルとフォルダを修復する方法

- 1 タスクメニューで、[ファイルを修復]をクリックします。
- 2 [ファイルを修復]ダイアログボックスの左ペインで、検索方法として[リカバリポイント]を選択します。
- 3 [リカバリポイント]ダイアログボックスで選択されているものとは別のリカバリポイントを使用する場合は、[変更]をクリックします。使用するリカバリポイントを探して、[OK]をクリックします。

p.218 の「[\[リカバリポイントを選択\]のオプション](#)」を参照してください。

メモ: **Symantec System Recovery** によってリカバリポイントが検出されない場合は、[リカバリポイントを選択]ダイアログボックスが自動的に表示されます。

- 4 [修復するファイルを検索]フィールドに、復元するファイルまたはフォルダの名前のすべてまたは一部を入力し、[検索]をクリックします。
たとえば、**recipe**と入力します。名前に **recipe** という語を含むファイルまたはフォルダ (**Chocolate Cheesecake Recipes.doc**、**Cathy Read Recipes.xls**、**Recipes for Success.mp3** など)が見つかります。
- 5 [名前]の表で、復元するファイルを選択します。
- 6 [ファイルを修復]をクリックします。
- 7 [ファイルを修復]ダイアログボックスで、必要なオプションを選択します。
p.220 の「[ファイルを修復]のオプション」を参照してください。
- 8 [修復]をクリックします。
- 9 既存のファイルを置き換えることを確認するメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。修復するファイルが修復したいファイルであることを確認してください。
- 10 [OK]をクリックします。

p.216の「ファイルおよびフォルダのバックアップデータを使用したファイルとフォルダの修復」を参照してください。

[リカバリポイントを選択]のオプション

次の表は[リカバリポイントを選択]ダイアログボックスのオプションを記述したものです。このダイアログボックスは[ファイルを修復]ダイアログボックスから利用可能です。

表 14-1 日付ごとにリカバリポイントを表示する場合の[リカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - 日付	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。
日付	ドロップダウンカレンダーを使用して代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。
すべてのリカバリポイントを表示	利用可能なすべてのリカバリポイントを表示できます。

表 14-2 ファイル名ごとにリカバリポイントを表示する場合の[リカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名	ファイル名ごとにリカバリポイントを表示できます。
ファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外部 (USB) ドライブ上のリカバリポイント (.v2i) または増分リカバリポイント (.iv2i) ファイルを参照できます。または、ネットワーク上の場所やリムーバブルメディアを参照することもできます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するリカバリポイントのファイル名を指定する場合のユーザー名を指定します。 p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

表 14-3 システムごとにリカバリポイントを表示する場合の[リカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - システム	リカバリポイントの保存場所にある現在のシステムインデックスファイルを使います。システムインデックスファイルには、コンピュータのすべてのドライブのリストと、関連付けられた選択可能なリカバリポイントが表示されます。 システムインデックスファイルを使用することで、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。

オプション	説明
日付	ドロップダウンカレンダーを使用して、システムインデックスファイルの代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する	コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のリカバリポイントを復元します。 ドライブ、ソースファイル(.v2iと.iv2iファイル)、日付のリストは最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。
代替システムインデックス(.sv2i)ファイルを使用する	別のコンピュータに存在するリカバリポイントを復元します。
目的のシステムの.sv2iファイルを参照して選択	ネットワーク上など、別の場所に存在するシステムインデックスファイル(.sv2i)へのパスを指定します。 ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報の入力を求められます。 p.86の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
ドライブ	選択したシステムインデックスファイルに基づいて、復元するリカバリポイントを含んだドライブを選択できます。

p.217の「リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復」を参照してください。

[ファイルを修復]のオプション

次の表は[ファイルを修復]ダイアログボックスのオプションを記述したものです。このダイアログボックスは[ファイルを修復]ダイアログボックスから利用可能です。

表 14-4 [ファイルを修復]のオプション

オプション	説明
元のフォルダ	バックアップしたときに存在していた元のフォルダにファイルを修復します。
デスクトップの新しいフォルダ (修復されたファイル)	Windows デスクトップに作成される [修復されたファイル] という新しいフォルダにファイルを修復します。
代替フォルダ	復元するファイルを保存する別の場所へのパスを指定します。

p.217 の「[リカバリポイントを使用したファイルやフォルダの修復](#)」を参照してください。

リカバリポイントに保存されたファイルやフォルダを開く

復元するファイルが不明な場合は、[Recovery Point Browser]を使用してファイルを検索し、開いて内容を確認できます。その保存場所から、[Recovery Point Browser]でファイルやフォルダを復元することもできます。

p.179 の「[リカバリポイント内のファイルの表示および復元](#)」を参照してください。

必要なファイルまたはフォルダの検索について

リカバリポイントを参照しても復元するファイルまたはフォルダが見つからない場合は、[エクスプローラ]機能を使用できます。この機能は、リカバリポイントが作業ドライブであるかのようにドライブ文字の割り当て(リカバリポイントのマウント)を行います。次に、[Windows エクスプローラ]の検索機能を使用して、ファイルを検索できます。ファイルをドラッグアンドドロップして復元することもできます。

p.177 の「[リカバリポイントの検索について](#)」を参照してください。

セカンダリドライブの修復

セカンダリドライブ上のデータが失われた場合、そのドライブに対応する既存のリカバリポイントを使用して、データを復元できます。セカンダリドライブとは、オペレーティングシステムがインストールされているドライブ以外のドライブです。

メモ: システムドライブ (通常は C ドライブ) を修復することもできます。

たとえば、コンピュータの D ドライブにあるデータが失われるとします。データが失われたときよりも前の状態に D ドライブを復元できます。

p.237 の「[コンピュータの修復について](#)」を参照してください。

ドライブを修復するには、修復するドライブが含まれるリカバリポイントが必要です。不明な場合は、[状態] ページで、利用できるリカバリポイントを確認します。

p.154 の「[\[状態\] ページのアイコンについて](#)」を参照してください。

メモ: 作業を進める前に、復元するドライブ上で開いているすべてのアプリケーションとファイルを閉じてください。

警告: ドライブを修復すると、ドライブ上のすべてのデータが、リカバリポイント内のデータに置き換えられます。ドライブ上でデータを変更している場合、ドライブの修復に使用するリカバリポイントの作成以降に行った変更は、すべて失われます。たとえば、リカバリポイントの作成後にドライブ上に新しいファイルを作成した場合、そのファイルは修復されません。

セカンダリドライブを修復する方法

- 1 タスクメニューで、[コンピュータを修復] をクリックします。
- 2 リカバリポイントの選択。
p.222 の「[\[コンピュータを修復\] のオプション](#)」を参照してください。
- 3 [今すぐ修復] をクリックします。
- 4 [OK] をクリックします。
- 5 [はい] をクリックします。

p.225 の「[ドライブの修復のカスタマイズ](#)」を参照してください。

[コンピュータを修復] のオプション

次の表は[コンピュータを修復] ダイアログボックスのオプションを記述したものです。

表 14-5 日付ごとにリカバリポイントを表示する場合の[コンピュータを修復] のオプション

オプション	説明
表示 - 日付	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。
日付	ドロップダウンカレンダーを使用して代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。

オプション	説明
すべてのリカバリポイントを表示	利用可能なすべてのリカバリポイントを表示できます。

表 14-6 ファイル名ごとにリカバリポイントを表示する場合の[コンピュータを修復]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名	ファイル名ごとにリカバリポイントを表示します。
ファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できません。 たとえば、外部 (USB) ドライブ上のリカバリポイント (.v2i) または増分リカバリポイント (.iv2i) ファイルを参照できます。または、ネットワーク上の場所やリムーバブルメディアを参照することもできます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するリカバリポイントのファイル名を指定する場合のユーザー名を指定します。 p.86 の「 ネットワーク資格情報について 」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

表 14-7 システムごとにリカバリポイントを表示する場合の[コンピュータを修復]のオプション

オプション	説明
表示 - システム	<p>リカバリポイントの保存場所にある現在のシステムインデックスファイルを使います。システムインデックスファイルには、コンピュータのすべてのドライブのリストと、関連付けられた選択可能なリカバリポイントが表示されます。</p> <p>システムインデックスファイルを使用することで、複数のリカバリポイントを変換するのにかかる時間が短縮されます。システムインデックスファイルは、リカバリポイントと同時に作成されます。システムインデックスファイルには、最新のリカバリポイントのリストがバックアップ元のボリュームの情報とともに保存され、このリストには各リカバリポイントに含まれるドライブの元の場所が含まれています。</p>
日付	<p>ドロップダウンカレンダーを使用して、システムインデックスファイルの代替の日付を選択できます。リカバリポイントがテーブルで検出および表示されない場合は、カレンダーを使用します。</p>
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する	<p>コンピュータのリカバリポイントの保存場所にある最新のリカバリポイントを復元します。</p> <p>ドライブ、ソースファイル(.v2iと.iv2iファイル)、日付のリストは最新のシステムインデックスファイル(.sv2i)に基づいています。</p>
代替システムインデックス(.sv2i)ファイルを使用する	<p>別のコンピュータに存在するリカバリポイントを復元します。</p>
目的のシステムの.sv2iファイルを参照して選択	<p>ネットワーク上など、別の場所に存在するシステムインデックスファイル(.sv2i)へのパスを指定します。</p> <p>ネットワーク上に保存されているシステムインデックスファイルを選択した場合は、ネットワーク資格情報の入力を求められます。</p> <p>p.86 の「ネットワーク資格情報について」を参照してください。</p>

オプション	説明
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
ドライブ	選択したシステムインデックスファイルに基づいて、復元するリカバリポイントを含んだドライブを選択できます。

p.221 の「[セカンダリドライブの修復](#)」を参照してください。

p.225 の「[ドライブの修復のカスタマイズ](#)」を参照してください。

ドライブの修復のカスタマイズ

ドライブの修復をカスタマイズするための各種のオプションを設定できます。

ドライブの修復をカスタマイズする方法

- 1 [タスク]メニューで、[コンピュータを修復]をクリックします。
- 2 リカバリポイントを選択し、[今すぐ修復]をクリックします。
- 3 [コンピュータを修復]ダイアログボックスで、[カスタム]をクリックして[ドライブの修復ウィザード]を開始します。
- 4 ウィザードの[ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 5 [復元するリカバリポイント]パネルで、必要なオプションを設定します。

p.226 の「[\[復元するリカバリポイント\]のオプション](#)」を参照してください。

- 6 [ターゲットドライブ]パネルで、復元する 1 つ以上のドライブ選択してから[次へ]をクリックします。

リカバリポイントを復元するのに利用可能な十分な領域がドライブにない場合は、**Shift**キーを押します。同じハードディスク上に存在する複数の連続した復元先を選択します。

- 7 リカバリポイントがパスワード保護されている場合は、[パスワード]ダイアログボックスにパスワードを入力し、[OK]をクリックします。
- 8 [修復オプション]パネルで、必要な修復オプションを選択します。

p.227 の「[修復オプション](#)」を参照してください。

利用可能なオプションは、選択した復元先によって異なります。

- 9 [次へ]をクリックして、選択内容を確認します。
- 10 [終了]をクリックし、そして[はい]をクリックしてください。

ウィザードが **Windows** で修復を行うためにドライブをロックできない場合があります (通常は、プログラムがドライブを使用中であるため)。このような場合、ドライブが使用されないようにします。たとえば、使用中の可能性のあるファイルやアプリケーションを閉じてから[再試行]をクリックします。

[再試行]オプションが失敗した場合、ドライブの強制的なロックが試行されるように、[無視]をクリックします。[無視]オプションが失敗した場合、メッセージに従って **Symantec System Recovery Disk** を挿入します。その後、修復を続行するために、手動で修復環境を起動する必要があります。修復が完了すると、コンピュータは自動的に再起動します。

p.221 の「[セカンダリドライブの修復](#)」を参照してください。

[復元するリカバリポイント]のオプション

次の表は[復元するリカバリポイント]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは[ドライブの修復ウィザード]から利用可能です。

表 14-8 [復元するリカバリポイント]のオプション

オプション	説明
リカバリポイントファイル名	ドライブの修復に使うリカバリポイントを指定します。 このフィールドにすでに追加されているリカバリポイントを使ったり、別のリカバリポイントを参照したりできます。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外部 (USB) ドライブ上のリカバリポイント (.v2i) または増分リカバリポイント (.iv2i) ファイルを参照できます。または、ネットワーク上の場所やリムーバブルメディアを参照することもできます。
ユーザー名	ネットワークパスに存在するリカバリポイントのファイル名を指定する場合のユーザー名を指定します。 p.86 の「 ネットワーク資格情報について 」を参照してください。
パスワード	ネットワークパスにパスワードを指定します。

p.225 の「[ドライブの修復のカスタマイズ](#)」を参照してください。

修復オプション

次の表に[修復オプション]パネルのオプションを示します。このパネルは[ドライブの修復ウィザード]から利用可能です。

表 14-9 修復オプション

オプション	説明
復元前にリカバリポイントを検証	復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。 このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に伸びます。
ファイルシステムのエラーを確認	リカバリポイントの復元後に、復元したドライブにエラーがないかどうかをチェックします。
復元されたドライブのサイズを変更	ターゲットドライブの空き領域のサイズに合わせてドライブを自動的に拡大します。
ドライブをアクティブ (OS ブート用) に設定	復元したドライブをアクティブパーティション (コンピュータの起動ドライブなど) に設定します。 オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元する場合は、このオプションが適切です。
元のディスク署名を復元	ハードディスクドライブの物理ディスク署名を復元します。 ディスク署名は、Symantec System Recovery がサポートするすべての Windows オペレーティングシステムで用いられています。ディスク署名は、ハードディスクドライブの使用に必要です。 次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ コンピュータのドライブ文字が非定型である (C、D、E など以外の文字が割り当てられている場合)。 ■ リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元する。
基本パーティション	ハードディスクの基本パーティションは最大 4 つに制限されているため、ドライブ内のパーティションが 4 つ以下である場合に、このオプションが適切です。

オプション	説明
論理パーティション	このオプションは4つ以上のパーティションが必要な場合に適切です。ハードディスクには、最大容量を超えない範囲で、最大3つの基本パーティションに加えて任意の数の論理パーティションが作成できます。
ドライブ文字	パーティションにドライブ文字を割り当てます。

p.225 の「[ドライブの修復のカスタマイズ](#)」を参照してください。

LightsOut Restore による離れた場所からのコンピュータの復元について

Symantec System Recovery LightsOut Restore を使用すると、管理者は離れた場所からコンピュータを復元できます。ファイルシステムが正常に動作している場合は、コンピュータの現在の状態に関係なく、この機能を利用できます。

たとえば、バハマでの休暇中にバンクーバーのネットワーク上にあるコンピュータが停止したとします。サーバーのリモート接続機能を使って、離れた場所からコンピュータに接続できます。リモートで Symantec System Recovery Disk にアクセスすれば、修復環境でコンピュータを起動できます。その後、Symantec System Recovery Disk を使用してファイルまたはシステムパーティション全体を復元できます。

LightsOut Restore では、カスタムバージョンの Symantec System Recovery Disk が、システムパーティション上のファイルシステムに直接インストールされます。その後、Symantec System Recovery Disk のブートオプションが [Windows ブート] メニューに追加されます。ブートメニューオプションを選択すると、コンピュータは Symantec System Recovery Disk を直接起動します。システムパーティションにインストールされているファイルを使います。

LightsOut Restore は Symantec pcAnywhere のテクノロジーを利用します。また、LightsOut Restore は Windows ブートメニュー、RILO や DRAC などのハードウェアデバイスを利用します。これらの機能が組み合わさることで、管理者は起動プロセス中にシステムを離れた場所から制御できます。

カスタム Symantec System Recovery Disk が LightsOut Restore によりブートすると、pcAnywhere Thin Host を自動的に起動させることができます。その後、Symantec pcAnywhere を使用して、離れた場所から Thin Host に接続できます。

LightsOut Restore を設定し、ブートメニューオプションを追加したら、ハードウェアデバイスを使って離れた場所からシステムに接続できます。システムに接続したら、電源を入れるかまたはシステムを再起動して、Symantec System Recovery Disk を再起動できます。

メモ: Microsoft BitLocker を使用してドライブのデータのセキュリティを保護している場合は、LightsOut Restore は BitLocker によって暗号化されたドライブ上では機能しません。そのため、システムドライブに「BitLock」を設定すると、LightsOut Restore を使用してそのドライブを修復することができません。

p.229 の「[LightsOut Restore のセットアップと使用について](#)」を参照してください。

p.230 の「[LightsOut Restore の設定](#)」を参照してください。

LightsOut Restore のセットアップと使用について

LightsOut Restore をセットアップする前に、次の情報を見直します。

メモ: Microsoft BitLocker ドライブ暗号化を使用してドライブのデータを暗号化する場合、LightsOut Restore は暗号化されたドライブ上では機能しません。ドライブで LightsOut Restore を使用するには、その前に BitLocker を無効にして、ドライブを解読する必要があります。

- ライセンスがある正規版の Symantec pcAnywhere を、管理に使うコンピュータ（ヘルプデスクのコンピュータなど）にインストールします。
- すべてのサーバーが、RILO や DRAC などのハードウェアデバイスを通じて離れた場所から管理できることを確認します。
- 保護する必要があるサーバーに Symantec System Recovery をインストールし、バックアップを定義および実行してリカバリポイントを作成します。
- [LightsOut Restore のセットアップ]ウィザードを実行して、カスタム Symantec System Recovery Disk をコンピュータのローカルファイルシステムに直接インストールします。[Windows ブート]メニューに、Symantec System Recovery Disk を起動するための項目が追加されます。

メモ: LightsOut Restore は 1 つのオペレーティングシステムでのみ機能します。マルチブートコンピュータ（同じパーティションから複数のオペレーティングシステムを起動するコンピュータなど）では機能しません。LightsOut Restore は、ブートメニューからのみアクセスできます。ファイルシステムが破損してブートメニューにアクセスできない場合、Symantec System Recovery Disk からコンピュータを起動する必要があります。

メモ: LightsOut Restore 機能を実行するには、少なくとも 1 GB のメモリが必要です。

- RILO または DRAC のデバイスを使ってリモートサーバーに接続すれば、離れた場所からファイルやシステムを修復できます。その後、システムの電源を入れたり、または再起動したりできます。
- リモートサーバーの起動時にブートメニューを開き、Symantec System Recovery Disk に指定した名前を選択します。
リモートサーバーで Symantec System Recovery Disk がブートし、RILO または DRAC による接続は切断されます。[LightsOut Restore のセットアップ]ウィザードで設定すれば、pcAnywhere Thin Host が自動的に起動されます。
- Symantec pcAnywhere を使って、リモートサーバーで待機中の pcAnywhere Thin Host に接続します。
- Symantec System Recovery Disk を使って、pcAnywhere から個々のファイル、またはドライブ全体を復元します。

p.230 の「[LightsOut Restore の設定](#)」を参照してください。

LightsOut Restore の設定

保護するコンピュータ上で、LightsOut Restore ウィザードを実行する必要があります。[LightsOut Restore のセットアップ]ウィザードによって、カスタマイズされたバージョンの Symantec System Recovery Disk をコンピュータのローカルファイルシステムにインストールします。[Windows ブート]メニューに、LightsOut Restore を起動するための項目が追加されます。

設定を編集する必要がある場合は[LightsOut Restore のセットアップ]ウィザードを再び実行できます。また、既存のカスタマイズされた Symantec System Recovery Disk を再構築する必要がある場合は、ウィザードを再び実行してください。

LightsOut Restore を設定する方法

- 1 Symantec System Recovery Disk をメディアドライブに挿入します。
- 2 Symantec System Recovery を起動します。
- 3 タスクメニューで、[LightsOut Restore のセットアップ]をクリックし、[次へ]をクリックしてください。
- 4 [ソースの場所]パネルで、Symantec System Recovery Disk を配置したメディアドライブへのパスを指定するか、またはメディアドライブを参照し、[次へ]をクリックしてください。
- 5 [含めるドライブ]パネルで、含めるストレージドライブまたはネットワークドライブのリストを確認し、[次へ]をクリックしてください。

p.231 の「[\[含めるドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。

- 6 [起動オプション]パネルで、**Symantec System Recovery Disk** 必要な起動オプションを指定し、[次へ]をクリックしてください。
 p.232 の「**[起動オプション]**」を参照してください。
- 7 [オプション]パネルで、必要なオプションを選択し、[次へ]をクリックしてください。
 p.232 の「**Symantec System Recovery Disk** 用の **LightsOut Restore オプション**」を参照してください。
- 8 [ライセンス]パネルで、カスタマイズされた修復環境内でライセンスを付与された機能([コンピュータをバックアップ]と呼ばれるコールドイメージ機能など)を有効にする方法を指定します。
 p.234 の「**[ライセンス]のオプション**」を参照してください。
- 9 [次へ]をクリックします。
- 10 [終了]をクリックして、コンピュータに **LightsOut Restore** をセットアップします。
 セットアップが完了したら、**LightsOut Restore** をテストする必要があります。
- 11 **LightsOut Restore** 機能を必要ときに使用できるようにするには、[はい]をクリックします。
- 12 [はい]をクリックして、コンピュータを再起動します。
 p.229 の「**LightsOut Restore** のセットアップと使用について」を参照してください。

[含めるドライバ]のオプション

次の表は**LightsOut Restore** ウィザードの[含めるドライバ]パネルのオプションを記述したものです。

表 14-10 [含めるドライバ]のオプション

オプション	説明
ストレージドライバおよびネットワークドライバ	含めるストレージドライバまたはネットワークドライバのリストを確認できます。
追加	ドライバを追加できます。 指定する場所に、追加するドライバのインストールパッケージが完全に抽出されていなければなりません。見つからないストレージドライバまたはネットワークドライバが複数ある場合は、見つからないドライバごとに [LightsOut Restore のセットアップ]ウィザードをもう一度実行する必要があります。
削除	必要ないドライバを削除します。

オプション	説明
リセット	リストをドライブの元のリストにリセットします。

p.230 の「[LightsOut Restore の設定](#)」を参照してください。

[起動オプション]

次の表は LightsOut Restore ウィザードの[起動オプション]パネルのオプションを記述したものです。

表 14-11 [起動オプション]

オプション	説明
タイムゾーン	LightsOut Restore 内で使うタイムゾーンを設定します。
表示言語	LightsOut Restore のデフォルトの表示言語を設定します。
キーボードレイアウト	LightsOut Restore を実行するときに使うデフォルトのキーボードレイアウトを選択できます。
ブートメニューのラベル	LightsOut Restore の[Windows ブート]メニューに表示するタイトルを示します。
ブートメニューを表示する時間	ブートメニューの表示時間(秒)を指定します。 デフォルトは 10 秒間です。

p.230 の「[LightsOut Restore の設定](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk 用の LightsOut Restore オプション

次の表に、LightsOut Restore ウィザードの[オプション]パネルのオプションを示します。

表 14-12 Symantec System Recovery Disk 用の LightsOut Restore オプション

オプション	説明
ネットワークサービスを自動的に開始	LightsOut Restore によってコンピュータを修復するときに、ネットワークを自動的に開始します。

オプション	説明
動的 IP	追加のネットワーク設定の必要なしでネットワークに接続します。復元するときにネットワーク上で DHCP サーバーが利用可能であることがわかっている場合も、このオプションが適切です。
静的 IP	特定のネットワークアダプタと固有のアドレスが設定されているネットワークに接続します。修復するときに DHCP サーバーがない(または DHCP サーバーが利用不能である)ことがわかっている場合は、このオプションをクリックします。
Symantec pcAnywhere を自動的に開始	Symantec 修復環境を起動するときに、Symantec pcAnywhere Thin Host を自動的に起動させます。このオプションは、システム修復のトラブルシューティングに適しています。
設定	Symantec pcAnywhere オプションを設定できます。 p.233 の「[Symantec pcAnywhere の設定]のオプション」を参照してください。

p.230 の「LightsOut Restore の設定」を参照してください。

[Symantec pcAnywhere の設定]のオプション

次の表は LightsOut Restore ウィザードの[オプション]パネルのオプションを記述したものです。

表 14-13 [Symantec pcAnywhere の設定]のオプション

オプション	説明
ユーザー名	pcAnywhere への認証を行うためのユーザー名を示します。
パスワード	pcAnywhere への認証を行うためのパスワードを示します。
パスワードの確認	pcAnywhere への認証を行うためのパスワードを再入力できます。
ホスト名	ホストに使う名前を示します。 ホスト名をコンピュータと同じ名前に設定する場合は、このボックスを空白にしておくことができます。

オプション	説明
暗号化レベル	ホストとリモートコンピュータ間のデータストリームを暗号化します。
暗号化レベルなし	ホストとリモートコンピュータ間で、データストリームの暗号化が行われないよう指定します。
暗号化レベル-pcAnywhere	第三者が容易に解読できないように、数学アルゴリズムを使用してデータをスクランブル処理します。 このオプションは、pcAnywhere がサポートしているあらゆるオペレーティングシステムで利用可能です。
暗号化レベル-共通	暗号キーを使ってデータのエンコードとデコードを行います。 このオプションは、Microsoft CryptoAPI をサポートしているあらゆる Windows オペレーティングシステムで利用可能です。

p.232 の「[Symantec System Recovery Disk 用の LightsOut Restore オプション](#)」を参照してください。

[ライセンス]のオプション

次の表は LightsOut Restore ウィザードの[ライセンス]パネルのオプションを記述したものです。

表 14-14 [ライセンス]のオプション

オプション	説明
このコンピュータでアクティブ化されているライセンスキーを使用する	アクティブ化されている製品のライセンスキーを使って、カスタマイズした Symantec System Recovery Disk の機能を有効にします。キーは復元するコンピュータにすでに存在している必要があります。
次のライセンスキーを使用する	製品のライセンスキーを入力して、カスタマイズした Symantec System Recovery Disk の機能を有効にします。
ライセンスキー用メッセージ	カスタマイズした Symantec System Recovery Disk の機能を有効にするときに、製品のライセンスキーの入力を求められます。

p.230 の「[LightsOut Restore の設定](#)」を参照してください。

コンピュータのリカバリ

この章では以下の項目について説明しています。

- [コンピュータの修復について](#)
- [Unified Extensible Firmware Interface \(UEFI\) ベースのコンピュータのリカバリについて](#)
- [Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)
- [ハードディスクのエラーを調べることでコンピュータの修復を準備](#)
- [コンピュータのリカバリ](#)
- [仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ](#)
- [別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて](#)
- [Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)
- [Symantec System Recovery Disk によるコンピュータのファイルとフォルダの検索](#)
- [Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)
- [リカバリポイントのプロパティの表示](#)
- [リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示](#)
- [サポートユーティリティについて](#)

コンピュータの修復について

Windows が起動しない、または正常に動作しない場合でも、コンピュータを修復できます。Symantec System Recovery Disk と利用可能なリカバリポイントまたはリカバリポイントから作成した仮想ディスクを使用できます。

メモ: Windows を起動でき、復元するドライブがシステムドライブ以外のドライブの場合、Windows 内からドライブを復元できます。

Symantec System Recovery Disk を使用して修復環境を実行し、一時的に Symantec System Recovery の修復機能にアクセスできます。たとえば、Symantec System Recovery の修復機能にアクセスしてコンピュータを再起動し、以前の使用可能な状態にすることができます。

メモ: Symantec System Recovery をコンピュータ製造元から購入した場合、修復環境の一部の機能が利用不能な場合があります。たとえば、製造元によってコンピュータのハードディスク上に修復環境がインストールされている場合などです。また、製造元によって、修復環境を起動するためのキーがキーボード上で割り当てられていることもあります。コンピュータを再起動した後、コンピュータ画面に指示が表示されるのを待つか、製造元の説明書を参照してください。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.238 の「[Unified Extensible Firmware Interface \(UEFI\) ベースのコンピュータのリカバリについて](#)」を参照してください。

Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) ベースのコンピュータのリカバリについて

Symantec System Recovery Disk により、Unified Extensible Firmware Interface (UEFI) 標準を使用するコンピュータをリカバリすることができます。ただし、UEFI ベースのコンピュータをリカバリする場合は、次の点を考慮してください。

- 64 ビット版の Symantec System Recovery Disk を使用して UEFI ベースのコンピュータを開始してください。
- UEFI ベースのコンピュータをブートする場合、システムドライブとブートドライブが GPT ディスクに存在することを確認してください。同様に、BIOS ベースのコンピュータをブートする場合は、システムドライブとブートドライブが MBR ディスクに存在する必要があります。
- UEFI ベースのコンピュータのブートパーティションとシステムパーティションのバックアップを BIOS ベースのコンピュータにリストアすることはできません。UEFI ベースのコンピュータのバックアップは、GPT ディスクにリストアする必要があります。同様に、BIOS ベースのコンピュータのブートパーティションとシステムパーティションのバックアップを UEFI ベースのコンピュータにリストアすることはできません。BIOS ベースのコンピュータのバックアップは、MBR ディスクにリストアする必要があります。

メモ: Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータをリカバリする間、バックアップのファームウェアの種類が表示されます。バックアップのファームウェアの種類に応じて、バックアップを GPT または MBR のいずれか適切なディスクにリストアします。

- コンピュータが UEFI と BIOS の両方のファームウェアをサポートし、バックアップを UEFI モードで実行した場合は、UEFI ファームウェアを使用してコンピュータを開始する必要があります。
- UEFI ベースのコンピュータをリカバリする場合、[コンピュータを修復]ウィザードの [ターゲットドライブとオプションを編集]パネルの次のオプションは選択しないでください。
 - [ドライブをアクティブ(OS ブート用)に設定]
 - [マスターブートレコードの復元]これらのオプションは MBR 形式のディスクにのみ適用可能です。GPT 形式のディスクには適用できません。
- UEFI ベースのコンピュータをリカバリする場合は、まず EFI システムパーティションをリストアする必要があります (存在しない場合)。
- UEFI ベースのコンピュータをリカバリする場合は、空の MSR パーティションが作成されます (存在しない場合)。
- UEFI ベースのコンピュータのブートボリュームとシステムボリュームをダイナミックディスクにリカバリすることはできません。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート

Symantec System Recovery Disk を使用すると、Windows オペレーティングシステムを実行できなくなったコンピュータもブートできます。Symantec System Recovery Disk は Symantec System Recovery に付属します。Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータをブートすると、簡易バージョンの Windows が起動し、修復環境を実行します。修復環境で、Symantec System Recovery の修復機能にアクセスできません。

メモ: Symantec System Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 DVD に含まれるか、または別の DVD として提供されます。Symantec System Recovery Disk が含まれている DVD は安全な場所に保管してください。

メモ: Symantec System Recovery Disk を実行するには、1 GB 以上のメインメモリが必要です。コンピュータのビデオカードがメインメモリを共有するように設定されている場合は、1 GB を超えて搭載することが必要になる場合があります。

Symantec System Recovery Disk を使ってコンピュータをブートする方法

- 1 USB デバイスにリカバリポイントを保存する場合、まずデバイス(外付けハードディスクドライブなど)を接続します。

メモ: コンピュータを再起動する前にデバイスを接続してください。さもなければ、Symantec System Recovery Disk はそれを検出しないことがあります。

- 2 Symantec System Recovery Disk が含まれている DVD をコンピュータのメディアドライブに挿入します。Symantec System Recovery Disk が USB デバイス上にある場合は、その USB デバイスをコンピュータのメディアドライブにプラグインします。

コンピュータ製造元が Symantec System Recovery をインストールした場合、修復環境がコンピュータのハードディスクドライブにすでにインストールされていることがあります。コンピュータを再起動した後、コンピュータ画面に指示が表示されるのを待つか、または製造元の説明書を参照してください。

- 3 コンピュータを再起動します。

DVD または USB デバイスからコンピュータを起動できない場合は、コンピュータのスタートアップ設定を変更しなければならないことがあります。

p.241 の「[CD/DVD から起動するためのコンピュータの設定 または USB デバイス](#)」を参照してください。

- 4 [Press any key to boot from CD/DVD or USB device] というメッセージが表示された直後にいずれかのキーを押すと、Symantec System Recovery Disk の起動が開始されます。

メモ: このメッセージを見逃さないように注意してください。メッセージは、表示されたから短時間で消えてしまいます。このメッセージを見逃した場合、あらためてコンピュータを起動する必要があります。

- 5 ライセンス契約に目を通し、[同意する]をクリックします。

同意しない場合は、Symantec System Recovery Disk を起動することはできません。コンピュータが再起動します。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

CD/DVD から起動するためのコンピュータの設定 または USB デバイス

Symantec System Recovery Disk は CD/DVD または USB デバイスに置かれている場合があります。したがって、Symantec System Recovery Disk を実行するには、コンピュータを CD、DVD、USB デバイスのいずれかから起動する必要があります。

p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。

コンピュータを CD/DVD または USB デバイスから起動するようにコンピュータを設定するには

- 1 コンピュータを起動します。
- 2 コンピュータが起動したら、画面の一番下に表示される、BIOS/UEFI セットアップへのアクセス方法を通知するプロンプトを確認します。

通常は、Delete キーまたはファンクションキーを押して、コンピュータの BIOS/UEFI プログラムを起動する必要があります。
- 3 [BIOS/UEFI セットアップ] ウィンドウで [起動シーケンス] を選択し、Enter キーを押します。
- 4 画面の指示に従って、CD/DVD または USB デバイスをリスト内の最初の起動デバイスとして設定します。
- 5 Symantec System Recovery Disk の CD/DVD をメディアドライブに入れます。Symantec System Recovery Disk が USB デバイス上にある場合は、メディアドライブに USB デバイスを差し込みます。

メモ: Symantec System Recovery Disk は、購入した製品のバージョンに応じて、製品 DVD に含まれるか、または別の DVD として提供されます。Symantec System Recovery Disk が含まれている DVD は安全な場所に保管してください。DVD を紛失しても、書き込み型 DVD ドライブがあれば新しい DVD を作成できます。

- 6 変更を保存し、BIOS/UEFI セットアップを終了して、新しい設定でコンピュータを再起動します。
- 7 任意のキーを押して、Symantec System Recovery Disk を起動します。

Symantec System Recovery Disk の CD/DVD または USB デバイスがドライブに挿入された状態でコンピュータを起動すると、[任意キーを押して CD/DVD または USB デバイスからブートしてください] というプロンプトが表示されます。5 秒以内にキーを押さないと、コンピュータは次の起動デバイスからの起動を試みます。

メモ: コンピュータの起動時には注意して画面を確認します。プロンプトを見のがした場合は、コンピュータを再起動する必要があります。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

ハードディスクのエラーを調べることでコンピュータの修復を準備

ハードディスクが損傷を受けている疑いがある場合は、エラーが発生しているかどうかを確認できます。

ハードディスクのエラーを調べることでコンピュータの修復を準備する方法

- 1 Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータを起動します。
p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 2 Symantec System Recovery Disk の[分析]パネルで[ハードディスク上でエラーを確認]をクリックします。
- 3 確認するドライブを選択します。
- 4 次のいずれかのオプションを選択します。
 - ファイルシステムのエラーを自動的に修復
選択したディスクのエラーを修正します。このオプションを選択しなければ、エラーは表示されますが、修正されません。
 - 不良セクタの検出および修復
不良セクタを検索し、読み取り可能な情報を修復します。
- 5 [開始]をクリックします。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

コンピュータのリカバリ

Symantec System Recovery Disk として知られるリカバリ環境内から、コンピュータを復元できます。リカバリする必要があるハードドライブ用のリカバリポイントがあれば、コンピュータを完全に復元できます。または、リカバリポイントが作成された時点での状態に、別のハードドライブをリカバリすることもできます。

メモ: 別のハードウェアを使うコンピュータにリカバリポイントを復元した場合は、Restore Anywhere 機能が自動的に有効になります。

p.256 の「[Restore Anywhere によるコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

コンピュータをリカバリするには

- 1 Symantec System Recovery Disk を使ってコンピュータを起動します。
p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 2 Symantec System Recovery Disk の[ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。
リカバリポイントがメディアに保存されており、メディアドライブが 1 つだけの場合は、ここで Symantec System Recovery Disk を取りはずすことができます。リカバリポイントが保存されている CD/DVD または USB デバイスを挿入します。
- 3 ウィザードの[ようこそ]ページで、[次へ]をクリックします。
- 4 [復元するリカバリポイントを選択]パネルで、復元するリカバリポイントを選択し、[次へ]をクリックします。

p.244 の「[\[復元するリカバリポイントを選択\]のオプション](#)」を参照してください。

レイアウト構造がないディスクが検出された場合は、ディスクレイアウトを初期化するよう求められます。レイアウト構造のないディスクのリストが表示されます。リストには、デフォルトのディスクレイアウトタイプ(GPT または MBR)が示されます。必要に応じてディスクのレイアウトタイプを変更してから、[OK]をクリックしてそれらのレイアウトを初期化します。

メモ: UEFI ベースのコンピュータを修復する場合は、そのシステムパーティションを GPT ディスクに復元する必要があります。

- 5 [修復するドライブ]パネルで、リカバリする各ドライブを選択し、必要なオプションを設定してから、[次へ]をクリックします。

p.246 の「[\[修復するドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。

コンピュータをリカバリするときには、**Windows** がインストールされているドライブを選択します。ほとんどのコンピュータシステムで、このドライブは C ドライブになります。リカバリ環境では、ドライブ文字およびラベルが **Windows** で表示されるものと一致しないことがあります。ラベルに基づいて正しいドライブを識別する必要があることがあります。または、名前、またはリカバリポイントのファイルおよびフォルダを参照することによって、ドライブを識別できます。

- 6 必要に応じて、リカバリするドライブを選択し、[編集]をクリックします。
リカバリプロセス中に実行するオプションを選択してから、[OK]をクリックして[修復するドライブ]パネルに戻ります。

p.247 の「[ターゲットドライブとオプションを編集](#)」を参照してください。

- 7 [次へ]をクリックして、選択したリカバリオプションを確認します。

- 8 リカバリプロセスの完了後にコンピュータを自動的に再起動する場合は、[終了時に再起動する]を選択します。
 - 9 [完了]をクリックします。
 - 10 [はい]をクリックしてリカバリプロセスを開始します。
- p.250 の「[仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。
- p.258 の「[Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

[復元するリカバリポイントを選択]のオプション

次の表は、[復元するリカバリポイントを選択]パネルのオプションについて説明しています。このパネルは、Symantec System Recovery Disk の[コンピュータを修復]ウィザードから使えます。

表 15-1 リカバリポイントを日付ごとに表示する場合の[復元するリカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - 日付別	検出されたすべてのリカバリポイントを作成された順序で表示します。 リカバリポイントが検出されなかった場合、表は空になります。このような場合、コンピュータのすべてのローカルドライブを検索するか、参照してリカバリポイントを見つけます。
ソースフォルダを選択	コンピュータのローカルドライブまたは特定のドライブに存在する可能性のある、使用可能なすべてのリカバリポイントのリストを参照できます。
ネットワークドライブのマップ	共有ネットワークのフォルダパスを指定し、それにドライブ文字を割り当てます。その後で、必要なリカバリポイントファイル用のフォルダの場所を参照できます。
参照	ローカルドライブまたはネットワークフォルダ上でリカバリポイントを特定します。
リカバリポイントの選択	復元するリカバリポイントを選択できます。
リカバリポイントの詳細	復元するリカバリポイントについての追加情報が表示されます。

表 15-2 リカバリポイントをファイル名ごとに表示する場合の[復元するリカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名別	リカバリポイントをファイル名別に表示できます。
リカバリポイントのフォルダとファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
ネットワークドライブのマップ	共有ネットワークのフォルダパスを指定し、それにドライブ文字を割り当てます。その後で、必要なリカバリポイントファイル用のフォルダの場所を参照できます。
参照	ローカルドライブまたはネットワークフォルダ上でリカバリポイントを特定します。
リカバリポイントの詳細	復元するリカバリポイントについての追加情報が表示されます。

表 15-3 リカバリポイントをシステムごとに表示する場合の[復元するリカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - システム別	<p>リカバリポイントの格納場所にある、現在のシステムのインデックスファイルを使えます。システムインデックスファイルには、コンピュータ上のすべてのドライブと、関連付けられているすべてのリカバリポイントのリストが表示されます。このリストから、表示するシステムを選択できます。</p> <p>システムインデックスファイルを使うと、複数のリカバリポイントを変換するために必要な時間を短縮できます。リカバリポイントが作成されるときに、システムインデックスファイルと一緒に保存されます。システムインデックスファイルには、各リカバリポイントの元のドライブの場所を含む、最新のリカバリポイントのリストが含まれています。</p>
システムインデックスフォルダとファイル名	リカバリのために使うシステムインデックスファイルのパスとファイル名を指定します。
ネットワークドライブのマップ	共有ネットワークのフォルダパスを指定し、それにドライブ文字を割り当てます。その後で、必要なシステムインデックスファイル(.sv2i)用のフォルダの場所を参照できます。

オプション	説明
参照	システムインデックスファイルを格納するパスを参照できます。 たとえば、外部 (USB) ドライブ、ネットワークの場所、またはリムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.256 の「[Restore Anywhere によるコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

[修復するドライブ]のオプション

次の表は、[修復するドライブ]パネルのオプションについて説明しています。このパネルは、Symantec System Recovery Disk の[コンピュータを修復]ウィザードから使えます。

表 15-4 [修復するドライブ]のオプション

オプション	説明
復元するドライブの選択	リカバリするドライブを選択できます。
追加	リカバリするほかのドライブを追加します。
削除	リカバリするドライブのリストから、選択したドライブを削除します。
編集	選択したドライブのリカバリオプションを編集できます。 p.247 の「 ターゲットドライブとオプションを編集 」を参照してください。
復元前にリカバリポイントを検証	復元する前に、リカバリポイントが有効か、または破損しているかを確認します。リカバリポイントが無効な場合、リカバリは中断されます。 このオプションを選択すると、リカバリが完了するまでに必要な時間が大幅に増えることがあります。

オプション	説明
Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復	<p>次のいずれかに当てはまる場合は、自動的に選択されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オペレーティングシステムドライブ以外のドライブを、新しいまたは別のコンピュータハードウェアにリカバリする。または、オペレーティングシステムのドライブと 1 つ以上のデータドライブの両方を、新しいまたは別のコンピュータハードウェアにリカバリする場合。 ■ 古いコンピュータから新しいコンピュータハードウェアまたは別のコンピュータハードウェアにアップグレードする場合。 ■ コンピュータのマザーボードが損傷した場合。 <p>新しいまたは別のコンピュータハードウェアにデータドライブのみをリカバリすると、このオプションは選択されません。</p>

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.256 の「[Restore Anyware によるコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

ターゲットドライブとオプションを編集

次の表は[ターゲットドライブとオプションを編集]パネルのオプションを示しています。このパネルは、Symantec System Recovery Disk の[コンピュータを修復]ウィザードの[修復するドライブ]パネルから使用できます。

表 15-5 ターゲットドライブとオプションを編集

オプション	説明
ドライブの削除	<p>リスト内の指定したドライブを削除して、リカバリポイントの復元に領域を使用できるようにします。</p> <p>このオプションを使用する場合、ドライブは削除用にマークされます。ドライブの実際の削除は、ウィザードの[完了]をクリックした後で実行されます。</p>
削除を元に戻す	削除されたドライブをドライブのリストに戻します。

オプション	説明
修復後にドライブのサイズを変更(未割り当て領域のみ)	リカバリポイントが復元された後、ディスクのサイズを変更します。このオプションを選択した後で、新しいサイズを MB 単位で指定できます。サイズは、リストで選択したディスクの識別されたサイズより大きくする必要があります。
プライマリパーティション	ハードディスクは 4 つのプライマリパーティションに制限されるため、このオプションは、ドライブに 4 つ以下のパーティションがある場合に有効です。
論理パーティション (Logical partition)	このオプションは、4 つを超えるパーティションを必要とする場合に適切です。ハードディスクの最大サイズまで、最大で 3 つのプライマリパーティションと、任意の数の論理パーティションを設定できます。
リカバリ後にファイルシステムのエラーを確認	リカバリポイントが復元された後、復元されたドライブでエラーがあるかどうかを確認します。
ドライブをアクティブ(OS ブート用)に設定	<p>復元されたドライブをアクティブパーティションにします(コンピュータを起動するドライブなど)。</p> <p>オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元する場合は、このオプションを選択してください。</p> <p>メモ: UEFI ベースのコンピュータのシステムパーティションまたはブートパーティションをリストアップしている場合は、このオプションを選択しないでください。このオプションは MBR 形式のディスクにのみ適用可能です。</p>

オプション	説明
元のディスク署名を復元	<p>ハードドライブの元の物理ディスク署名を復元します。</p> <p>ディスク署名は、Symantec System Recovery がサポートするすべての Windows オペレーティングシステムの一部です。ディスク署名はハードドライブを使用するために必要です。</p> <p>次のいずれかの状況である場合は、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">■ コンピュータのドライブ文字が特殊である場合 (C、D、E などの文字以外が割り当てられているなど)。■ 新しい、空のハードディスクにリカバリポイントを復元する場合。

オプション	説明
マスターブートレコードの復元	<p>マスターブートレコードを復元します。マスターブートレコードは、物理ハードディスクの最初のセクタにあります。マスターブートレコードは、マスターブートプログラムと、ディスクパーティションを記述するパーティションテーブルで構成されません。マスターブートプログラムは、どのプライマリパーティションがアクティブであるかを判別するために、最初のハードディスクのパーティションテーブルを分析します。その後で、アクティブパーティションのブートセクタからブートプログラムを起動します。</p> <p>このオプションは上級ユーザーにのみ推奨されます。また、リカバリ環境でドライブ全体を復元する場合にのみ使用できます。</p> <p>次のいずれかの状況である場合は、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 新しい、空のハードディスクにリカバリポイントを復元する場合。 ■ 元のドライブにリカバリポイントが復元するが、リカバリポイントが作成された後にドライブのパーティションが修正された場合。 ■ ウイルスまたは他の問題によって、ドライブのマスターブートレコードが破損したことが疑われる場合。 <p>メモ: UEFI ベースのコンピュータのシステムパーティションまたはブートパーティションをリストアしている場合は、このオプションを選択しないでください。このオプションは MBR 形式のディスクにのみ適用可能です。</p>

p.246 の「[\[修復するドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.256 の「[Restore Anywhere によるコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ

リカバリ環境を使って、仮想ディスクファイル(.vmdk または .vhd) 内からコンピュータをリカバリできます。リカバリするハードドライブ用の仮想ディスクがある場合は、コンピュータを完全にリカバリできます。または、元の仮想ディスクが作成された時点での状態に、別のハードドライブをリカバリすることもできます。

メモ: 仮想ディスクファイルから UEFI ベースのコンピュータを修復することはできません。

p.194 の「[仮想変換ジョブの定義](#)」を参照してください。

p.203 の「[仮想ディスクへの物理的なリカバリポイントのワンタイム変換の実行](#)」を参照してください。

メモ: 別のハードウェアを使うコンピュータに仮想ディスクを復元した場合は、**Restore Anywhere** 機能が自動的に有効になります。

コンピュータを仮想ディスクファイルからリカバリするには

1 Symantec System Recovery Disk を使ってコンピュータを起動します。

p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。

2 Symantec System Recovery Disk の[ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。

3 ウィザードの[ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。

4 [復元するリカバリポイントを選択]パネルの[リカバリポイントを表示]リストで、[ファイル名]を選択します。

レイアウト構造がないディスクが検出された場合は、ディスクレイアウトを初期化するように求められます。レイアウト構造のないディスクのリストが表示されます。リストには、デフォルトのディスクレイアウトタイプ (GPT または MBR) が示されます。必要に応じてディスクのレイアウトタイプを変更してから、[OK]をクリックしてそれらのレイアウトを初期化します。

5 [復元するリカバリポイントを選択]パネルで[参照]をクリックして、仮想ディスクファイル(.vmdk または .vhd)を見つけ、選択して開きます。

必要に応じて[ネットワークドライブのマップ]をクリックします。共有ネットワークのフォルダパスを指定し、それにドライブ文字を割り当てます。その後で、仮想ディスクファイル用のフォルダの場所を参照できます。

6 [次へ]をクリックします。

7 [ターゲットドライブ]パネルで、仮想ディスクを復元するターゲットドライブを選択します。

8 必要に応じて、次のいずれかを実行します。

■ [ドライブの削除]をクリックします。

リスト内の指定したドライブを削除して、仮想ディスクの復元に領域を使用できるようにします。

[ドライブの削除]をクリックしても、ドライブは削除用にマークされるだけです。ドライブの実際の削除は、ウィザードの[完了]をクリックした後で実行されます。

- [削除を元に戻す]をクリックします。

ドライブを削除した後で削除操作を取り消す場合は、[削除を元に戻す]をクリックして、そのドライブをリストに戻します。

- 9 [次へ]をクリックします。

[Restore Anyware を使用して別のハードウェアに修復]は、オペレーティングシステムのドライブ (Windows がインストールされているドライブで、通常はドライブ C) をリカバリする場合、すでに選択されています。

このオプションは、ターゲットコンピュータ用に必要なドライバがすでに仮想ディスクに含まれている場合は選択されません。または、データドライブが含まれている仮想ディスクを復元する場合です。

- 10 必要に応じて、製品のライセンスキーを入力します。

ライセンスキーは、仮想ディスクファイルからシステムをリカバリするときに、Restore Anyware を使用するのに必要です。

[カスタムリカバリディスクを作成]ウィザードを使用して、カスタム Symantec System Recovery Disk にライセンスキーを直接追加することもできます。仮想ディスクを復元するときに、Restore Anyware が Symantec System Recovery Disk で有効になっていると、ライセンスキーの入力は求められません。これはすでに、カスタム Symantec System Recovery Disk の一部になっています。

p.39 の「[カスタム Symantec System Recovery Disk の作成](#)」を参照してください。

- 11 [次へ]をクリックします。

- 12 [リカバリオプション]パネルで、リカバリプロセス中に実行するオプションを選択します。

p.253 の「[修復オプション](#)」を参照してください。

使用できるオプションは、前に選択したターゲットドライブによって決まります。

- 13 [次へ]をクリックして、選択したリカバリオプションを確認します。

- 14 リカバリプロセスの完了後にコンピュータを自動的に再起動する場合は、[終了時に再起動する]を選択します。

- 15 [完了]をクリックします。

- 16 [はい]をクリックしてリカバリプロセスを開始します。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.256 の「[Restore Anyware によるコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

修復オプション

次の表に[修復オプション]パネルのオプションを示します。このパネルは、仮想ディスクを修復するためにSymantec System Recovery Disk の[コンピュータを修復]ウィザードを使うときに利用可能です。

表 15-6 修復オプション

オプション	説明
修復前にリカバリポイントを検証	<p>復元する前に、リカバリポイントが有効であるか、または破損しているかを検証します。リカバリポイントが無効なら、修復は中断されます。</p> <p>このオプションを有効にすると、修復の所要時間が大幅に延びます。</p>
修復後のファイルシステムのエラーを確認	リカバリポイントの復元後に、復元したドライブにエラーがないかどうかをチェックします。
修復後にドライブのサイズを変更(未割り当て領域のみ)	新しいドライブサイズをMB単位で指定します。
基本パーティション	ハードディスクの基本パーティションは最大4つに制限されているため、ドライブ内のパーティションが4つ以下である場合に、このオプションが適切です。
論理パーティション	このオプションは4つ以上のパーティションが必要な場合に適しています。ハードディスクには、最大容量を超えない範囲で、最大3つの基本パーティションに加えて任意の数の論理パーティションが作成できます。
ドライブをアクティブ(OSブート用)に設定	<p>復元したドライブをアクティブパーティション(コンピュータの起動ドライブなど)に設定します。</p> <p>オペレーティングシステムがインストールされているドライブを復元する場合は、このオプションを選択してください。</p>

オプション	説明
元のディスク署名を復元	<p>ハードディスクドライブの物理ディスク署名を復元します。</p> <p>ディスク署名は、Symantec System Recovery がサポートするすべての Windows オペレーティングシステムで用いられています。ディスク署名は、ハードディスクドライブの使用に必要です。</p> <p>次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ コンピュータのドライブ文字が非定型である (C、D、E など以外の文字が割り当てられている場合)。 ■ リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元する。
マスターブートレコードを復元	<p>マスターブートレコードを復元します。マスターブートレコードは、物理ハードディスクの第一セクタに含まれています。マスターブートレコードは、マスターブートプログラムと、ディスクパーティションを記述するパーティションテーブルから構成されています。マスターブートプログラムは、最初のハードディスクのパーティションテーブルを分析して、アクティブな基本パーティションを調べます。その後、アクティブなパーティションのブートセクタからブートプログラムを起動します。</p> <p>このオプションは、高度な知識を持つユーザーのみが利用することをお勧めします。修復環境でドライブ全体を復元する場合にのみ利用可能です。</p> <p>次のいずれかに当てはまる場合、このオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ リカバリポイントを新しい空のハードディスクに復元する。 ■ リカバリポイントを元のドライブに復元するが、ドライブのパーティションはリカバリポイントの作成後に変更されている。 ■ ウイルスまたはその他の問題によって、ドライブのマスターブートレコードが破損した疑いがある。

p.250 の「仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ」を参照してください。

別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて

Symantec System Recovery の Restore Anyware 機能は、管理者が、サポート対象の Windows プラットフォームコンピュータのシステムドライブを復元できるようにします。リカバリポイントが作成された元のコンピュータで見つかったのとは異なるハードウェアを使用するシステムでも、復元できます。

Restore Anyware では、システムを起動可能にするのに必要な変更を加えることができます。構成によっては、コンピュータが以前とまったく同じように実行できるようにするため、追加の変更を行う必要がある場合もあります。

リカバリポイントが最初に作成されたのと同じ(または非常に似ている)ハードウェアに復元する場合、Restore Anyware 機能は自動的に選択解除されます。

p.255 の「[Restore Anyware の使用方法](#)」を参照してください。

Restore Anyware の使用方法

Restore Anyware は、新しいハードウェアにリカバリポイントを復元できるようにします。たとえば、Restore Anyware は、次のシナリオで自動的に使用されます。

- コンピュータのマザーボードが損傷し、新しい、または別のマザーボードに取り替えた場合。
- 古いコンピュータから新しいハードウェアにアップグレードする場合。
- 仮想ディスクファイルを物理コンピュータに戻して復元する場合。

この機能は、ドライブをリカバリするためののみ使用されます。ファイルやフォルダなど、より詳細なレベルでのリカバリには使用できません。

メモ: ドメインコントローラのサポートについて、詳細情報を得ることができます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-16> を参照してください。

警告: ハードウェアの製造元からの OEM ライセンス、またはシングルユーザーライセンスを保有している場合は、Windows ソフトウェアの再アクティベーションを求められることがあります。Windows のライセンスキーを使って、再アクティベーションを実行できます。OEM ライセンスやシングルユーザーライセンスの場合、アクティベーションの回数に制限がある場合があります。Restore Anyware を使うことがオペレーティングシステムやアプリケーションの使用許諾契約に違反しないことを確認してください。

Restore Anyware を使う場合は、次の点に留意します。

- **Restore Anyware** を著しく異なるハードウェアに対して実行する場合は、次の操作が必要になることがあります。
 - 大容量記憶装置のデバイスドライバを追加する。
 - 復元する **Windows** オペレーティングシステム用の修正プログラムをインストールする。
 - **Windows** オペレーティングシステムをシステムの再起動時に再アクティベーションする。
 - ライセンスキーをシステムの再起動時に入力する。
 - ローカルユーザー名およびパスワードをシステムの再起動時に入力する。
- **Restore Anyware** を使ってリカバリポイントを復元するときに、ローカル管理者名およびパスワードの入力を求められることがあります。復元を行う前に、この情報を手元に用意しておいてください。テクニカルサポートでは、失われたパスワードを復元できません。
- **Restore Anyware** は、複数のコンピュータに対して単一のリカバリポイントを復元するのには使用されません。この製品では、すべてのコンピュータの一意の **SID** (セキュリティ識別子) は生成されません。
- 固定 IP アドレスを使用するコンピュータで **Restore Anyware** を使用するときは、復元の完了後に手動でコンピュータを再構成する必要があります。
- **Symantec System Recovery** は、1 つのシステム上で 1 つの NIC をサポートします。デュアル NIC のシステムの場合、**Restore Anyware** で復元を実行するには、手動での追加の **NIC** 設定が必要な場合があります。

p.255 の「別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて」を参照してください。

p.256 の「**Restore Anyware** によるコンピュータのリカバリ」を参照してください。

Restore Anyware によるコンピュータのリカバリ

Restore Anyware を使ってコンピュータを復元する前に、リカバリポイントまたは仮想ディスクファイルをアクセス可能な場所に保存する必要があります。リカバリの間に、ディスクドライバ、サービスパック、ホットフィックスなどの提供を求められることもあります。使用できる **Windows** メディア CD があるはずですが。

Restore Anyware ドライバの入手方法について詳しくは、次の URL でシマンテック社のナレッジベースを参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-15>

警告: Restore Anyware を使ってコンピュータを復元する前に、リカバリ環境で、リカバリポイントまたは仮想ディスクへのアクセスをテストします。SAN ボリュームへのアクセスが可能であること、ネットワークに接続できることを確認してください。

Restore Anyware を使ってコンピュータをリカバリするには

- 1 Symantec System Recovery Disk を使ってコンピュータを起動します。

p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 2 [ホーム]パネルで、[コンピュータを修復]をクリックします。

リカバリポイントまたは仮想ディスクが、メディアに保存されている場合もあります。その場合、CD/DVD または USB ドライブが 1 つのみであれば、ここで **Symantec System Recovery Disk** を取りはずすことができます。リカバリポイントまたは仮想ディスクが保存されている CD/DVD または USB デバイスを挿入します。
- 3 ウィザードの[ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 4 次のいずれかを実行します。
 - **Symantec System Recovery Disk** がリカバリポイントを検出した場合は、手順 7 に進みます。
 - **Symantec System Recovery Disk** がリカバリポイントを検出しなかった場合は、次の手順に進みます。
- 5 [復元するリカバリポイントを選択]パネルで、復元するリカバリポイントを選択します。

p.244 の「[\[復元するリカバリポイントを選択\]のオプション](#)」を参照してください。

レイアウト構造がないディスクが検出された場合は、ディスクレイアウトを初期化するように求められます。レイアウト構造のないディスクのリストが表示されます。リストには、デフォルトのディスクレイアウトタイプ (GPT または MBR) が示されます。必要に応じてディスクのレイアウトタイプを変更してから、[OK]をクリックしてそれらのレイアウトを初期化します。

メモ: UEFI ベースのコンピュータを修復する場合は、そのシステムパーティションを GPT ディスクに復元する必要があります。

- 6 [次へ]をクリックします。

- 7 [修復するドライブ]パネルで、リカバリする各ドライブを選択し、必要なオプションを設定してから、[次へ]をクリックします。

p.246 の「[\[修復するドライブ\]のオプション](#)」を参照してください。

コンピュータをリカバリするときには、**Windows** がインストールされているドライブを選択します。ほとんどのコンピュータシステムで、このドライブは C ドライブになります。リカバリ環境では、ドライブ文字およびラベルが **Windows** で表示されるものと一致しないことがあります。ラベルに基づいて正しいドライブを識別する必要があることがあります。または、割り当てられる名前に基づいてドライブを識別できます。または、リカバリポイントのファイルおよびフォルダを参照できます。

p.258 の「[Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

- 8 必要に応じて、リカバリするドライブを選択し、[編集]をクリックします。

リカバリプロセス中に実行するオプションを選択してから、[OK]をクリックして[修復するドライブ]パネルに戻ります。

p.247 の「[ターゲットドライブとオプションを編集](#)」を参照してください。

- 9 [次へ]をクリックして、選択したリカバリオプションを確認します。
- 10 リカバリプロセスの完了後にコンピュータを自動的に再起動する場合は、[終了時に再起動する]を選択します。
- 11 [完了]をクリックします。
- 12 [はい]をクリックしてリカバリプロセスを開始します。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.250 の「[仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復

Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータを起動し、リカバリポイント内からファイルとフォルダを復元できます。

Symantec System Recovery Disk を使ってファイルとフォルダを修復する方法

- 1 Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータを起動します。

p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 2 [修復]、[ファイルを修復]の順にクリックします。
- 3 次のいずれかを実行します。

- Symantec System Recovery Disk でリカバリポイントが見つからない場合は、検索するように求められます。[リカバリポイントを選択]ダイアログボックスでリカバリポイントを選択し、[OK]をクリックします。
p.260 の「[\[リカバリポイントを選択\]のオプション](#)」を参照してください。
- Symantec System Recovery Disk によってリカバリポイントが検出された場合は、リストからリカバリポイントを選択し、[OK]をクリックします。

メモ: ネットワーク上にリカバリポイントが見つからない場合は、リカバリポイントが保存されているコンピュータ名と共有名を入力します。たとえば、
`¥¥computer_name¥share_name` のように入力します。

それでも問題が解決しない場合は、コンピュータの IP アドレスを入力してください。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

- 4 Recovery Point Browser のツリーペインで、復元するファイルまたはフォルダが含まれるドライブをダブルクリックします。
- 5 Recovery Point Browser のコンテンツペインで、復元するファイルまたはフォルダを選択します。
- 6 [ファイルを修復]をクリックします。

[アイテムの修復]ダイアログボックスでは、[このフォルダに復元]フィールドに作成したときの元のパスがすでに含まれていることがあります。

元の場所にドライブ文字が含まれていない場合は、パスの先頭にドライブ文字を入力する必要があります。

メモ: 修復環境では、ドライブ文字とラベルが Windows のものと一致しないことがあります。ラベル(割り当てられた名前)に基づいて、適切なドライブを識別する必要があります。

- 7 元のパスが不明であったり、選択したファイルを別の場所に復元する場合は、[参照]をクリックして復元先を選択します。
- 8 [修復]をクリックして、ファイルの復元を開始します。
- 9 [OK]をクリックして終了します。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

p.250 の「[仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

[リカバリポイントを選択]のオプション

次の表は[リカバリポイントを選択]パネルのオプションを記述したものです。このパネルは Symantec System Recovery Disk の[ファイルを修復]ウィザードを使うときに利用可能です。

表 15-7 日付ごとにリカバリポイントを表示する場合の[リカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - 日付	検出されたすべてのリカバリポイントが、作成日付順に表示されます。 リカバリポイントが検出されなかった場合は、表には何も表示されません。そのような場合、コンピュータのすべてのローカルドライブを検索するか、参照してリカバリポイントを探します。
ソースフォルダを選択	コンピュータのローカルドライブまたは特定のドライブにあるすべての利用可能なリカバリポイントのリストを表示できます。
ネットワークドライブの割り当て	共有ネットワークフォルダパスを指定し、ドライブ文字を割り当てます。このとき、必要なリカバリポイントファイルがあるフォルダの場所を参照できます。
参照	ローカルドライブまたはネットワークフォルダのリカバリポイントを検索できます。
リカバリポイントの選択	復元するリカバリポイントを選択できます。
リカバリポイントの詳細	復元するリカバリポイントについての追加情報を示します。

表 15-8 ファイル名ごとにリカバリポイントを表示する場合の[リカバリポイントを選択]のオプション

オプション	説明
表示 - ファイル名	ファイル名ごとにリカバリポイントを表示できます。
リカバリポイントのフォルダとファイル名	リカバリポイントのパスとファイル名を指定します。
ネットワークドライブの割り当て	共有ネットワークフォルダパスを指定し、ドライブ文字を割り当てます。このとき、必要なリカバリポイントファイルがあるフォルダの場所を参照できます。

オプション	説明
参照	ローカルドライブまたはネットワークフォルダのリカバリポイントを検索できます。
リカバリポイントの詳細	復元するリカバリポイントについての追加情報を示します。

p.258 の「[Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk によるコンピュータのファイルとフォルダの検索

[コンピュータを検索]機能を使用して、Symantec System Recovery Disk からコンピュータ上のファイルとフォルダを検索できます。

この機能では、Recovery Point Browser と、Windows エクスプローラに類似した機能を使用します。コンピュータに接続されたすべてのドライブのファイル構造を、Symantec System Recovery Disk から参照できます。

Symantec System Recovery Disk を使ってコンピュータのファイルとフォルダを検索する方法

- 1 Symantec System Recovery Disk を使用してコンピュータを起動します。
p.239 の「[Symantec System Recovery Disk の使用によるコンピュータのブート](#)」を参照してください。
- 2 [分析]パネルで、[コンピュータを検索]をクリックします。
p.258 の「[Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について

ネットワーク上にリカバリポイントを保存する場合は、ネットワークにアクセスする必要があります。ネットワークにアクセスすることで、Symantec System Recovery Disk からコンピュータまたはファイルとフォルダを復元できます。Symantec System Recovery Disk には各種のネットワークツールが含まれていて、それらを使用して修復に役に立てることができます。

メモ: ネットワークを通じてコンピュータまたはファイルを修復する場合は、追加のコンピュータメモリが必要になることがあります。

p.262 の「[ネットワークサービスの起動](#)」を参照してください。

p.262 の「[リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用](#)」を参照してください。

p.264 の「[Symantec System Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング](#)」を参照してください。

p.265 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

ネットワークサービスの起動

ネットワークサービスを起動する必要がある場合は、手動で起動できます。

ネットワークサービスを起動する方法

- ◆ Symantec System Recovery Disk の[ネットワーク]パネルで[ネットワークサービスを開始]をクリックします。

ネットワークへの接続を確認するため、ネットワークドライブをマッピングできます。

p.264 の「[Symantec System Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング](#)」を参照してください。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用

Symantec System Recovery Disk は pcAnywhere Thin Host を含んでいます。修復環境のコンピュータにリモートでアクセスできます。pcAnywhere Thin Host には、1 つのリモートコントロールセッションをサポートするために必要な最低限の設定が含まれています。Thin Host には、リモートコントロールセッションをホストするための IP アドレスが必要です。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

メモ: Thin Host は Symantec System Recovery Disk に配備できません。Thin Host は、Symantec System Recovery Disk から起動した場合のみ、Symantec System Recovery Disk でリモートコントロールセッションをホストします。Symantec System Recovery Disk の Thin Host は、ファイル転送をサポートしません。また、ネットワークまたはストレージデバイスのドライバを追加するために使用することはできません。

Thin Host は Symantec System Recovery Disk から起動されると、リモートコンピュータからの接続を待機します。Thin Host に接続して、修復のリモート管理または Symantec System Recovery Disk でサポートされているその他のタスクを実行できます。Thin Host に接続するには、Symantec pcAnywhere を使用する必要があります。

p.263 の「[pcAnywhere Thin Host へのリモート接続](#)」を参照してください。

pcAnywhere Thin Host を起動する方法

- ◆ Symantec System Recovery Disk の[ネットワーク]パネルで、[pcAnywhere Thin Host を開始]をクリックします。

必要に応じて、ネットワークサービスが開始されます。Thin Host が接続を待機します。

pcAnywhere Thin Host へのリモート接続

Symantec pcAnywhere を使用すると、修復環境で実行中のコンピュータにリモート接続できます。コンピュータが、pcAnywhere Thin Host を実行中である必要があります。このホストは Symantec System Recovery Disk に含まれています。また、ホストは利用可能で接続を待機中である必要があります。ホストとクライアントコンピュータが接続されると、クライアントコンピュータはリモートで修復を管理できます。または、クライアントコンピュータは Symantec System Recovery Disk でサポートされる他のタスクを実行できます。

メモ: クライアントコンピュータは、ファイルの転送や、ネットワーク用のドライバ、または Thin Host を実行しているコンピュータ上のストレージデバイスの追加はできません。

pcAnywhere Thin Host にリモート接続する方法

- 1 リモートで管理されるコンピュータ(ホスト)が Symantec System Recovery Disk で起動されたことを確認します。また pcAnywhere Thin Host が利用可能で接続を待機中であることを確認します。
- 2 Thin Host コンピュータの IP アドレスを取得します。
- 3 クライアントコンピュータの Symantec pcAnywhere で、リモート接続項目を設定します。

詳しくは『Symantec pcAnywhere ユーザーズガイド』を参照してください。

メモ: 接続中のホストに自動的にログオンする必要はありません。

- 4 pcAnywhere で接続設定を行うときは、次の操作を実行します。
 - 接続の種類として[TCP/IP]を選択します。

- ホストコンピュータの IP アドレスを指定します。
- 接続中のホストへの自動ログオンを選択します。
ログオン情報を入力しないと、**Thin Host** に接続するときに、入力を求めるメッセージが表示されます。
- 次のログオン名を入力します。
symantec
- 次のパスワードを入力します。
recover

間違った設定で接続しようとする、**Thin Host** はシャットダウンします。

権限のないユーザーによって設定が不正に変更されることを防止できます。また、許可のないセッションが開始されようとするのを防止できます。そうするために、リモート接続項目のパスワードを設定できます。

このオプションは、[項目の保護]タブの[リモートプロパティ]ウィンドウで選択できます。**Thin Host** は暗号化をサポートしていません。

5 **pcAnywhere** で、リモートコントロールセッションを開始します。

接続に失敗した場合は、再接続を行う前にホストコンピュータで **Thin Host** を再起動する必要があります。

6 ホストコンピュータで必要なタスクをリモートに実行します。

Thin Host を終了すると、リモートコントロールセッションは終了します。また、**Thin Host** コンピュータが再起動されたとき、またはリモートコントロールセッションが終了されたとき、リモートコントロールセッションは終了します。

ホストコンピュータが **Windows** を起動した後、クライアントコンピュータはコンピュータ上に **Thin Host** を配備、接続できます。接続することにより、修復環境の使用中に実行されたタスクが正常に完了したことを検証できます。

p.262 の「[リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用](#)」を参照してください。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Disk 内からのネットワークドライブのマッピング

修復環境を起動した後にネットワークサービスを開始した場合、ネットワークドライブをマッピングすることができます。このマッピングによって、マッピングしたドライブを参照し、復元するリカバリポイントを選択できるようになります。または、修復環境からバックアップを作成すれば、ネットワーク上のある場所に存在する保存先を選択できます。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

DHCP サーバーが存在しない場合、または DHCP サーバーが利用不能な場合は、静的 IP アドレスの指定が必要になります。Symantec System Recovery Disk を実行しているコンピュータのサブネットマスクの指定が必要になります。

p.265 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

静的 IP アドレスとサブネットマスクを入力すると、修復環境が使用できるようになります。ただし、コンピュータ名を解決する方法はありません。[コンピュータを修復]ウィザードまたは[Recovery Point Browser]を実行しているときは、IP アドレス以外ではネットワーク上のリカバリポイントを参照できません。ネットワークドライブをマッピングすると、より効率的にリカバリポイントを検索できます。または、修復環境内から作成するリカバリポイントの保存先として、マップしたネットワークドライブを使うこともできます。

Symantec System Recovery Disk 内からネットワークドライブをマッピングする方法

- 1 Symantec System Recovery Disk の[ネットワーク]パネルで、[ネットワークドライブのマップ]をクリックします。
- 2 リカバリポイントが保存されているコンピュータの UNC パスを使用して、ネットワークドライブをマッピングします。

例:¥¥computer_name¥share_name や ¥¥IP_address¥share_name のように入力します。

また、Symantec System Recovery Disk 内で、[コンピュータの修復]ウィザードまたは[コンピュータのバックアップ]ウィザードからネットワークドライブをマッピングすることもできます。

p.262 の「[リモート修復での pcAnywhere Thin Host の使用](#)」を参照してください。

ネットワーク接続の設定

[ネットワーク設定]ウィンドウにアクセスし、Symantec System Recovery Disk 環境で実行するときの基本的なネットワーク設定を行うことができます。

ネットワーク接続を設定する方法

- 1 Symantec System Recovery Disk 環境で、[ネットワーク]、[ネットワーク接続を設定]の順にクリックします。
- 2 ネットワークサービスの起動を求めるメッセージが表示されたら、[はい]をクリックします。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

静的 IP アドレスの割り当て

ネットワークドライブまたは共有に存在するリカバリポイントを復元できます。しかし、ドライブをマッピングできない、あるいはリカバリポイントにアクセスするネットワーク上のドライブまたは共有を参照できないこともあります。利用可能な DHCP サービスが存在しないため、そのようなエラーが引き起こされることがあります。このような場合、修復環境を実行しているコンピュータに固有の静的 IP アドレスを割り当てることができます。これにより、ネットワークドライブまたは共有にマッピングできるようになります。

p.265 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

静的 IP アドレスを割り当てる方法

- 1 Symantec System Recovery Disk 環境で、[ネットワーク]、[ネットワーク接続を設定]の順にクリックします。
- 2 [ネットワーク設定]ダイアログボックスで、[次の IP アドレスを使用する]をクリックします。
- 3 復元するコンピュータに、固有の IP アドレスとサブネットマスクを指定します。
指定するサブネットマスクがネットワークセグメントのサブネットマスクと一致していることを確認します。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [閉じる]をクリックして、修復環境のメインメニューに戻ります。
- 6 [ネットワーク]パネルで、[リモートコンピュータに対して ping を実行]をクリックします。
- 7 ネットワークセグメント上の ping 先のコンピュータのアドレスを入力します。
- 8 [OK]をクリックします。

アドレス方法としてコンピュータ名またはコンピュータ名とドメインを指定した場合は、返された IP アドレスを記録しておきます。

ストレージコンピュータとの接続が確立したら、[ネットワークドライブの割り当て]ユーティリティを使用して、リカバリポイント保存場所にドライブをマッピングできます。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

ping 送信に失敗したときの静的 IP アドレスの取得

アドレスに ping 送信し、そのアドレスが応答しない場合は、`ipconfig /all` コマンドを使用して正しい IP アドレスを確認できます。

p.265 の「[ネットワーク接続の設定](#)」を参照してください。

p.261 の「[Symantec System Recovery Disk でのネットワークツールの使用について](#)」を参照してください。

ping 送信に失敗したときに IP アドレスを取得する方法

- 1 復元するリカバリポイントを含むコンピュータのコマンドプロンプトで、次のコマンドを入力して Enter キーを押します。

```
ipconfig /all
```

- 2 表示された IP アドレスを書き留めます。

Symantec System Recovery Disk 環境を実行しているコンピュータに戻ります。

- 3 Symantec Recovery Disk 環境の[ネットワーク]パネルで、[リモートコンピュータに対して ping を実行]をクリックし、書き留めた IP アドレスを使用します。

p.242 の「[コンピュータのリカバリ](#)」を参照してください。

リカバリポイントのプロパティの表示

Recovery Point Browser を使用して、リカバリポイントのプロパティを表示することができます。

p.268 の「[リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

リカバリポイントのプロパティを表示する方法

- 1 次のいずれかを実行します。
 - Symantec System Recovery の表示メニューで、[ツール]をクリックします。
[Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
 - Windows の[スタート]メニューで、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[Recovery Point Browser]の順にクリックします。
- 2 Recovery Point Browser のツリーパネルで、表示するリカバリポイントのファイル名を選択します。
- 3 次のいずれかを実行します。
 - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
 - リカバリポイントのファイル名を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。

p.267 の「[\[リカバリポイントのプロパティ\]](#)」を参照してください。

[リカバリポイントのプロパティ]

次の表は[リカバリポイントのプロパティ]ダイアログボックスで利用可能な情報を記述したものです。このダイアログボックスは[Recovery Point Browser]から利用可能です。

表 15-9 [リカバリポイントのプロパティ]

プロパティ	説明
説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明を表示します。
サイズ	リカバリポイントのサイズ(MB)を表示します。
作成日時	リカバリポイントの作成日時を表示します。
圧縮	リカバリポイントで使用されている圧縮レベルを表示します。
複数のファイルに分割	リカバリポイントが複数のファイルに分割されているかどうかを識別します。
パスワードプロテクト	選択したドライブのパスワード保護の状態を表示します。
暗号化	リカバリポイントで使用している暗号化の強さを表示します。
バージョン	リカバリポイントに関連付けられているバージョン番号を表示します。
コンピュータ名	リカバリポイントを作成したコンピュータの名前を表示します。
Restore Anyware	リカバリポイントに対して Restore Anyware を有効にしているかどうかを識別します。
検索エンジンのサポート	リカバリポイントに対して検索エンジンのサポートを有効にしているかどうかを識別します。
作成者	リカバリポイントの作成に使用されたアプリケーション(Symantec System Recovery)。

p.267 の「リカバリポイントのプロパティの表示」を参照してください。

リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示

リカバリポイント内のドライブについて、プロパティを表示できます。

p.267 の「リカバリポイントのプロパティの表示」を参照してください。

リカバリポイント内のドライブのプロパティを表示する方法

- 1 次のいずれかを実行します。

- Symantec System Recovery の表示メニューで、[ツール]をクリックします。
 [Recovery Point Browser を実行]をクリックします。
 - Windows の[スタート]メニューで、[プログラム]、[Symantec System Recovery]、[Recovery Point Browser]の順にクリックします。
- 2 Recovery Point Browser のツリーパネルで、表示するドライブが含まれているリカバリポイントのファイル名をダブルクリックします。
 - 3 ドライブの名前を選択してください。
 - 4 次のいずれかを実行します。
 - ファイルメニューで、[プロパティ]を選択します。
 - リカバリポイントのドライブ名を右クリックし、[プロパティ]をクリックします。
- p.269 の「[リカバリポイント内のドライブのプロパティ](#)」を参照してください。

リカバリポイント内のドライブのプロパティ

次の表は[リカバリポイントのプロパティ]ダイアログボックスで利用可能な情報を記述したものです。このダイアログボックスは、リカバリポイント内のドライブを選択するときに [Recovery Point Browser]から利用可能です。

表 15-10 リカバリポイント内のドライブのプロパティ

プロパティ	説明
説明	ユーザーが入力したリカバリポイントの説明を表示します。
元のドライブ文字	ドライブに割り当てられていた元のドライブ文字を表示します。
クラスタサイズ	FAT、FAT32、または NTFS ドライブで使用しているクラスタサイズ(バイト)を表示します。
ファイルシステム	ドライブで使用しているファイルシステムの種類を表示します。
基本/論理	選択したドライブのパーティションの種類を基本パーティションまたは論理パーティションのいずれかで表示します。
サイズ	ドライブの総サイズ(MB)を表示します。 使用領域と空き領域の両方が含まれます。
使用領域	ドライブ内の使用領域の容量(MB)を表示します。

プロパティ	説明
未使用領域	ドライブ内の未使用領域の容量(MB)を表示します。
不良セクタが含まれています	ドライブ上に不良セクタがあるかどうかを示します。
正常に静止しました	リカバリポイントが作成されたとき、データベースアプリケーションが正しく静止したかどうかを示します。

p.268 の「[リカバリポイント内のドライブのプロパティの表示](#)」を参照してください。

サポートユーティリティについて

Symantec System Recovery Disk 環境にサポートユーティリティがいくつかあります。シマンテック社のテクニカルサポートは、ハードウェア問題のトラブルシューティングの際に、これらのユーティリティを使用するように指示させていただくことがあります。

シマンテック社のテクニカルサポートに問題解決の支援を求める場合は、これらのユーティリティが生成する情報を提供する必要があることがあります。

メモ:これらのツールは、シマンテック社のテクニカルサポートから指示があった場合にのみ使用してください。

p.258 の「[Symantec System Recovery Disk を使用したファイルとフォルダの修復](#)」を参照してください。

ハードディスクドライブのコピー

この章では以下の項目について説明しています。

- ハードディスクドライブのコピーについて
- ハードディスクドライブのコピーの準備
- ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー

ハードディスクドライブのコピーについて

[ハードディスクドライブをコピー]機能を使ってオペレーティングシステム、アプリケーション、データを新しいハードディスクにコピーできます。コピーするハードディスクドライブに複数のパーティションがある場合は、パーティションを一度に1つずつコピーする必要があります。

[ハードディスクドライブをコピー]機能を使って次の操作を行えます。

- 大容量のハードディスクへのアップグレード。
- 2台目のハードディスクを追加し、元のハードディスクを保持します。

データのコピー中に電源やハードウェアに障害が発生しても、元のドライブからデータが消失することはありません。障害が解決された後、処理を再開できます。

始める前に、コピー先ドライブのすべてのパーティションを削除し、割り当てを解除してください。コピー先ドライブをフォーマットしないでください。**Windows** のディスク管理ユーティリティまたは他のディスクユーティリティを使ってコピー先ドライブのパーティションを削除できます。

メモ: 別のコンピュータで使うハードディスクドライブのセットアップには、[ハードディスクドライブをコピー]機能を使うことはできません。

p.255 の「別のハードウェアを使用するコンピュータへのリカバリについて」を参照してください。

ハードディスクドライブのコピーの準備

ハードディスクドライブをコピーする前に、ハードウェアを適切に構成する必要があります。ハードウェアを準備するには、次のステップを実行します。

ドライブのコピーの準備をするには

- 1 次の手順を実行します。
 - ドライブの取り付けに関する製造元の指示を確認します。
 - コンピュータをシャットダウンし、次に電源コードをはずします。
 - 接地用金属に触れて、放電します。
 - コンピュータのカバーをはずします。
- 2 新しいハードディスクドライブのジャンパーの設定を変更して、新しいハードドライブをスレーブドライブにし、データケーブルを接続します。ハードディスクドライブのケーブル選択設定を使う場合は、スレーブとして接続します。
シリアル ATA ドライブ (SATA) を使う場合は、次のステップにスキップします。
- 3 電源ケーブルのコネクタを新しいハードディスクドライブに差し込みます。
- 4 製造元の指示に従って、ベイエリアにドライブを固定します。
- 5 コンピュータを起動します。
- 6 新しいハードディスクドライブを認識するように BIOS 設定を変更します。
SATA ドライブを使う場合は、ブート設定が古いドライブからブートするように設定されていることを確認します。
- 7 BIOS 設定を保存し、コンピュータを再起動します。

p.272 の「ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー」を参照してください。

ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー

別のハードディスクドライブに 1 つのハードディスクドライブをコピーするには、次のステップを実行します。コピーするハードディスクドライブに複数のパーティションがある場合は、パーティションを一度に 1 つずつコピーする必要があります。

メモ: Windows 7 がインストールされているハードディスクドライブをコピーする場合は、システム予約済みパーティションを最初にコピーする必要があります。システム予約済みパーティションのコピーが完了したら、コピー先ドライブの空き領域の他のパーティションをコピーします。

ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブにコピーする方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [ハードディスクドライブをコピー]をクリックします。
- 3 [ようこそ]パネルで、[次へ]をクリックします。
- 4 [コピー元のドライブ]パネルで、コピーするドライブを選択し、[次へ]をクリックします。
コピーするドライブがリストにない場合は、[非表示ドライブを表示します]オプションにチェックマークを付けます。
- 5 [保存先]パネルでは、コピー先のドライブを選択し、[次へ]をクリックしてください。
- 6 [詳細オプション]パネルで、必要なコピーオプションを設定し、[次へ]をクリックします。

p.274 の「[\[詳細\]オプション](#)」を参照してください。

メモ: Windows 7 のシステム予約済みパーティションをコピーするには、[ドライブをアクティブに設定]オプションを選択します。また、[未割り当て領域を最大限に利用するようにドライブのサイズを変更]オプションのチェックマークをはずし、ドライブ名を割り当てないでください。Windows 7 がインストールされているハードディスクドライブから他のパーティションをコピーする場合は、[ドライブをアクティブに設定]オプションを選択しないでください。

- 7 [終了]をクリックして、コピーを開始します。
- 8 ハードディスクドライブの他のパーティションをコピーするには、同じステップを繰り返します。
- 9 ハードディスクドライブをコピーしたら、古いドライブの接続を解除し、次にコピー先ドライブをブートします。

メモ: コピー先ドライブでコンピュータをブートしたら、古いドライブをコンピュータに再接続できます。

p.272 の「[ハードディスクドライブのコピーの準備](#)」を参照してください。

[詳細]オプション

次の表に、[詳細オプション]パネルのオプションを示します。このパネルは[ドライブのコピーウィザード]から利用可能です。

表 16-1 [詳細]オプション

オプション	説明
コピー元のファイルシステムのエラーを確認	ソースドライブをコピーする前に、そのドライブにエラーがないか確認します。ソースドライブとは、コピー元のドライブです。
コピー先のファイルシステムのエラーを確認	ドライブのコピー後にエラーがないかコピー先のドライブを確認します。コピー先のドライブとは、新しいドライブです。
未割り当て領域を最大限に利用するようにドライブのサイズを変更	復元先のドライブの空き領域のサイズに合わせてドライブを拡大します。
ドライブをアクティブ(OS ブート用)に設定	<p>コピー先のドライブをアクティブパーティション(コンピュータのブートドライブ)に設定します。アクティブにできるドライブは 1 つだけです。コンピュータをブートするためには、最初のハードディスクにアクティブなドライブがあり、そのドライブにオペレーティングシステムがインストールされている必要があります。コンピュータはブート時に最初のハードディスクのパーティションテーブルを読み込み、アクティブなドライブを探します。見つかったその場所からブートします。コンピュータをドライブから起動できない場合は、ブートディスクを使用します。Symantec System Recovery Disk を使うことができます。</p> <p>[ドライブをアクティブに設定]オプションは、ベーシックディスク(ダイナミックディスクではない)の場合にのみ有効です。</p>
SmartSector コピーの無効化	<p>データを含むクラスタとセクタのみをコピーすることで、コピー処理を高速化します。</p> <p>セキュリティが強化された環境などのように、データの有無にかかわらず、すべてのクラスタとセクタを元のレイアウトのままコピーすることが望ましい場合もあります。このような場合、このオプションは選択解除する必要があります。</p>
[コピー時に不良セクタを無視]	ディスク上にエラーがある場合でも、ドライブをコピーします。

オプション	説明
MBR をコピー	<p>ドライブから別のドライブに、マスターブートレコードをコピーします。このオプションは、C:ドライブを新しい空のハードディスクドライブにコピーする場合に使用します。</p> <p>ドライブを、バックアップと同じハードディスクドライブ上の別の領域にコピーする場合は、このオプションを選択しないでください。</p> <p>また、コピー先ドライブにパーティションがあり、それらを上書きしたくない場合にも、このオプションを選択しないでください。</p>
プライマリパーティション	<p>コピー先の(新しい)ドライブが基本パーティションになります。</p>
論理パーティション(Logical partition)	<p>コピー先の(新しい)ドライブが拡張パーティション内の論理パーティションになります。</p>
ドライブ文字	<p>パーティションに割り当てるドライブ文字を選択します。</p>

p.272 の「[ハードディスクドライブから別のハードディスクドライブへのコピー](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery Granular Restore Option の 使用

この章では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery Granular Restore Option](#) について
- [Granular Restore Option](#) で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス
- [Granular Restore Option](#) の起動
- [Granular Restore Option](#) で実行できる処理
- 特定のリカバリポイントの内容の確認
- メールボックスのリストア
- 電子メールフォルダの復元
- 電子メールメッセージの復元
- [SharePoint](#) ドキュメントの復元
- ファイルとフォルダの復元

Symantec System Recovery Granular Restore Option について

[Granular Restore Option](#) は、Symantec System Recovery とともに動作する管理ツールで、次のアプリケーションに個別復元機能を提供します。

- Microsoft Exchange™ 2003、2007、2010
- Microsoft SharePoint® 2003、2007、2010
- ファイルとフォルダのデータ

Symantec System Recovery は、ボリュームレベルのリカバリポイントの作成に使用されます。Granular Restore Option を使用すると、これらのリカバリポイントを開いて、Microsoft Exchange メールボックス、フォルダ、個々のメッセージを復元できます。Microsoft SharePoint ドキュメントや、未構造化ファイルとフォルダを復元することもできます。

p.280 の「[Granular Restore Option の起動](#)」を参照してください。

p.281 の「[特定のリカバリポイントの内容の確認](#)」を参照してください。

p.280 の「[Granular Restore Option で実行できる処理](#)」を参照してください。

p.278 の「[Granular Restore Option で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス](#)」を参照してください。

p.282 の「[メールボックスのリストア](#)」を参照してください。

p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。

p.284 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

p.285 の「[SharePoint ドキュメントの復元](#)」を参照してください。

Granular Restore Option で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス

リカバリポイントを作成する場合は、次のガイドラインを参考にしてください。

- 選択したファイルおよびフォルダをバックアップするオプションではなく、コンピュータをバックアップするオプションを選択します。
p.78 の「[ドライブベースのバックアップの定義](#)」を参照してください。
- バックアップするドライブを選択する場合は、システムのすべてのドライブを選択していることを確認します。
p.279 の「[バックアップするドライブを指定する方法](#)」を参照してください。
- 作成するリカバリポイントの種類を選択する場合は、[単体リカバリポイント]ではなく、[リカバリポイントセット]を選択します。この選択によって、後続のリカバリポイントのサイズが非常に小さくなります。
p.81 の「[リカバリポイントの種類オプション](#)」を参照してください。
- バックアップを正常に実行するために、Exchange サーバーまたは SharePoint サーバーの電源を切る必要はありません。ただし、サーバーがビジー状態になりにくい時間帯（たとえば、午前 0 時以降）にバックアップをスケジュールしてください。

p.85 の「[\[詳細なスケジュール\]のオプション](#)」を参照してください。

- マウントポイントを使用している場合は、マウントポイントをバックアップ対象として選択していることを確認します。

p.277 の「[Symantec System Recovery Granular Restore Option について](#)」を参照してください。

バックアップするドライブを指定する方法

Exchange サーバーを保護するには、サーバー上のすべてのドライブが含まれるバックアップジョブを 1 つ作成することをお勧めします。ただし、ストレージグループやメッセージストアのレベルでバックアップを実行することもできます。バックアップが正常に実行されるように、次の事項を考慮してください。

Exchange のインストール先のドライブを含める **Granular Restore Option** では、Exchange サーバーのリカバリポイントを使用して復元操作が実行されます。そのため、Exchange サーバーを定期的にバックアップする必要があります。リカバリポイントを作成する場合、Exchange のインストール先ディレクトリが含まれるドライブを選択する必要があります。

たとえば、Exchange を C:\Program File\Exchsrvr ディレクトリにインストールした場合は、C ドライブ全体がリカバリポイントに含まれていることを確認してください。

バックアップするメッセージストアのストレージグループを含める ストレージグループはメッセージストアの集まりです。各ストレージグループには、メッセージストアへのバッファ書き込みに使用されるトランザクションログが含まれます。保護するメッセージストアのストレージグループのログファイルが含まれるドライブをバックアップする必要があります。

たとえば、**First Storage Group** という名前のストレージグループがあるとします。E:\Exchsrvr\mdbContext にストレージグループのトランザクションログがある場合、リカバリポイントに E ドライブ全体を含める必要があります。複数のストレージグループがある場合は、すべてのストレージグループを同時にバックアップする必要があります。複数のストレージグループを別々のスケジュールでバックアップする場合でも、バックアップに Exchange を含める必要があります。

保護するメッセージストアを含める

1つのメッセージストアは、電子メールを保存するデータベースファイルです。複数のメッセージストアはストレージグループのサブグループです。1つのメッセージストアのリカバリポイントを作成する場合は、そのメッセージストアのストレージグループも含める必要があります。

たとえば、**Message Store (myserver)** という名前のメッセージストアが、`F:\Exchsrvr\mdbdata\Message Store (myserver).stm` に配置されている場合、リカバリポイントに Fドライブ全体を含める必要があります。

Microsoft SharePoint サーバーをバックアップするときにドライブのサブセットを選択できます。ただし、サーバー全体を保護することを推奨します。Exchange の方法とは異なり、SharePoint のバイナリをバックアップする必要はありません。ただし、SharePoint データが含まれるすべてのボリュームをバックアップする必要があります。

p.278 の「[Granular Restore Option で使用するリカバリポイントを作成する場合のベストプラクティス](#)」を参照してください。

Granular Restore Option の起動

Granular Restore Option を起動する方法は使用する Windows のバージョンによって異なります。

Granular Restore Option を起動する方法

- ◆ 次のいずれかを実行します。
 - Symantec System Recovery の [ツール] ページで、[Granular Restore Option を実行] をクリックします。
 - Windows のクラシックタスクバーで、[スタート] > [プログラム] > [Symantec System Recovery] > [Granular Restore Option] の順にクリックします。
 - Windows 2003、2008、XP、Vista、7 のタスクバーで、[スタート] > [すべてのプログラム] > [Symantec System Recovery] > [Granular Restore Option] の順にクリックします。

p.280 の「[Granular Restore Option で実行できる処理](#)」を参照してください。

p.281 の「[特定のリカバリポイントの内容の確認](#)」を参照してください。

Granular Restore Option で実行できる処理

Granular Restore Option を使用して次のタスクを実行できます。

表 17-1 Granular Restore Option タスク

タスク	詳細情報
<ul style="list-style-type: none"> ■ Exchange メールを復元する。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 特定のリカバリポイントを開く。 ■ メールボックスを復元する。 ■ 電子メールフォルダを復元する。 ■ 電子メールメッセージを復元または転送する。 	<p>p.282の「メールボックスのリストア」を参照してください。</p> <p>p.283の「電子メールフォルダの復元」を参照してください。</p> <p>p.284の「電子メールメッセージの復元」を参照してください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ SharePoint ドキュメントを復元する。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 特定のリカバリポイントを開く。 ■ 消失したドキュメントを検索または参照する。 ■ ドキュメントを復元する。 	<p>p.285の「SharePoint ドキュメントの復元」を参照してください。</p>
<ul style="list-style-type: none"> ■ 構造化されていないファイルおよびフォルダを復元する。 <ul style="list-style-type: none"> ■ 1つまたは複数のリカバリポイントを開く。 ■ 消失したファイルやフォルダを検索または参照する。 ■ 消失したファイルおよびフォルダを復元する。 ■ ファイルの1つのバージョンを復元する。 	<p>p.286の「ファイルとフォルダの復元」を参照してください。</p>

p.277の「[Symantec System Recovery Granular Restore Option について](#)」を参照してください。

特定のリカバリポイントの内容の確認

リカバリポイントを開くと、メールボックス、電子メールフォルダとメッセージ、SharePoint ドキュメント、ファイルとフォルダを復元できます。

特定のリカバリポイントを開く方法

- 1 表示メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行]Granular Restore Optionをクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く]ダイアログボックスで必要なオプションを選択し、[OK]をクリックします。

p.282の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。

- 4 右上で別の日付を選択すると、表示するバックアップ日を変更することができます。

p.280の「[Granular Restore Option で実行できる処理](#)」を参照してください。

[リカバリポイントを開く]のオプション

次の表は[リカバリポイントを開く]ダイアログボックスのオプションを記述したものです。このダイアログボックスは **Granular Restore Option** を実行するときに利用可能です。

表 17-2 [リカバリポイントを開く]のオプション

オプション	説明
このコンピュータの最後のリカバリポイントを使用する	作業しているコンピュータの最後のリカバリポイントを使用してリカバリポイントを開きます。
代替システムインデックス(.sv2i)ファイルを使用する	システムインデックスファイルを使用してリカバリポイントを開きます。
システムインデックスファイル名	修復に使うシステムインデックスファイルのパスとファイル名を指定できます。
参照	システムインデックスファイルを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、システムインデックスファイルを選択できます。
別のコンピュータのリカバリポイントを使用する	別のコンピュータに存在するリカバリポイントを開きます。
参照	リカバリポイントを含んでいるパスを参照できます。 たとえば、外付け(USB)ドライブ、ネットワーク上の場所、リムーバブルメディアを参照して、リカバリポイントを選択できます。
コンピュータ名	別のコンピュータの指定したパスにあるリカバリポイントファイルと仮想ディスクファイルの名前を識別します。

p.281 の「[特定のリカバリポイントの内容の確認](#)」を参照してください。

メールボックスのリストア

復元されたメールボックスは、リカバリポイントの作成時にユーザーのメールボックスに含まれていたすべての電子メールで構成されます。復元されたメールボックスは、PST ファイルとしてディスク上に保存されます。

Microsoft Outlook を使用すると、ファイルを開いて内容を表示できます。復元されたメールボックスを Outlook で開いた後、電子メールやフォルダをドラッグして元の場所に戻すことができます。

メモ: 多くの場合、1 つのメッセージを見つけるよりもユーザーのメールボックス全体を復元の方が簡単です。

メールボックスを復元する方法

- 1 表示メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く]ダイアログボックスでは、メールが Exchange サーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
p.282 の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [Exchange メール]タブで、メールボックスのリストから、復元するメールボックスを選択してください。
- 6 メールボックスを右クリックして、[メールボックスの修復]を選択します。
- 7 復元したメールボックスを配置したいフォルダを選択し、次に[保存]をクリックしてください。

メモ: メールボックスのサイズが大きい場合、共有フォルダにコピーする必要がある場合があります。

p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。

p.284 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

電子メールフォルダの復元

メールボックス全体を復元する代わりに、フォルダ単位で復元を行うことができます。たとえば、送信したメッセージのコピーが必要な場合は、[送信済みアイテム]フォルダのみを復元する方が早く済む場合があります。

復元されたフォルダは、PST ファイルとしてディスク上に保存されます。Microsoft Outlook を使用すると、フォルダを開いて内容を表示できます。復元された電子メールフォルダを Outlook で開いた後、電子メールやフォルダをドラッグして元の場所に戻すことができます。

電子メールフォルダを復元する方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く]ダイアログボックスで、メールが Exchange サーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
p.282 の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [Exchange メール]タブで、復元を要求したユーザーのメールボックスを選択します。
- 6 フォルダのリストで復元するフォルダを右クリックして、[フォルダの修復]をクリックします。
- 7 復元したフォルダを配置するフォルダを選択して、[保存]をクリックします。

p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。

p.284 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

電子メールメッセージの復元

Granular Restore Option を使って個々の電子メールメッセージを復元することができます。個々のメッセージは、.msg ファイル形式でディスク上に保存したり、ユーザーに直接転送したりできます。保存されたメッセージファイルの内容を開いて表示するには、Microsoft Outlook を使用します。

電子メールメッセージを復元する方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く]ダイアログボックスで、メールが Exchange サーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
p.282 の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。
- 5 [Exchange メール]タブをクリックし、復元を要求したユーザーのメールボックスを選択します。
- 6 復元するメッセージを含むフォルダを選択します。

- 7 復元するメッセージを選択してください。

メモ: 列見出しをクリックすると、リストをソートできます。また、メッセージのリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力すると、メッセージの件名を検索できます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。

- 8 ユーザーに電子メールメッセージを返すには、次のいずれかを実行してください:
 - **Microsoft Outlook** がインストールされている場合は、メッセージをダブルクリックして **Outlook** で開きます。**Outlook** を使って所有者にメッセージを送り返すことができます。
 - **Outlook** のメッセージを転送する場合は、メッセージを右クリックし、次に[次へ]をクリックしてください。
Outlook は新しいメッセージを開きます。転送するメッセージは添付ファイルとして含まれます。元の所有者にこのメッセージを転送できます。
 - ディスクにメッセージを保存する場合は、メッセージを右クリックし、[メッセージの修復]をクリックします。ファイル名を入力し、次に[保存]をクリックしてください。電子メールメッセージがディスクに保存されます。**Outlook** を使ってメッセージを開くことができます。

p.282 の「[メールボックスのリストア](#)」を参照してください。

p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。

SharePoint ドキュメントの復元

Symantec System Recovery は、Microsoft SharePoint サーバーのバックアップドキュメントの復元に使用できます。SharePoint ドキュメントはローカルシステムに復元されます。必要に応じて、Microsoft SharePoint を使用してドキュメントを SharePoint サーバーに戻すことができます。

SharePoint ドキュメントを復元する方法

- 1 [表示]メニューで、[ツール]をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行]をクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く]ダイアログボックスで、メールが Exchange サーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
p.282 の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK]をクリックします。

- 5 [SharePoint ドキュメント] タブで、復元するファイルを参照または検索します。

メモ: 列見出しをクリックすると、リストをソートできます。ドキュメントリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力することができます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。

- 6 内容を表示する場合または復元する場合は対象のファイルをクリックし、横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。
- 7 [タスク] メニューで、**Restore Files** をクリックし、復元先を選択します。
p.286 の「[ファイルとフォルダの復元](#)」を参照してください。
p.282 の「[メールボックスのリストア](#)」を参照してください。
p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。
p.284 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

ファイルとフォルダの復元

Granular Restore Option は構造化されていないファイルとフォルダの復元に使うことができます。この機能は、消失したファイルやフォルダを見つけるために、複数のリカバリポイント(複数のバックアップ日付)を検索する必要がある場合に特に便利です。

ファイルまたはフォルダを復元する方法

- 1 [表示] メニューで、[ツール] をクリックします。
- 2 [Granular Restore Option を実行] をクリックします。
- 3 [リカバリポイントを開く] ダイアログボックスで、メールが **Exchange** サーバー上に存在した期間内で最新の日時のリカバリポイントを開きます。
p.282 の「[\[リカバリポイントを開く\]のオプション](#)」を参照してください。
- 4 [OK] をクリックします。
- 5 [ファイルやフォルダ] タブで、復元するファイルを参照または検索します。
- 6 一度に複数のリカバリポイントを表示できます。複数のリカバリポイントが含まれるファイルシステムを表示するには、[バージョン] をクリックしてください。リスト内の表示するバージョンにチェックマークを付けて選択します。

列見出しをクリックすると、リストをソートできます。ドキュメントリストの近くにある検索フィールドに検索する用語を入力することができます。検索ボックスの文字を追加したり削除したりすると、自動的に結果が変更されます。

- 7 内容を表示する場合または復元する場合は対象のファイルをクリックし、横にあるチェックボックスにチェックマークを付けます。
- 8 [タスク]メニューで、[Restore Files]をクリックし、復元先を選択します。

メモ: 複数のリカバリポイントを表示する場合、複数のバージョンのファイルが利用可能であれば、バージョンのリストを展開できます。各ファイルの隣にあるプラス記号をクリックします。復元するファイルを選択した後で、目的のファイルのバージョンを選択します。

- p.285 の「[SharePoint ドキュメントの復元](#)」を参照してください。
- p.282 の「[メールボックスのリストア](#)」を参照してください。
- p.283 の「[電子メールフォルダの復元](#)」を参照してください。
- p.284 の「[電子メールメッセージの復元](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery を使用したデータベースの バックアップ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery](#) を使用したデータベースのバックアップについて
- [Symantec System Recovery](#) を使用した VSS 対応データベースのバックアップについて
- [Symantec System Recovery](#) を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて

Symantec System Recovery を使用したデータベースの バックアップについて

Symantec System Recovery を使用すると、Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS) 対応データベースと VSS 非対応データベースの両方をバックアップできます。VSS 対応データベースのバックアップについて、Symantec System Recovery は VSS と統合されて、バックアップ処理を自動化します。VSS 非対応データベースのバックアップについては、データベースのコールドリカバリポイントまたはホットリカバリポイントを手動または自動で作成できます。

p.290 の「[Symantec System Recovery](#) を使用した VSS 対応データベースのバックアップについて」を参照してください。

p.291 の「[Symantec System Recovery](#) を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて」を参照してください。

Symantec System Recovery を使用した VSS 対応データベースのバックアップについて

Symantec System Recovery は、Microsoft VSS と統合されて、次のような VSS 対応データベースのバックアップ処理を自動化します。

- Exchange Server 2003 以降
- SQL Server 2005 以降
- Windows Server 2003 ベースのドメインコントローラまたはそれ以降

VSS 対応データベースは自動的に有効になり、無効にすることはできません。VSS により、管理者はサーバー上のボリュームのシャドウコピーバックアップを作成できます。シャドウコピーには、すべてのファイル（開いているファイルを含む）が含まれます。

リカバリポイントを作成するとき、Symantec System Recovery は VSS (Volume Shadow Copy Service) に警告します。VSS は、VSS 対応データベースを一時的に休止 (スリープ) 状態にします。この休止状態の間、データベースがバックアップされると同時に、トランザクションログに対して書き込みが続行されます。データベースが静止した後、Symantec System Recovery はスナップショットを作成します。スナップショットの作成が完了すると VSS に通知されます。データベースが復帰すると、トランザクションログがデータベースに対してコミットされます。同時に、リカバリポイントが作成されます。データベースはスナップショット作成の間だけ休止され、リカバリポイント作成の残りのプロセスの間はアクティブになります。

Symantec System Recovery は、VSS テクノロジーを実装した Exchange Server 2003 以降をサポートします。ただし、データベースの負荷が高い場合には、VSS 要求が無視される可能性があります。リカバリポイントの作成は負荷が最も低い時間帯に実行してください。

指定したデータベースの最新の Service Pack がインストールされていることを確かめてください。

メモ: Exchange データベースのバックアップを Symantec System Recovery とともに実行する場合には、他のバックアップアプリケーションは不要です。

p.291 の「[Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて

Symantec System Recovery を使うと、VSS 非対応データベースの手動コールドバックアップ、自動ウォームバックアップ、ホットバックアップを作成できます。

p.291 の「[Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk を使用したコールドバックアップの手動作成について](#)」を参照してください。

p.292 の「[Symantec System Recovery を使用したウォームバックアップの自動作成について](#)」を参照してください。

p.291 の「[コールドバックアップの手動作成](#)」を参照してください。

p.293 の「[ウォームバックアップの自動作成](#)」を参照してください。

p.293 の「[Symantec System Recovery を使用したホットバックアップの作成](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk を使用したコールドバックアップの手動作成について

コールド(オフライン)バックアップを手動で作成すると、すべてのデータベーストランザクションをハードディスクに保持できます。その後、Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk のいずれかを使用してリカバリポイントを作成し、データベースを再起動します。

p.291 の「[コールドバックアップの手動作成](#)」を参照してください。

コールドバックアップの手動作成

次の表は Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk を使ってコールドバックアップを手動で作成する手順の概略を示したものです。

表 A-1 コールドバックアップの手動作成

手順	処理	説明
手順 1	データベースの停止	バックアップするデータベースを手動で停止します。

手順	処理	説明
手順 2	リカバリポイントの作成	<p>Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk を使ってリカバリポイントを作成します。</p> <p>次のいずれかを実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Symantec System Recovery を使用し、[バックアップを実行]または[ワнтаイムバックアップ]機能を使ってバックアップをすぐに実行します。 <p>p.97 の「Symantec System Recovery からのワнтаイムバックアップの実行」を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ Symantec System Recovery Disk を使用して、ワнтаイムのコールドバックアップを作成します。 <p>p.98 の「Symantec System Recovery Disk からのワнтаイムバックアップの実行について」を参照してください。</p>
手順 3	データベースの再起動	<p>コンソールの[監視]ページにリカバリポイントのプログレスバーが表示されたら、手動でデータベースを再起動します。</p> <p>データベースが再起動されている間に、実際のリカバリポイントが仮想ボリュームリカバリポイントから即時に作成されます。</p>

p.291 の「[Symantec System Recovery または Symantec System Recovery Disk を使用したコールドバックアップの手動作成について](#)」を参照してください。

p.291 の「[Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery を使用したウォームバックアップの自動作成について

バックアップジョブのコマンドファイルを実行することによって、VSS 非対応データベースのウォームバックアップの作成を自動化できます。データ取得前にこのコマンドファイルを実行してデータベースを一時的に停止(または休止)し、すべてのトランザクションログをハードディスクに保持します。Symantec System Recovery により、すぐに仮想ボリュームリカバリポイントが作成されます。

仮想ボリュームリカバリポイントからリカバリポイントが作成される間、バックアップジョブで 2 番目のコマンドファイルを実行し、データベースを再起動します。

データベースは一時的にリカバリポイント状態になりますが、仮想ボリュームスナップショットの作成は数秒で済みます。その結果、最小限の数のログファイルが作成されます。

p.293 の「[ウォームバックアップの自動作成](#)」を参照してください。

ウォームバックアップの自動作成

次の表は Symantec System Recovery を使ってウォームバックアップを自動的に作成する手順の概略を示したものです。

表 A-2 ウォームバックアップの自動作成

手順	処理	説明
手順 1	バックアップの定義	次に示すリカバリポイントの各段階で使用するコマンドファイルを作成し、そのコマンドファイルを含むバックアップを定義します。 <ul style="list-style-type: none"> ■ データ取得前: データベースを停止するコマンドファイル ■ データ取得後: データベースを再起動するコマンドファイル
手順 2	バックアップジョブの実行	Symantec System Recovery を使用して、コマンドファイルを含むバックアップジョブを実行します。

p.292 の「[Symantec System Recovery を使用したウォームバックアップの自動作成について](#)」を参照してください。

p.87 の「[バックアップ中のコマンドファイルの実行について](#)」を参照してください。

p.291 の「[Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

Symantec System Recovery を使用したホットバックアップの作成

コールドバックアップまたはウォームバックアップを作成できない場合、VSS 非対応データベースのバックアップとしてホット(またはオンライン)バックアップを作成します。

Symantec System Recovery では、クラッシュ整合性リカバリポイントが作成されます。このようなリカバリポイントは、電源障害時に実行していたシステムの状態に相当します。この種類のエラーから修復できるデータベースは、クラッシュ整合性リカバリポイントからの修復が可能です。

ホットバックアップを作成する方法

- ◆ データベースを停止したり再起動したりせずにリカバリポイントを作成するには、Symantec System Recovery を使います。

Symantec System Recovery により、仮想ボリュームリカバリポイントが即座に作成されます。この仮想ボリュームリカバリポイントからリカバリポイントが作成されます。

p.291 の「[Symantec System Recovery を使用した VSS 非対応データベースのバックアップについて](#)」を参照してください。

Active Directory のバックアップ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Active Directory の役割について](#)

Active Directory の役割について

Symantec System Recovery でドメインコントローラを保護する場合は、次の事項に注意してください。

- ドメインコントローラが Windows Server 2003 の場合は Microsoft Volume Shadow Copy Service (VSS) がサポートされます。Symantec System Recovery は自動的に VSS を呼び出して Active Directory データベースのバックアップの準備を行います。
- ドメインに参加するためには、すべてのドメインコンピュータは、ドメインコントローラとトラストトークンをネゴシエートする必要があります。このトークンは、デフォルトで 30 日ごとに更新されます。このタイムフレームは変更することができ、セキュリティが確保されたチャネルトラストと呼ばれます。一方、リカバリポイントに含まれるトラストトークンは、ドメインコントローラによって自動的に更新されません。したがって、古いトークンが含まれるリカバリポイントを使用して修復されたコンピュータは、ドメインに参加できません。そのようなコンピュータがドメインに参加するためには、適切な資格情報を持つユーザーによってドメインに再度追加される必要があります。

Symantec System Recovery では、修復プロセスの開始時にコンピュータがドメインに参加する場合、このトラストトークンは自動的に再度確立されます。

- ほとんどの場合、ドメインコントローラは非公式に復元される必要があります。ドメインコントローラを非公式に復元することによって、Active Directory の古いオブジェクトが復元されないようにすることができます。古いオブジェクトは、tombstone (廃棄) と呼ばれます。Active Directory は設定された制限よりも古いデータは復元しません。ドメインコントローラの有効なリカバリポイントの復元は、非公式の復元と同じことにな

ります。実行する復元の種類を決定する際には、Microsoft 社のドキュメントを参照してください。非公式な復元では、tombstone の競合を回避できます。

VSS 非対応のドメインコントローラについて詳しくは Web ページにあるホワイトペーパーの「Protecting Active Directory」を参照してください。

<http://sea.symantec.com/protectingdc> (英語)

また、シマンテック社のナレッジベースの次の文書も参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-269-16>

Microsoft の仮想環境のバックアップ

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて](#)
- [Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について](#)

Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて

Microsoft Windows 7 と Windows Server 2008 R2 で仮想ハードディスク (VHD) の使用がサポートされるようになりました。Microsoft 社では、同じバックアップジョブでの物理ディスクおよびその物理ディスク上の VHD のバックアップはサポートされていません。この制限は Symantec System Recovery にも適用されます。Symantec System Recovery を使用して同じバックアップジョブで物理ディスクとそれに対応する VHD をバックアップすることはできません。また、別の VHD でホストされている VHD または別の VHD 内にネストされている VHD をバックアップする機能もサポートされていません。物理ディスクおよびその物理ディスク上の VHD をバックアップする場合は、各ディスクに対して個別のバックアップを作成する必要があります。

VHD をホストする物理ディスクのバックアップは、同じバックアップにその VHD を別のボリュームとして含めないかぎりサポートされます。VHD をホストする物理ディスクがバックアップする場合、その VHD は物理ディスクのバックアップの一部である別のファイルとして処理されます。

VHD は物理ディスクのホスト (ボリューム) に接続したり、物理ディスクのホストから切り離したりすることができます。Microsoft 社では、バックアップの前にホストボリュームに保存されている VHD を切り離すことを推奨しています。バックアップの前に VHD を切り離さないと、バックアップ時にホストボリュームで一貫性のない VHD のコピーが作成される可能性があります。ホストボリュームを復元した後、VHD ファイルを再接続できます。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-2>

VHD のバックアップについて詳しくは Microsoft 社の Web サイトを参照してください。

[http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd440865\(WS.10\).aspx](http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/dd440865(WS.10).aspx)

Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元に関する情報の入手先

p.298 の「[Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について](#)」を参照してください。

Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップと復元について

Microsoft Hyper-V 仮想マシンのバックアップを作成するには、仮想マシンがホストされるコンピュータのボリュームをバックアップする必要があります。ホストコンピュータのライブバックアップまたはシステム状態バックアップのいずれかを作成します。特定の仮想マシンをバックアップしたり、復元したりすることはできません。ライブバックアップは仮想マシンが実行している間に作成されます(ホットバックアップ)。

システム状態バックアップは、次のいずれかの場合に作成されます。

- 仮想マシンのゲストオペレーティングシステムが動作していない(コールドバックアップ)。
- Hyper-V VSS の統合コンポーネントが仮想マシンにインストールされていない。

メモ: Symantec System Recovery では、クラスタ共有ボリュームをバックアップできません。そのような構成のボリュームは、クラスタ化された Hyper-V ホストコンピュータのそれぞれからアクセス可能であるため、特定のボリュームをバックアップのためにロックできません。ただし、1 つのホストがディスクに排他的にアクセスできるため、クラスタ化されたディスクを Symantec System Recovery でバックアップできます。

実行中の仮想マシンのバックアップを作成するには、次の条件を満たす必要があります。

- ゲストオペレーティングシステムが実行されている必要があります。
- ゲストマシンが Windows Server 2003 以降を実行している必要があります。
ゲストマシンが Windows 2000、Windows XP 32 ビット版または 64 ビット版を実行している場合は、システム状態のバックアップ(コールドバックアップ)のみを作成できます。
- Hyper-V VSS の統合コンポーネントが、バックアップされる各仮想マシンにインストールされている必要があります。

Virtual Server 2005 から Hyper-V に仮想マシンを移動した場合は、最初に仮想マシンから Virtual Server 2005 の統合コンポーネントをアンインストールします。Virtual Server 2005 の統合コンポーネントの後に、Hyper-V VSS の統合コンポーネントをインストールできます。

- ゲストの仮想マシンは、ダイナミックディスクではなく、ベーシックディスクのみを使用するように設定する必要があります。
この設定は、Windows の仮想マシンをインストールするためのデフォルトです。
- 固定ディスク上のすべてのボリュームで、スナップショットの作成がサポートされている必要があります。

これらの条件が満たされていない状況でバックアップを行うと、Symantec System Recovery で作成されるシステム状態のリカバリポイントは破損になります。破損なリカバリポイントは、システム障害や停電が発生したかのような状態で仮想マシンをキャプチャします。

Recovery Point Browser を使って、ホストコンピュータのリカバリポイントから特定の仮想マシンを復元できます。Recovery Point Browser は、仮想マシンを構成するファイルを抽出するために使います。ホストコンピュータのリカバリポイントには、復元対象の仮想マシンを保持するボリュームが含まれている必要があります。

Recovery Point Browser を使ってリカバリポイントからファイルを開き、復元する方法に関する情報を参照してください。

p.179 の「リカバリポイント内のファイルの表示および復元」を参照してください。

仮想マシン上のデータベースをバックアップするときの Hyper-V の制限事項について詳しくは、次のシマンテック社のナレッジベースを参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-2>

マイクロソフト社の仮想ハードディスクのバックアップについて詳しくは、次の情報を参照してください。

p.297 の「Microsoft 仮想ハードディスクのバックアップについて」を参照してください。

<http://entsupport.symantec.com/umi/V-306-2>

Symantec System Recovery 2013 と Windows Server 2008 Server Core の使用

この付録では以下の項目について説明しています。

- [Symantec System Recovery 2013 と Windows Server 2008 Core について](#)
- [コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール](#)

Symantec System Recovery 2013 と Windows Server 2008 Core について

Windows Server 2008 Core には、Windows の他のバージョンで利用できる従来のグラフィカルユーザーインターフェース (GUI) が含まれていません。これは、主にコマンドラインインターフェースのコマンドを使用してインストールされ、管理されます。

Symantec System Recovery 2013 を Windows Server 2008 Core にインストールできますが、エージェントのみがインストールされます。Windows Server 2008 Core では、Microsoft .NET はサポートされません。したがって、Symantec System Recovery GUI をインストールできません。Symantec System Recovery は、ヘッドレスエージェントによってのみ Windows Server 2008 Core でサポートされます。Symantec System Recovery 2013 は、コマンドラインのコマンドを使ってインストールできます。また、リモートコンピュータからエージェントをインストールする (プッシュする) こともできます。

Windows Server 2008 Core コンピュータのバックアップと復元についてサポートされる唯一の方法は、1 対 1 管理です。Windows Server 2008 Core コンピュータにエージェントをインストールしたら、次のいずれかを実行しているリモートコンピュータからそのエージェントに接続します。

- Symantec System Recovery 2013
- Symantec System Recovery 2013 Management Solution

Windows Server 2008 Core コンピュータにリモートからエージェントをインストールする前に、サーバーへのアクセスを許可するようにファイアウォールを設定する必要があります。デフォルトでは、ファイアウォールはサーバーへのアクセスを許可しないように設定されています。

Windows Server 2008 Core コンピュータのファイアウォールの設定について詳しくは、マイクロソフト社の Web サイトを参照してください。

64 ビット版 Windows 上の Windows (WoW64) は、Windows オペレーティングシステムのサブシステムで、64 ビット版の Windows で 32 ビット版アプリケーションを実行するために必要になります。これはデフォルトでインストールされており、64 ビット版の Windows すべてに含まれています。Windows Server 2008 Core R2 コンピュータの WoW64 をアンインストールした場合は、Symantec System Recovery 2013 をインストールする前に再インストールする必要があります。

p.302 の「[コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール](#)」を参照してください。

コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール

Windows Server 2008 Core システムに Symantec System Recovery 2013 をインストールする場合は次のオプションがあります。それらを次に示します。

- GUI サポート付きのフルインストール
p.302 の「[GUI サポート付きのフルインストールの実行](#)」を参照してください。
- ログ付きのフルサイレントインストール
p.303 の「[ログを使用した完全なサイレントインストールの実行](#)」を参照してください。
- ログ付きのエージェントのみのサイレントインストール
p.303 の「[ログを使用したエージェントのみのサイレントインストールの実行](#)」を参照してください。

GUI サポート付きのフルインストールの実行

次の表に、GUI サポート付きのフルインストールのオプションを使って Symantec System Recovery 2013 をインストールする手順を簡単に示します。

表 D-1 GUI サポート付きのフルインストールのオプションを使った Symantec System Recovery 2013 のインストール

手順	処理	説明
手順 1	Browser.exe の実行	Symantec System Recovery 2013 DVD で、Browser.exe を参照して実行します。 インストールの残りの手順を実行するグラフィカル環境 (GUI) が起動されます。
手順 2	インストールの完了	インストールウィザードの手順に従ってインストールを完了します。 Symantec System Recovery がフルインストールされた場合でも、Windows Server 2008 Core ではエージェントのみが必要とされ、使用されます。

p.302 の「コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール」を参照してください。

ログを使用した完全なサイレントインストールの実行

ログを使用した完全なサイレントインストールのオプションを使って Symantec System Recovery 2013 をインストールする手順を次に示します。

ログを使用した完全なサイレントインストールのオプションを使って Symantec System Recovery 2013 をインストールするには

- 1 Symantec System Recovery 2013 DVD で、インストールディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
Setup.exe /S: /FULL:
```

完全な Symantec System Recovery がインストールされても、Windows Server 2008 Core ではエージェントのみが使用され、必要になります。

p.302 の「コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール」を参照してください。

ログを使用したエージェントのみのサイレントインストールの実行

ログを使用したエージェントのみのサイレントインストールのオプションを使って Symantec System Recovery 2013 をインストールする手順を次に示します。

ログを使用したエージェントのみのサイレントインストールのオプションを使って Symantec System Recovery 2013 をインストールするには

- 1 Symantec System Recovery 2013 DVD で、インストールディレクトリに移動します。
- 2 次のコマンドを実行します。

```
Setup.exe /s: /SERVICE:
```

p.302 の「[コマンドを使用した Windows Server 2008 Core への Symantec System Recovery 2013 のインストール](#)」を参照してください。

記号

- .sv2i、複数ドライブの復元に使用 242
- 「オプションを指定してバックアップを実行」機能 120
- アイデアの共有 19
- アクセス、ユーザーまたはグループを許可または禁止 145
- アップグレード、Symantec System Recovery の評価版 26
- アーカイブ、リカバリポイントのコピー 188
- イベントログ
 - トラブルシューティングでの使用 164
 - 説明 164
- イベント起動のバックアップ
 - ThreatCon レスポンスの有効化 126
 - 有効化 124
- インストール
 - Symantec System Recovery Monitor 33
 - 手順 27
- インストール
 - サポートされるファイルシステム 23
 - サポートされるリムーバブルメディア 23
 - システムの必要条件 21
 - 後 30
 - 準備 21
 - 無効な機能 24
- ウイルス、リカバリポイントのチェック 177
- ウォームバックアップ、自動作成 292
- エラー
 - 通知の設定
 - 警告: 送信する電子メールの設定 60
- エラーメッセージ、表示または非表示の設定 51
- エージェント
 - Microsoft サービス 139
 - サービスのトラブルシューティング 139
 - セキュリティの設定 145
 - 依存関係、表示 141、144
 - 修復操作の設定 143
 - 開始、停止、再起動 141
- エージェント、概要 138
- エージェントのブッシュインストール 133
- エージェントの停止 141
- エージェントの再起動 141
- エージェントの配備
 - Windows Vista 133
 - 使用 133
- エージェントの開始 141
- エージェントセキュリティの設定 145
- オフサイトコピー
 - リカバリポイントのコピー 103
 - 使用する外部ドライブへの一意の名前の割り当て 56
 - 説明 103
- オプション、デフォルトの設定 47
- オペレーティングシステム、複数を含むコンピュータのバックアップ 74
- 概要
 - コンソールの表示 174
- 仮想ディスク
 - コンピュータのリカバリ 250
- カテゴリ、ファイルの種類の管理 53
- 管理者、Symantec System Recovery の実行 148
- 緊急事態
 - コンピュータのリカバリ 242
 - コンピュータのリカバリ、について 237
- クラスタ化された共有ボリューム 298
- コンピュータ
 - 仮想ディスクファイルからのリカバリ 250
 - リカバリ 242
 - リカバリ、について 237
- コンピュータ
 - CD または DVD ブート用の設定 241
 - コンピュータリストへの追加、リモート 132
 - コンピュータリストへの追加、ローカル 133
 - リカバリ 38
 - 修復 37
- コンピュータのエージェント
 - サービス、確認 138
 - 説明 138
- コンピュータのエージェントサービスの停止 138
- コンピュータのエージェントサービスの確認 138
- コンピュータリスト
 - リモートコンピュータの追加 132
 - ローカルコンピュータの追加 133
- コールドバックアップ
 - 手動作成 291

- 概要 98
- サポートユーティリティ 270
- サービス
 - エージェントの使用 139
 - エージェントの開始、停止、再起動 141
 - 使用のベストプラクティス 140
- 資格情報、エージェントの変更 148
- システムの必要条件 21
- Symantec System Recovery Monitor 34
- システムインデックスファイル、複数ドライブのリカバリに使用 242
- システムトレイアイコン
 - エラーメッセージの表示または非表示 51
 - デフォルト設定の調整 51
 - 状態メッセージの表示または非表示 51
 - 表示または非表示 51
- システムドライブ
 - 修復 37
- システムドライブ、修復 38
- 修復
 - コンピュータ(ドライブ C) 237
 - スケジュール、バックアップを編集 128
 - スロットル、バックアップ中に調整 51
 - セカンダリドライブ、修復 221
- セキュリティ
 - エージェント 129、145
 - 他のユーザーにバックアップ権限を付与 129
 - 他のユーザーにバックアップ権限を付与する 145
 - 権限を許可または禁止 145
- タブ、イベントとログファイル 140
- デフォルトオプション
 - 設定 169
- ディスク、再スキャン 152
- ディスクの再スキャン 152
- ディスクメディア、サポート 23
- デバイス、サポートされるストレージ 23
- デフォルトオプション、設定 47
- デフォルト設定、Symantec System Recovery Agent に対する変更 141
- デュアルブートのコンピュータ、バックアップ 74
- デュアルブートのコンピュータのバックアップ 74
- データベース
 - VSS 対応のバックアップ 290
 - VSS 非対応のバックアップ 291
- ドライブ
 - システムインデックスファイルを使って複数のリカバリ 242
- ドライブベースのバックアップ
 - 定義 78
- トラブルシューティング、エージェント 139
- ドメインコントローラ、Symantec System Recovery を使用した保護 295
- ドメインユーザー、Windows Server 2003 SP1 での権限の付与 137
- ドライブの検証 37～38
- ドライブ
 - Symantec System Recovery Disk 内からのプロパティの表示 268
 - コピー 271
 - リカバリポイント内での表示 181
 - 修復 215
- ドライブのコピー 271
- ドライブベースのバックアップ
 - 概要 66、184
 - 説明 77
- ドライブ文字、リカバリポイントに割り当てる 177
- ネットワーク、バックアップ中にスロットルを調整 51
- ネットワークサービス
 - Symantec System Recovery Disk での使用 261
 - Symantec System Recovery Disk での起動 262
 - 接続の設定 265
 - 静的 IP アドレスの割り当て 266
- ネットワークドライブ、マッピング方法 264
- ネットワーク資格情報、入力する場合のルール 86
- バックアップ
 - ドライブベースの定義 78
- ハードディスク
 - プライマリのリカバリ 242
- ハードディスク
 - 修復 215
 - 再スキャン 152
- ハードディスクドライブ、別のドライブへのコピー 272
- バックアップ
 - Symantec System Recovery Disk からのワンタイム、概要 98
 - Windows からのワンタイム 97
 - イベント起動の有効化 124
 - オプションを指定して実行 120
 - キャンセル 122
 - コンピュータのパフォーマンス重視の低速 122
 - スケジュールの編集 128
 - デュアルブートのコンピュータ 74
 - データベース、VSS 対応 290
 - データベース、VSS 非対応 291
 - ドライブベースの定義について 77
 - ドライブベースの高度なオプションの設定 85、193
 - バックアップ先の選択 72

- バックアップ後の作業 69
- ヒント 70
- ファイルおよびフォルダ 185
- ファイルとフォルダについて 109
- ファイルとフォルダのバックアップ中のフォルダの除外 109
- 中に実行する内容 69
- 今すぐ実行 119
- 他のユーザーにバックアップ定義を許可 129
- 保存場所の管理 184
- 削除 128
- 最初の定義 62
- 正常終了の検証 123
- 無効化 128
- 状態の表示 123
- 監視 151
- 種類 66
- 設定を編集 124
- 詳細オプションの編集 92
- 進行状況の表示 94
- 高速 122
- バックアップの実行に関するヒント 70
- バックアップの無効化 128
- バックアップの状態 123
- バックアップの進行状況、表示 94
- バックアップを停止 122
- バックアップジョブ、詳細オプションの編集 92
- バックアップデータ
 - パスワードによる保護 194
 - ファイルとフォルダの修復のための使用 216
 - 自動管理 212
- バックアップ中のパフォーマンス、ネットワーク用に調整 51
- バックアップ保存場所、概要 184
- バックアップ先
 - 移動 213
- ファイル
 - バージョンの検索 212
 - ファイルおよびフォルダのバックアップからの削除、手動 211
 - 消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 215
- ファイルおよびフォルダ
 - リカバリポイントに保存された状態から開く 221
 - リカバリポイントを使った復元 217
 - 検索 221
 - 消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 215
- ファイルおよびフォルダのバックアップ
 - バックアップデータを使用した修復 216
 - ファイルの削除 211
 - フォルダの除外 109
 - 説明 109、185
- ファイルおよびフォルダのバックアップデータ
 - バックアップ先 72
 - 保存されているデータ量の表示 211
 - 管理 210
- ファイルとフォルダのバックアップ
 - 概要 66
- ファイルのバージョン、保存する数を制限 211
- ファイルの種類
 - 削除 55
 - 新規作成 53
 - 管理 53
 - 編集 54
- ファイルシステム。サポート 23
- フィードバック、送信 19
- フォルダ
 - バージョンの検索 212
 - 消失または破損したファイルおよびフォルダの修復 215
- ブート構成データベース 80
- 別のユーザーとして実行、ログオンの変更 148
- ベストプラクティス、サービス 140
- ホットバックアップ 293
 - ワンタイムの実行 97
- ホットバックアップ
 - ドライブベースの定義 78
- マスターブート、復元 250
- 元のディスク署名、リカバリ 249
- ユーザー、Symantec System Recovery を実行する権限 145
- ライセンス製品 30
- リカバリ
 - UEFI ベースのコンピュータ 238
 - 元のディスク署名 249
- リカバリポイントオプション、Symantec System Recovery Disk 247
- リカバリポイント
 - CD または DVD へのコピー 188
 - Symantec System Recovery Disk からのドライブのプロパティの表示 267
 - Windows エクスプローラからのマウント 178
 - アーカイブ 188
 - ウイルスチェック 177
 - ウォームの自動作成 292
 - オフサイトコピー 103
 - オフライン作成 291
 - オプションの選択 84、193

- オンライン作成 293
- ワールドの手動作成 291
- サポートされるメディアへのコピーによる保存 74
- セットの削除 187
- セット数の制限 84
- ドライブのプロパティを表示 181
- ドライブ文字の割り当て 177
- ハードディスク領域の解放 188
- パスワードによる保護 194
- ホットの作成 293
- マウント 177~178
- マウントしたリカバリポイントのプロパティを表示 181
- リカバリポイントを使用したファイルの修復 217
- 仮想ディスク形式への変換のスケジュール設定 194
- 仮想変換ジョブ、プロパティの表示 201
- 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 201
- 仮想変換ジョブ、削除 203
- 仮想変換ジョブ、編集 202
- 仮想変換ジョブ、進行状況の表示 202
- 保存されたファイルやフォルダを開く 221
- 単体 81
- 古いもののクリーンアップ 186
- 整合性を調べる 84
- 検索 177
- 検証 84
- 特定の種類の作成 120
- 種類、定義 81
- リカバリポイントのオプション 83
- リカバリポイントの作成 84
- リカバリポイントの作成、オプション 193
- リカバリポイントファイル、検索 72
- リムーバブルメディア
 - サポート 23
 - リカバリポイントの保存 74
 - リカバリポイントの分割 74
- リモートコンピュータ
 - ログオンクレデンシャルの修正 172
- リモートコンピュータ
 - インポート 171
 - バックアップ保護状態の表示 173
 - 削除 172
 - 追加 170
- レポート、ログファイル 140
- ログファイル
 - イベントの使用 164
 - 確認 140
- 今すぐバックアップを実行、概要 119
- 仮想ディスク
 - リカバリポイントの変換のスケジュール設定 194
 - 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 201
 - 仮想変換ジョブ、削除 203
 - 仮想変換ジョブ、編集 202
 - 仮想変換ジョブ、進行状況の表示 202
- 依存関係、エージェントの表示 141、144
- 保護の状態 123
- 修復
 - カスタマイズ 225
 - キャンセル 122
 - ファイルおよびフォルダ 215
 - ファイルとフォルダの復元 215
 - 説明 215
- 修復操作、エージェントが開始しないときの設定 143
- 別のハードウェア、復元先 255
- 単体リカバリポイント 81
- 変換ジョブ
 - プロパティの表示 201
 - リカバリポイントから仮想ディスク 194
 - 今すぐ実行 201
 - 削除 203
 - 編集 202
 - 進行状況の表示 202
- 外部ドライブ、一意の名前を割り当てる 56
- 復元
 - Exchange、電子メールフォルダ 283
 - Exchange、電子メールメッセージ 284
- 必要条件、システム 21
- 接続された VHD 80
- 時間、[イベント]タブの経過時間 140
- 更新、LiveUpdate による自動更新 32
- 概要
 - Symantec System Recovery 2013 Monitor のアイコン 166
- 権限、Windows Server 2003 SP1 でのドメインユーザーに対する付与 137
- 機能、Basic Edition では無効 24
- 無効な機能 24
- 物理から仮想
 - スケジュール設定 194
- 物理から仮想へ
 - ジョブ、プロパティの表示 201
 - ジョブ、今すぐ実行 201
 - ジョブ、削除 203
 - ジョブ、編集 202
 - ジョブ、進行状況の表示 202
- 状態メッセージ
 - SNMPトラップの使用 158
 - 表示または非表示の設定 51

状態レポート、ドライブごとのカスタマイズ 159
 現在の操作のキャンセル 122
 簡単セットアップ、最初のバックアップの定義 62
 製品のアクティブ化 31
 許可、他のユーザーにバックアップを許可 129
 評価版、インストールまたはアップグレード 26
 評価版の有効期限終了 26
 起動、コンピュータのエージェントサービス 138
 電子メール、復元 283～284
 電子メール通知、警告とエラーの送信設定 60
 [オフサイトコピーの設定]のオプション 83
 [イベント]タブ、ログファイル履歴 140
 [詳細]ページ
 表示または非表示 62
 説明 62
 [関連するドライブ]オプション 80

A

Active Directory、役割 295

B

Basic Edition、無効な機能 24

E

Exchange

 保護 279
 メールボックスの復元 282
 電子メールフォルダの復元 283
 電子メールメッセージの復元 284

G

Granular Restore Option 277
 起動 280

H

hiberfil.sys 86
 Hyper-V マシン、サポート 298

L

LightsOut Restore
 セットアップと使用 229
 設定または再設定 230
 説明 228
 LiveUpdate、使用 32

M

MIB、概要 158
 Microsoft 仮想ディスク(.vhd) 194
 Microsoft 仮想ハードディスク、サポート 297
 Microsoft 仮想ディスク 203

N

NTbackup、バックアップ 295

P

P2V
 ワンタイム 203
 スケジュール設定 194
 仮想変換ジョブ、プロパティの表示 201
 仮想変換ジョブ、今すぐ実行 201
 仮想変換ジョブ、削除 203
 仮想変換ジョブ、編集 202
 仮想変換ジョブ、進行状況の表示 202
 pagefile.sys 86
 pcAnywhere Thin Host、リモートで修復するために使用 262

R

RAM ドライブ、サポート 24
 リカバリポイントの種類オプション 81
 Recovery Point Browser
 リカバリポイント内でファイルを開く 179
 Restore Anyware、使用 255

S

SharePoint、ドキュメントの復元 285
 SmartSector コピー、概要 90、102
 SNMPトラップ、送信するための Symantec System Recovery の設定 158
 Symantec System Recovery
 より多くの情報の取得 19
 異なるユーザー権限での実行 148
 新機能 17
 デフォルトオプションの設定 47
 使用 45、280
 復元 280
 Symantec System Recovery 2013 Monitor
 概要 165
 アイコン 166
 開始 166
 Symantec System Recovery Agent
 デフォルト設定の変更 141

ネットワークに配備 133
 修復操作の設定 143
 自動的に起動 140
 製品 DVD からのインストール、手動 133
Symantec System Recovery Disk
 使用中のコンピュータの検索 261
 にブート 239
 バックアップを作成 99
 ハードディスクのスキャン 242
 ファイルとフォルダの修復 258
 オプション、LightsOut Restore 232
 カスタム SSRD の作成 39
 仮想ディスクファイルからのコンピュータのリカバリ 250
 コンピュータのリカバリ 242
 サポートユーティリティ 270
 テスト 37~38
 トラブルシューティング 241
 ドライブのプロパティの表示 268
 ドライブのマッピング 264
 について 237
 ネットワークツール 261
 ネットワーク接続の設定 265
 バックアップの作成について 98
 リカバリオプション 247
 リカバリポイントのプロパティの表示 267
 開始 239
 静的 IP アドレスの割り当て 266
Symantec System Recovery Disk からのドライブのマッピング 264
Symantec System Recovery Disk からコンピュータを検索 261
Symantec System Recovery Monitor
 Windows ファイアウォールの例外の設定 34
Symantec System Recovery を使用するメリット 15

T

ThreatCon レスポンス、有効化と無効化 126

U

UEFI ベースのコンピュータ
 リカバリ、概要 238

V

VHD、接続 80
 VMware ESX 194
 VMware 仮想ディスク(.vmdk) 194
 VMware ESX Server 203

VMware 仮想ディスク 203
 VSS
 完全バックアップの実行 91
 サポート 295
 データベースのバックアップ 290
 VSS 非対応データベース、バックアップ 291

W

Windows 7、サポート 21
 Windows Server 2003 SP1、ドメインユーザーに対する権限の付与 137
 Windows からのワнтаイムバックアップ 97
 Windows のサービス、ローカルコンピュータで開く 141
 Windows エクスプローラ
 ファイルおよびフォルダのバージョン情報の表示 212
 リカバリポイントのマウント 178
 Windows 7、サポート 17

あ

暗号化、リカバリポイント 92

か

概要

Symantec System Recovery 2013 Monitor 165
 保護状態レポート 175
 仮想ディスク
 リカバリポイントのワнтаイム変換 203
 仮想ディスクにリカバリポイントをワнтаイム変換 203
 コマンドファイル、バックアップ中に実行 87
 コールドバックアップ
 ワнтаイムの実行 99
 コンピュータ
 リモート修復 262

さ

作成後のリカバリポイントの検証 154
 修復
 元のディスク署名 254
 詳細なスケジュールオプション 85
 スクリプト、バックアップ中に実行 87
 ストレージグループ、識別と保護 279

た

ドキュメント、復元 285
 ドライブ
 詳細の表示 161
 バックアップの指定 279

- バックアップ保護レベル 152
- 保護 152
- 保護レベルの向上 161
- リカバリポイントのマウント解除 180
- ドライブ修復オプション 227
- ドライブベースのバックアップ
 - 含まれないファイル 86
- ドライブベースバックアップ
 - 詳細オプションの設定 90
- トランザクションログ、切り捨て 91
- トランザクションログの切り捨て 91

は

- バックアップ
 - Symantec System Recovery Disk からのワンタイムの実行 99
 - コマンドファイルの実行 87
 - 状態の監視 154
 - 推奨事項 67
 - 正常終了の検証 154
 - ドライブベース時に不良セクタを無視 102
 - ドライブベースの中に不良セクタを無視 90
 - ファイルおよびフォルダの詳細オプションの設定 114
 - ファイルとフォルダの定義 110
 - 前に実行する内容 67
 - ローカルコンピュータから他のコンピュータ 131
- バックアップ先
 - 動作の理解 184
- バックアップ先のオプション 81
- バックアップデータ
 - パスワードによる保護 91、103
- ファイル
 - リカバリポイント内から開く 179
- ファイルおよびフォルダ
 - Symantec System Recovery Disk を使用した修復 258
 - 復元 286
- ファイルおよびフォルダのバックアップ
 - 定義 110
- 復元
 - Exchange、メールボックス 282
 - SharePoint ドキュメント 285
 - ファイルおよびフォルダ 286
- 物理から仮想
 - スケジュール設定 203
- ベストプラクティス 278
- 保護
 - ハードディスク 152

- 保護状態レポート
 - エクスポート
 - 表示 175

ま

- マスターブート、復元 254
- メッセージストア
 - 指定 280
 - 保護 280
- メール、復元 282
- 元のディスク署名、修復 254

ら

- リカバリポイント
 - 圧縮レベルの設定 96
 - 暗号化 92
 - オプションの選択 101
 - 仮想ディスクへのワンタイム変換 203
 - 検証 101
 - 作成後の検証 93
 - 整合性チェック 93、101
 - 特定のリカバリポイントの内容の確認 281
 - ドライブのマウント解除 180
 - パスワードによる保護 91、103
 - ファイルを開く 179
- リカバリポイントドライブのマウント解除 180
- リカバリポイントの圧縮レベル 96
- リカバリポイントの検証 93
- リカバリポイントの作成、オプション 101
- リモートバックアップ 131
- ログ、トランザクションの切り捨て 91